

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言談話資料（1）：山形・群馬・長野

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002270

方言談話資料(1)

—山形・群馬・長野—

国立国語研究所資料集 10

國立國語研究所

1978

国立国語研究所資料集 10

方言談話資料(1)

——山形・群馬・長野——

國立國語研究所

1978

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であるが、その第一集として、今回本書を刊行することにした。

本書に収めた録音・文字化資料は、専ら、矢作春樹（山形県）、上野勇・杉村孝夫（群馬県）、馬瀬良雄（長野県）の四氏の尽力によるものである。また、話者として、佐直きえ、高梨八太郎、佐直まさゑ（以上山形県）、小林弥太郎、小林よ志ゑ、星野富司、小林喜市（以上群馬県）、清水悟郎、片桐としそ、小池千勢（以上長野県）の各氏の協力を得たほか、現地教育委員会や有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和53年3月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛 容 八 郎 康 隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	寛 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄 一 郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼 一 郎	後 藤 和 彦	小 松 代 融 一	斎 藤 義 七 郎	迫 野 虔 德
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢 一 郎
日 野 資 純	広 戸 慎	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉 治 郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」(1) 編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

山形…矢 作 春 樹 群馬…上 野 勇（杉 村 孝 夫） 長野…馬 瀬 良 雄

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡例	10
I 山形県西村山郡河北町谷地	11
解説	13
1. 冬の藁仕事	19
2. 冬の水汲み	33
3. 山仕事	37
4. 叔母さんの卒倒	48
5. 荑野刈り	53
6. 肥やし金と給金	59
7. 蚕の収入	65
8. 草履作りと小遣い	70
9. 子守り	79
10. 手足による農作業	83
11. 旅行	102
12. 植樹と日照権	107
13. 都市計画と移転	112
14. 田螺と蝗	118
15. 小正月の行事	126
16. 田楽焼き	132
II 群馬県利根郡利根村大字追具	137
解説	139
1. 雨乞と天氣祭	152
2. 壮健芝居	170
3. 千草刈り	189
4. 薬	197
5. 昔の商店	210
6. 昔の菓子・飴売りのおばあさん	217
7. 病気見舞の品物	229

8. 出稼	236
9. 荷の運搬と牛の扱い	242
10. 狼	250
11. 配給と兵役	256
III 長野県上伊那郡中川村大字葛島	279
解説	281
1. 縞手本の話	294
2. 幼いころの遊び	309
3. 昔の嫁入り	332

まえがき

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

51年度は収録地点を4地点減らし、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。今回は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「山形県西村山郡河北町谷地」「群馬県利根郡利根村大字追貝」「長野県上伊那郡中川村大字葛島」の3地点分について、オフセットにより複製印行する。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話（50年度）

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常の生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にもしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者でも差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをね

らって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮したことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。
3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にま

かせた。

4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
 - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
 - ②音声・音韻上の特色
 - ③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など

C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡　　例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。

2. 発言や録音が不明瞭なため聞き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。

例 エッダクテ エッダクテ。 (28ページ12段)

3. 最終的に聞き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。

4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。

5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。

例 O ムカシワ ムギコムギ ウント (Kソーエバネー) ツクッタカラサー。

(153ページ 7段)

6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxをつけた。

例 ジベン ジベ ジベタオ フカーチ ホッテ (316ページ 6段)

7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。

8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I. 山形県西村山郡河北町谷地

収録・文字化担当者 矢 作 春 樹

A 収録地点とその方言について

1 地点名 山形県西村山郡河北町谷地

2 収録地点の概観

位置——山形県のほぼ中央部、山形盆地の北西に位置し、山形駅から北へ約20km。

交通——山形駅から奥羽本線で下り約30分、神町駅下車、バスで西へ8km約20分。山形駅から左沢線で下り約30分、寒河江駅に下車、バスで北へ8km約20分。国鉄の駅はないが、バスは、谷地を始点終点として四方に通じており、山形行きのバスなら約1時間で、山形市に達する。

地勢——山形盆地の北西、西は出羽山地、東は最上川に接し、寒河江川の北に位置した寒河江川扇状地で、大体菱形に近い土地を占めている。この東半分（全地域の約7割）が肥沃な平野部で、ここに集落が形成されている。四方を山に囲まれているため、典型的な内陸性気候で、全国最高気温を記録しており積雪量も多い。

行政区画——この地は平安時代の初期に開発され、江戸時代には米・紅花・生糸等の集散の中心地、舟場として発展していた。明治22年に市町村制が実施され、合併前の形をととのえた。続いて昭和29年10月1日、谷地町・西里村・溝延村・北谷地村が合併して、河北町が誕生、翌年、元泉地区の編入などがあり、現在に及んでいる。

戸数・人口——昭和51年1月現在 世帯数 約4,900戸
人口 約22,400人。人口は減少の傾向がある。

主な産業——米づくりが盛んで、昭和43年には米作県一位賞を受賞し、反当収量も全国最高といわれる。また農家の副業としての草履表は全国一の生産高を誇っていた。さくらんぼ・くり・桃・ぶどうなどの果実の生産、出荷も盛んである。

3 収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

山形県の方言は、北奥方言区に属する庄内方言と、南奥方言区に属する内陸方言とが大きく対立している。内陸方言では、最上地方・村山地方・置賜地方との間に、わずかの対立が見られる。たとえば、「かわいそだ」の分布の場合、庄内方言はメジョケネ、最上はムゾサエ、村山はムツコ(サ)エ、置賜はモゴサエといった分布になっている。

調査地点は、村山地方の方言区に属している。この地域は、江戸時代の政権交替や群雄割拠の影響もあってか、比較的複雑な方言分布を示している。

②音韻上の特色

- (1) 「イ」と「エ」の混同がはなはだしい。「息」も「駅」も「エギ」、「鯉」も「声」も「コエ」であり、「椅子」も「石」も「エス」、「絵馬」も「居間」も「エマ」である。
- (2) 「ス・シ」は「ス」(süü)に、「ツ・チ」は「ツ」(tsüü)になり、「ズ・ジ・ヅ・ヂ」の区別がなく、すべて「ヅ」(dzüü)である。したがって、「煤」も「獅子」も「寿司」も「スス」であり、「梨」も「茄子」も「ナス」、「筒」も「乳」も「ツツ」である。また、「辻」も「地図」も「知事」も「ツンヅ」となる。総じて、「イ」段の母音があいまいで、「ウ」段の母音もややあいまいなため、歯きれの悪い発音になっている。
- (3) 「シュ・ジュ・チュ」は「ス・ヅ・ツ」になり易い。そのため、「十二」は「ヅーニ」、「主人」は「スヅン」に、「手術」は「スツヅツ」になり易いが、それほどひどくはない。
- (4) 「冬」を「フヨ」、「雪」を「ヨギ」、「露」を「ツヨ」のようにいう ユ ヨ の現象が、古い年代に残っている。
- (5) 連母音の「アイ」や「アエ」は、庄内・最上では「エー」であるが、村山・置賜では融合を起こさず「アエ」と発音する。したがって、「帰」と「蠅」を「ヘー」と「ハエ」とに言いわ

けている。

- (6) 語中、語尾のカ行子音・タ行子音の有声化が盛んである。「柿」は「カギ」、「的」は「マド」、「味方」は「ミガダ」と発音される。これは若い世代でも盛んである。
- (7) 語中、語尾のガ行音・ダ行音・ザ行音・バ行音は、鼻濁音となり、「鍵」は「カギ」[ka ñi]、「窓」は「マンド」、「数」は「カンヅ」、「壁」は「カンベ」のように発音される。しかし、若い世代では、聞かれなくなっている。
- (8) 「セ」「ゼ」を「シェ」「ジエ」と発音し、最上では「シェ」よりも「ヘ」に近い。この地點では、「背中」は「シェナガ」、「先生」は「シェンシェ」、「風」は「カジエ」であるが、使役の「……せる」は、「泣ガシェル」とも「泣ガヘル」ともいうようである。
- (9) ハ行音を「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」と発音する現象の中では、「桑・鍬」の「クファ」、「塞ぐ」の「クフェル」が顕著に表われている。
- (10) 「家」や「良い」は「イエ」[je]と発音されるが、[je]音は、山形市を中心に根強く残っている。
- (11) ヤ行子音が摩擦化する傾向があり、「山形」が「シャマカダ」に聞こえる。また、[je]も多少摩擦化する傾向が見られる。
- (12) 「行く」[ŋyu]、「動く」[ŋyogu]のように[ŋ]が語頭にあらわれることがある。
- (13) 二重子音[ʃʃ]が語頭にあらわれることがある。
「白い」「シショエ」、「冷える」「シシェル」、「知らない」「シシャネ」、「仕余しする」「シシャマススル」など。
- (14) 濁音が清音化する傾向がある。
「短かい」「ミンツカエ」、「案じ事」「アンツコド」、「座布団」「ザフトン」、「書初め」「カキソメ」など。
- (15) 長音や撥音・促音を十分に発音しない傾向はこの地域にもあり、「在郷」「ザエゴ」、「五合」「ゴンゴ」、「走った」を

「ハシタ」、「食って」を「クテ」という。

(16) アクセント

山形市を中心とする村山地方（北村山郡の大部分を除く）と米沢市を中心とする置賜地方（小国町を除く）とには、一型アクセントが分布している。「箸」も「橋」も、「雨」と「飴」も全く区別しない方言である。すなわち、アクセントという概念を持ち合わせていないので、一般には、無アクセント地帯と呼ばれる。収録地点も、一型アクセント地帯に属している。

③文法上の特色

- (1) 推量、意志の助動詞は「ベ」であり、終止形に接続する。したがって「読モー」という形がないので「五段活用」はない。
- (2) 四段活用以外の動詞、ラ行四段活用の動詞の連体形に「時」「事」が接続するときは、「着ッドギ」「来ッゴド」のように「ル」が促音化して「ッ」になる。
- (3) 尊敬命令法「へなさい」の意味で「～シャエ」を使う。
- (4) 「～しなければならない」は「書がンナネ」「生きランナネ」のように、「ンナネ」「ランナネ」を使う。
- (5) 「タ」を過去のほか完了として特に現在のことに対する用法が著しい。大過去や過去回想のときには「タケ・ダケ」を使う。
- (6) 自然にようになったことを表わすには「ラテ・ラタ」を使う。
「朝5時に起きラタ」（自然に起きる結果になった）
- (7) 上一段、下一段活用の動詞に続ける使役の助動詞は、「植えラシェル」「着ラシェル」のように、「ラシェル」を使う。
- (8) 可能の助動詞は、「レル・ラレル」も用いるが、「来るエ」（来られる）「見るエ」（見られる）「笑ウエ」（笑える）のように、終止形に「エ」をつける用法が特に盛んである。
- (9) 主格を示す「が」「は」、対象を示す「が」「を」などは、使わない。対象を強調して、「俺バ叩ぐな」とも言う。
- (10) 連体修飾語を作る「の」は「ナ」や「ヌ」に変化し易い。
「俺ナ手」「お前ナ本」「松ヌ木」「桑ヌ木」など。

- (11) 場所・方向を示す「サ」の使用は盛んで、「山形サ泊まる」「学校サ行く」のように使うが、目的の用法は使わない。
- (12) 理由表現は「サゲ」「ハゲ」と「カラ」を併用しているが、「サゲ・ハゲ」が古いと思われる。
- (13) 仮定表現は「読めバ」はほとんど使われず、「読ムゴンタラ」「見ッゴンタラ」「見ッコンタラ」「読ムゲバ」などが盛ん。
- (14) 一般に、形容詞の活用が退化して不活発になっている。
- (15) 丁ねい表現の「甘ごいッス」「行くッス」のような「ッス」が多く使われる。
- (16) 強意の助詞には、「ハー」「ヅー」「シタ」などがあり、複雑なニュアンスをもっている。
- (17) 「ホニ」「ヤッパリ」「ホレ」など、間投助詞に転成しかかっているものが多い。

4 地点選定の理由

- ① 昨年の予備調査の際に、方言保有量が大で、記憶も確かであり、発音がはっきりしているいい話者を得られたこと。
- ② 地方研究員（文字化担当者）が生まれ育った土地なので、文字化や標準語訳しやすく、確かめやすいこと。

B 話者・録音環境など

- 1 昭和50年12月1日 録音
- 2 山形県西村山郡河北町谷地庚21（下小路） 佐直まさゑ宅
- 3 話し手

A 佐直 きえ （女） 明治36年生まれ 農業

谷地生まれの谷地育ち。現住所は録音場所（佐直まさゑ宅）の隣で名子。若い頃から大人にまじって農作業に従事していくため、方言保有度がきわめて高く、話題も広く記憶力が抜群で話し好きである。声に張りがあり発音もはっきりしている。マイクにも慣れており、語尾で自問自答するのは、古い方言調の語り口で、得がたい方言の話し手である。語り調子は早口ぎみである。

B 高梨ハ太郎 （男） 大正3年生まれ 農業 建設会社社員

谷地生まれの谷地育ち。16歳の年から10年間、佐直まさゑ宅に住み込みで下男奉公、結婚後は筋向いの生家に居住。その後も同家の農作業を手伝っていた。その間、佐直きえ・佐直まさゑと一緒に農作業をしており、話し好きで話題が合う。年令に比べ方言の保有度は高いが、やや早口で口の開きが小さいせいか、わずかにとちりの口調がみられる。

C 佐直まさゑ （女） 明治34年生まれ 農業

村山市湯野沢生まれ、結婚以来現在地に居住。隣接市のため方言上の差異は目立たないが、話の引き出し役になつてもらつた。長寿の家系にあるため方言保有は高いが、ややインテリ的である。担当者の伯母にあたる。

4 録音環境

- ・同席者は、話し手と文字化担当者の4人。
- ・同席者は、全員が気のおけない者同志なので、話はスムーズに進行した。しかし、仲間うちすぎるために、あいづちが多く、疑問や聞きかえしなどの語形が出にくかった。指示語の出かたが多かったのも、そのせいであろう。
- ・部屋が道路に近いため、車の音がしばしばはいっていた。

1. 冬の藁仕事

話し手

A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A フヨナノ ナエデカンドー⁽¹⁾ ホレハ⁽²⁾ ユギ フッド アレダッズ⁽³⁾
冬など 何はともあれ ほれ 雪(が) 降ると あれだし
シャキショーシューダ ワラスゴドヅタナ オドゴデモ
百姓衆達(は) 藂仕事だよな 男でも
オナゴデモ。
女でも

B ンダー ハゲゴ⁽⁴⁾ アンダリ ホレー ミヌ アンダリ (A ンダ"。)
そう 藂かご 編んだり ほれ 藂 編んだり そう。
タラ アンダリ ダケッタナナー。
俵 編んだり だつたよな。

A ンダ"ダレッズ。ホダーナ オラダモ ンダケチャ。アノ
そうですよね。そんな 僮達も そうだったな あの
オドツアチャ⁽⁵⁾ アエデナテ ホノ アサケ ハヤーグ オギ"デ
父親に 相手(は)なって その 朝 早く 起きて
ワラ ブダンナネケツー。 (C ンダ"モナエヤ。) ホリヤー⁽⁶⁾
藁(わら) 打たなければならなかつたな。 そうだよな。 ほう

ドゴーダ"テ ホノ ドンカエ ンコシ"ヤ ⁽⁷⁾ ブッタベ シェンニー。
ど"こ(の家)で"だつて その 薙打ち は 打つたろう 昔 ^(は)。

(C ンダ。笑) ハエツ" コンド" ⁽⁹⁾ テーサ シビ キッテナレ
そう。 それ(か) こんど 手に ひび きれてな
コンド (笑) ワラブ"ズスドヨ ホレ。 (C ヒビギデ"ナエ)
こんど 薙打ちするとよ ほれ。 (響きでね)

ホリヤ ドゴソゴデ" イエ / マエデナー ⁽¹⁰⁾ ワラ ブッテダハナテ
ほら ど"こそこで 家の前(の家) で"など 薙^(き) 打っているよ なんて

ヤッデ" ホシテ。 ナエーダ"テ ミナ アノ ツツ"ボード ⁽¹²⁾ アオテ"
言われて そして。 なんだって みな あの 檻棒と ⁽¹³⁾ 掛矢で
ブダネゲバ ワラ ツカワンナエナダモナヤ。 ワラブ"ズキカエナテ
打たなければ" 薙(は) 使われないんだものな。 薙打ち機械なんて

(B ンダ) ナエッス ホレ。
そう) ないし ほれ

B アエツ" オ ヤッパリ シタリ オドゴ エダ" ⁽¹⁴⁾ イエーデナノ
あれ お やっぱり =人(の) 男(か) いる 家でなんか
ナエデ"カンデ" ドンカエ ンコヨナエハ。
何はともあれ 薙打ち よね

A ンダ" オラ オナゴダ"テ テツ"ダエ サヘラッタ"ツー。 アサケ
そウ 僕は 女なのに 手伝いさせられたな。 朝(方)に
イエー エダ"ドギヨー ハヤーク" オゴ"サッテ" ホシテ オラエ/
(実)家に いたときよ 早く 起こされて そして 僕(の)家の
カガサ ママツ"メデ" ⁽¹⁶⁾ オレ ホレ ワラブ"ズ サンナネケヅアナエ。
母親(が) 炊事で 僕(か) ほれ 薙打ち しなければならなかつたわけよ。

(C 笑)

B アオ タガ[。]テガ[。]

掛矢(矢) 持ってか。

A ンダ[。] テツ[。] エスロナテ ャッテ[。] ホシテ。ホシテ コンド
そ^う。 手伝いしろなんて 言われて そして。そして こんど
ニナ ナウナナテ ユード ホリヤ アノ。 *ホレガラ アノリヤ
荷繩(索) なうのなんて 言うと ほら あの。 それから あのあれ
ミヌ ツグンナ ミゴ。 (ンダ[。] ミゴナヤー。) アエヅナ
蓑(き) 作る 薙[。] (そ^う 薙[。]) あれなんか
ホダナ ナンカエモ ブダンナネデ。 サンカエモ ブダンナネデ。
そんな 何回も 打たなければならぬだろ。 三回も 打たなければならぬだろ。
⁽¹⁷⁾ エヅ[。] ドゲ[。] ホダエ ャッコグ[。] ホダエ ブダンナエ モ。
一度で そんなに 柔かく そんなに 打てないもの。

B ブダン ブダンナエ ケモナエ。
~~× × ×~~ 打てなかつたものね。

A ンダ[。] エヅ[。] ドエ……
そ^う 一度に

B エギテ ⁽¹⁸⁾ キテ ワガシナエ ケモ。 *
生きてきて だめだったもの。

A ン ンダ[。] ホレガラ ホレ コデナ ⁽¹⁹⁾ ナウナ ミゴ[。] テ
ん そ^うだ。 それから ほれ 細繩(索) なうの 薙[。] べで
サンナネケドレ。 タラ アム コデナ……。
しなければならなかつたろ。 傑(き) 編む 細繩

C ミナ ミゴダケモナエ ホンテ……。
全部 薙[。] べだつたもね ほんとに

A ハゲコ[。] アムナ ナヤ。 ミナ ホレ ミゴナワジヤ ナッタ
藁[。] かご(籠) 編むの なあ。 みんな ほれ 薙[。] べ繩は なつた

モノヅダナ ンダ"ゲ。シ。 (20) ホレガラ オゴサマノ リヤ コー
もんだよな だから。ん。 それから 垂の ほら こう
ナワアミ リヤー (C シ) アエツモー アレダ"ケデ ワラ"デ
縄 綱 ほら (ん) あれも あれだったろ? 薤で
コー コンデナ ナッテ ホシテ マロコーグ コー コヘダ" (21)
こう 細縄 (後) なって そうして 丸く こう 作った
モンダ"ダレ イエーデ。 (C ンダ" ンダナ。) シ。 シトーフユ
もんだものな 家で。 (そウ そウだな。) ん 一 冬(中)
ワラスゴドヨ。オドゴ"シユータ"テ ホダナ ワラ"ンヅノ ホダナハ
蓑仕事だよ。 男衆でも そんな わらじの そんな
シトナツ。サンニンモ ヨッタリモシテ ハッコロ ミナ ツクテ
一 夏 三人も 四人も で 履くぐらい みんな 作って
オガソナネナダ"ハゲ"ナヤ。 (C タンートナ。)
置かねばならないんだかなな。 (たくさん なあ。)

B ンダ。ツマゴワラ"ツガラ ナニガラダ"ケハゲナヤ。
そウ。爪掛わらじはじめ 何もかもだったからね。

A ンダ。タガジョナテ ナエッス エッソ一 ワラ"ンヅダ"ドレ。
そウ。地下足袋など ないし すべて わらじだものね。

(C ンダ。) ハゲゴガラ ミヌガラ ニナガラ ミナ ナッテ
そウ。蓑かごから 蓑から 荷縄から みな なって
(25) オガソナネドレハ。ニナナエナテ ユード ドゴンデモ ホダナ
おかねばならないものな。荷縄ないなんて 言うと どこの家でも そんな
ワラブヅナヤ。 (C シ。) (笑)
蓑打ち(だよ)な (ん)

B ンダ ホシテ ニナナエテ ユード リヤ キューショーガツノ
そウ そして 荷縄ないって いと ほら 1日(の) 正月 の

ジューエヅニツーダモナエ。

十一日 だものね。

- A ンダ" シシテ" デ" (B ン) ナワンナネナダケモナエ。
そう 一日 で (ん) なわなければならなかつたんだものね。
- B ホシテ ン トーガノ ヒー ミナ ブッテデ ホリヤ (A ンダ)
そして ん 十日の 日に 全部 (藁) 打ておいて なあ (そウ)
(26) ツカラモツ" クテナレ (笑) (A ホンダ") キナゴモツ" クテリヤ
力餅 (を) 食ってな (そウ) 黄粉餅 (を) 食ってな
(A ンダ - C 笑) ホシテ ハダツナダモナエ。 (A ンダ - ホシテ)
(そウ) そして とりかかるんだものね (そウ) そして
- ホノヒデ ニナダーゲ ホノヒ ミナ ナウケナヨ ドゴデモ。
その日で 荷縄だけ (は) その日 (で) 全部 なうんだったよ どこの (家) でも。
- A ンダ" マエガラ ワラ ブッテ オガソナネケツ" ヤッコグナヤハ。
そう 前 から 藂 (を) 打って おかねばならなかつたよ 柔かくなあ。
(B ン -) ホシテ ホレ ジューエヅニツ" シシテ" デ" ホレ
(ん) そして ほら 十一日 一日で ほら
エヅネン ツカウナ シトナツ" ツカウ ニナ ペロット ミナ
一年で 使う分を 一 夏 使う 荷縄 (を) すっかり 全部
ナワンナネナダド。 テ" ミンツカエナガラ ナンガエナガラナヤ。
なわねばならぬんだもの。 短いのから 長いのから な。
- (C ン -) ダエーブ" ナワンナネケチャ オレ ホダナ。
(ん) かなり なわねばならなかつたな 僕 そんな。
- (27) C ンダッダナー。
そうだよなあ。
- A ニナダ" テ ジュースゴホンモ ナエゲバ タンナエケベ。 *
荷縄だって 十四、五本も なければ" 足りなかつたろう。

- C バガハゲゴナ ナンボー コシェッケ オマエ。 (A ンダ一)
 大藁かごなど いくつ 作ったもんだ" おまえ(は)。 そウ
- B バガハゲゴナ アリヤ クファ ヘレンナ バガハゲゴナエ。
 大藁かごなど あれ 桑(を) 入れるの 大藁かご ね。
- (A ン オッキナ) ~~シト~~ ⁽²⁹⁾ シト ハエルエクラエナ。 (笑)
 ん 大きな ~~人(が)~~ 合いれるくらいの。
- A シト ハエテ ネデルエクラエナナヤ オッケナ バガハゲゴ
 人(が) はいって 寝てられるくらいの な 大きな 大藁かご(を)
 ナンボモ。
 いくつも。
- B ジューゴ"ガソメガラ ニツッカンメグ^oラエ (C ンダ) ハエンナナエ。
 十五貫目 から 二十貫目 ぐらい そウ はいるのをね。
- A ニツッカンメグ^oラエ ハエッケモナヤ アノ バガハケゴ
 二十貫目 ぐらい はいったものね あの 大藁かご
 オッケナ。 (C ンダ一) ハエーツ アンデ オガソナネッスホレ
 大きいの。 そウ それを 編んで おかねば"ならぬしな
 コンド コダナ ツッチャエナ ホリヤ ホノ アレ ママ モテ
 また こんな 小さな ほら その あれ ご飯(を) 持って
 アラグナガラ (B ベントハゲゴナエ) ⁽³⁰⁾ イエ アンバエナ コンド
 行くのから 弁当 藂かご な 手頃な こんと"
 ホレ チュークラエナガラ ホレ スコス オッケナガラ
 ほれ 中くらいの から ほれ 少し 大きいのから
- C スコス オッケ ハゲゴガラナ。
 少レ 大きい 藂かごからな。
- A ンダ一 ハゲゴダ"テ ヨードリモ エヅドリモ ホレ
 そウ 藂かごだけで 四通りも 五通りも ほれ

アマンナネドレナヤ。

編まねばならないものね。

- B ⁽³²⁾ マメ マグ^ハ ハゲゴナ ツチャコーグ(笑) コシェデ^ア
豆(を) まく 裳かごなどは 小さく 作って
- オガソナネケッスナ。
おかねばならなかつたしな。
- A ンーダ マメ マグナナ チエッチャエナ (Bン) マタ
そウ 豆(を) まくのなど(は) 少さいの(が) (ん) また
エツヅダッス ホレ。ホンーテ ショッデンナ ミナ
必要だし な。 ほんとに 者は (なんでも) みな
ワラザエグデバリ シテ ホレ マンニヤワシエッタナツア ホレ
裳細エではかり 作って ほれ 間に合わせていだんだよな
ヒヤクショノ ドーグワナヤ。 ミヌタ^アテ スケナクテ
百姓の 道具は な。 裳だつて 少なくっても
シトリチャ ホレ シタツツツツツ^ア ツグランナネケッス ホレ。
一人に ほれ ニツ すつは 作らねばならなかつたし。
- B ンダ ヌッダ ドギ コーダエ サンナネ^ア (A ンダ) スンナ。
そウ 濡れた とき^ア 交代 しなければならぬから そウ (交代)するの。
- A カ カワンナ ナエクテジャナヤ。 ヌッダ ドギ キンナ
代わるの(が) なくって はね 濡れた とき 着るの(が)
ナエクテ。 ホーダハゲ ホダナ エッケンノ イエーデ
なくって だから そんな 一軒の 家で
サンニンモ ヨッタリモ トモデサ デハテ エンナダ^アモノ
三人も 四人も 野良に 出て いるんだ^アもの
ホダナ ハエツ^アバリモ タエヘンダド ホレ。 ミヌツグンナバリモ。
そんな そればかりでも 大変だ^アよ な。 裳作るの だけでも。

ホンダーハゲ ヨスゴドジャ サンナネケツダ"ナ ショッデーン。
だから 夜仕事は しなければならなかつたんだ 昔は

B ンダ" ヨスゴド サンナネケツダ"ナナエ。

そう 夜仕事(を) しなければならなかつたもんだよな。

A ン ジューヴ コロマ"テナー マエバン サンナネケドレ。
ん 十時 頃までは 每晩 しなければならなかつたものだよ。

ンナエゲバ ハル トモデ"サ デハルマ"デ ワラスコ"ド デ"ネケモ。
そうでないと 春(?) 野良に 出るまで 薫仕事は 終わらなかつたもの。

タラダ"テ ナンジユーダ"ラド ホレ アンデ" オガソナネツダ"ス
僕だつて 何十僕と ほれ 編んで おかねばならなかつし
ホレ。*

ほれ。

B タラ アンデ" ハゲゴ" アンデ" (A ンー) ミヌ アムド
僕(を) 編んで 薫かご(を) 編んで (ん) 薫(を) 編むと
ヤッパリ ミヌ デネ ドキ アッケツハ。

やつぱり 薫(か) 完成しないとき(か) あつたもな。

A ンダベ"ハ (B ンー) ヤッパリ ミヌジャ アエツ テマ
そうだろうな (ん) やつぱり 薫って あれは 手間(か)
カガソモナヤー。
かかるもね

B テマ カガルナヤ (A ンー) ナンボ エッショケンメ= ナタテ
手間(か)かかるな (ん) いくう 一生けんめいに なつても
ヨッカグラエ カガッケモナ。 (A ンダベ") アマコエサ
四日ぐらい(は) かかるんだったもな (そうだろう) 首の部分に

ヒシテハンカ (A ンダベ") フツ"ガ カガッケモ。 スコース
一日半か (そうだろう) 二日は かかるんだったもの。 少し

キレニナ スッド マル フツガ カガッケモナエヤ。
きれいになんかすると まる 二日 かかるんだったものね。

(A ンダベナー) アノリヤ ウッショノ ホーノ コー カザリ
(そうだうるな) あのほら 後ろの 方の こう 飾り
ツケンベー (A ンーダー) アエツダド フツガ カガッケジエ。
つけるだう (そう) あれだと 二日(は) かかるんだったもの。

A ンダベー ヤッパリ。
そうだう やっぱり。

C ホシテ コンド ハエツ ユギサ コー ツケデナエ一。 (B ン)
そして こんど(は) それを 雪に こう 浸けて な (35)

B スグ スケデナエ。 (A ンーダー) ホノママ キッド アリヤー
渋(を) 抜いて な (そうだ) そのまで 着ると あれ (36) (37)
アガグ ナテ (A ンダデレナヤ) ミンツア ツケネド アノ
赤く なって (そうだもな) 水に 浸けないと あの (38) (39)
ミゴノ スグデヨ (A ンー) アガグ ナンナヨネハ。
藁しべの 渋でよ (ん) 赤く なるのよなあ。

A ンダー。 ミゴ アエツ ヤッコグ ブダネド ホレ
そう 草しべ あれは 柔らかく 打たないと ほら
ワガエモナヤ ミヌモ ヨワクテ。 (C ン) ンダケ ヤッコグ
だめだものね 草も 弱くって。 (ん) だから 柔らかく
ブダンナネケドレ ミヌ ツグンナー。
打たねばならなかつたんだ 草を 作るのは

B アノー ハルサギ キテ アラグド ダンダエ オンダレッケモネ
あの 春先(は) 着て あるくと だんだん 折れるんだったものね (40)
カダエドネハ。
堅いと 収。

- A ンダ。 カッタエド ミナ モケデナハ。
そう。 堅いと みんな もけてしまつてなあ。
- B ホンデモ ヤンダクテ ホダナ ミゴブヅ ヤンダクテ カッタグ
それでも いやで そんな 蔦(わ)べ打ち(が) いやで 堅く
ブダラネナヨナヤ。⁽⁴¹⁾*
打たうないのよな。
- A アノ ドンカエンコ オラ イエエ エダ ドギ テツダエ
あの 蔦打ちは 僕 家に 居た とき 手伝いを
オドツアチャ サンナネクテ。(笑) シビー コゴラ ミナ
父親に しなければならなくって。⁽⁴²⁾ ひび(が) この辺(に) みんな
キッデナヤ。 (B 笑)
切れてなあ。
- C ヒビギデナヤ。 (A ヒビギデ) ンー (A ンー)*
響きで なあ。 (響きで)
- A ンー ホシテ ヨル一 コンド ユサナノ ハエッド スモテ
ん そして 夜 (は) こんど 風呂になど はいると 滲みて
コンド。 ハネアガッコロ エッダクテナヤ。(笑) ホーシテ
こんど。 跳び上がるほど 痛くって な そうして
コンド テーデバ ミナ オマエ ワッデ リヤ。 (C ンダー)
こんど 手といつたら みな おまえ 割れて りや。 (そう)
アレー ヨル ネッドギ アガギリノ コーヤグ コンド(笑)
あれ 夜 寝るとき(に) あかぎれの 膏薬(を) こんど
ツケデ ネランナネケドホレ ホダナ エッダクテ エッダクテ。
つけて 寝なければならなかつたもんだ そんな 痛くって 痛くって。
- B アグド アタリア (A ンダ アガギリー) オドゴシト ホダンデ
かかと(の) 辺は (そう あかぎれ) 男の人(は) それほどでも

ナエゲント オナゴシトダケツナエ ドツツガテ ユード
ないけれど 女の人だったよな どっちかと いうと
アガギリ キラスナナヤ。
あかぎれ(を) 切らすのは ああ。

A ンーダ アエツ アレダベ ⁽⁴⁴⁾ ナベ アロエ スッサゲ ホレ。
そう あれは あれだう 鍋 洗い(を) するから ほら。
アグー アエツ
灰は あれ(は)

B ア ススー ^(A ン) ミダエナデ ⁽⁴⁵⁾ / アエツデガ
あ 煤 ^(ん) みたいので のあれでか

A ^{アグ} ^{アグ} ツケッケテ アリヤ ^(B ンー) キアグ ツケデ ナベ
[×] [×] 灰(を) つけるんだった ありや ^(ん) 木灰(を) つけて 鍋(を)
ミカッケテ ハカマ ^(B ンー) アエツ アノ アグ スモウ
磨いたもんどう 篠 ^(ん) あれは あの 灰(は) 渗みる
モンダモナ ^(B ンー) アノ ワッタ ⁽⁴⁷⁾ ドゴサ
もんだものな ^(ん) あの 割れた ところに ⁽⁴⁸⁾

注

- (1) 「何でも彼でも」が原形。何はともあれ・何はさておき・とにかくといつた意味であるが、ショッちゅうの意味もある。
- (2) 間投助詞 語勢を添える。相手の関心を呼び起こすニュアンス
- (3) 屋外の農作業はできないし というつもりだったとのこと。
- (4) 農作業をする時に使う籠。腰に下げる小さなもののから背負ったり車で運んだりする大きなものまで、さまざまの大きさがある。水田地帯では藁を原料にし、山村ではマタタビやあけびづるなどで作る。また竹製のものもあり、庄内では魚籠(びく)をハケゴ[。]という。
- (5) 語尾の「ッス」は、敬語(丁寧)の意をふくむ終助詞。内陸一円に分布し、使用頻度が高いが、仲間うちの方言には出てきにくい。
- (6) オドツアは、「お父さん」の意の位相語で、おとうちゃん・とうちゃん・おっちゃん・おどつあ(おつあ)・おど・ちゃん、などの順に家格が下がるとされていた。チャは、格助詞「に」にあたり「サ」と同じ。村山地方・最上地方一円に分布。
- (7) 節を二人で打つ時の音から、節打ち のことをさす。
- (8) 「先(せん)に」が原形であるが、「昔は」という意に使われる。
- (9) 間投詞的用法 語勢を添え、語調をつける。
- (10) 両隣のうち、玄関側の隣家を イエノマエ、裏側の家を ウラ(ウラノイエ)という。
- (11) ブッテダは 過去や完了ではなく、現在「打っている」という意味である。マンダ ハシッタ は「まだ走っている」ことで、オレモ ミッダ は「私も見ている」ことである。「た・だ」の変則的な用法であり、誤解をまねきやすい。
- (12) 節を打つ木槌、直徑 20 ~ 30 cm ぐらい 座って使う。
- (13) 柄が長いので立って、あいづちを入れる。
- (14) 「た」の現在的用法。
- (15) 「お母さん」の意の位相語。「サ」が「さん」にあたる敬語。
- (16) 「ママジマイ」ともいう。
- (17) 一時にが原意。
- (18) しめり気をふくんできて纖維が硬くなつて

- (19) 薙レベでなつた細縄。太さ3mmぐらいで左ないにした。小手縄？
- (20) 自分でうなずいている。吉風な語り口で、この人の特徴である。
- (21) 持えた
- (22) 手先に藁でつまをかけたわらじ。冬や萱草りなどのときにはいた。
- (23) 刺子の足袋で、昔、簫匠がはいたことから名称が出たと思われる。
- (24) 一層が原意。
- (25) 背負い縄をなう年中行事。荷縄は、縄の中程を直径3cmほどに太くし、左ないのない方で、三本ないにした。
- (26) 荷縄ないの前に食べる餅。力が出るように、そして、いい荷縄がなわれるよう縁起をかついで命名したもの。
- (27) 望ましくない気持ちを相手に印象づけるために添えるような用法。
- (28) ばかでかい といふ感じで、特大の藁かごのこと。
- (29) ク Fa クは無声音。Faは古音の残存と思われる。
- (30) ハエルエの「エ」は可能の助動詞。「ネルエ」は「寝ることができます」「ハスルエ」は「走ることができます」であり、終止形の動詞に接続する。
- (31) 「良い按配」・適切ななどの意。
- (32) 豆まきのときに、種豆を入れて腰にさげる。
- (33) 「時」であるが「場合・こと」の意で使うことが多い。
- (34) 蕎の首のあたりの飾りをつけた部分。ひょうたんや草花の模様など作り手それぞれが、独特な編み方で、腕を競ったものである。
- (35) 雪の上にさらして、渋を抜いたり、白くしたりする。
- (36) 「ヌケデナエ」は「ヌイデナエ」のねじれ。
- (37) 渋を抜かないで の意。
- (38) 下着や衣服が赤らむこと。
- (39) 「ミヅサ」の縮音。
- (40) 蕎レベが折れてもげてしまうことをさしている。
- (41) 堅く きり 打てなかつた といふべきところがねじれたもの。
- (42) 手の甲を指しながら
- (43) 「ユ」は、湯も風呂もさす。

- (44) 「キレルノワナヤ」のねじれ。
- (45) 鍋洗い・釜洗いは、毎日の女性の仕事であった。木灰で磨いて光らせておくのが、女性のたしなみであった。
- (46) 鍋・釜の底にこびりついた煤。方言では「ヘソビ」という。
- (47) 「歯釜」が語源。釜のこと。
- (48) あかぎれ のこと。

2 冬の水汲み

話し手

- A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

B (1) エマミデ ユギー スクナエド イエーゲント ムガス (Aンダ一。
今みたいに 雪(が) 少ないと 良いけれど 昔(は) そう
C ンニ。) (2) ウガエモンダハゲ ホダナ サンダンモ ヨンダンモ (笑)
ん) 多い もんだから そんな 三段も 四段も
(Aンダ) (3) オッデッテナエ コンドナヤ。
(そう) 降りて行ってな こんどね。

A ンダ (C ンニ) (4) カワバダサ カエダン ツケデナヤ。 (C ンダ)
そう (ん) 川端に 階段(を) つくってな。 (そう)
エマ コダエー ホンテ ユギ スクナクテ ラブエ ナタゲント
今(は) こんなに ほんとに 雪(か) 少なくって 楽に なったけれど
コラエ ホンテ……。
これは ほんとに……。

C ンデモ マエニ ホレ ジドーシャナテ アラガネーケハゲ"テ……。
でも(以)前に(は) ほう 自動車 なんて 通らなかつたから……。
(A ホンダ)
(そう)

- B ンダ バシャーダケハゲナエ (A ンダー) バゾーリ。ンダハゲ……。
そう 馬車 だったからね (そう) 馬轡(とか)。だから……。
- A フロッタ ナエッタ ミナ カワガラ クンデ ワガサンナネケドレ
風呂でも 何でも みんな 川から 沢んで 溶さねばならなかつもの
ムガスナヤ。
昔(は) なあ。
- C テオゲデナー。
手桶 でなあ。
- A ンー テオゲ シテ アーナ オモダエナ。(C 笑) バケツナテ
ん 手桶 そして あんなに 重たいの バケツ なんて
ナエケッスアレ テオゲテ。(C 笑)
なかつたしなね 手桶で。
- B キンナ ミダエダド アエンダケツナヤ (A ンー) アノリヤ
昨日 みたいだと あれだつたよな (ん) あのほう
バケツン ナガハ ミナ コーリテ (A ンダー) ホンテ シシャグ
バケツの 中などは みな 氷で (そう) ほんとに ひしゃく(が)
ハエルクラエトカ (A 笑) ナエ (開いて) ナエクテナエ。(C ンダ) (笑)
はいるぐらいいきり (そう) なくってね。
- A アッツグ スガ⁽⁷⁾ ハッテナヤ。
厚く 氷(が) 張ってね。
- B ン スガ⁽⁸⁾ ハッテ。シテ ドゴンテモ アリヤ ソラ イエード
ん 氷(が) 張って。そして どこの家でも あれ 天気(が) 良いと
ソドサ ダシテナエハ (A ンダー) トガスケデハー。
外に 出してね (そう) 解かすんだつたものな。
- A ソドサ ダシテ トガスケダレ。テンピサ アデデナヤ。
外に 出して 解かすんだつたな。天日に あててなあ。

B ホッダナ……。

そんな……。

A ホダナゴド エマ ナエモナヤ。

そんなこと 今は ないものね。

B ン⁽⁹⁾ トガスナテ オンスエキナテ ナエッス (A ホ~~タ~~^タ ホダ一)
んん 解かすなんて 温水器なんて ないし (そ そう)

ヤガンサ シトヅ⁽¹⁰⁾ラエ。ヤガンダテ シトヅトカエ ナエケデ
やかんに 一つぐらひ。やかんだって 一つきり なかつたもの
ショッデンナナヤ。 (A ンーダー ンー) シタツモ ミツツモナテ。
昔などには なあ。 (そウ ん) ニツモ 三ツもなんて。

ポットナテ ナエッス。 (A ンダ一)

ポットなんて ないし。 (そウ)

C テツ⁽¹¹⁾ (A ナエデカンデモ ……) チャガスナ一。
鉄の いつもきまつて 湯沸し(で)なあ

A ンー シー タエデ ワガシテナヤ エロリサ。ホンーテナヤ一。
ん 火を たいて 沸かしてなあ いおりに。ほんとになあ。

C カグマデ ゴハン タエデナエ。 (A ンー)
小柴で ご飯を 炊いてなあ (ん)

注

- (1) 近年雪が少なくなっているので、近年のように という意味。
- (2) 雪の階段の段数。平地の積雪が 1m 50 ぐらいあった。
- (3) 「落ちて」と「降りて」の語形が同じである。
- (4) 水汲みや炊事用具洗いなどは、すべて、表通りに沿った小川でやっておった。そこをカクバタと言っていた。
- (5) 通りで働いていても危険ではなかつた と続けるつもりだつた。
- (6) 昨日は冷えこんでマイナス 11 度であった。「すごく冷えこんだときには」という意味
- (7) すごく厚く という意味。強意の表現なので促音を強く言う。
- (8) 氷一般をさすが、水面にはつたものをいう。村山地方、置賜地方に分布している。庄内・最上・北村山北部では 氷柱フクモトをスガといふ。
- (9) 「解かずにしても」の意。「トガスナテ ユテモ」のねじれ。
- (10) 言いかけ であつて、「……湯を沸して解かす」という意味のことと言つたりだつたといふ。
- (11) 鉄びんのこと。元来は「茶沸し」→チャワガス→チャーガス →チャガス と変化したと思われる。
- (12) 「……大麥だつた」の言いかけ。
- (13) 杉の下草や小柴や笹などを刈り集めたもの。杉の葉や松の葉も混じつており てしてかまどの焚き物として好適であった。

3. 山仕事

話し手

A 佐直 きえ 女 明治 36 年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3 年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治 34 年生まれ

B タギモノ ショエダラ エガンナネケッダナ ナツ"ナエ
焚き物 背負いには 行かねばならなかつたもんだな 夏(になると)ね。
ンダゲナエ。
だからねえ。

A ンダー ヤマサ。ヤッパリ オラエデナホレ オラエ/
そう 山にね やっぱり 僕家でなんかね 僕家の
ジッカデナー ヤマ ナエケハゲテ ホレ タナキージ"ヤ
実家でなんか 山(やま) なかつたから ほら まき(薪)は
カウケヅダナナヤ。 (B ンダ タナキ) ホレ ヒトフヨー……。
買ったもんだよな。 (そう まき) それ 一 冬

C ヤマデナー。

山でね

A ン一 ヤマデ⁽⁴⁾ カッテ。 (C ン一) ヤマデ カウド
ん 山で 買って。 (ん) 山で 買うと
ヤッスエナテヨ。 (C ン一) ホシテ ホレ オラ ンダ
安いなんてよ。 (ん) そして ほら 僕達(は)

エガンナネケツー ホノ アエマニ ホリヤ。ターノ スゴド
行かなければならなかつたな。その 合い間に ほら。田の 仕事(を)

シタ アエマニ。(C ンー) エガンナネナ キー ショエ。
した 合い間に。(ん) 行かなければならぬの 木(を) 背負いに。

(C ンダ"ンタ") ンダード オメ ホダ"ナ ショエダスナデ" コゴラ
(そウそウ) そうすると お前 そんな 背負い出すので このへん

シェナガ ムゲッケツ" オラ ホン……。

背中(か) 剥けるんだつたよ 倦 ほん……

C ンダ"ナエ キー……。(B ンタ" A 笑)
そウホ 木(を)……。(そウ)

B タノ クサ トリアゲッド ヤマダ"ケモナエ。(A ンタ") ナツテ
田の 草(を) 取りあげると 山(仕事)だつたものね。(そウ) 夏って

ユード (A ナエデカンド) ドッゴ"デモヨーハ
いうと (何はともあれ) ど"この家でもよ

A シマサエ アッド ヤマサナヤ (B ン) ショッテン。スバー
暇さえ あれば 山になあ (ん) 昔は 柴(を)
ショッタリダ"ベ ホレ。テスバナ" (6) ミナ ヤマデ" カッテナレ。
背負つたりだ"ろう ほら 手柴など(は) みを 山で 買ってね。

(C ンタ"ナエー) ン。ホシテ ショエーダ"サンナネケツ"。オラ
(そうだ"なあ) ん そして 背負い出さねば"ならなかつたな。倦(は)

(7) (8) アノ ユワギ" ナベヤリサダ"ラ エッタナ キーショエ。
あの 岩木の 鍋遣(は) 行つたなあ 木背負いに。

(C ンーンー) イエー エダ"ドギ。アソゴ" ショエーダ"スナ
(ん ん) 家に 居たとき。あそこ 背負い出すの(に)

トガクテナレー ホダ"ナ。(レ) シルママ" ニンドグ"ラエツケ
遠くってねえ そんな。(ん) 登まで(に) 二度ぐらいきり

アラガンナエケンナエガツ⁽¹⁰⁾ オラ (C ンー) シランカラ
歩けなかつた ジやないかな 僕 (ん) 午後 から
エッペングラエ ショエダシテ アド クルマサ ツケテ
一ペんぐらい 背負い出して あとは 荷車に つけて
クランナネドレハ ヤッパリー。 アノ ナベーヤリサダラ
来なければならぬいたう やつぱり あの 鍋遣になら
エッタナー (B ン) ンー。
行つたな (ん) ん。

B オランダ["] ユワギヤマノ ホーサ ホダエ エガ^oネハゲ
俺達は 岩木山の 方には そんなに 行かないから
ワガンナエモナエ。 (C ン^ンダナエ)
わからぬいものな。 (ん そうだぬ)

A ンー ホレガラ テスバ ホリヤ キューリノ テスバダ
ん それから 手柴 ほら きゅうりの 手柴だ(の)
ササギノ テスバダノテ アダナ ミナ ヤマデ カッテ ホレ。
ささげの 手柴だのって あんなのは みな 山で 買って ほら
スバ マロテ コンド ショッテナヤ。 ショエダシテ ホレ。
柴を 束ねて こんど 背負ってな 背負い出して ほら

C カヤシイ エッタツアナヤ タギバサワサ。
萱背負い((⁽¹¹⁾) 行つたもんだな 滝葉沢 に

B ンダ["] ヤッパリー カ カヤーブギダケハゲ ナエデカンデモ
そう やつぱり 萱葺きだったから どんなことがあっても
カヤデ (A 笑) フガンナネハゲ カゲ^{.....}。
葺で () 萱かねばならぬから

C オラエノ ヤマンナ カヤ ナンガ^oクテナヤ アソゴナヤー
俺家の 山の 萱(は) 長くってな あそこなあ

ナガサガ⁽¹²⁾ (A ン一) ノボンナ コワエッタラ コワエッタラ(笑)。
長坂(を) (ん) 登るの(は) 疲れること 疲れること

A ヤマシヤ コノ一 ノボリクダリ アッサゲー ホンーテ
山は この 登り下り(か) あるから ほんとに
クタビレンモナヤー。 (C ンダ一) ン一。
くたびれるものね (そう) ん

B ンダ⁽¹³⁾ アノ ドンドゴノ サガヨナエ。 (C ンダ一。 A ハア一)
そう あの ドンドコロの 坂よね。 (そウ) はあ
ミログ⁽¹⁴⁾ ヴヤマサ エッタゴド ナエケガ一。
弥勒寺山 に 行ったことは なかつたかい。

A ミログ⁽¹⁵⁾ ヴヤマナテ ホダエ エガネナ。 オランダ タエーデ
弥勒寺山 なんて そんなに 行かないな。 僕達(は) 大低(は)
イエー エダドギ^ワ ユワギ^(B ユワギヤマダケモナエ) シ
(実)家に 居たときは 岩木 (岩木山 だつたものね) ん
ユワギヤマダケモ カウナ。 (C ンン一) ン一。
岩木山 だつたもの 買うのは。 (んん一) ん。

B ドンドゴロノ サガヨ ノボルエナエ。
ドンドコロの 坂(が)よ 登るのにね。

C ナガクテナヤー。 (A ハ ンダツダ一)
長くってなあ。 (は、なるほど)

B ノボーリデ⁽¹⁶⁾ ホッダナ。 クルトジュー ヤッパリ ニンジエン
登りで そんな。 来る途中(で) やっぱり 荷休息棒(を)
カゲデ^エ エッカエ ヤスマネド (C ンダ) ナエッタテ
使って 一回 休まないと (そウ) どうしても
ノボランナエ ナダケ ホゴマテナエ。 (C ナエ。 A ンダガ一)
登られないんだつた そこ(岐)まではね。 (ねえ。 そつだつたか)

コワクテ。 (A ヤッパリナー) ンダ"ガド"テッド コンド クダ"リデ
くたびれて。 (やつぱりなあ) そうかと思うと 今度は 下りでは

アス プルプルプルプルテ (笑) (A ホダ"ヅダ") クダ"リダ"ド
足(か) ぶるぶるぶるぶるして (なるほど) 下りだと

ショエモノ ショッテ アス プルプル ナテナエ。

荷物 (を) 背負って(るので) 足(か) ぶるぶる なってね。

A ンダ" クダ"リジャ ンダ"モナエ。 (B シー) アエツ" シンドエ
そう 下りは そうだもんね。 (ん) あれは ひどい
モンダ"モナヤ ヤッパリ。
もんだもの奴 やつぱり。

B ノボリエガテモ ラグンナエナナエ。 (A ンダー) タント
登りよりも 楽でないのね。 (そウ) たくさん

ショッテ ンダ"ラヨ。

背負ってなら よ。

A ⁽¹⁷⁾ オカナクテヨ ヤッパリナヤ。 ターント ショッテ クランナネハゲ
おつかなくってよ やつぱりな。 たくさん 背負って 采なければならぬから
ホレ。 シー。
ほら。 ん

B アドガラ シタノ ホーガラ ミツ" ツエダ"ケゲントナヤ。 (A シー)
後年 下の 方から 道(か) できたっけ けど な。 (ん)
⁽¹⁸⁾ ハヤグナノ……。 (C アソゴサ……) エ エマ コーチャエン/
以前など……。 (あそこニ……) エ エマ 興ちゃん家の

(20) ホソギナー アエヅ (21) スッドギ アンドギ マダ ミツ
細丸太など(を) あれ するとき あのとき(は) まだ 道の
(22) シェンーバエドゴ ホゴ サガ ノボタンダモナエ。
狭いところ(を) そこ 坂(を) 登ったんだものね

C ンダナー アノ ナンガエナ ホレ (A ンー) ショッタンタゲナ
そうだよな あの 長いの(を) ほら (ん) 背負ったんだからな
ミナ (A ンダツダー) ンー アレマテ (A ホンテナエー) アノー。
全部(を) そういうわけだ ん あれまで (ほんとにね) あの

B ツヽヽ ナンガエ モンダハゲ コノ スコス クボミサ ハエッド
長い もんだから この わずかの 窪みに はいると
ツカエテ。(笑) (A 笑) ンダハゲテ コンド ホゴシテヨー (A ンー)
つかえって。 (だから) こんどは ほぐしてよ (ん)
オツランナネケツ (A ジャー) シタマテ サケテ。 (A ンダツダー)
下りなければならなかつんだよ (まあー) 下まで 下げて (なるほど)
ン。 ナリツッチャエ モンダベツス (A ンー) ナガエモンダモ
ん 背丈が低い もんだし (んー) 長いもんだもの
トプント ハエンナヨ。
とぶんと はいるのよ。

A ンダツダー ヤッパリ ナエヤー。
なるほど やっぱり なあー。

C ホンーテ オラエノ コースケダナンダラ アダナ エッポンダテ
ほんとに 僕家の 興輔たちなら あんなものは 一本だって
モテクランナエ。(A ンー) ミロ ムガエノ ジーチャンダ ミナ
持って来れない。(んー) 「見ろ 向い(の家)の 爰さんたち (が) 全部
(26) ショッタンダテ。 ホンダゲ (27) ホゴ ミナー アノ ソカギ
背負ったんだ」って。 だから そこ みんな あの 雪囲い

- スンナ ミナー ショッタンダ"ダ"レー。 $(^A \underline{\text{ンダツダ}})$ $\underline{\text{ダエブ}}$
 するのを 全部 背負ったんだものねえ。 (そういうわけだ) かなりの
- ネン ナルネハー アノ $(^A \underline{\text{ン}})$ ホソギ モテキテガラ。
 年数に なるねえー あの $(\underline{\text{ン}})$ 細丸太を持ってきてから。
- B ンダー アエツ シツシャスエナー。 ナンネングラエナッカ。
 そう あれ(は) 久しいなあー 何年ぐらいたつたかな。
- C ョンジューネンテ $\overset{(29)}{\text{キカネガ}}\text{ー}。$
 四十年で きかないか
- B ョンジューネンナ ナルナハ。
 四十年など なるな。
- C ナルナー。
 なるなー。
- A ヤマワ ホンテ ナンギ サンナネ ヤッパリナヤ⁽³⁰⁾ス。
 山は ほんとに 難儀 なければならぬ やっぱりな
- C ヌー ユノサワアダリダド $(^A \underline{\text{ン}})$ ホレ ツッカエハゲテ
 $\overset{(31)}{\text{ん}}\text{ー}$ 湯野沢あたりなら $(\underline{\text{ン}})$ ほら (山が) 近いから
 ホダンデ ナエケヅ。
 そんなでも なかつたな。
- B ンダ ミツ イエーケッスナー。 $(^A \underline{\text{ン}})$
 そう 道(か) 良かっただしなあー。 $(\underline{\text{ン}})$
- C ンダゲヨ コツツサ キテ マツガダサ エッテ カエテ ナンギ
 $\overset{(32)}{\text{だ}}\text{からよ} \quad \text{こっちに} \quad \text{来て} \quad \text{町の方に} \quad \text{行って} \quad \text{かえって} \quad \text{難儀}$
 サンナネドー オモテッケ オラー。 $(^A \underline{\text{ン}})$ ヤマ ンダーゲ。
 なければならないって 思っていたもんだ" 僕は。 $(\underline{\text{ン}})$ 山 だけ(は)。
- A オランダナ ホレ ホダナ タナギ カッタドギドカ スバ
 僕達など(は) ほら そんな 薪(を) 買ったときとか 柴(を)

カッタドギツカエ ヤマサナ エグゴダ ナエハゲナ。 (C シー)
買ったとききり 山などには 行くことは なかったからな。 (ルー)

ヤマナ ナエハゲ オラエノ イエーデ ホレ。
山など なかったから 僕の 家では ほら。

C ンダ"ゲテ ア アノ (A シ) タナキ ショウドギ カマス チェット
だから あ あの (ル) 薪 (を) 背負うとき(は) 叩 (を) ちょっと
(33) コー タデ"デ ホシテ (A シー) ショウド イエーナダッス。
こう 立てて そして (ルー) 背負うと 良いんですよー。

(A ハー ンダガ) ンダド アダラネ (A シー) カマスバ
はー そうか そうすると(骨) 当たらない (ルー) 叩 (を)

シタツツエ オッテナレ。 (A ンダツタ)
ニツ (イ) 折ってな。 (なるほど)

A ハエツ ホレ スンケ⁹ ショウハゲテ ホレ シエナガ オマエ
それを ほら じかに 背負うから ほれ 背中 (か) お前
ムゲッケツ ホダナ。 (C ムゲル) エッタクテ コンド ヨル
剥けろんだったよ そんな (剥ける) 痛くって こんど 夜
ユサ ハエッドギ ピリピリテヨー。 (笑) ホーシ¹⁰ コンド
風呂に はいるとき(イ) ひりひりしてよー。 そして こんど

(35) ハスマテ¹¹ ホリヤ ヤマサナ エッタドギナ コンド ツギノ シ
最初の日(イ) ほら 山などに 行ったときなど こんど 次の 日
(36) アガリバン オツランナエナヨ。 コンド コムラカエリシテ。(笑)
上り樋(を) 降りられないのよ。 こんど 腹返りして

B コムラカエリシテ ンナエガ。 (A ンダ 笑) アエツ¹²
腹返りして じゃないの?。 (そう) あれは
ヒドエモナエ コムラカエリワ。
ひとりものね 腹返りは。

- A ンタ"ー ンデモ マエニツ" エグドヨー (B ミツ_x ...) ナレテハ一
そう でも 每日 (山) 行くとよー (C ナレル一) 慣れてしまつ
(C 慣れる一)
- B ミッカグラエガラダ"ド ホダンデ ナエナヨー。
三日(目)ぐらいからだ"と そんなでも ないのさー。
- A ミッカヨッカ ホントデ ナエモナヤ。コムラカエリシテ。
三、四日は 本調子で ないものな 腹返りして。
- C ホンテナヤー。 (A ンー) ヤマ トッガエド タエヘンタ。
ほんとになあー。 (ルー) 山(が) 遠いと 大度だ。

注

- (1) 山から切り出した小柴でご飯を炊くといふ話をうけてこゝ言った。
- (2) 棚木。雑木の山に木棚を作り、伐り倒した一定の長さに切った木を積み重ねた焚き木。樋が多かった。
- (3) 「フヨ」と言ふ人はほとんど生きていない。古い発音? 語形である。
- (4) 「山で買う」には二通りある。①山の立木で買い、秋に伐採し適当な長さに切って乾燥させておき、後日、家に運ぶ場合。②棚木になっているものを、山で買いとて 後日、家に運ぶ場合。つまり、①山ごと買う のと ②山に於て買う のと 二通りである。
①が最も安く、ついで②が安く、家に運んでもらうのがいちばん高く、この買ひ方をするのは裕福な家と言われた。
- (5) 背中をさして
- (6) 元んどく豆・きゅうり・ささげ・朝顔などに使ふ支柱用の柴。
- (7) (8) 地名。録音地の北方2~4kmの山村。
- (9) 実家に。
- (10) 運べなかつた といふ意。
- (11) 地名。録音地の西北4kmの山地。
- (12) 地名。
- (13) 地名。ドンドゴロが正しい名称。
- (14) 地名。
- (15) 地名。
- (16) 息棒。荷棒。背負い運搬や荷ない運搬のとき、背負つたまま小憩するためには荷を支える杖。この地域では普通桐の股枝で作る。
「ニンジェンカゲル」は、上のようにして小憩する意。
- (17) 背負つてころんだら怪我をするし、ひとりでは起き上がれないほどの荷物を背負うのが常であったから、ころぶのはこわかった。
- (18) 「タント」を強めた言い方。すごくたくさん。
- (19) 話し手C佐直まさゑの子息が興ちゃん。録音地高宅であり、話し手Bの若い時の奉公先。佐直興輔宅のこと。
- (20) 杉の梢つきの細丸太。もとが直径15cmぐらいのもの。雪囲いや

仮設小屋等に使う。

- (21) 運搬すること。
- (22) 狹いところを強めた言い方。
- (23) ほんとうは、かついたのだという。
- (24) 麓のところ、広い道路のあるところまで。
- (25) 荷をくずしてほごしたという意。
- (26)」って語って聞かせているのだという意。
- (27) 植えこみの樹木。
- (28) 雪折れを防ぐための雪囲い。ソガキの語源としては、粗朶囲い・柴垣・粗垣・粗囲い・外囲いなどが考えられる。
- (29)以上になるかという意。
- (30) 敬意を表わす「ス」は助詞なので、共通語に訳せない。
- (31) 地名。村山市湯野沢。話し手の生まれたところ。山添いの村落。
- (32) 谷地。婚家である現住地。
- (33) 手まねをして。
- (34) すぐに → スグエ → スゲエ → スンゲ⁹
- (35) 清音化している
- (36) 土間から座敷にあかるところに、一尺五寸ゆぐらいの縁をつけておくのが農家の一般的な上かり板であった。

4 叔母さんの卒倒

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治 36 年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3 年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治 34 年生まれ

- C オバサタ⁽¹⁾ アエツ["] アノ タギバサワ⁽²⁾ サギ オラエ["] ヤマノ
叔母さん達^(か) あれ あの 滝葉沢の 先 僕家の 山の
サギ["] ホーデダベ タオッダナ アリヤ。 (A ン一
先の 方でだろウ 倒れたのは あれ ん一)
B ンダ アエツ["] オランダ⁽³⁾ カヤノン ドゴデ。
そウ あれは 僕達^(か) 萱野の 所で。
C カヤノン ドゴデ。 (A ン一) ン一。
萱野の 所で。 (A ん一) ん一。
B オレド ホレー スンサクサド エッタ ドギダゲナ。 (A ン一
俺と ほら 新作さんと^(か) 行った ときだからな。 ん一
C ン一 シューエッツアエ⁽⁴⁾ カガサド⁽⁵⁾ ホレ (A ン一) オバサド
ん一 周一さんの家の 母親と ほら (A ん一) 叔母さんとか
エッタ ドギ。 (A ン一 ン一)
行つた とき。 (A ん一 ん一)
C アオモノトリ⁽⁷⁾ ホレ オカゲデ["] エッタンダケベチャエ。 (A ン一)
山菜採り⁽⁶⁾ ほら ついて 行つたんだつたろうね。 (A ん一)

- B オラダ⁽⁸⁾ スキオゴス エッテー $\left(^A \text{ン} \right) \text{ オバサド }$ ホレ
 倭達(か) 杉起こしに 行って $\left(^A \text{ン} \right) \text{ 叔母さんと }$ ほら
 シューエッツァエ！ カガサ アオモノトリ シッタンダケ。
 周一さんの家の 母親(か) 山菜採り(を) していたんだった。
- A ンーダ"ヅダース⁽⁹⁾ ンー。
 なーるほど んー
- C ホシテ ンタ"テ チヨンドシテ。アラテ モカエタナ ンナエベー。
 そして だって じっとして。歩いて(て)倒れたのでは ないんだろう。
- B モッカエタナ ンナエナヨー。 オランダ⁽¹⁰⁾ ホレ シタリシテ
 倒れたのでは(は) ないんだよ。 倭達は ほら 二人で
 スギオゴシッタベー $\left(^A \text{ン} \right) \text{ シタエバ }$ オバサ アンベハ
 杉起こししてたろう $\left(^A \text{ン} \right) \text{ そしたら }$ 叔母さん(か) 帰ろウ
 アンベハーテ エダナヨ。 $\left(^C \text{笑 } ^A \text{ン} \right) \text{ ホゴ }$ オラダ⁽¹⁰⁾ ニモツ
 帰ろウ って (言て)いたのさ。 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ そこ(の) 倭達(か) 荷物(を) }$
 オエッダ⁽¹⁰⁾ ドゲ エデヨー。 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ アンベハ } \text{ アンベハーテ }$
 置いとった 所に 居てよー。 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ 「帰ろウ } \text{ 帰ろウ って }$
 ナエダ⁽¹⁰⁾ キタバンデ⁽¹⁰⁾ アンベハザ⁽¹⁰⁾ アンマエチャエナテ オランダ⁽¹⁰⁾
 どうしたんだ 来たばかりで 帰ろウなんて あるまいに」 なんて 倭達
 シタリ エダナヨ。 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ アンベヅ' } \text{ アンベヅ'ハーテナレ }$
 二人(が) いたのよ。 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ 帰ろウよ } \text{ 帰ろウよ ってね }$
 $\left(^A \text{ン} \right) \text{ ナエンーダガ } \text{ ア } \text{ アンベ } \text{ アンベテ }$ ナエダ"ベナ ドテ
 んー なんだか 帰ろウ 帰ろウ って なんだろうな と思って
 ホシテ キタレバ ホレ $\left(^A \text{ン} \right) \text{ シコス }$ クツ⁽¹⁰⁾ マワラネミダ⁽¹⁰⁾
 そして 来てみたら ほら $\left(^A \text{ン} \right) \text{ 少レ }$ ロ(か) もつれるみたいに
 ナッタナーケ。 $\left(^A \text{ア} \right) \text{ ンダーガー }$ ンタ"ゲ オレ コタ"コド
 なってたんだった。 $\left(^A \text{ア} \right) \text{ あ } \text{ そうかー }$ だから 倭(は) こんな具合に

ナッタハゲハ シエデ アンベハーテダケデー。 (A ンー ホーガー)
なってしまったから 運れて 帰って ってだったなー。 (んー そうか)
ンダラ ワガンナエッダナーテ ホレ オンフ^トテ キタナッダナ。
これじゃ だめだなあって ほら おんぶして 来たんだよな。

A ンダーヴ^トダ。
なーるほど。

C ホンテナー アダナ オッケナバ。
ほんとにな あんな 大柄な(人)を。

B ホシテー スンサクサバ ホレ イエーマンデ" エー リヤカトリ
そして 新作さんを ほら 家まで え リヤカーを取って
キテケロッタナヅアナエ。 (A ンー) オランダ アエデッタ
来てくれと言ったんだったよ。 (んー) 僕達(は) 歩いて行つた
モンダモ ホレ。 (A ンー) ショッテン ヴ^トテンシャ ナエッス
ものだから ほら。 、 んー、 昔は 自転車(か) ないし
イエガラ ミナ アエデ エガンナネケデー。 (A ンダ" ンダ")
家から みんな 歩いて 行かねばならなかつたもの。 (そウ そウ)
デー トニカグ エギャウマンデ" オンフ^トテ ング^トハゲー。 (A ンー)
でー とにかく 行き合うまで おんぶして 行くから。 (んー)
リヤカ モテキテ ケロハーテ (A ンー) リヤカトリ
リヤカー(き) もってきて くれって (んー) リヤカーをとりに
ヨゴシタケナヨー。 (A ンー) ンデ モッカエタナデワ
よこしたんだった。 (んー) んで 倒れたのでは
ナエガタナヨー ン。 (A ハー ンダ" ンダ") タタ" コエンス^(II) テ
なかつたのよ ん。 (はー なるほど) ただ こんなにして
ホノママ ホレー (A ンー) スコス アエツ" ナタソダベ アレナ。
そのまま ほら (ん) 少し あれ なつたんだろう あれな。

A キモツ" ワレグ" ナタンダベチャーナース。

気分(が) 悪く なったんでしょうねえ。

B キモツ ワレグ" ナタナヨー。

気分(が) 悪く なったのよ。

C タダンナググモ ナタケナ ンナエベガー。

立たれなくでも なったのでは ないだろウか。

B ン タダンナエケナヨハ。 (A ンー) ンダ ドエット コダア
ん 立てなかつたのよ。 (んー) そ ばたりと こんなに
モカエタ アエツ" ンナクテ ホレ ツブンガハ (A ンー)
倒れた あれじや なくて ほら 自分が (んー)
ガソツ"エダンダベ アレ。 (A ン ンダベ) ンゴガソナグ" ナタナ。
気付いたんだろウ あれ (ん そうだろ) 動けなく なつたのを。

ンダハゲ" アンベハー アンベハーテ ユタンダベ アレー。
だから 帰ろウ 帰ろウって 言つたんだろウ あれ。

(A ンー)
 (んー)

C ナ ンテ キタミロハナテ オランダ" エダベシター。 (A ンー)
な なんだって もう帰ってきたなんて 僕達は 考えていたわけよ。 (んー)

注

- (1) オバサワと言るべきところがねじれている。
オバサには次のような意味がある。①妹・次女以下の娘 ②弟嫁
③伯(叔)母 ④出もどり女 ⑤婚期を逸した女 ⑥おろかな娘
オバともいう。
- (2) 地名。録音地点の北西3~4Kmの浅山
- (3) 地名。同上
- (4) 人名。話しへ 佐直まさゑ宅の分家の主人。
- (5) 人名。同上
- (6) カガサ ①母親 ②(子どもが呼ぶ)おかあさん
- (7) アオモノ 山菜の総称。庄内の海岸をのぞく県内全域で使用。
- (8) 雪で倒れた杉の若木を起こす作業。
- (9) 敬語の「ス」
- (10) アンベは、「行こう」という意味だが、ここでは「帰ろう」の意。
- (11) かがむしさをして。

5 萱野刈り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- A シエンニ ホリヤ ミナ クサヤネダケハゲテ オランダモ
昔は ほら みんな 草屋根だったから 僕たちも
アギー スゴド⁽¹⁾ スマウド リヤー ノーカリジャ エッタツー。
秋(に) 仕事(を) 終えると あれ 萱野刈りには 行ったなあ。
- $$\left(\begin{matrix} C & /-\text{カリガ一} \\ \text{萱野刈りか} \end{matrix} \right) \text{ン一} \text{ ヨース アリヤー。 } \left(\begin{matrix} C & \text{ン一} \\ \text{ん一} \end{matrix} \right)$$
- B カヅギザワシュー⁽²⁾ ンダケッダナナー⁽³⁾ アッツノ⁽⁴⁾ ホーナー。
勝木沢の人たち(は) そうだったよな あっちの 方は友一。
- A ンダ⁽⁵⁾ アソゴラシュータ ミナ ホレ⁽⁶⁾
$$\left(\begin{matrix} C & \text{ン一} \\ \text{ん一} \end{matrix} \right) \text{アノノ一テ}$$

そう あの辺の人たちは みんな ほら⁽⁷⁾
$$\left(\begin{matrix} C & \text{ン一} \\ \text{ん一} \end{matrix} \right) \text{あの 野で}$$

カウナダケンダナレ。
$$\left(\begin{matrix} C & \text{ン一} \quad \text{ン一} \\ \text{ん一} \quad \text{ん一} \end{matrix} \right)$$
 カーッテ ホシテ
買うのであつたんだな。 刈って そして
ホリヤー……。
ほら……。
- C ナンーガ⁽⁸⁾クテナヤー。
長くってなあ。

A ンダー ヨス ナンーガ⁹クテ (C ナンーガ⁹クテ) ナヤ。
そう 葦(か) 長くって (長くって) なあ。

C イエー⁽⁷⁾ケデー。
よかったものね。

A ホーシテ コンド ワラ ホレ ウッショノ ホーサ コー
そうして こんど(は) 薙(き) ほら (体の) 後ろの 方に こう
アレシテ。 (C ンー) ホシテ イエアンバエ イエアンバエ
あれして んー そして 適宜 適宜に
タバネ タバネナヤ (C タバネ⁽¹⁰⁾デナヤ) ホシテ コー タデデ
東ね 東ねてな (東ねてな) そして こう 立てて
クンナダケデハ (C ンー) アノ一 カッタ ドゴサヨハ タバネデ。
来るんだったものな (んー) あの 戻った 所によ 束ねて。
ホシテ ハル ホリヤー コンド ヤネフギ ⁽¹²⁾ クルナテ ュード
そして 春に ほら こんど 屋根葺き(が) 来るなんて 言うと
ツケランナネツア ⁽¹³⁾ コンド ハエツ¹⁴ナヤ。
運ばなければならなかつたもんだ こんど それをなあ。

C ンダナー ナンガ⁹エナナー
そうねー 長いのをなー

A ンー ヨス コンド クルマン ドゴマテ⁽¹⁴⁾ ショエタシテ。
んー 葦(き) こんど 車の 所まで 背負い出して。
オラダモ⁽¹⁵⁾ ナリ ツッチャエハゲ コム ナンーガ⁹エナ (笑)
俺も 背丈(か) 低いから この 長いの

ホツツ ヨスノ ホー／ホー ホレ ツルツル シパラテ
そっち 葦の 穂の 方(き) ほら するする(と) 引きずって
コンド (笑) シミ タツアナヤ ハエツ (笑)。 ホーシテ コンド
こんど 背負つたもんだよ それを 。 そして こんど

(17)
ホレ ヤネ フエデ" モラワンナネナーデ" コンド ハエンデ"ナヤ。
ほら 屋根(因) 舞いて もらわねばならないんだから こんど それを使ってな。

C ンデ"モ アエツ" ヨッポド シトキリイエガ" シタキリグ¹⁸⁾ラエ
でも あれ(は) よっぽど" 一切以上 ニ切り ぐらい
ヨゲー ヤマンナユリ アレダ" ンナエガ"。
多く 山のものより あれじゃ ないか。

A ナンガ¹⁹⁾エハゲ²⁰⁾ナニ。
長いからな

B ンダ" ナンガ²⁰⁾エゲント ジョーブンナワ ホレ ヤマンナノ ホー
そう 長いけれど" 丈夫なのは ほら 山のものの 方(が)
ジョーブンダ"テ ユーケッタ"ナエ
丈夫だ"て 言うんだったよな

A ンダツダ"ナエ カヤー²⁰⁾-----
そうだねえ 萱

B カダ"エハゲー
堅いから

A カヤガ" カッタ"エナツ"ダ"ナー。ホンデ"モ オラエンドゴ" シューナ
萱が 堅いんだよなあー。それでも 僕家の近所(因) 人達など(は)
ミナ ヨスー アノ ノーンデ" カッテナレ キヨーノドーシテ
みんな 舟(を) あの 一野 で 買ってさ 協同で
ミナ カッテヨ。 (B ンン) ホシテ ホレ ノーカリ エング"ナダ"ケ。
みんな 買ってよ (んん) そして ほら 萱野刈り(因) 行くんだった。
(B ン) テ"ハ ウッショサ コー ワラー サシテナレハ
ん で (体の) 後ろに こう 薤を さしてさ
(C ンダ" ンダ") ホシテ チェッヂ²¹⁾ ニサンボンツツ" コー
そウ そウ そして ちょくちょく ニ、三本すつ こう

ヌエデ” ホシテ カリナガラ (B タンバネデナ) コレ ング⁽²¹⁾ラエ
抜いて そして 刈りながら (束ねてな) これぐらい (E)
タンバネデナヤ。 (C ンー) ホシテハ一 コンド グルーット
束ねてねえ (んー) そしてさ こんど ぐるっと
ナワー マシテハ一 ホシテ アノ フユ ホレ ホサ タデ⁽²²⁾デ
縄(を) 囂してさ そして あの 冬(は) ほら そこに 立てて
クンナヅンダナハ。
来るんだったよ。

C ン ハルサ ナテガラ ホシテ ショウナ。
ん 春に なってから そして 背負うのな。

A ンー ハルサ ナテガラ コンド ショッテナヤ。 (C ンー)
んー 春に なってから こんど 背負ってな。 (んー)

ホーシテ ツルツルド オランダナー ホダナ (笑) ナリ
そして するすると 倭なんか(は) そんな 背丈(か)
ツッチャエハゲ ホノ ミーナ シッパラツツンダデ” コンド
低いから その みんな 引きずつてしまふんだよな こんど
ホレ ホツツ ウラノ ホー。
ほら そっち 末の 方(か)

C ヤンダナテ ヤネンデ⁽²³⁾ ホレ ナヤー……。 *
いやだなんて いわないで ほら なあ

注

- (1) 野良仕事。
- (2) 河北町内の小字名、話レ手 A の生まれた所。
- (3) 萱野刈りには行ったもんだ ということ。
- (4) 勝木沢の方面。
- (5) 生えたままの葦を野ごと（買ウ）。
- (6) ナンーガクテはナンガクテ（長くて）の強調した言い方。
- (7) 良い材質だったといふ意。
- (8) 葦を束ねるための藁。
- (9) 手まねをしながら……腰にさげて といふ意。
- (10) 「イエアンバエイエアンバエ」ガイデオム。
いい塩梅・いいかげん・適當・適切・手ごろに などの意。
- (11) 立てるしぐさをしながら。
- (12) 屋根葺き職人。
- (13) 車につけて運びこと。
- (14) 葦は湿地に生えているため、荷車が近くまではいきこめないので。
- (15) 複数の「だ」（達）を用いているが、この場合は「俺なども」の意。
- (16) 自然に引きずるような状態になって といふ意。
- (17) 葦を用いて
- (18) 屋根を葺くときの葦葦の長さ。50 cm ぐらい。
- (19) 萱・茅・オガルカヤのこと
- (20) 同上
- (21) 直径 5 ~ 7 cm ぐらいの束を手で示して。
- (22) 葦の束を直径 2 ~ 3 m ぐらいの円錐形状にまとめて立てて、繩をまわしてしばっておくのであった。
- (23) 末・梢のこと。ウラポ、ウラポエともいふ。
- (24) どんな労働もやったもんだ といふつもりだった由。

6 肥 やし 金 と 給 金

話し手

- A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A オラエノ アネサ ガッコ ソヅキョースッド アッチャ リヤー
俺家の 姉さん(は) 学校(を) 卒業すると あっちに あれ
⁽¹⁾
アノ エドトリコーバサ (C アーン) エッタハゲハ (C ホーガ)
あの 糸取り工場に (あー) 行ったから (そウカ)
⁽²⁾
ホシテ ムガスザヨ ヤッパリ アレンダケデ アノー オー
そして 昔はね やっぱり あれだったもの あのー
ホダナ ワレワレミダエ ミンヅノミヒヤキショーテ ユタラ
そんな われわれみたいな 水呑み百姓って 言ったら
イエーガ ホーユー シトナナレー (C ンー) ヤッパリ ターサ
いいか そウイク 人などはなー (んー) やっぱり 田に
⁽³⁾
コヤス ヘレンナ ホノ コヤスガネテ ユナ ツグランナネケナヨ。
肥料(を) 入れるのに その 肥し金って いうのを作らねばならなかったのよ。
(C ン) ダレガ カレガ。 (C ンー) ンダケテ ホリヤ
(ん) 誰か 彼かが。 (ん) だから ほら
ゲジョドガ (C ン) コンモリドガテ ミナ ツッチャエ ドギガラ
下女とか (ん) 子守りとかに みんな 小さい 時から

(c ん) ヤラッタ"ドホレ ミナ。
やられたもんだ" みな。

C ンダ"ヅ"ンダ。

なるほど。

A ハエツ コンド ダンナガラ ホレハ マエキン カッデハ
それが こんど" 旦那から ほら 前金を 借りて

(c ん) ホシテ ホレ (c ん) コヤスガネジャ ホレ (c んー)
そして ほら (c ん) 肥やし金は ほれ (c んー)

コヤスジャ カッタ モノヅナ ムガス。 (c んー) ハエツ
肥やしといふのは 買った もんだよ 首(は)。 (c んー) それが

ホレ オラエ/ イエーデナ/ ホレ オラエ/ オドツヤニ
ほら 僕家の 家でなんか(は) ほら 僕家の 父親の

シャデ⁽⁴⁾ ホレ アツツエ エダケハゲ エケグロエ。 (c んー)
弟(か) ほら あっちに 居たっけから 池黒に。 (c んー)

ホレ エマ/ ナンヨーシリヤ。 (c んン) アソゴワ ント
ほら 今の 南陽市 だね。 (c んん) あそこは 非常に

ホレ エドトリノ アレンタケデ サガンナ ドゴンタケドレ。
ほら 糸取りの あれたつたろウ 盛んな ところだったもの。

C ンダ"ヅ"ンダ。

なるほど。

A オッケ コーババリ アッテ ホレ タシェーナテ ユーナナヤ。
大きな 工場ばかり あって ほら 多勢 なんて いうのなどな。

(c んー) ホゴサ ホレ オラエ/ オンツヤエ/ イエーサ
んー そこに ほら 僕家の 叔父さんの 家に

トマテ (c んー) オラエ/ アネサワー ガッコ ソヅギヨースッド
泊まって (c んー) 僕家の 姉さんは 学校を 卒業すると

ホレハ(Cン) エドトリ エッタ モンダハゲナヤ (Cン)
ほら (ん) 糸取り(に) 行つた もんだからなあ (ん)

ホンダゲ オラエノ イエデジヤ ホノ コヤスガ[。]ネージヤ
だから 僕の 家では その 肥やし金 は

フジュスネケヅ。 (Cハ一) オラエノ アネサ ホレ ボン
不自由しなかったよ。 (はー) 僕家の 姉さんは ほら 盆と

ショーガツ ジェネ ナエ[。]デカンデ モテクッケハゲナレ。
正月には お金(を) きまつて 持つて来たもんだからな。

(Cン一) ホシテ ホレー アノー エドトリ ジョーツ[。]デー[。]
(ん一) そして ほら あの 糸取り(が) 上手で

ナナヒヤグニングラエ エタケベアレ オラエノ アネサ
七百人ぐら(も) 居たんだろ(が) 僕家の 姉さん(か)

ハエッタ コーバデ (Cシ一) エツンータ⁽⁶⁾ ユートーシェーテ[。]ヨ
勤めている 工場で (ん一) いつでも 優等生でよ

(Cン) ャッパリ ニバンドガ エツバンドガ ホレ
(ん) やっぱり ニ番とか 一番とか ほら

サンバントガテナレ (Cン一) ャッパリ ジョーツナタケナ。
三番とかになつてな (ん一) やっぱり 上手だつたんだな。

アダナ ワガツニスル シトンダハゲダガ ナエタガ エドガ[。] ホレ
あんな 若死にする 人だったからか どうか 糸が ほら

フットエ ホッソエ ナクテ タエーラナタケド。 (Cン一)
太い 細い(が) なくて 均質なんだつたそうだ。 (ん一)

ハエツ[。]デ ジョーツンタ[。]テ ユナ[。]デ ホレ ホービ マエネン
それで 上手だつて いうので ほら 寝美(を) 每年

モラウケヅ。 (Cン一) ショッデン ホリヤ ニジューゴエンナテ
もううんだつた。 (ん一) 昔は ほら 二十五円なんて

ユード タエーシタ ホダナ ⁽⁷⁾ (C ンダベ) オナゴシュー／＼
いたら たいした そんな そうだろウ 女性の

アレナテ ユド ホービヅナヤ (C ン) アダリマエ ホレ
あれなんて いたら 褒美だよなあ (ん) あたりまえに ほら

⁽⁸⁾ テマ モラタ ホガエ

手間賃(き) もらった ほかに

B ニジューゴエンナンダラ ンダッタナナヤ ⁽⁹⁾
二十五円なら そうだよな。

A モラウナダーゲナヤ。
もううのだからな。

C ユエノー モラウ コロンダモナハ。 ⁽¹⁰⁾
結納(として) もらう 金額だものな。

A ホンダドレ オマエ ニジューゴエンナテ オラ ンタ
そうさ おまえ 二十五円なんて 僕など(は)
サンジューエンデ キタンダドホレナヤ。(笑)

(結納) 三十円で 来たんだものね。

B サンジューエンデテ。オレー コーチャエンノ イエーサ キタナ ⁽¹¹⁾ ⁽¹²⁾
三十円だなんて 僕など 興ちゃんの 家に 来たのは
エツンバン ハヤグノ トス サンジューゴエンタケテ。 (A ナアツ
一番 初めの 年は 三十五円だつたものな なあ

C ナー エダ) イエー イエガラ ⁽¹³⁾ イエーガラ シコムドギ ⁽¹⁴⁾
なんと 家から 身を引くとき

ハツシューエン。(笑) ホノ アド ブッカ グングン アガテ
八十円(だった)。 そのあと 物価(か) ぐんぐん 上がって
キタベ。(A ンダー) カガチャ ユエノー ヤル ゴジユ
来よう。 そ 妻に 結納 を やる(のに)

ゴジューイン。^(C ンー A.C 笑) コノ ゴジューインタテ
五十円(だろウ)。^(ルー) この 五十円といつても
エツ"ネンハンモ カガ"ンナダ"デナエ。
一年半も かかるんだものな。

- A ホンダ"ヅンダー。ゴジューインタラ イエー ホーツアナヤ。
そういうわけだ。 五十円なら いい ほうだよなあ。
- B ⁽¹⁵⁾ エマノ シトナー ラーグ"ナツアン ユエノーナテ ユタテ。
今の 人なんか 楽なんだよな 結納なんて いつても。

A サンジューエンナテ オマエ タンダ-----
三十円なんて おまえ たた"-----

B ヒヤグマンナテ ユタテ ラグッダ"ナネ。オランダ エツ"ネンハンモ
百万(円) なんて いつても 楽だよな。 僕など 一年半も
カガテ ^(A 笑) ユエノー ヤランナネナ ^(A 笑) ホダナ エマノ
かかって 結納(き) やうねばならない味 ^(き) そんな 今
シト エツ"ネンモ ^(A 笑) カガラネデハ。 ^(C ンダナー)
人は 一年も ^(A 笑) かからぬもの。 ^(き) そうだね

A ⁽¹⁶⁾ ホダナンタ"ドレナヤ。ハエツ オラエノ アネサ"ンダ オマエ
そんなもんだ"ものね。それが 僕家の 姉さんは おまえ
アダリマエ ゲッキュー モラタ ホガエ ャッパリ エツ"ネンデ
あたりまえに 月給(き) もらった ほかに やつぱり 一年で
ショーヨテ ユーナナレ ^(C ンー) ニジューゴ"エング"ラエ
賞与って いうのをね ^(ルー) ニ十五円ぐらい
マエネン モラウナダ"ケ。^(C ンー) ホノ ホガエ ホレ
毎年 もううんだった。^(ルー) その ほかに ほら
キョーダエドガ ナニドガテ スナモノデ モラタ モノツアナヤ。
鏡台とか 何とかって 品物で もらった もんだ"よな。

(C ンー) ンダ"ゲテ オラエノ ツッカ"ンデ"ジヤー アネサ
（んー）だから 僕家の 実家では 姉さんか

ジエネ モテクッサゲ ホレ オランダ" イエー エル ウツワ
お金(を) もってくるから ほら 僕(が) 家に 居た うちは
コヤスガ"ネテ ユナ シャッキン スッゴ"ダ" ナエガ"タズ。シ。
肥やし金(と) いうのは 借金 することは なかったもんだよ。んー。

C ンダ"ハグ⁽¹⁷⁾ カシェガ"ンナネケッタ"ナナー。
だから 稼がねばならなかつたわけだ"よな。

A ンダ"ー。ンダ"ゲテ ムガスナテ ホリヤー ミナー アノー
そウ。だから 昔などは ほら 又な あの
トッタタゲ⁽¹⁸⁾ ハンブンモ ネング⁽¹⁹⁾ ハガランナネハゲ"テー
取つた分の 半分も 年貢(を) 納めなきゃならぬから

(C ンー) イエサ ノゴッ ドコジヤ ナエナーテ" コメナヤ。
(んー) 家に 残る ところは ないんだよな 米はなあ。

(C ンダ" ンダ"ー) ンダ"ゲ クンヅ
（そウ そウ） だから 肩

C クンヅ"バリ クテランナネケナヤー。

肩(米)ばっかり 食ていなきゃならなかつたな。

A ンー。ホンダ"ゲテ ホダ"ナ ナツゴ"メ⁽²⁰⁾ アソゴノ イエーテ"
んー。だから そんな 夏米(を) あすこの 家で⁽²¹⁾
ニジュータ"ラ⁽²²⁾ シイテ⁽²³⁾ ウッタドナテ ユナ"ンダ"ラ ホーンテ
ニ十俵(も) ひいて 売つたそだなんて いうのなら ほんとうに
ダンナシユーダ"ケ。⁽²⁴⁾ (C ン ンダ"ナー) ムランデモ⁽²⁴⁾ (25) エッケンカ
金持ちだつた⁽²⁵⁾ (ん そうだ"な) 地区でも 一軒か
ニゲンク"ラエダ"ケ。^(C 笑) ナツゴ"メナ ホレグ"ラエ ウル シトナ!。
ニ軒ぐらいだつたな。 夏米を それぐらい 売る 人など。

注

- (1) 小学校六年生
- (2) 製糸工場。まゆから糸をとる工場。
- (3) 金肥。
- (4) 地名。南陽市池黒に製糸工場があつた。
- (5) 工場主の姓。
- (6) 「いつだって」が原形。エヅダテ（いつでも）を強めた形。
- (7) たいした を強めた形。
- (8) 給金。
- (9) 大変な金額だよな。
- (10) コロ は くらい の意。ここでは「-----くらいの金額」の意。
- (11) 佐直興輔。話し手Cの長男。話し手Bの奉公先。
- (12) 来たとき、住みこみで奉公したとき の意。
- (13) 奉公先から
- (14) 「引っ込む時」が原形。シコムには、①引っ込む ②引退する
③身を引く ④卒業する などの意味がある。
- (15) ラクナ（楽な）の強調形。
- (16) 「そんなにも給金が少なくて、現金収入が少なかつた」ということ。
- (17) だから、姉さんの恩に報いるためにも、姉さんのかわりに
- (18) 米の総収穫高
- (19) 年貢を納めることを 年貢ハカルといった。旦那の家の番頭が、舟で米をはかり、あるいは重さをはかって、検査を受けて納めた。
- (20) 粱で保存しておいて、夏の端境期に、脱穀精米する米。
- (21) 俵（たわら）を タラという。
- (22) 脱穀して。
- (23) ホンテ（ほんとうに）の強調形。
- (24) 旦那衆が原形。お金持ち、素封家、金満家。
- (25) 部落 町内会にあたる範囲の地区、区域。

7 蚕の収入

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A オゴサマジヤ サンド ヨガエリ⁽¹⁾グラエ オッケハゲナ⁽²⁾ (Cンー)
蚕といふものは 三度も 四度も 飼^フたからな (んー)
シダタテ ホレー ヤッパリ オゴサマノ カネナノ コンヅガエ
だつて ほら やっぱり 蚕の 金など(は) 小遣い(く)
ナテスマタリ ナニモカニモ カワソナネンダッス オランダ⁽³⁾
なつてしまつたり いろんなものを 買わなければならぬんだし おれたちは
ホレ ハツニンモ キョーダエ エダンダゲ ガギンビラチャ⁽⁴⁾
ほら 八人も 兄弟が いたんだから 子どもたちに
カッテケランナネベッス ホダナ オゴサー⁽⁵⁾ ジエネナー⁽⁵⁾
買ってやらなければならぬだろうし そんな 蚕の 金など
ノゴラネツ⁽⁶⁾ ンダツ⁽⁶⁾ ホレ。

残らないわけだよな

C ハツニンナー エダンダガ。 (Aンダ-) ンダガー。
八人もねえ いたのか (そう) そうか

A ホダナ ホレ タマリ⁽⁶⁾ ナエ⁽⁶⁾ ネンジュー
そんな ほら 醤油だの 何だのって (Cンー) (んー) 年中

A カヨエ⁽⁷⁾ デ クテッドレ。 (C ホンダ ホンダ) ハエツ コンド
通い帳で 食っているだろう。 (そう そう) それしか こんビ
(C ネヤー) オゴサマ⁽⁸⁾ ウッタドギ ミナ (Cン) ナサンナネドレ。
(ニヤー) 蔵 (を) 売ったとき (H) 金部 (ん) 返済 (なければならぬ) だろ
(Cン ンダ-) サゲンダテ ナエ⁽⁹⁾ ダテ ミナ カヨエ⁽¹⁰⁾ ダケド
(ん そう) 酒 でも 何でも 全部 通い帳で だつたもの
ムガス。 (C ン-)
昔 (ホ) (ん-)

B ンダモナエ アノニ (A ンーダ) ボント ショーガ⁽¹¹⁾ ンダケモナエ
そうだね あの (そウだ) 盆と 正月 だつたものな
カンジョナテ ユナ。
勘定 (する) なんて はうのは。

A ンボン ショーガ⁽¹²⁾ カンジョー デナレ。
ん 盆と 正月の勘定 であら。

B エサンバヤ⁽¹³⁾ デモ ドゴンデモヨ。 (A ンダデ-) ホレマンデ
海産物商 でも どこでもさ。 (そウねー) それまで
ジエニ ハエラネ モンダモナエ。
金 (か) はいらない もんだものね。

A ンーダー ジエニ (B ン-) ハエラネゲ ジエニ ハエタ ドギ
そう 金 (か) (ん-) はいらないから 金 (か) はいった とき (H)
ナスナヅ⁽¹⁴⁾ ナナヤー。 (B ン) サゲンダテ ホリヤ ホダナ
返済する なんだつたよなあ。 (ん) 酒 だつて ほら そんな
エツネンジユーデ⁽¹⁵⁾ ダエ⁽¹⁶⁾ ンブ ノムドレナヤ。 (C ン-)
一年間で だいぶん 飲むものねえ。 (ん-)
タマリ ンダテ……。

醤油 だつて ……

C ナンボ ヤッスエタテナー。

いくら 安くったってなあ。

A ンニ。 クーッス ホレ ホダナ ミナ ボン
んー。 食うし ほら それも 全部 金(と)

ショーカヅ カンジョーテ ホレ。 ンダゲ ⁽¹⁰⁾ ナヅカエゴナノ
正月(の) 勘定で ほら。 だから 夏蚕などを、
ウッタテヨハ ボンノ スハラエ ⁽¹⁰⁾ デハ……。 ホレ サガナ^ナダテ
売ったってよ 金の 支払いです……。 ほら 魚だって
ンダデー ミナ カヨエダケドレ。(B.C. ンダー) ンー。 ツネニナヤ。
そうだもの 又な 通帳(と)だつたもの。 そウ んー。 つねにね。

(C ンー) ホシテ カヨエ⁽¹¹⁾ ンダド ドーシテモ アレー ホンドギ
んー そして 通帳だと どうしても あれ そのとき
ジエネ ダサネゲ クンダレナー。
金(と) 払わないから 食うんだあなた。

C ン クーモナー。 (A ンー) ン。
ん 食うものなあ。 (んー) ん。

A ホレー ミナー コンド オゴサマナー ウッタタテ ⁽¹²⁾ スハラエ
ほら 又な こんど 薙なんか 売ったって 支払い
サンナネデ コンドナヤ。 ホレ バンシューサンナ! オエダ^テ
しなければならないだろう こんどは。 ほら 晩秋蚕など 飼ったって
コンド スコースツカエ オガネッス。 ホダナ ホレハ
こんど 少ししか 飼わないし。 そんな それ
シェンダグスルーナダハーナテ ン オドゴシュー⁽¹³⁾ ダアデ
選択するのだ なんて ん 男の人たち(を) あてには
サンナエナダナテ ホダナ ゴド ユテ ホレ オナゴシュー⁽¹⁴⁾ ノ
できないんだなんて そんな ことを 言って ほら 女の人たちの

ホンマツ"ンダ" オゴサマナテ ホダ"コド" ユテ オグナタ"ケドレナヤ。
へそくりだ" 薙(の金は) なんて そんなことを(言)って 飼うのだったよな。

バンシューナテ ュードヨ。 シテ サンドモ ヨガエリモ
晩秋(蚕) なんて いとさ。 こうして 三度も 四度も

オゴサマ オエダ"テ ジェニナー エツ"モンダ"テ (笑) カツカツテ
蚕(を) 飼っても 金などは 一文だって(なくて) かつかつで
ホダ"ナ (c笑) ノゴラネナツ"アネー。
そんな 残りうないのだものね。

B ⁽¹⁶⁾ ハエツ"バンダ"モノ ンダ"ツー。*
それは"かりだ"もの そうだ"よ。

注

- (1) 「四返り」(四サイクル)が原形。
- (2) 蚕を飼うことを オゴサマオグといふ。
- (3) 「何も彼にも」が原形。
- (4) 「餓鬼びら」が原形。子どもは、いつも腹をすかしてがつがつしていることからの卑称らしい。「びら」は人間の複数を表わす「達」
- (5) 錢だけでなく、お金の総称。現金というふくふくもある。
- (6) 元来タマリは、自家製の醤油のしぶる前に自然にたまる上質の醤油の称であったが、自家製が減って商品が出まわるにしたがって醤油の総称となつた。
- (7) 掛け買いで。代金あとはらいの約束で商物を買って。
- (8) 蘿を売ることをオゴサマウルといふ。
- (9) 鰯屋(いさばや)。魚屋。海産物を籠に背負つたり、リヤカーにつけたりして一軒一軒売り歩く行商であった。
- (10) ……は、「すっかりなくなってしまう」という気持ち。
- (11) たくさん 食うんだよなあ。という意。
- (12) 売ったとしても。
- (13) 削減する。精選する。少しだけ飼う。
- (14) 男衆達
- (15) いつもぎりぎりで。古語「かつがつ」の変化か。どうにかこうにかやっとまにあう意。
- (16) 現金收入はそれきりない、養蚕の收入だけだということ。

8 草履作りと小遣い

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A ジョーリナ ツクタテ ヘッゲナ エッパ⁽¹⁾ ジューサンシェン
草履など 作ったって そんなものは 一把で 十三錢^一
オドゴ⁽²⁾ジョーリ ツクテ ジューサンシェンナ ジュニシェンナテ
男(物の)草履を 作って 十三錢とか 十二錢(だ) なんて
(C ン一) ホダナダ⁽³⁾ モノナヤー (C ン一) ホダーナ ナンボ
ん一 そんなもんだ ものね ん一 だから いくう
エッショケンメ ツクタタテヨ ホダナ ヨエ タツコロ⁽⁴⁾ ホダエ
一生懸命(に) 作ったって そんな 用に 立くほど そんなに
(笑) ヤッパリー。
やっぱ[。]りー。

B オラエ! バンサ エダ ドギンダド ナンボ エッパ
俺家の 婆さんが 生きてたときだと いくう(かな) 一把
ニジューヨンシェンダケガヤー。
二十四錢だったかな

A ン一 ンダド ホレグ[。]ラエ スッドギモ アッタンタ" ンデモナ。
ん一 そうすると それぐらい するときも あったんだ" それでも。

(C ンー) ダンダエ アガテナヤ。
 (んー) だんだん(?) 上がってな。

B ンダ"テ エッ ホンドギ ナエデモ ⁽⁵⁾ ヤッスエテ ユーモノノ
だって そのとき 何でも 安いって いうものの

(A ンダ"ー) エッパ ツクルニ エヅニツダ"デナヤ。
 (そー) 一一把 作るのに 一日だものな。

A ンダ"ー ホダナ ミナガ⁶ガリシテ ⁽⁶⁾ フス ⁽⁷⁾ ヌエダ"リ (C ンダ"ー)
 (そー) そんな 全員総出で 節⁽⁸⁾ 抜いたり、そー
 (フス) キッタリナヤ。(C ンダ"ナヤー) ンー。*
 (節⁽⁸⁾) 切ったり交 (そうだったな) んー。

C ンデモ ムガス セーカツホジョナテ アンナダケガツー。
 (でも) 昔は 生活補助なんて あつたんだろ? か。

A ナエケ。 (B ナエナヨ) ホダナ ゴドナ ナエケ。ホンダ"ハゲ
 (なかつた) ないのさ そんな ことなど なかつた。ぢから
 ホレ ホダナ……。
 ほら そんな……。

B タエヘンナダケッダナナエ。
 (9) 大変だつたんだよな。

A ガギビラ ンー サンニンモ オガッデ ⁽¹⁰⁾ テーシュナー
 (子どもたち) んー 三人も 置かれて 亭主などに
 スナッタ"リ ビヨーギナ サッタ"リ スルンダ"ラ ホンーテ
 死なれたり (駐が) 病気になつたり すれば ほんとに
 (11) ホダナ カガ ナンツエガ ナッコロ ホレナヤ (C ンー)
 (そんな) 妻は どうにか なるほど ほら んー。
 (12) ヤッパ"リ ナンギシテ ガギビラ オカ¹⁰シタナテ ユナ
 やつぱ"り 難儀して 子どもたち^(を) 育てたなんて いうことも

アンナツ"アン。ンタ"ゲ ムガスナ ホリヤ ジョーリ ツクテ
あるんだよな。だから 昔などは ほら 草履(を) 作って
アノ コメ カッテ カヘタ" シトナ ナンボモ エンナツ"ンダ"ナ。
あの 米(を) 買って 食べさせた 人など 何人も いるんだよな。

(C ンタ"ベー) ンー。
(そうだ"ろう) んー。

- C (13) エギノサナ ンタツテ ユーケデ。ナワ ナッテ (B ンタ" A ンー)
ゆきのさんなどは そうだって 言ってたっけ。縄(を) なって (そウ んー)
アレンダド ホレ ナワ ナッテ ホシテ ジョリー ツクテ ア
あれだ"そウだ" ほら 縄(を) なって そして 草履(を) 作って
(14) オヤツ"チャ サゲ ノマハダ"ーテ。 (A ンー)
夫に 酒(を) 飲ませたって。 (んー)
- B ン オヤツ ホレ ホダエ カランダ ジョープ"シテ ナエケッス
ん 夫(は) ほう そんなに 体(が) 丈夫で なかつたし
ヤスンデ"バリ エッケハゲナヤ。 (C ン A ン"タ"ナヤー)
休んではばっかり 居ったからなあ。 (ん そうだねえ)

C ドガダ" スルエ
土方(を) するのに

- A (15) アノ シト ンタラ カシェータ"ナツ"ダ"ナナヤー。 (A ンタ"ナー)
あの 人だつたら 縁いだんだよなあ。 (そウだ"ね)
(16) ホンデオ ジョーリ ツクテ ママ カヘデ オグナテ ユーナ
それでも 草履(を) 作って 飯(を) 食わせて おくなんて いうのは
アノ メンツ"ラスク" ナエケ。 ンデモ ムガス。 (C ンタ"ナ) ンー。
あの 珍しくは なかつた。 それでも 昔(は) (そウだね) んー。
(17) (C ンー) エーマ ホダナ ナンボ シタテ ジョーリナ ツクテ
(んー) 今(は) そんな どんなに したって 草履なんか 作って

コメ カッテ ホダナ カシェランナエ ベー。エマ シヨリ
米(を) 買って そんな 食わせられないだろう。今(は) 草履(は)
ヤッスエッス シテ ホダナホレ。^(C ンダ) ホダナ シェーカツ"
安いし そして そんな。 そんな 生活を
シテル シト エネドレ エマ。^(C ン) シー。
している 人(は) いないだろう 今は。^(ん) んー。

B シテー エマーノ シト ンダテ ジェニトリー シトリバーリ⁽¹⁸⁾
そして 今の 人だつて 現金収入 一人ばっかり(の)
ジェニトリナテ ユード コレモ タエヘンナンダ"モナエ。
現金収入なんて いえは これも 大変なんだものな。
(A, C シー") ン。アド ホレ ナエショグ"ドガ ナニガ ミナ
（ そうだ" ） ん。あと(は) ほら 内職とか 何か(を) どこでも
シテッサゲ エゲントナエ。^(C ン A ンダ")
しているから いいけどね。^(ん そうだ")

A ホンーテ ハエツ" ヤッパリ ンダ"ゲ ムガスナノ ジ"エニ
ほんとに それは やっぱり だから 昔などは 金は
ツカワソナエ ナダ"ケヅアナヤ ナクテ。^(C ンー ンダ") シー。
使えなかつたんだよなあ 貧乏で。^(んー そだ") んー。

C シエンベ アガッシャエ。⁽¹⁹⁾
せんべい(を) おあがりなさい。

A ホンーテ ホダナ ンダ"ケー。アラヤ ハルカエゴナノー ホレ
ほんとに そんな そうだつた あれ 春蚕など ほら
ホンデモ マエナノ ウッド ヒヤグ"エンサツナ ミルエ ゴド⁽²⁰⁾
それでも 薙など(を) 売ると 百円札などを 見られる ことが
アッタケノ ヒヤグ"エンサツナ ミランナエナアケモナヤ ^(C ン)
あつたけど 百円札などは (普通) 見られないんだつたものね ^(ん)

A / シエツ (B ンダナ) ホダナ エツネンジュー (咳ばらい)
あの 時節(は) そうだね そんな 一年中

カシェーダ"テ ヒヤグエンサツ"ナ ミランナエナダ"ケ。 オゴ"サマ
稼いだって 百円札なんか(は) 見られない んだつた。 蔊(を)

ウッテリヤ マエナノ ワタ"スド ホリヤー ヒヤグエンサツ"ナ
売ってさ 蔊など(を) 売渡すと ほう 百円札などを

モラテ キタナテ ホシテ オイエ ベッサマサ アゲロ マツ"ナテ
もうって 来たなんて そして お恵比須さまに 供えろ まず"なんて

ホシテ コンド (笑) ミンナチャ ヒヤグエンサツ" タガ"ガヘデ
そして こんど みんなに 百円札(を) 持たせて

メシェデダ"テ ヒヤグエンサツ"ナテ コダエ一 ネウツ" アンナタ"
見せてだろウ 百円札なんて こんなにも ねうちか" あるんだ

コリヤナテ (笑) ホシテ オラエ、 オドツアナノ。(笑) (C 笑)
これはなんて そして 僕家の 父親なんかは。

アリガタ"クテ ホノ ヒヤグエンサツ" ホレ (C ン) ン一。
ありがたくて その 百円札を ほう (ん) ん一。

B ヒヤグエンサツ"ナノ ワレワレ (23) ミランナエケモナ ホンデモ
百円札などは われわれ(は) 見られなかつたものな そんでも
オランダナノ
僕達など。

A ミランナエ ホダナ (B ン一) エツネンジュー カシェーダ"テ
見られない そんな (ん一) 一年中 稼いだって

ミランナエ。

見られない。

B ヨッポド ナ (24) シト ンナエド。 (A ンー ンー) ナダ"
よっぽど の 人で ないと。 (んー んー)

ゴツガエナテ ユタタテ ゴシェンカ ツッセントダ"デ"ナエ。
小遣いなんて いっても 五錢か 十錢だものね。

(A ンーダ) オマツナテ ユタテ。
(そだ) お祭なんて いっても。

A ンダ。ハツガツノ オマツナテ ユタテ ホレ ゴシェンナノ
そう。(旧暦) 八月の お祭なんて いっても ほら 五錢など
オランダナノ モラウド ヨローゴンデ"ナヤ ホダ"ナ。
俺達など(が) もううと 喜こんで なあ そんや。
ゴシェンナテ ツネニ モラタ ゴド ナエナードレ。
五錢なんて 常には もうた ことか) ないんだ"もの。
エッシュエンカ ゴリントガテ (笑) 木タ"ナバンデ"。
一錢か 五厘とかって そんな(金額) ばかりで。

B オランダドモ マダ ジューネングラエモ ツカウハゲナ。(A ホンダ)
俺達とも また 十年ぐらいも (年代が) 違うからな。(そだ)
* オレー エツネンデ リヤ コーチャエンー / イエー エタ
俺(は) 一年で あれ 興ちゃんの 家に 居た
アダリ"ダド ジューエン アッド エツネン タクサンダケハゲナ。
頃だと 十円 あれば 一年 充分だったからな。

ツボン カッタリ (A ハー ホシガナー) コンヅガ"エシタリ。(A ヤッパリ)
ズボン(を) 買ったり (はー そうかな) 小遣いにしたり。(やっぱり)

タンバコモ / マネハゲナレ。(A ンー) ナエデ"カンド ボンニ
タバコも 飲まないからな。(んー) 毎年きまって 盆に

ゴエントヨー (A ン) ホレガラ ホレ ショーガツ ゴエン
五円とよ (ん) それから ほら 正月に 五円を

カリッケナヨー (A ンタツダ) ハエツ ホントワダ"ド
借りろんだったよ。 (なるほど) それが 本当は

エラネゲント ホレ ショーカヅテ ユード ナエンデカンデモ
いらないけど ほら 正月って いうと 每年きまって
アリヤ アニキ ドゴサ シケハゲ ホレ。⁽²⁶⁾
ほら 兄貴(の) 所に 行くけから ほら。 んー 釜淵に。
(A ンダ ンダ ンー) ンダハゲ ジューエン エッケナヨー。
（そう そう んー）だから 十円(が) 必要だったのよ。

A ンー。 ヤッパリ ンダモナヤー ムガス ナエンデモ ホレ
んー。 やっぱり そうだね 昔(は) なんでも ほら
ヤッスエクテ ホレ。 ヤッスエゲント カワンナエナダケ
安くって ほら。 安いけれど 買えないんだった
ンデモ。
でも。

B カワンナエケナ (A ジエニ) ジエニ トランナエケモ。
買えなかつたな (金) 金(が) となれなかつたもの。

A ンダ トランナエッス ナエナダケモ ヤッパリ ジエニ。
そう となれなかつたし ないんだつたもの やっぱり 金が
エマミデ ジエネマワリ ワレッスナヤ。⁽²⁷⁾ (B ンダ) ンー。
今みたい(には) 金回りが 悪いしなあ。 (そう) んー。

B オナゴ^o シトノ ジニトリナテ ユーナ ナエケモノナエ。
女の 人の 金とりなんて いうのは なかつたものね。

(A ナエケー) ジョーリツクリノ ホガニワヨー。 (A ンダ)
なかつた 草履作りの ほかにはさ (そうだ)

A ンダゲ ドゴーデモ ホダナ ジョーリジャ ツクタナツアン
だから どこでも そんな 草履は 作ったんだよな
ムガスー。^{*}
昔(は)

往

- (1) 十足で一把。
- (2) 中三寸で作にくいが、文物（中二寸八分）より、ねだんが高い。
- (3) ホダナ（だから）の強めた形。
- (4) 生活費のたしになるほど。
- (5) どんな品物でも。どんな商品でも。
- (6) 全員の協力によって草履ができた。草履ができるまでの手順は、
①わらしごき ②節ぬき ③ぬごし（米のとき汁）つけ ④水洗い
⑤節干し ⑥節切り をして「節」を作る。そのあと ⑦草履編み
⑧槌でたたく ⑨金棒でのす ⑩十足ずつ束ねる。
一方併行して縄ないをする。①わら打ち ②縄ない ③燃りかけ
④こすりかけ ⑤丸める
- 以上の仕事のために、家族全員が手わけして、手伝った。
- (7) 蕎の節
- (8) ストローを切る。節と節との間のストローの部分を切る。
- (9) 生活が苦しい、経済的に苦しい ということ。
- (10) 残されて
- (11) ナンズエガ ナッコロ で「ひどく」という意味
- (12) オカス は ①育てる ②ふくらます ③茂らす ④繁茂させる
- (13) 近所の主婦の名。
- (14) オヤズ は ①父親 ②男の成人 ③夫
- (15) ゆきのさん
- (16) ママ カヘデ オグ で「生活を支えいる」「生計を立てる」
- (17) 「もう」というニュアンス。
- (18) ①現金収入（者） ②生計主体者 ③稼ぎ手 ④お金とり
- (19) 話題の流れとは関係なしに、茶菓をすすめている。
- (20) ミルエのエ は、可能をあらわす。
- (21) 神仏に供えること
- (22) マツ 間投助詞的はたらき。
- (23) 僮達 という意味だが ひらきなおったうしていうときに使う。

- (24) よっぽど裕福な
- (25) 旧暦八月十五日を中心に行なわれた谷地八幡神社の例祭。近在でも
もっとも賑かな祭りで、昔は一週間もの間続いたので、谷地のバカ
祭りとも、ドンガ祭りとも呼ばれ、無形文化財の谷地舞楽と凱旋奴
(ふり奴)が有名である。現在は、九月十四日から三日間行なう。
- (26) 地名。最上郡真室川町の釜淵。
- (27) 「良くないしな」のねじれ。
- (28) ジニトリ ①お金とり ②現金収入 ③収入を得るための仕事。

9 子守り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- A ヤッパリ ジュンジュント ホレ コンドモ ホレー アレ
やつぱり 順々と ほら 子ども(き) ほれ あれ
オンバンナネクテ ホレ (Cンダ-) シー。
おんぶしなければならなくて ほら (そだ) んー。
- B ゴログニンナ アダリマエナタケ (笑)。
五六人などは あたりまえなんだった
- A ホンダー ゴログニン スヅハツニンナ (Bン) アダリマエ
そうだ 五六人 七八人などは (ん) あたりまえ
ミタエ ダケハゲナヤ。 (Cン) ンダハゲテ ホダナ コンドモーバ⁽³⁾
みたいだったからなあ。 (ん) だから そんな 子どもを
コンドモ オガシテ ケランナネミタエナ モンタケドレ ムガス。
子どもが 育てて やりなけばならないみたいな もんだったよな 首は。
- B ンダケ エヅンバン オッキナナ コ^x コンモリツアン
だから 一番 上の子などは 子守 だったよな
ツーットナエハ。
ずうっとね。

- A ンダ" ツーット コンモリヨハ ヤッパリ。
 そう ずうっと 子守だったな やっぱり。
- B デハテングド⁽⁵⁾ コンド ホノ シタンナ コンモリ シテ (Aンダ)
 出ていくと こんど その 下の子(が) 子守(を) して (そウ)
 バツツノ ホーバ オバンナネケッス。
 末っ子の 方を おんぶしなければならなかつたし。
- A ジュンーグリナヤ⁽⁶⁾ (B笑) ダンーダエ。 オレーワ ンデモ
 順縁り(に) ねえ () だんだんに。 僕は それでも
 コンモリワ スネーナ。 アノー ツッチャエガラ トモデサ
 子守は しないな。 あの 小さい(時) から 野良に
 デハテアラテ。 オレ⁽⁷⁾ トショリーシタリ エダケハゲ。(Bシ一)
 出て 歩いて。 僕の家で 年寄り(が) 二人 居ったから。 (ル)
 ンデ トショリバンチャド ホレ ホノ アレード ホレ
 んで 年寄り婆さんと ほら ほの あれと ほら
 ヤッパリ ワガエ バンチャド シタリ エダケハゲナ。 ホノ
 やっぱり 若い 婆さんと 二人 居ったからな。 その
 シト⁽⁸⁾ ンダ" コンモリ シテ ケッケハゲ ホレ。 ンタ"ゲ
 人達(が) 子守り(を) して くれたから ほら。 だから
 トモデサバリ デハテ アラタツダナー。
 野良にはっから 出て あるいたんだよな。
- B オラエノ フンジコナノ ンナエナー。 ヤッパリ エツ"ンバン
 僕家の 富士子などは そうでないな。 やっぱり 一番
 オッキハゲヨ (A ンダ"ベー) ガッコガラクッド ナエンデカンデモ
 上の子だから (そだろう) 学校から 帰ると いつもきまって
 オンボコオンビヨハ。 (A ンダ" ナヤー) ホシテ バン
 子どもおんぶさ。 (そだよ なあ) そして

バンカダ ホレ ママヅマエシテ ⁽⁹⁾ オゲナハーナテ ヤッテナレ。
夕方に ほら ご飯の仕度して おけよな なんて いわれてさ。

A ンダー ホシテ ショッデンノ シトナ オバンナネ カンージョ
そう そして 昔の 人など おんぶしなければならない つもり
シテナヤー。
してねえ。

B ンダ"スル カンージョ シテナエハ。 (A ンダ")
そう する つもり してなあ。 (そう そうだ")
ドゴンデモ オッキナハ コンモリ シテ (A ンダ") ママヅマエ
どこの家でも 大きい子が 子守(を) して (そうだ") ご飯の仕度(を)
サンナネケヅナ。 (A ンダ") ガッコガラ クッド (A ンダ"ネヤ)
しなければならなかつたよな。 (そうだ") 学校から 帰ると (そうだ"ねえ)
アデ シテル モンダモネハ。 (A ンダナ) *
あてに してる もんだ"ものね。 (そうだ"ね)

往

- (1) 子どもの数、きょうだいの数、について言っている。
- (2) もう子どもなんかは というややなげやうなニュアンス。
- (3) ……をば の残存か。
- (4) 何年もの間、長らく。
- (5) デハル（出張る） ①家を出る ②勤めや奉公に出る ③野良仕事に出る。
- (6) 第一子が、第二子第三子をおんぶし、第二子が第四子の子守をし、第三子が第五子の子守をするといふぐあいに 順送りにすること。
- (7) ①小さい時から ②小さいという理由で の二つの用法があるが、①の方は古老の使用法である。
- (8) 話し手B 高梨八太郎の長女（第一子）。
- (9) ご飯仕舞い とも。

10 手足による農作業

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- A エッソー テアスンデ スネゲンバジャ ホレ キカエ
すべて 手足で (作業) しなければ ほう 機械は
ナエッスナヤ。 (C ンー)^{*}
ないしなあ。 (んー)
- B ンダ"ゲ オランダ"ガラ カンガエッド ヒヤキショ一 ヤンダ"ナテ
だから 僕などから 考えると 百姓(か) いやだなんて
ユナ ナシテ ヤンダ"テ ヤンナネミダ"エナ モンダ"モナエ。
言うの なぜ いやだって 言わねばならないみたいな もんだものね。
- A エマ ナヤ。 ラグ"デ"ナヤー。
今 なあ。 楽でなあ。
- B ナンニモ ゴミモ カガッゴダ ナエ (C ンダ"デー) キカエデ
なにも ごみも かかること(か) ない そうだものね 機械で
(A.C ンダ"デー) ホダ"ナ ヒシテ フツガ"デ オワル
そうだものね そんな 一日か 二日で 終わる
スゴド ンダ"デ"ナエ タエデ"ナエ。 (C ンダ" A ンダ"ナヤース)
仕事だろうにね たいていはね。 (そウ そウですねえ。)

オーラーダナノ アエヅナ ⁽²⁾ ドギ ホダナ トーガモ ハツガモ
俺達など あれの ときは そんな 十日も 二十日も
ホレ ⁽³⁾ (C ンダナエー) ターチョス シテランナネ。 オッカケ
ほら (そうだね) 田の仕事(を) していなければならぬ。 次から
オッカケナエハ (C ンダー)
次に ねえ (そうだ)

A ターウナエナノ ホダナー ヤッパリ エッシューカンカ
田起こしなど(を) そんな やっぱり 一週間か
トーガ^アラエナ スルンダラ ミナ ユーピ スカグエ
十日ぐらいも したら みんな 指(か) 四角に
ナッケジャエ。^(B ンダー) ンー。

B ンダゲ オランダナ ^(A ンー) コゴ コー タゴエッテハ。^(A ンタ)
だから 俺なんか(お) ^(んー) ここ(か) こう 肝臓になってさ。^(そウ)
カッタクテ ^{(A マ}) マメナテ デネケデハ。
堅くって まめなど 出なかつたさ。

A ンー ンダベハ ヤッパリ ホダナ エマナノ エマノ シトナ
んー そだろよ やっぱり そんな 今など 今の 人など
グンテ カゲデナバリ ミナ スッサゲンダゲノ ショッテン
軍手(を) かけてばっかり 何でも するからだけど 昔は
ホダナ ナエッスホレ アレタデレ。 ホダナハ トーガ^アラエナ
そんなものは ないしね あれだろ。 そんな 十日ぐらいも
タウナエ スルンダラ ミナ スカグエ ナテハ ユビ ホーダナ。
田起こし(を) したら みんな 四角に なつて 指(か) そんな。
タウナエジャ アエヅ ツッカラ エル スゴドンダモナヤ。
田起こしは あれは 力の 要る 仕事だものな。

B ツッカラ エンナヨーナヤ。 (A ンダ)
力 (か) 要るのよねえ (そうだ)

C ンタ"ゲ オナゴ"シューナ ラグ"デ"ナエ、"タ"ナナヤ。
だから 女の人など(は) 楽でないんだよなあ

A ラグ"デ"ナエ オナゴ"シューナノ シー。
樂でないよ 女の人など(は) んー。

B タウナウド コンド ホレ アメ フラレッド ニバンカエステ
田を起こすと こんど ほう 雨(に) 降られると ニ番返しといって
(笑)(A ンダ) コー マダ カエサンナネナヨ (A ンダ)
(そう) こう また 起こさなければならぬよ (そうだ)

カワガネハゲー。

乾かないからー。

A ツツ⁽⁶⁾ シネドット⁽⁷⁾ コンド ツンブンナエ ハゲナ⁽⁷⁾ ャッパリ。
土(か) 乾かないと こんどは(土が) 碎けないからな やっぱり。

B ホシテ⁽⁸⁾ コンド マサガリデリヤー (A ンダ) タツシブスナエ。
そして こんど まさかりでさ (そう) 塙打ちね。
(C ンダ A シー) ホノ タノ スコドデ タツシブス エツ"バン
(そう んー) その 田の 仕事で 塙打ち(が) 一番

テーマ カガッケナエ。

手間 どるもんだったな。

A ンダ⁽⁹⁾ アエーツ"ワ テマカガッケ。
そう あれは 手間どるもんだった。

B ツンブサンナエナヨナエ。 (A シー) エツ"ニツ"
碎かれないのでね (んー) 一日に
ゴシェブ"グ"ラエトケ (A ンダ) ヒヤグ"ゴ"ツツボ"グ"ラエトケ
五畝歩ぐらい きり (そう) 百五十坪ぐらい きり

ツンブサンナケモナエ。

碎かれなかつたものね。

A アエツワ ンダー。ンタグ ミナ (B ン) ヨエシテ ムガス
あれは そうだ。だから みな (ん) 共同して 首(は)
ツンブシタ モンダダレー。(B ンダ) ターツンブス
碎いた ものだよなー (そう) 塊打ち(ほ)

テマカガッ サゲ。

手間どる から。

C シトリバリナンダドナエ (A ンー) コツツアラ コワクテハ。
一人ばかりなどだとね (んー) ことさらに 疲れて な。

A ンー ムサクテナ。 (C ンー)
んー はかどらなくてな。 (んー)

B ホノ アドガ アリヤ コンド ンマニテ アノー。
その 後か あれ こんどは 馬で あのー。

A ンー クレギリ⁽¹³⁾
んー 塊切り

B ン クレギリ シ スンナ アッケッス タツンブステ ユナー
ん 塊切り(き) するのが あつた 田潰し って いう
キカエ ハヤタ (笑) キカエテ ムガス/ キカエツアナ (A ンダ)
機械(が) 流行した 機械って 首の 機械だよな (そう)
ゴロゴロゴロゴロド コロバシテ アラグナリヤ。(A ンダ)
ごろごろ ごろごろと 転がして あるくのな。(そう)

アエツ テデガラ ラグエ ナタケゲントナエ。

あれが 出てから 楽に なつたっけけどね。

A ンダ ンダー。 マサガリテ ミナ ツンブサンナネモナヤ。
そう そう。 まさかりで みんな 碎かなければならなかつたんだものな。

(C ンダ) シー。
そう んー。

C タツンブスマサガリテ チャントハ (A ンダ-) ソロエデ
塊打ち用 まさかりって ちゃんとさ (そう) そろえて
オグケハゲ。 (A ンダ"レハー)
おくんだったから。 (そうだったものね)

A カロクテモ アエツ ツンブンナエッス ダモナヤ。
軽くっても あれは 碎けないし だからね。

B ツンブンナエ"ナエ。
碎けないものなあ。

A オモダクテモ マダ (B ン) エツニツ ヌシャゲテ
重たくっても また (ん) 一日(中) 振り上げて
エランナネナダゲ (笑) コレモ (B 笑) ラグ"デナエ ホン一テ (笑)
居なきやあならないから これも 楽でない ほんとに。
アエツヨ チェット シトナ ミッド ラグミダエタ"ゲント
あれはね ちょっと 他人の(目) 見ていると 楽みたいだけれど
ホン一テ。
ほんとに。

C ウワツツラバリ ツンブシテ エランナエッスナ
表面ばっかり(を) 碎いて(は) いられないしな

A ホンダ- ナガマンデ コー ブットルクラエ
そうだ 中まで こう つき通るくらい

ツンブサンナネ"ナヤー。 (C ンダ-)
碎かねばならないものね。 (そうだ-)

B コンド ツンブンナエード ゴマガサレット ハンド タウェン
こんど 碎けないと ごまかされると こんどは 田植 の

ドギ シッショ カゲネクテリヤ。

とき(い)代搔きが(うまく)できなくってね。

A ゴロゴロテナ

ごろごろしてな

B ナエ ゴロゴロテ (A.C シー) タウエ スンツラクテ
ね ごろごろして ん 田植(か) しにくくって

ワガンナエ ナナエニ。

だめなんだよな

A ンダ一 ンダ一ゲ タツンブスジヤ ホレ コー コマグ
そウ だから 塙打ちは ほう こウ 細かく

ツンブスド イエナツナ ホレナヤ。 (C シー) ン一。 オランダ一ノ
碎くと 良いんだ よな (ん) ん 僕達の

アダリナノ ホダナ ンマナノ エダ⁽¹⁶⁾ イエデナノ…… ホンーテ
あたりなどで そんな 馬など 居る 家でなんか…… ほんとに

ホダナ ムラデモ エッケンカ ニゲンツカエ ナエハゲテ
そんな 地区でも 一軒か ニ軒 しか ないから

オラエデナノ ホレ テーデバリ サンナネケツ。 クレキリモ
俺家でなど ほう 手ではばっかり しなければならなかつたな 塙切りも

テーダケツ (B ンダ一) ミナ。

手でだったな (そだ) みな

B タエデー アエンダケモナエ。 (A ンダ一)
たいていは あれだったものね。 (そウ)

A クリキリデバ マダ ホレ クファ^{x x} サンボングワ ホッチャド
塙切りといえば また ほら 鍬⁽¹⁷⁾ 三本鍬(を) そっちにと
コッチャ ホレ チエッチエ チエッチエド (B ンダナ) コンド
こっちに ほら ちょくちょく ちょくちょくと (そだね) こんど

(19)
スカエラン-----。
持ちかえ-----。

B アエツ コー コー ニンドシテ マダ スング コー トカエテ
あれは こう こう =度やって また すぐ こう 持ちかえて
(A ホーダ) コー サンナネナダモナエ。 (A ホーダ C 笑)
(そうだ) こう しなければならないんだものね。 (そうだ)

A アエツ コンド アコノ ツリヨー ハラタ⁽²¹⁾ンダド (笑) (B 笑)
あれは こんど 歩(ゆ)の 運び方が でたらめだと
コンド (笑) アス キッテナヤ。

こんど 足(あし) 切ってな。

B アッチャコッチャ ナテガ一。 (笑)
あべ こべ に なってか。

A ホーダ ホッチャ コッチャエ ナッド スンヅラエダレ
そうだ あべ こべに なると しにくいものね
アエツナヤ。ンダーモ (C 笑) アダナ マネシテ ムガス
あれなあ。 そうだぬ (C ナヤー) あんな ことをして 昔は
シタナツダツナヤー。ホンーテ (C ナヤー) サンボングワデ
したもんだけよなあ。ほんとに (なあ) 三本鉄で
ナエデカンデオ クレギリ マダ。 (C ン) アッゲナ クレギリナ
何でもかんでも 塊切りも また。 (あんな) 塊切りなんか

ホレ タエシタ ホダエ テマ カガラネゲド。
ほら たいした そんなに 手間 どうないけど。

B ンダ アエツーダド バエー スルエケハゲナ。
そうだ あれだと (塊打ち) 倍は できたからな

A スルエケハゲナヤ。*
できたからな。

B ナエ"ン"デ"カ"ン"デ"モ エ"ネ"ナ"ノ イ"エ"サ ショ"ッ"テ"ン"ダ"ケ"ハ"ゲ"ナ"エ"ヤ。
何はともあれ 稲など(は) 家に 背負って(来て)だったからな。

(A ン"ダ"ー ミ"ナ ショ"ッ"テ C ン"ダ") ジェ"ン"ブ"ナ"エ。
(そ"う 全"部 背"負"つ"て そ"う) 全"部 枚

A ムガスナヤ。

昔は な

C ナン"ー"キ"シ"テ (A ン"ー") ウエ"マ"ン"デ" ア"ケ"デ"ナ"ア。
難儀して (ル"ー") 上"ま"で 積"み"あ"げ"て"な。

A ホ"シ"テ マロガネ"ン"デ"ナ"バ"リ オラ イ"エ"一 エ"タ" ド"ギ"
そして 束ねないでは"ぱ"っかり 倭(か) 実家に いた とき(は)
マロガネ"ン"デ"ナ"バ"リ ショ"ッ"タハ"ゲ"テ"ヨ"。 ャ"ッ"パ"リ ヨ"ー"グ"
束ねないでは"ぱ"っかり 背負ったからよ。 や"っ"ぱ"り よく

(27) (28)
ホ"ン"デ"モ フ"リ"アエニ"ナ"ヤ ザ"グ"ザ"グ"テ ヤ"ネ"ケ"ヅ" ア"レ"
それでも 割"合"いに"ね" ザ"く"ザ"く しなかった よ
ホ"ン"デ"モ"ナ"ヤ。 ホ"ダ"ナ マロ"テ"ル テ"マ"ン"デ" ショ"ッ"タ ホ
それでもねえ。 そんな 束ねている 手間で 背負った 方(か)
イ"エ"ー"ナ"テ"ハ オ"ラ"エ"ノ オド"ッ"ア"タ" (B ナ"ン") ホ"シ"テ"ー"……。
良い なんてさ 倭の家の 父親たちは (B ナ"ン") そして ……。

B ツ"ッ"カエ ドゴ"ン"ダ"ド ン"ダ"ケ"モ"ナ"エ。 *

近い(田の) ところだと そうだったものね。

(29)
オ オ"レ" ショ"ッ"タ ゴ"ド ナ"エ"ケ"デ"レ コ"ー"チャ"エン"サ キ"タ"
× 倭(は) 背"負"つ"た こ"と"が な"か"つ"た"もの"な 興"ち"ゃ"ん"の"家"に 来"た"
ド"ギ" (笑) (A 笑 ン"ダ"ゴ"デ"ヤ"ー) ヤ"シ"エン"マ"サ ホ"/
とき そ"う"だ"ろ"う"よ" (30) (31)
背"負"い"梯"子"に そ"の"
(32)
ナ"ラ"ビ"ガ"ダ"モ ワ"ガ"ン"ナ"エ"ナ"ッ"ダ"ナ"エ"。
並"ベ"方"も わ"か"ら"な"か"つ"た"ん"だ"よ"な"。

C ハエツ ショーツエ ナテ。 (Bン) マロガネンデ
それが 上手に なって。 (ん) 束ねないで

ヨンジューグラエ ショウケハゲナー。 *

四十(束) ぐらい 背負うんだったからな。

(33) タントンダモノナエ タントショウモノ。

たくさんだ ものね たくさん背負うもの。

A ワングリーント ウエサ コー ヨーハンツ ナラネド アエツ
湾曲して 上に こう 両端(か) ならないと あれは
ンマグ ナエハゲナエ。
うまく ないからねえ。

B ンマグ ナエモナエ。
うまく ないものね。

A ハエツ オランダモ イエー エタ ドギ マロガネテ
それよ 僕たちも 実家(に) いた とき 束ねないで
ショッタツー。 ホダーナ ニーツグリ ヘダニダド ダメダ。
背負ったなー。 そんな 荷作り(が) 下手だと だめだ。
(35) ヴルヅル シッパラテ コンド アンゴ ツランナグナテ(笑)
するする 引っぱる状態になって こんど 足(を) 運べなくなって

(C笑)

B ヨッポンド アノ カゲン アルモナエ。
よっぽど あの 加減(が) あるものね。

A ンダ ヨッポンド アエツ ニノ ツグリヨー アンナヨー。
そう よっぽど あれは 荷の 作りよう(が) あるのよ。

B ヤシェンマ ^{x x} ヤシェンマ ^{x x} デダド ヨッポンド イエーゲント
背負い様子 でだと よっぽど 良いけれど

ニナンデ スングエ スンナダド (A ンダ) アエーヴ カゲン
荷縄で 直接に するんだと (そう) あれは 加減が

アンナヨナエ。 (A ンダー)
あるのよね (そう)

C アンブラツンツア ジョンダケツナヤ。
油屋の爺さんは 上手だったよな。

B ンダー ツシツアダラ ンダー。 (A ンー)
そう 爺さんなら そうだ。 (んー)

C スコースヅヅダゲント。
少し ずつ だけど

A スメデナヤ (C ン) スメデ コー ワングリーント コー
締めてな (ん) 締めて こウ 湾曲させて こウ
ナルヨーニ サンナネハゲ。(C 笑) エツエツ シェナガンデバリ
なるように しなければならないから。 いちいち 背中で ばっかり

ショッテ サンナネケドレ ムガス ヨーグ ホンテ。 ムガスノ
背負って しぬけばならぬかたものね 昔は よく ほんとに。 昔の
シトナテ カランダ ツヅエダツナヤ ホンデモ。

人は 体(か) 続いたよなあ それでも

B ンダ ホレタゲ ジョーブン…… ホーユー ウンドーバリ
そう それだけ 大夫 そういう 運動ばかり
シテッサゲ ジョーブンナダベナエ。
してるから 大夫 なんだろうな。

A ンダナ ンー。 * ンー ンダ。 コヤデ ホレ コンド エネ
そうね んー。 んー そう。 納屋で ほら こんど 稲(を)
コエデナヤ。 ホシテ コンド アメー フラーネド ホレ ソドテ
扱いてな。 そして こんど 雨(か) 降らないと ほら 屋外で

コッケント ン アメ フッド コヤノ ナガシテ^(Cニタ一)
扱くけれど ん 雨が 降ると 納屋の 中で そうだ
コガンナネハゲ^(Cシ一) ハエツ アメ フッドギ スマツスンナ
扱かねばならないから んー それは 雨(が) 降るとき 処理するのを
ハエツ ホレ カグゴシテ エネ ヘッテ オグナツアン コヤン
それを ほら 覚悟して 稲(き) 入れて 置くんたよな 納屋の
ナガサハ。

中にさ。

C ハエツ コヤ ナエ シトンダ イエーサ アノ ミナシテ⁽³⁹⁾
それを 納屋(か)ない 人たち(は) 家の中に あの 又なして
(A ンダ)⁽⁴⁰⁾ タケツツナエ。 (A ヘレッケタレナヤ) ボーボード
（そウ）だったよね。 (入れたもんだよね) ほうほうと
ヤシエテ。
させて。

A ンダド アメ フッドギ ホレ スゴド ナエワゲタ ホノ エネ
だと 雨(が) 降るとき(は) ほら 仕事(か) ないわけだ その 稲(き)
ヘッテ オガネド。 (C ンダ)^{*} ンダゲ^{*} アメフリンドギ ハエツ
入れて 置かないと。 (そウ) だから 雨降りのとき(に) それ(を)
コンド ナガシナ ハエッタナ コンド コガンナネツアナヤ。
こんど 屋内の 入れてあるのを こんど 扱かねばならないのよ。
(C ン) ホーシテ コンド エネ コギアゲッド コンド
（ん） そして こんど(は) 稲(き) 扱き終えると こんどは
モミヨス ンダドレ ムガスナヤ。 (C ンタ一) モミー ヨシテ
糸打ち だものね 昔はな。 (そウ) 糸(き) 打って
ホーシテ シエンニ アダナ ノゲスネナバリ ウエッケモナヤ⁽⁴¹⁾
そして 昔は あんな 芒稻 などばかり 植え込んだものな

ホシテー。

そして

B ンダーナ コメ テッケハゲダ" ンナエガヤー。

そうだな 米(か) 多くとれたからでないかなあ。

A ンダベ アレー ノケスネ ハンブングラエ オラエノ イエーデナ
そうだろうあれ 芒稻(を) (作付の) 半分ぐらい 僕の 実家などでは
ウェッケハゲダー。(C ン-) ンダド ホレ ハエツ⁽⁴²⁾ ヨスエ
植えるんだったからさ。(ル-) そうすると ほら それを 打つのが

タエヘンデ ノケ ミナ モケルクラエ ヨサンナネドレ コンド。
たいへんで 芒(か) 全部 もげるほど 打たねばならないものな こんど。

C モ^モ モケッケツ"ナエ ホンデモ。

もげるもんだったね それでも。

A ンダ モケッケ ホンデモ ン。 ホンデモ アダ"ナ
そう もげるもんだった それでも ん。 それでも あんな
アエコグ"ナテ ユナタ"ド ノケー……。

愛國なんて いうのだと 芒が

C ンダ アエツ"ー アエツ"ー ンダケナー。

そう あれは あれは そうだったな。

A ミンツカエケハゲ ホダンデ" ナエケノ アリヤー シギシマドガ"
短かかったから そんなで ないけど あれは 敷島とか
トーゴー"ナテ ュー エネタ"ド ノケ フットクテ
東郷なんて いう 稲だと 芒(か) 太くって

ナンカ^クテナヤー (C ン) ナガナガ モケネクテ。

長くってなあ (ル-) なかなか もげなくって。

C エラー"ポエ オモエバリ シタツ"アナヤー。 (A ン-)
ちくちくする 思いはっかり したもんだなあ。 (ル-)

- B オレ アエコグテ ユナダ"ド オボ"エッタ"ナー。⁽⁴⁷⁾ (C 二) シマグ
俺は 愛國って いうのだったら 覚えているなあ んー 旨く
ナエ コメダケナヤ アエツ。 (C ンマグ ナエナ)
ない 米だったなあ あれは。 旨く ないの
- A ンダ" アエツ" シマグ" ナエゲド (B ン) コグドリアルテ シート
そウ あれは 旨くは ないけど (ん) 収穫量があるって たくさん
ウェンナダ"ケデ。 (C ンタ"ー)
植えるんだったな。 (そウ)
- B モカエネ"ケモ。⁽⁴⁹⁾
倒れなかったもの。
- A ンダ"ー モカエネクテ カラ カッダクテ ホシテ ホレ ノケ⁰
そウ 倒れなくって 粟殻(か) 堅くって そして ほら 芒(か)
ミンツカエケモ アエツタ"ド。
短かかったもの あれだと。
- B ンダ" スコス アガエーミダ"エナ。
そウ 少し 赤い みたいに
- A アガクテナヤー。 ンダ"ー。 ン二。
赤くってなあ。 そウ。 んー。
- C アエコグダ"ラ シマグ" ナエケモナヤ。⁽⁵⁰⁾ (B ンマッ"グ" ナエナヨ)
愛國 は 旨く なかったものな。⁽⁵¹⁾ 旨く ないのよ
- A ンマグ" ナエ。 ホンテモ タント デルッテ ミンナ
旨くなかった。 それでも たくさん できるって みんな
ウェンナダ"ケダ"レ アエツ。
植えるのだったよなあ あれを
- B ンデモ ムガスナノ ホレ ネング⁰ナテ ンマエノ ンマグ"
でも 昔など ほら 年貢なんか 旨いとか 旨く

ナエノテ $(^A \text{ ホンダ } \text{ ホンダ })$ カマネケハゲ イエー ナダケッタナ
ないとかは $(\text{ そう } \text{ そう })$ かまわなかつから 良いんだつたよな

$(^C \text{ ンダ" } -)$ ナエ。 エマミダエヨー……。
 $(\text{ そだ" } -)$ ねえ 今 みたいによ……。

A ンダ" コメツラサエ イエゲバナヤ $(^B \text{ ン" } -)$ ホンデ" ゴーカグ"
そウ 米の外見さえ 良ければな $(\text{ ん" } -)$ それで 合格に
ナタンダ"ゲ ホレ $(^B \text{ ン" } -)$ ハエツ" ホレー アノー アエコグ"/
なつんだから ほら $(\text{ ん" } -)$ それか ほら あの 愛國の

$(^{53})$ マエヨ シギシマドガ トーゴーナテ ユナダド ノケ
前よ 敷島とか 東郷なんて いうのだと 芒か

フットクテ オマエ ムキミダエダケツ $(^C \text{ ン" } -)$ ハエツ" ンダラ
太くって お前 麦みたいだったな $(\text{ ん" } -)$ それだったら
ノケ フットクテ ナンカ"クテ。 $(^B \text{ ン" } -)$ ホダナ ヨレネクテ
芒か 太くって 長くって。 $(\text{ ん" } -)$ なんとも もげなくって
ヨレネクテナレー。 ナンキ。 サンナネケ アエツ" ンダド。

もげなくってなあ。 難儀 しなければならなかつ あれだど。

C $(^{55})$ アリヤ トヨクニ"ダ"ノ カメノオ"ダ"ノ $(^A \text{ ンダ" } -)$ テユナ アエツ"
あれ 豊国だの 龜の尾だの $(\text{ そう" } -)$ っていウの あれは
ンマエケツナエ。 $(^A \text{ ンダ" } -)$
旨かったよねえ。 $(\text{ そう" } -)$

B $\text{ ン } \underset{x}{\text{ フス }} \text{ フスワラーガレ。}$
 ん 節藁 かね。

C $\text{ ン } \text{ フスワラナンナ。}$
ん 節藁になるの。

A ン" アエツ" ンダド ボーツ" ンダハゲナー $(^C \text{ ン" } -)$ ホダエ
ん" あいつだと 坊主だからなあ $(\text{ ん" } -)$ そんなに

アレンダ"テ ホレ。ホンデ"モ ムガス シェンバンデ"ナバリ
あれだって ほら。それでも 昔は 千歯扱きなどではっかり
コエダ"ゲ⁽⁵⁸⁾ カゲマダ"バリ⁽⁵⁹⁾ アッテ ホレ エ ホダ"ナヨ……。
扱いたから 穂つき糀 ばかり あって ほら え そんなどよ……。

B ⁽⁶⁰⁾スグロヨス タエヘンダケッダ"ナエ。
遅り残り打ち(が)たいへんだったよな

A ン ヨサネデ⁽⁶¹⁾ トサンナエケダ"レ。 (C ンダ") ナエドカンデ"モ
ん 打たないでは 篩にかけられなかつもんだ。 (そウ) ともかくも
ヨシテガラ トスナダ"ケダ"レ。 *

打ってから 篩にかけるんだった。

B ホシテ ボンゴ"ナステ" コレ サンナネナヨナエ。(A ホダ") ホシテ
そして 唐竿で これを しなければならないのよね (そウ) そして
コンド ホノ カスバ コンド マダ⁽⁶⁴⁾ トンバシテナエ。(A ンダ")
こんど その カすを こんど また 飛ばしてさ (そウ)
カジエ アッド ホレ コー (笑) トンバシテヨ。
風(か) あると ほら こう 飛ばしてな。

A ンダ" ハエツ"バ" マダ" ヨサンナネドレナヤ。 ボーゴ"ナステ
そう それを また 打たねばならないものね。 ボーゴ"ナス といって
ドゴタ"テ コー ワングリント シタナ (B ンダ") コー ホレ
とこの家にも こう 湾 曲 したのが (そウ) こう ほら
アッケツ"ダナ。(B ン一) ン一。 ハエツ"テ" コー サンニンモ
あったものよ。 (ん) ん それで こう 三人も
ヨッタリモシテ コシテ タダ"ガンナネツ"ンダ"ナ (B ンダ") ホレ
四人もして こうして 叩かねばならないんだよ (そウ) ほら
ナヤ ン一。
な ん一。

- C ヨッタリグ⁹ラエシテダ"ド ハガ エンケント⁽⁶⁷⁾ シトリシテナンダラ
四人 ぐらいで なら はか(が)行くけれど 一人で など
ナガーナガ。
なかなか
- A シトリシテナンダラ ヨレルモンテ"ナエ。
一人で なら もげるもんでない
- B ヨレネクテナヤ。 (C ンー)
もげなくってな (んー)
- A ホダゲ ムガスジャ ホレ カナエジュー ミナ ホレ アデ
だから 昔は ほら 家内中 みんな ほら あてに
サッデ デハタ モノッダナ トモデサナヤ。(C ンダ"ナ一) ンー。
されて 出た もんだよな 野良になあ (そくだ"な) ンー
ミンナシテ サンナネナダ"ドレー ンー。*
みんなで しなければ"ならないんだ"もの ん。

注

- (1) 言いたくなる という ニュアンス
- (2) 農繁期や野良稼ぎの時をさしている。
- (3) チヨスは「いじる」意であるが、ここでは仕事のこと。
- (4) 手の平を指して
- (5) ツカラ(力)の強めた表現。
- (6) シネ(干ない、乾かない)
- (7) ツブス(碎く)
- (8) 荒起こした田の土塊を、塊割りなどでたたいて細かに碎くこと。
- (9) アエヅワ(あれは)の強調した表現。
- (10) ユイ。各家相互間の互助的な労働力の交換による共同労働。
- (11) コワイは「疲れ状態にある」意味の形容詞。
- (12) ムサイは、①減らない ②減りにくい ③消滅しにくい 意味の形容詞。反対語は オケナイ。
- (13) 塊打ちで碎けなかつたところを、さらに細かく鍬などで切り割る。
- (14) ノシャゲテ(伸し上げて)が原形。
- (15) 塊打ちをいいかけんにして、ごまかされると。
- (16) エダの夕は、継続や存続をあらわす。
- (17) アエンはアレと同じだが、やや強調して示すニュアンス。ここでは「手による労働」を指している。
- (18) 田畠の荒起こしに使う鍬で、身が三本にわかっている。
- (19) スカエル ①とりかえる ②すりかえる ③持ちかえる。
- (20) 鍬でさくる手まねをして。
- (21) アエゴとも。歩中のこと。ここでは「足の運び方」アゴツリ。
- (22) ハラタクサイとも。ハラタクはの嘘 ②でたらめ ③まずいの意。
- (23) 足の運びと三本鍬の持ちかえが、正しい方向にならないこと。
- (24) (23)に同じ。
- (25) ジェンブ(全部)の強めた表現。
- (26) 雪国のため、稻はコヤと呼ばれる納屋兼作業場に収納するのであった。土間床が普通で、かなり大きな建物を作っていた。

その農舎の上の方まで稻を積み上げることをさしている。

- (27) 稻の七株ぐらいを刈り取って稻束にし、それを六つ（六把）ぐらい一まとめにした大きな稻束にするのが常で、それを一束といった。そこでは、「大きな束にしないで」
- (28) 束ねないにもかかわらず、背負っても稻はくずれなかつたこと。
- (29) 下男奉公先の家に来た年は。
- (30) やせ馬。やせた馬が背負うほどの沢山の荷物を背負えるといふ意。
- (31) 稲の。
- (32) ナラベガタモのねじれ。
- (33) タント（たくさん）を強めた表現。
- (34) 荷作りを指す。
- (35) 自然に「引っぱるような状態になって」といふ意。
- (36) 話し手の分家の老人。油売り行商であった。
- (37) 荷縄で荷物をきりっと締めて。
- (38) 農作業に適する
- (39) 稲を運び入れて積み重ねて
- (40) ボンボントとも。①ごみやちりの舞い上がる形容。②炎が盛んな形容。③草などが勢いよく繁茂する形容。
- (41) 芒（のぎ。稻・麦などの果実の外殻皮の先にある堅い毛）の長い稻。
- (42) 芒の長い稻
- (43) 稲の品種名。
- (44) "
- (45) "
- (46) 粋穀や芒や藁屑などが下着にささって、ちくちくと肌を刺す感じ。イラッポイが原形。イラは、いらいらする・いら草・いらだたしい・いら立つ・いらぐなど、「いら（苛）」と同じ語源であろう。
- (47) 繙続を表わす。
- (48) 石取りであろうか 穀取りであろうか
- (49) 稲が倒伏しない性質であった。
- (50)(51) ンマクナイ（旨くない）の強めた表現。ンマックがより強い。

- (52) コメツラ（米面）。米の外観、見ばえ
- (53) 愛國という品種が作られようになる以前。
- (54) ヨレネ（遅れない）。唐竿でたたいても収穫が藁レベからばらばらに取れない。収穫だけをとり出すための作業だったから「遅る」といったものか。
- (55) 稲の品種。
- (56) 藜丈が高くて、草履の材料（フス）をとるに適した稻の品種。米は旨いが、収穫量が少なかった。
- (57) ボーツ（坊主）。芒がない品種の総称
- (58) コエダゲ（扱いたから）コイタとハケの融音。
- (59) カゲマダ 藜レベから収穫がばらばらに散らないで、収穫がくついたまま穂ごとむしりとられたもの。篩（収穫通し）にかけても、篩の中に残り、さればといって、捨てるわけにもいかず、再び叩かなければならなかつた。欠け又であろうか。
- (60) スグロ 藜の外皮などとカゲマダとが混じり合つたもの。
スグル（元りすぐる）→スグリ→スクロ か。
- (61) トサンナエ 篩（収穫通し）にかけられない。
- (62) ボンゴナス。唐竿、連枷、麦打ち棒のこと。こなし棒が原形か。
「こなす」は、穀物の穂から果粒（穀粒）を切りはなす。脱穀すること。
- (63) 唐竿で打つまねをして
- (64) 風でごみやわらを飛ばして、カゲマダを選別する。
- (65) 飛ばすときのしぐさをして
- (66) どこ（の家）にだつて
- (67) ハガエク。①仕事が順調に進む ②結果がどんどん進行する。

II 旅行

話し手

A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

B グエンブン ホッソコツツサ コンド サンガヅアダリンタド
すいぶん そっちこっちに こんど 三月あたりになると
⁽¹⁾ アラグエ ナンナタ^{ンデ}モナエ。(A ンタ) ニカヅ サンガヅダド
行くようになるんだ それでもねえ。(そう) 二月 三月だと
エツンバン イエーテ ユナタ^{ンタ}モナエ。(A ンタヅダ一) ジキドシテ。
一番 良いって いうんだよね。(なるほど) 時期としては。
⁽²⁾ (A ン一) ヒロッサダ^{テンド} テンドナテ⁽⁴⁾ ホッカエドーサ
ん一 弘さん(は) 天童じゃない 北海道に
エングテ エダ^{ンナエガヤ。}(A ホンダベチャ アレナー 笑)
行って(言ひ)いる ジゃないかな。(そうだろうよ あれな)
(笑) ナナカヅダナテ。(A ン一)
七月だって。 (ん一)

A ホッカエドーワ アタガエ ドギ^{ンナエド} ワガンナエベナ
北海道は 暖い 時で ないと だめだろうな
ヤッパリ。(B ン一) ホッカエドーワ ンダド^{ンデ}モー⁽⁵⁾
やっぱり。(ん一) 北海道は すると でも
メーサエニ ミルダラ^{トーガ} カガルテ ユーナダンデオナ
明細に 見るならば 十日 かかるって いうんだ でもな

(B ンー) ホッカエドモ。
 (ルー) 北海道も。

B コッツサ⁽⁶⁾ エカネ ゴンタラー エンカナーナテ⁽⁷⁾ エダンダケゲント。
こっちに 行かない ならば 行こうかななんて いたんだったけど。

A (笑) ンダ ヤッパリ アノ ワガエウツ エッテ キタ ホ
 そう やっぱり あの 若いうち(に) 行って 来た 方(か)
イエーナダ。トスエングド ホダナ クタービッテ⁽⁸⁾ ツカッテ
いいんだ。 年(が) 行くと そんな くたびれて 疲れて
アラガンナエモ ホダナハ。(笑) オダクサンアダリア チョード
歩けないもの そんな。 お宅さんあたりが ちょうど
イェアンバエナ トスゴロダ。アラギアンバエダッス。
いい具合な 年頃だ。 行くには絶好です。

B マンダ ハヤエベナー。(笑)
 まだ 早いだろうや。

A ハヤーグナ⁽⁹⁾ ナエベツハ ホダナ エマミナ ワガエ シトバリ
早くなんか ないだろうや。そんな 今はみな 若い 人ばっかり
タント アラグデ トショリ イエガ。(笑)
多勢 行くじゃないか 年寄り よりも。

B ツエブン アラグエ ナタンダ ホンデモナエー。
すいぶん 行くように なったんだ それでもねえ。

A アラグー。
行くねえ。

B ワッガエクテテ⁽¹⁰⁾。
若くっても。

A ンダーッス。
そうです。

- B コツツ ヤツ⁽¹¹⁾ シューナノー トスエッタナバリ ミデ"ンダゲ"ントモ
こっち 谷地の人など 年いった人はばかり みたいだけど
- サンバタ⁽¹²⁾ シューナ イエアンバエ ワガエナバリミダエダナー。
沢畠の人など かなり 若い人はばかりみたいだな。
- A ンダベース エマ ワッガエ シトバンダ アラグナ ミナー
そうでしょう 今は 若い 人はばかりだ 行くのは みな
ン。ヤッパリ ゴジューダエ ログジューダエダ"ド アレタ"ゲンノ
ん。やっぱり 五十代 六十代 だと あれだけど
オランダ⁽¹³⁾ ミダエ スヅジュノ ウェー ナッドハ ホダナハ (笑)
俺なんか みたいに 七十の 上に なると そんな
オモヤミデ トッガエ ドサナ アラガンナエモナヤ。
心配で 遠い 所など 行けないもの ね。
- B ンダゲ ホユナ ナナジューダエタ"ラ ナナジューダエク^アラエナバーリ
だから そういう 七十代なら 七十代 ぐらいの人はばかりの
コー トスンナバ コー(笑) ズカン カゲデ シエデ アラグド
こう 年の人を こう 時間(を)かけて 連れて 行くと
イエーナダベナエー ホントワ。(A笑) ハエツ ワッガエナド
いいのだろうね 本当は。 それが 若いのと
- トショリッタナ⁽¹⁴⁾ マンザッサゲ ホレ (A笑) タエヘンナツアナエ
年寄った人(とが) 混じるから ほれ たいへんなんだよな
- トス⁽¹⁵⁾ アエツナ シトナエ。 ホノ トス トスニ アエツ
年が あれな 人はね。 その 年令別に あれ(を)
スッド ホダンデ ナエナ ンナエガヤ アエツア。
すると そんなで ないの でないかね あれは
- A ンデモ オランダミデナ ナテガラハー イエノ シトモ
でも 俺達みたいに なってからは 家の 人も

ヤッパリハ ホダエハ トッガエ ドサナノ タシテ
やっぱり そんなに 遠い 所などに 出して
ヤッタガラネハゲナ ンデモナ ヤッパリ。
やりたがらないからな でもな やっぱり。

B ンダゲ ホユー (A ン) トスダエノ シトヨ ナナジュー⁽¹⁴⁾ダラ
だから そういう (ん) 年代の 人さ 七十なら
ナナジュー⁽¹⁴⁾ダエノ シト エグド (A 笑) ミンナ ホユナダモノ
七十代の 人(が) 行くと () 全員が そういうのだもの
イエーナ ンナエガヤー。 (A 笑) *
いいので ないかな。

A ホンデモ ツブンナガラ ンデモ コレハ ン スツジュー⁽¹⁵⁾ノ
それでも 自分ながら でも これは ん 七十の
ウエナ ナッド アンマリ トッガエ ドサナ ヤッパリー
上などに なると あんまり 遠い 所など やっぱり
エングダグ ナエミデダモナヤー。 ホンテ ツンブント タエテ
行きたく ないみたいだものな。 本当に 自分と たいして
ツカワネミデナ シト ホリヤー ホツツデ スンダ コツツデ
違わないみたいな 人(が) ほう そっちで 死んだ こっちで
スンダナテバリ ユーハゲテ。 *
死んだなんてばかり いうから。

注

- (1) 旅行（ここでは観光旅行）に行くように。方言のアルクは共通語の歩くよりも、意味範囲が広いようである。
- (2) 観光旅行をするには、もっとも適している ということ。
- (3) 話し手Aの甥で、話し手Bと同じ職場の人。
- (4) 将棋のまち天童市（温泉地）のこと。
- (5) 見るつもりならば。古い言い方。普通は「ミルキダラ」という。
- (6) 九州一周旅行
- (7) 北海道に行こうかな ということ。
- (8) クタビッデ（くたびれて）を強調した表現。
- (9) ハヤグナ（早くなんか）を強調した表現。
- (10) 若くっていても。「若いくせに」というニュアンスがある。
- (11) 地名。河北町谷地。録音地。
- (12) 地名。河北町谷地の小字名。録音地の西方 1.5 Km。
- (13) 思い病み が原形。
- (14) トショツタナ のねじれ。
- (15) 年老いた
- (16) 老人だもの
- (17) 大抵

12 植樹と日照権

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A イエアンバエ オッケナダモ ンデモ マツヌギッタテ ホダナハ
カなり 大きいのだもの でも 松の木といつても そんな
⁽¹⁾
ンダナ コノ タガサイエガナ ツット タッガエナダ ンデモ
そくだな この 高さよりも ずっと 高いんだ でも
ンー。(B ア マツヌギガ) ンー マツヌギ ナニマツドガテ
ルー。(あ 松の木か) ンー 松の木(ほ) 何とか松とか言って
チエット ン カワタ マツドガテ ユナダケツ。ンタ"ゲ
ちょっと ん 変わった 松だとかって 言うんだった。だから
⁽²⁾
エダマスエドテ オレ ウエデ ケダモナナテ エダケハゲヨ。
惜しいと思って 僕(め) 植えて やったものなんて いたっけからよ。
コノ トスエ ナテ ハツジュバリナテ ンー ヨー アダエ
この 年に なって 八十にもなって ん よ あんなに
⁽³⁾
ワッガエ モノニ ゴシャガッテ ナテ。(笑)(B 笑) オモシヤグ
若い 者に 叱られて なんて。
⁽⁴⁾
オクテ カダッケゲヨ。 (C クータモナエヤ)
さわって (そう)語ってたからよ。 (九 だものなあ) ン
ン

- ンダデ クーダ。^(C ン) カゾエドス ナナジュークーダモ。
 そう 九だ。^(ん) 数え年 (の) 七十九 だもの。
- C ナナジュークーダドレハー。
 七十九 だものな
- A オラエノ ツンツアダド オナエドスダハゲ ホレナ。^(C ン一)
 僕家の 爺さんなんかと 同い年 だから ほら ⁽⁷⁾ ん
- B ホシテ ワレノ ヤスギサ ウェダナダラ ゴシャガレッコドモ
 そして 自分の 屋敷に 植えたのなら 叱られることも
 ナエケベナヤ。
 なかったろうがなあ。
- A ンダケベゲントモ アレアド イエダ カエデ⁽⁸⁾ オガップド
 そうだろうけど あれだって 枝(左) 扱って 成長すると
 オラエノ ハタ"ゲサ シカゲ ナルテダド ^(C 笑) ンダケテ
 僕家の 烟 に 日陰に なるってだって ^(C 笑) だから
 コン"エデ⁽⁹⁾ モラワソナネテ ホレ ャッタ"テダ一。ホダナ ユギノ
 根こぎにして 貰わなければならぬって ほら 言われたっていんだ。「そんな 雪の
 ウエデ⁽¹⁰⁾ コン"エデ⁽¹¹⁾ モラワソナネナテ ユタテ エマナ
 上だから『根こぎにして 貰わなければならぬ』って 言ったって『今なんか
 コン"ガソナエハゲテ^(笑) ユギ ナグナテガラダテ^(笑) オレ
 根こぎにできないから 雪(が) なくなつてからだ』って 僕(は)
 ユタナテ^(笑) エダ"ケ。^(笑) ^(C 笑)
 言った なんて ^(笑) ^(笑) いたつけ。
- B ホダナソナダゴンタラ タゲヤニ ゴシャガレンナヨー。⁽¹⁰⁾ ワレノ
 そんな(言い分)だったら 竹谷に 叱られる論法だよ。 「お前の
 イエー タッガエハゲ^(笑) シカシケ^(笑) ナッサゲ^(笑) ヒックグ
 家(か) 高いので 日陰に なるから 低く

シテケロナテ ヤレルヨーナ モンダ"ベチャエナエ。(笑)
してくれ」なんて 言われるような もんだろう やな。

- A ンダ"ベナヤ。アソゴ タ"エブ シカ⁽¹³⁾ケ[。] ナテッタレ ナヤッス。
そうだろうな。あそこ だいぶ⁽¹²⁾ 日陰に なってるじゃないかね。
- B タ"エブ シカ⁽¹²⁾ケ[。] ナテルナ ワガ⁽¹³⁾ンナエ[。] モンダ"モナヤ (A ンダ")
だいぶ⁽¹²⁾ 日陰に なってるの(が) わからぬ もんだもなあ そうだ
- A フミヨッサエンナ⁽¹³⁾ モモスギダ"テ アレ コツツノ ホ シカ⁽¹⁴⁾ケ[。]
文義さん家の 桃の木だって あれ こっちの 方 日陰の
ホ ナエダガ⁽¹⁴⁾ シェー ワレ (B ワガ⁽¹⁴⁾ンナエ) ミダ"エダ"ダレ
方(は)なんだから 勢が 悪い (だめだ) 又いだものね
オガ⁽¹⁵⁾ラネクテ。
大きくならなくって。
- B オラエンナ デハリノ⁽¹⁵⁾ ハダ"ゲモ ンダンモ (A ンー)
俺家の 村はずれの 烟も そうだもの (んー)
ブンサクサエデ⁽¹⁶⁾ クファ ツーット ウエテ⁽¹⁷⁾ オグ"ハゲ"ナレ。
文作さんの家で 桑(を) すうと 植えて 置くからね。
(A ンー) ヤッハリ⁽¹⁷⁾ エッケンドーリグ⁽¹⁸⁾ラエ ナンータ"テ
(んー) やっぱり 一間(1.8m) 中ぐらい(は) 何を植えちって
ワガ⁽¹⁹⁾ンナエナヨ。
だめなのさ。
- A ンダ"ベー ヤッハリ⁽¹⁹⁾ アエツ (B ワガ⁽¹⁹⁾ンナエ シカ⁽¹⁹⁾ケン ドコ")
そうだろう やっぱり あれは (だめだ) 日陰の 所(は)
シカ⁽¹⁹⁾ケ[。] ナルバリ⁽¹⁹⁾ンナグ⁽¹⁹⁾ ツー スウハゲダ"モナヤ。(B ンダ"ナー)
日陰(に) なるばかりでなく 地力(を) 吸うからだものね (そうだね)
ンー。 オガ⁽¹⁹⁾テガラ ホレ ホリオゴ"スエ タエヘンタ" ンー
ンー。 「大きくなってから ほら 堀り起こすのに 大変だ" んー

ハゲテ ホレ アノ ハヤグ ユテ モラテ
から ほう あの 早く 言って 貰って
イエガッタツタ"ゲ"ドヨナテ (B シー) ツンツア ⁽²⁰⁾ エダ"ケナ。(笑) *
良かったんだけどよ」なんて んー 爺さん(か) (言って)いたっけな。

C ホゴノ ⁽²¹⁾ アレノ ミサチャエンデ ⁽²²⁾ アノ クファ ⁽²³⁾ (A シー)
そこの あれの 美佐ちゃん家で あの 桑(か) んー
オラエノ ハタ"ゲ"ノ ンダ"ナー エッケンハンク"ラエマ"デ コー
俺家の 煙の そうだな 一間半(2.7m) ぐらいまで こウ
エ"タ" ノビ"デ" クンナタ"ケデ"。 (A 笑) キツ ^{××}
枝(か) 伸びて くるんだったものね。 タカ [×]

タオシタモナエハ。

倒したものな

A ンダ"ガハッス。ン ミナ キッタガアッス。(C キッタハ) モドガラ
そうですか。 ん みな 切ったんですか。 (切っちゃった) (根)本から
(C シン モドガラ) ホーガレ (C シン) シー。
(ん (根)本から) そうかな ん んー

B アノ クファヌギガ。(C シー) シー。
あの 桑 の木 か。 んー んー

A ンデ イエー
そりや 良い

B アソゴ ロソーダ"ケガレ。
あの木は 魯桑だったっけ。

C ンダー ロソー。 マエネン オラエテ" カッテダンダ"ケドナヤ。
そう 魯桑だ。 毎年 僕の家で 買ってたんだけどなあ。

(A シー)
(んー) *

往

- (1) いい塩梅にが原義。ここでは、かなりの意。
- (2) 天井をさして
- (3) 痛ましい（心が痛む状態）が原形。
- (4) ワガエ（若い）を強めた表現。老人の北隣に住んでいる工藤某、四十六歳の男をさしている。屋敷の境に近く松を植えて、工藤氏にしりをもちこまれたことをいっている。
- (5) おもしろくなくって
- (6) 年令を言うときに、一位数だけで言う習慣がある。八十歳などの場合は、チョードと言う。
- (7) 夫のこと
- (8) 撸き取って高く伸ばす
- (9) 根ごと引き抜く
- (10) 竹谷氏。工藤某は、竹谷氏の南側に二階建ての大きな家を屋敷ぎりぎりに建てている。そのため竹谷氏の畠は終日日陰になって、迷惑をこうむっている。
- (11) 工藤某をさす
- (12) 自分のことは「わからぬものだ」という気持ち
- (14) ワガンナエ ①分からぬ ②だめだ ③いけない
- (13) 工藤某の家の日陰になっている桃畠の持主の名
- (15) 出張り。町・村・部落などのはずれ。出張りの対語はスグ（宿）。
- (16) 人名
- (17) 一間通り
- (18) ナンダテ（何でも）を強めた表現。
- (19) 地力。作物を成長させる土地の力。
- (20) 松の木を植えて、しりをもちこまれた老人。
- (21) すぐ南隣りの
- (22) 話し手Cの南隣りの家の名
- (23) 魔桑。葉は巨大で柔らかく水分が多く養蚕に適する。巨木だった。
- (24) 日陰にならなくなつて よかった ということ。

13 都市計画と移転

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A ナエンダ"ガ"ナヤー ドサー キラル モンダ"ガ"-----
どうなるのかねえ どこに(道が)切れるのか

B アエツ" キラルーテ ヌード タテ"ラシェネハゲナエハ。
あれ (道路が)切れるって いうと 建てらせないからな。

(A ンダ"ベナハ) タテ"ラシェルタテ アリヤ (A キマレバナ)
そうだろうな 建てらせるとしても あれ (決まればな)
ジョーケンツ"ギタ"ド。(A ンー ンダ"ガ") ン。
条件つきだそ(う)だ (んー そ(う)か) ん

A ホンダ"ゲ アリヤ アノ ショーエツ"ロサエノ ター アソゴ
だから あれ あの 正一郎さんの家の 田(は) あそこ(を)
ウッタナナノ ンダ"ゲ アダエー ニスノ ホー リヤー
売ったのなど だから あんなに 西の 方 あれ

(B ン ミナ ウラタデハ) アケテ⁽⁴⁾ アレ シタデアレナヤ。(B ン)
ん 全部 売れてしまったな あけて あれ したじゃないか。(ん)

イエー タテ"ダ"デアレ アソゴ。アレタゲ ミツ" ヒログ
家を 建てたじゃないか あそこ。あの分だけ 道(か) 広く

ナッサゲテ ホレ アゲラヘダンダベ ヤッパリ。
なるから ほう あけさせたんだろウ やっぱり。

B ンダ" アエツ" / ホー ヒガスノ ホー ミナ ウラタナツァナハ。
そウ あれの 方 東の 方は 全部 売れたんだよな。

A ンダベナエハッス ンー。
そうでしょウね んー。

B アラダメガラ ⁽⁵⁾ クッ ドゴ ホレ ガッコノ ⁽⁶⁾ ホーサワ ミナー
改目から 来る 所 ほら 学校の 方へは みな
アソゴ アゲルエ シタンダゲネ。ウ カッタンダッスヨ ミナハ。
あそこ あけるように したんだからね。 買収したんだしょ 全部。

(A ハー ンダ"ヅダ") キヨネナノ ハル ミナー ⁽⁷⁾ ウツタ
はー なるほど 去年の 春に 全部 売った

ウツタヅダ"ガ" (A ンー) カッタナツ"ダナハ。
売ったといふか (んー) 買収したんだよな。

A ンダ"ヅダ"ナ ナハ。ミナ キマタンダベハケナハ。
そうだよな。 全部 決まつたんだろウからな。

B キマタンダハケ。 (A ンー)
決まつたんだから。 (んー)

C ナンヅエ ナルンダ"ガ"ナエ。
どんなに なるのかね。

B ンデ" アイナ イエー タデ"レッタテモ ホレー ン ホゴサ
んで ああいのは 家(き) 建てるっていっても ほら ん そこに
ドーロ キラルテ ユー ⁽⁸⁾ ワガ"ッテッド ⁽⁹⁾ ケーカ"グシテッド
道路(が) 切れるって いうのが わかっていると ⁽⁹⁾ 計画していると
ホーユー バアエダ"ド イテンスルドガ ⁽⁹⁾ イテンヒドガ"テ
そういう 場合だと 移転するとか 移転費とかは

ケネ ゴドエ シテ スンナダッタデ"ネ。* ンナエド ホダナ
呉れないことに して (建築)するんだそうだよね。 でないと そんな
ヅロエナバリ エルテアデ。 ワラワラ ミヅ キラルテ ユド (笑)
ずるい人はばかり 居るっていんだ。 急いで 道(が) 切れるって いと
エラネ モノモ ウエダリ マッタリ スルテヨ。
いうない ものも 植えたり 何か するってよ。

A (笑) ホダ ホンダー ホンダモナヤ。
そう そう そうだものな。

B ンダ元 タツギサー ホショ一 ツグナタ"ゲナエ。
だって 立木に(mo) 補償金(ga) つくんだからね。

A ンー ンダツ"ダ。 ンダ一 アソッカラ マッスケ^p キラル
んー なるほど。 そう あそこから まっ直ぐ 切れる
キラルテ ハナス アッタンダツ"ナヤ。
切れるっていふ話(ga) あつたんだよな。

B キララネモナヤ。*
切れないものね。

A ンダ アソゴ スロサエンドッカラ マッスケ^p ユード ンデモ
そう あそこ 四郎さんの家の所から まっ直ぐって いと でも
ダエブ イエ一 タガ^pガンナネナ アンベモアレナ ホンデモー。
大分 家(を) 移転しなければならない家(ga) あるだろうからなあ それでも。

B アソゴ ゴンスケガラ アソゴ マーッスケ^p オッキリミツツア
あそこ 権助の所から あそこ まっ直ぐに 押切道に
キラルーエ ナンナンナエガ (A ハー ンダガ) ケーガ^pグワ。
切れるように なるんではないか (はー そうか) 計画は。

(A ンー) ナエ アソゴラサ キランナダガ スンナエナ。
んー ね あのへんに 切れるのかも 知れないな。

- A ンダ"レバ アソゴ"ダ"レバ ホレ イエー ナエハゲ"ナヤ (B ンダ)
 そんなら あそこならば ほら 家(か) ないからな。 そウ
 ターバンダ"ゲ イエーツ"ダ"ナナヤ。アノ ミツ" ヒログ
 田ばかりだから 良いんだよな。 あの 道(か) 広く
 ナンナダベ ンダラ。
 なるんだろウ では。
- B ヒログ ナンナダガ スンナエナ。
 広く なるのかも 知れないな。
- A ン アソゴワ イエーツ"ダアレナ。ヤッパリ イエー タガ"グテ
 ん あそこは 良いんだよあれは。やっぱ"り 家(を) 移転するって
 ユード カネ カガ"ッ"ア ナヤー。
 いうと 金(か)" かかるんだよね。
- B ンダ" (18) ジェニ一 ケルテ ユー モノノ……。 (笑)
 そう 補償金(を) 吳れるって いう ものの……。
- A ンーダー ホダナ。ケンナナ サンブンノエツ"モ ホダナ ケー
 そう そんな。吳れるのなど(は) 三分の一も そんな
 ダ"サネモノ (19) ホダナ。 (笑) (C 笑)
 出さないもの そんな。
- B ケッキョグ" ホゴシテ モテグ" ナンノッタテ イエグ"
 結局 (家を) ほごして 移転するの なんのって いたって 良く(は)
 エカ"ネヅ"ダ"スネヤ。
 いかないんだしね。
- A ンーダ"デ"ーハス。 コシェーンタテ イエー ドゴ"ナバリ コンド
 そうですもんね。 捧えなくって(も) 良い 所などば"かり こんど
 コシェランナネグ" ナテナ。エゴ"ガシェバ" ホレ。 ンダ"ゲー
 捧えなければ"ならなく なってな。 移転すれば" ほら。 だから

ヤッパリ イエー タガ^アグテ ユーナワ カネカガルンダ
やっぱり 家(を) 移転するって いうのは 金(か)かかるんだ

ヤッパリナ。

やっぱりな。

B フルエナ モテッテ タデンナダラ アダラスク タデダ オ
古い家を もって行って 建てるんなら 新しく 建てた 方(か)
イエーモナエハ。^(A ンーダ"ナハ) ヘッゲナ ワンツガノ サデナ。
良いもねえ。^(そうだ"ね) そんな わづかの 差でな。

A ンー ンダ。ホダナ カネ カガタ ワリアエニ イエーグ
んー そう。そんな 金(か) かかった 割に(は) 良く(は)
エガ^アネハゲナヤ ヤッパリ。フルモノ シシャケ^アデジヤ ヤッパリ。
いかないからな やっぱり。古物(を) 仕上げて は やっぱり
^(B ンダ"デー) ンー。
^(そうだ"よな) んー。

注

- (1) 都市計画の道路予定地には建造物を建てさせないという話題。
- (2) 路線が決定すると
- (3) 人名。
- (4) 道路の予定地を空地にして
- (5) 地名。河北町の小字名。録音地の北方 1 Km。
- (6) 谷地中部小学校のこと。改めから谷地中学校。各地中部小学校のすぐ西側にバイパス道路が出来る予定になっている。
- (7) 買収済みになった
- (8) ユーナ と言るべきところ
- (9) 理由にあたるものと、三回も言い表えている。
- (10) サセンナダッタデネ のねじれ。
- (11) ワラワラ は副詞。ワラワラド・ワラワットとも。ウエダリに係る。
- (12)したりなんか。-----シタリ マッタリ が慣用句
- (13) 人名。
- (14) 人名。
- (15) 地名。録音地の東方 1 Km の部落。
- (16) 道路が接続するように。道が通じるよう。
- (17) タガグ ①持つ(手掛く) ②携える ③持ち上げる ④持ち運ぶ。
⑤移転する
- (18) ジエニ 錢だけではなくお金の総称。ジニ・ジエネとも。カネは、やや改まった言い方。
- (19) 補償金を支払わないもの。

14 田螺と蝗

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- C アノ ツンブシェメー リヤ シェック クッドギ⁽¹⁾ハ⁽²⁾
あの 田螺 捕り ほら 節句^(が) 近づくと
(A シー) アノ アレダケ⁽³⁾テ。シェメッダ⁽⁴⁾シト ホツツ
あの あれだったな。捕っている 人^(が) あっち
コツツエ タンボエ エッケ。⁽⁵⁾ (A シー)
こっちに 田圃に 居たっけ。⁽⁶⁾ ん
- B ツンブワ ンマエモナ。ンデモナ。
田螺は 旨いもんね。なんといっても
- A アエツ ンマエヤー。(B シ) オガスゲナ ハマプリナー アレナ
あれ(は) 旨いや ん おかしな はまぐりなど あんな
アサリイエガナー ンマエモナヤ。(B シ) シー。
浅蜊 よりも 旨いものな ん ん。
- B キヨネナ オランダ ソンデサギー⁽⁶⁾ ツヅミニ (A シ) アソゴン
去年^(レ) 僮達^(が) 袖崎の 堤に⁽⁷⁾ ん あそこの
ドゴ スゴド シテテ⁽⁸⁾ ア ツンブ エダ⁽⁹⁾ ンデ⁽¹⁰⁾ ツンブ
所^(で) 仕事^(を) していく「あ 田螺^(が) 居る。じゃあ 田螺を

シェメデ アベヤナテ シエメデ" キテヨ (A ン) ホシテ ニテ
捕って 行こうや」なんて 捕って 来てさ (8) そして 煮て
クタヅ。 (A ジャッ) タガジエギンデヨ。
食ったよ。 (まあ) 高関(の事務所) でよ。

A ターガラガス ターガラ。
田からですか 田から。

B ンナエ。ツツミサ (A ジャー オー) エダンダ。タンート
いや。 堤に (まあ おう) 居たんだ。 沢山
エダンダケナ。
居たんだっけな。

A ナエーダ ヨグナヤ ホダエ。
なんだって よくね そんなに。

B ツンブ"ズルデ"モ シテ ケーヤナテ ホシテ (A ン) モテ キテ
田螺汁でも 作って 食おうやなんて そして (ん) 持って 来て
クタケ (A ン) ヤッパリ アンツ イエーナー。
食ったっけ (ん) やっぱり 味 (か) 良い なあ。

A ヤッパリ ツンブ ンマエモナヤ。
やっぱり 田螺(は) 旨いもの な。

B ンマエナー。
旨い なあ。

A ミソスルナー シテ クード シタ ンツ (9) ンマエダレ (B ン) *
味噌汁などを 作って 食うと 汁 (が) 旨いものね (ん)
ツンブド ナンゴンタラ ホンーテ メケランナエ ナヤッス。
田螺と いなご なら ほんとに 見付けられないですね。

C ナンゴンタラ ミランナエ。
いなご なら 見つからぬ。

- B ンダナ オバナザワノ⁽¹⁰⁾ ホーサ エガネド ワガンナエモナエ。
そう 尾花沢の 方に 行かないと 見られないものな。
- (A ンー) アツツダテ ショードグ シテンナ⁽¹¹⁾ンダベゲントモ
ん あっちだって 消毒(き) してるんだろうけれども
(C ナンシテ ンダハゲヨー)⁽¹²⁾ エルナエ。
どうして だからよ 居るな。
- A ミナ ヤマサ ネケンナダッタ ンナエガツー。⁽¹²⁾
全部 山に 逃げろっていうんで ないかい。 (C ナー)
な
- B ホダテ ヤマッタテ ホダナ チョード ハナバスナンダラタ"ゲント。⁽¹³⁾*
だって 山といったって そんな ちょうど 間近かなど なら だけど
カワー アソゴ アッサゲ カワサデモ テーボアダリサデモ
川(が) あそこ(に) あるから 川にでも 堤防あたりにでも
ネンケデ ネエッド アユニ エギ"エンナダ"ガ ナエンタ"ガ。
逃げて いると? あんなに 生きているのか なんだか
- A ドーユー モンダガナヤー。ンデモ (B ンダテ)⁽¹⁴⁾ アツツノ ホーテ
どういう ものかなあ でも (だって) あっちの 方(に)
エルジヤ ヨー。
居るってのは よ。
- B ホダナ カンジョシタラ⁽¹⁵⁾ サバダアダリエモ⁽¹⁶⁾ エランナネナツア左。
そんな 考えでいったら 沢畑あたりにも いなければならぬんだよね。
ヤマアダリサ (笑)
山のあたりに
- A ンーダナー ャッパリ。
そうだね やっぱり
- B ネケデ⁽¹⁷⁾ ングナ。ハエツ" サバダアダリモ エネデー。
逃げて 行くのが。それが 沢畑あたりにも 居ないだろウ。

A ンダーナヤー。

そうだね。

B アツツ オバナザワノ ホーバリ エンナダモナエ。 (A ン一)
あっち 尾花沢の 方(に)ばかり 居るんだものね。 (ん)

C アレノ ホエ エネガヤ。アノ スンヅタ⁽¹⁷⁾ノ ゲンカエスンヅ⁽¹⁸⁾ノ
あれの 方に 居ないかい。あの 志津だ^の 玄海 志津の
ホーナノ……。
方など^(い)

B アツツ^x アツツノ ヤマテノーエ エネヅ。ン。マザワノ ホー
あっち あっちの 山手の方に(は) 居ないんだ。ん。間沢の 方に(は)
ミランナエユーダツ^{*}。マザワノ ホーエ ナンゴ^o エダナテ ユー
見られないようだな。 間沢の 方に いなご(が)居たなんて いウ
ゴド ナエナ。 (A ン一 C ン一)
こと(は) ないな (ん ん)

A ホノ トヅニ アンナツンダガナヤナエ。

その 土地に (根柢が) あるのだろうかなあ。

B ナリゴ^oノ ホーエ エルッタ ンナエガヤ。
鳴子の 方に 居るといふ じゃないかい。

C フン一 ミヤキケンノ ホーダラ エル (B ン一) ガスンナエナ。
ん 宮城県の 方なら いる (ん) かも知れないな。

A ンダド⁽²¹⁾ アガグラノ ホーナ (C ン一) シ アツツノ ホ……
そうだって 赤倉の 方など^(い) ん あっちの 方

B コドス ズエンブン オガルルマノ ホーサ シエメ エッタテ
今年(は) すいぶん 方に 捕り(は) 行ったって
ユナダナ。 (C ン一)
いうんだな。 (ん)

A オラエ！ ホンケ！ オッカダモ⁽²²⁾ ニンド エッタナテ
俺家の 本家の 嫁たちも 二度 行ったなんて
キヨネナ！ アギ。^(C ンー) ホーシター！ ホリヤ コツツガラ
去年の 秋^(レ) ん そうして ほら こっちから
エグニ ヤッパリヨー タップリ ニシツカン カガッド
行くに やつぱりよ たっふり 二時間 かかるそうだ
ヤッパリ。^(C ナエー) アガグラサ エグエ。
やつぱり。^(なあ) 赤倉に 行くに。

C クルマンデナー。

車でだろ

A ンー クルマンデ。 ンダゲテ ヤッパリ アサケ クラエ ウツー
ん 車で だから やつぱり 朝 暗い うち^(レ)
^(C ン) エッテ ホシテ アッチャ エッテ シエメネデ
ん 出発して そして あっちに 着いて 捕られないでは
シエメランナエテ ユナダナ。^(B ンタベナエ) アタカグ
捕られないって いうんだな。^(そうだろうね) 暖かく
ナテガラナ シエメランナエチャ ハヤクテ。^(C ンー) ブンブド
なってからなど 捕られない よ 速くって。^(ん) ぶんぶんと
トンデ アラテ。^(C ンー) シタレバ ホレ エネカリ シッタ
飛び 歩いて。^(ん) そしたら ほれ 稲刈り^(レ) している
シト エダケテダテ ナエーダ アノ オマエノ ホーテ
人^(が) 居たっけといふんだ 「なんだって あの お前の 方で
ナコナノ クナダガーテ ホレ ユタテ。^(C ンー) ホシテ ナンゴ
いなご など 食うのか」って ほれ 言ったって。^(ん) そして いなご
クーナダテ ユタエバ オラホデ カネテダケ ナテ。 ホシテアノ
食うんだ」って 言ったら 「俺方では^(は) 食わない」ってだけなんて。 そして

ラエネンモ シエメ ゴザッシャエナテ ツカエモラテ⁽²³⁾ (笑)
「来年も 捕りに いらっしゃい」なんて 招待されて
キタテンダ"デ。(笑)*
来てって言うんだな。

C ヨーグ タ コガ"レンナ ⁽²⁴⁾マ_x マダ キテケラッシャエナテ
よく 田(を)踏みこまれるのに また 来てくだ"さい なんて
ユーチャー。
言うことね。

A ン ホゴラー-----
ん そこ

B アツツ / ホー ンタ"ゲ ホダナ タント ^ン
あっちの 方は だ"から そんな 大勢(は)
ンガネナダ"ベチャエナア。
行かないんだろうよなあ。

A エカ"ネナダ"ド。ンー。エネカリ シッタ シト
行かないんだって。ん。稻刈り している 人が
エダ"ケテダ"ドレ。^(C ンー) ホシテ-----
言ってたっていうんだ。^(ん) そして

B ハエツ ニツヨーテ ユード オバナザワアタ"リナ! オマツリ
それが 日曜なんて いたら 尾花沢 あたりなど お祭り
ミダエタ"デ"ナエハ。^(C ンー A ンタ"ベー) ミナ クルマテ"
みたいだよな。^(ん そうだ"ろう) みんな 車で
エッテホレ。^(C ンー A ンー) ンタ"ゲ スコドモ サンナク"
行ってほら。^(ん ん) だ"から 仕事も できなく
ナルテダ"ケナ。
なるってだったな。

C ンダ"ヅ"ンダ。

なるほど。

A ンダ"ゴ"デナ ャッパリ。 エネ カリヅラグ ナテナ。 (Cン)
そうだろうな やっぱり。 稲(が) 割りにくく なってな。 (ン)
ンー。
ん。

注

- (1) 桃の節句。田螺とアサツキの酢味噌あえを供えるのが慣例だつた。
- (2) 「来る時は」が原義。
- (3) あとの文の内容をさす。
- (4) シエメッダは 現在進行・継続をあらわす。
シエメダは 過去・完了をあらわす。
- (5) 居たもんだつた 昔は というニュアンス。
- (6) 地名。村山市袖崎
- (7) 現在
- (8) 高闘は地名
- (9) 下地。煮物などのしる。
- (10) 地名。尾花沢市。
- (11) なぜ 尾花沢の方面にはばかり 蟻がいるのか と言っている。
- (12) なるほど そうかい という気持ち。
- (13) 鼻端。間近かの意で、ハナサギ、ハナノトツツアギ も使う。
- (14) 蟻が山に逃げこむという考え方。
- (15) 勘定
- (16) 地名 録音地図の西方 1.5 KM、山添いの村落。河北町
- (17)(18) 地名 西川町。月山の登り口にあたる
- (19) 地名 西川町。志津・亥海などへの入り口
- (20) 地名 宮城県の鳴子温泉。 蟻は山形県と宮城県の県境一帯に多く住んでいるといふ。
- (21) 地名 山形県最上町赤倉温泉。宮城県境付近。
- (22) おかあさん(主婦)の普通称。オッカア。
- (23) お使い状(招待状)をもらつて か原義か?
- (24) 稲田にひみこむ。漕ぐ。ぬかるみや雪、草木などで歩きにくいうろを、踏みわけて歩くこと。川をコグ ともいふ。

15 小正月の行事

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ
- D 矢作 春樹 男 昭和 6年生まれ (研究員)

D ムガシノ コー ネンチューギョージデネ (A ンー) ミーサ
昔の こう 年中行事でね (ん) 箕に
カナモノ ミナ アゲデナテ ユナヨ (A ンー) ナガナガ
金物(を) すべて 上げて なんて いの(は)よ (ん) なかなか
ハナスシテケル シト エネナヨ。
話してくれる 人(は) いないのよ。

A ンダ" ハエーツ"ワ ドゴ"デモ ンデモ……。
そう それは どこでも でも

B ンダ" ミナ ミナ シタモンダモナエ。
そう すべて やったもんだものね。

A ショーガツワ ミナナヤ。(B ンー) ホダナ モツ"一 アケ"……
正月は すべて なあ (ん) そんな 餅(を) 供え
ナリトリモツ" コー シトグミンツ" ホレ。(B ン)
お供え餅(を) こう 一組 ずつ ほれ (ん)
アケダナツダナナヤ。
供えたもんだよな。

- B カナモノー。⁽¹⁾ (A ンー) ワレタ"バリ ヤスンデ" ワガ"ンナエテ。
 金物 (いん) 自分達ばかり 休んで だめだって。
- カナモノモ カシェーダンダ"ゲ ヤスマシェランナネーテ
 金物 (も) 働いたんだ"から 休ませなければならぬって (お供え)
シタモンダ"モ。
 したもんだ"もの。
- A ン ネンジュー ホレ ツカウモノヅダナ (C ジェンブ"ナ)
 ん 年中 ほれ 使う物を だ"な 全部 な
- ホエジョドガ コガダナドガ ホレ カワムギドガ ホレ
 広丁 とか 小刀 とか ほれ 皮むきとか ほれ
 ナニドガテヤナ フラエパントガテ ホレ.....*
- なにとかってね フライパンとかって ほれ
- B ヤッパリ ツゴグ"モ ホレ カマノ フタモ ミナ アグナダ"ハゲ。
 やっぱり 地獄試も ほら 爺の ふたも みな 開くのだから。
- A ンーダ ジューログニツワナヤ。
 そう 十六日 はなあ。
- B ヤスマシェンナダ"テ ユナデ" (A ンー) ホユイ イミニ
 休ませるんだ"って いウので (いん) そういう 意味に
- トッタンダベ ムガスナア。
 取ったんだろう 昔はなあ。
- A ンーダ ンダ"ゲ ツネニ ツカウ ドーグチャダ"テ ホレ モツ
 そう だから 常に 使う 道具に だ"って ほら 餅(五)
 カヘランナネーテ ユー ワケデ" (B ンダ) ホレ ミナナヤ。
 食わせなければならぬって いう わけで (そう) ほら 全部 にね。
- C カギサモ ⁽²⁾ (A ン ンダ) モツ クツケデ"ネー (A ンー) ユッテ。
 鉤にも (そう そう) 餅(五) 結わえつけてね (いん) 結って。

- A ユッテナヤ カミサ ツツンデ。
結ってな 紙に 包んで。
- B ンダゲ アリヤ サンボングワナ クワナ モテ クランネベ。
だから あれ 三本鍬など 鍬など(は) 持って 来られないだろ。
ンダゲ コー スカゲデ オグ ドゴサ ミナ (A ホンダ"ミナ
だから こ⁽³⁾ウ 引掛けて おく ところに みな そうだ みな
モツ"コーナヤ) ヒスモツニ⁽⁴⁾シテ リヤ (C ンダ") ミナ ミゴデ
餅を こ⁽³⁾うね。 菱餅 (に) して あれ (そ⁽⁴⁾う) みな 薤しへで
ユッテ ナレ (A ホダ" ユッテナヤ) カミサ クルンデ" シテ
結って なあ (そ⁽⁴⁾う 結ってなあ) 紙に くるんで そして
(A ホシテ ミナ) カシェデ" オグナダケ。
(そして みな) 食わせて おくのだった。
- A ンダゲ アドノ ショーカツジヤ モツ" シート エッケツ"ンタ"ナ
だから あとの 正月といふものは 餅(が) うんと 必要だったんだな
ムガスナヤ。
昔は な。
- B ハヤグンナ イエガテナヤ。
早くの(正月) よりも ね。
- A シヨンドーグサ ミナ ホレー アグランナネモノ。
諸道具に すべて ほう 供えなければならぬもの。
- B ジェンブダモノ。
全部だ"もの。
- A ン エマナノ ホレ オラエノ ジュンイチダ"ナ一 ホレ
ん 今など⁽⁵⁾ ほう 僕家の 純一たちなど⁽⁵⁾ ほう
ヅドシャナノ アグデル アレ。(C ン) ン。
自動車など(に) 供えてる あれ。(ん) ん。

C ズドシャダ"テ ホレ カジエカ"シエデ オグ"ナタ"ハゲ
自動車だ"って ほら 働かせて おくんだ"から

A ンダ" ンダ"ハゲテ
そうだ" だ"から

B アドノ ショーガ"ツナテ ユタテハ モツナ ツカネツ"ハ。(笑)
あの 正月 なんて 言ったって 餅など" つかないな。
オラエデナ ツカネハ。
俺家でなど" つなないな。

A ンダ" ヤッパリ ンダ"ツ エマナノ アドノ ショーガ"ツナテ
そう やっぱり そうだ 今など" あの 正月 なんて
ツカネハ" ヤッパリ。(B ンダ") スンノ ショーガ"ツド キュー/
つかないなあ やっぱり(そ) 新暦の 正月と 旧暦の
ショーガ"ツ グラエナ モンデヨハ。(B ン) ンー。 ンダ"ケ"
正月 ぐらいの もんですよ。(ん) ん。 だ"から
キュー/ ショーガ"ツ キュー/ ガンツ"ツ ホレ ミナー ホノ
旧暦の 正月 旧暦の 元日(に) ほれ みな その
ズンドシャサデモ ナエデモ アゲダ"ツダ"ナ (B ン) オラエデナ
自動車にでも 何にでも 供えよな(そ) 僕家でなど"
ホレ。(C ンー) ミーサ ヤッパリ ホレ ナニモカニモ アツ"ベデ"
ほら(ん) 箕に やっぱり ほら 何もかも 集めて
(7) コヤサ オエデ ホシテ (笑) モツシテ.....
納屋に おいて そして 餅 そして(3)

B オラエデナ ホダ"ナ スネナハ。(A ンダガ) ズドシャサバリ
俺家でなど" そんなことはしないな。(そ) 自動車には"から
アゲデ"ハ。 *
供えてさ。

- A オラエノ ジュンイチナ ホダナ ゴド シテ バンチャ
俺家の 純一など そんな こと(を)して お婆さん(よ)
⁽⁸⁾ ヘッゲナサ アゲッゴダ" ナエベチャエ ナニモナテ。(笑)
そんなものに 供えることは ないだろうよ なにも なんて。
- B ナンニモ ナラネ ミタエナタケントナエ。
なんにも ならない みたいなんだけど ね。
- A ⁽⁹⁾ ウサ ネンージュ ホダナ ツカテ エンナダ" モノ ショーガツ"
お前 年中 そんな 使って いるんだ" もの 正月
グラエ モツ" カヘランナネベツ"テ ホシテ ホレ ミナー
ぐらいは 餅(を) 食わせなければならぬだろうよって そして ほら みな
キュー! ショーガツ" シタモハ。^(C)ンー。 ^(C)ンー。
旧暦の 正月に やったもの。^(C)ンー。 ^(C)ンー。

注

- (1) 人間どもばっかう の意
- (2) 自在かぎのこと。
- (3) 結わえるしぐさをして。
- (4) 切り餅にして
- (5) 話し手 A の孫
- (6) あらゆる農機具・日常具・台所用具を集めて 箕に入れて感謝の意を表わした。これは、五穀豊穣を祈る行事であったと同時に、釜・庖丁・まないた・自在鉤・鍋などを休ませることによって、家族全員の骨休めを徹底させる庶民の知恵であった。この行事は、正月も休めない嫁たちへの最高のおくりものであったろう。
- (7) 雪国であるため、農作業場兼物置が、自作農の家にはあった。
- (8) 卑めた言い方 「そんなくだらないものに」の意
- (9) 第二人称の卑めた言い方 ウサ・ンサ・ソナタなどは同じ。

16 田 楽 焼 き

話し手

- A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨ハ太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

B ホシテー コンド ヨルサ ナッド ホレ デンガグ⁽¹⁾ツアナエ。
そして こんどは 夜に なると ほら 田楽だよねえ。

A ンダ デンガグ シテ (B ン) ジューゴニツナヤ。
そう 田楽(を) して (ん) 十五日なあ。

B モツ^ミミソツケテ^(A ホタ) ミソサエ ツケレバ
餅(に) 味噌(を)つけて (そう) 味噌さえ つければ
デンガグダーテ。(笑)
田楽だって。

A ンダ ユベナ ホンダケツダナ ホレ ジューゴニツ/ バンデ。
そう 昨夜(が) そうだったよな それ 十五日の 晩で

B ユンベナヨー ハエツ デンガグモナニモ ナエデハ。
昨夜よ それが 田楽もなんにも なくなつたものね。

A ンダ ドゴーデモ ホレ トーフサ ホレ クルミミソナ
そう どこの家(の家)でも ほら 豆腐に ほら 胡桃味噌など
サンエショ ミソナ一 スッテナヤ ホシテ (C 咳) ホレ エロリサ
山椒味噌など 捻ってな そして (ほら) いろりに

- シー オエデ アンプテ ホレ クタモンダ エツ……
火(を) おいて あぶって ほら 食ったもんだ"
- B シエンシェダモ オベッダベ。ンダテー アノ (A ンー) コッコーテ
先生たちも 覚えてるだろ。 だって あの ん コッコーって
アラグナナエ。(A ンダー) オラダナ アエツ……
歩くのはねえ。(そう) 僕達など あいつ
- C ユベナダケッダナ アエツナヤ。(A ンダー) コッコー。
昨夜だったけな あれはね。(そう) コッコー。
- B ンー アラタゲヨー。フ ウヅワサ アリヤー (A ンダ)
ん 歩いたからよ。麺(を) 団扇に ありや (そう)
ネンギド フー (A ンダ) シツツゲデナレ (A 笑 C 笑) フーフ
葱と 麺(を) (そう) くつづけてな 夫婦
アエワスナテ (A ホダー 笑) トモニ スラガノ ハヤルマニデ
相和すなんて (そうだ) ともに 白髪の 生えるまで
ナテ。(A 笑 ンダー) (笑)
なんて。(そう)
- C トスユワエ / シト ンダ アラタッダナナエー。(B ンー A ンダー)
年祝いの 人たち(は) 歩いたもんだよね。(ん そう)
- B ホレア シエンリヨーバゴナ コシェデナエ (A ンダー) タラ
ほら 千両箱など 作ってね (そう) (福)儀(を)
コシェタリ。
作ったり
- C ドーッサリ マエゴンダナテナ。
どっさり 舞いこんだ なんてな。
- A ホンダ ンー ホシテ ヤッパリ ホレ ダンゴイエガ モツ
そだん ん そして やっぱり ほら 団子よりも 餅(か)

イエーナテ ミナ (C 笑) アラタ モノヅア ナヤホレ (B ンダ) 良いなんて みな () 歩いた ものだよなあ。 (そウ)

コッコ。 ハエツモ コノゴロ コネハ。

コッコ(は)。 それも このごろは 来なくなつたな。

C コネナ シトツツモ。⁽⁵⁾

来ないな さっは^アク

A シトーリモ アラガネ。
一人も 歩かない。

B ガッコデ アラグナテ ユタナンデモ ナエナタガヤ。
学校で 歩くなつて 言つたので ないのかね。

A ンダド ガッコデ ユタンダド (B ン一) アラグナテ。
そうだつて 学校で 言つたんだつて、ん 歩くなつて。

B アユナ ナグスッ ドゴ⁽⁷⁾ ナエベネヤ。(笑) (A 笑)
ああいうの(を) なくする こと(は) ないだろうにね。⁽⁶⁾

A ムガスノ (笑) ブンカザエ。(笑)
昔の 文化財。

B ブンカ^{××} ブンカザエミダエタ。(笑) (A 笑)
文化財 みたいだ。

A アダナ ホエドミダエデ モラテナ アラグナ ホダナ ゴド
あんな 乞食 みたいで もらつてなど 歩くのなど そんな こと(は)
スンナテ ガッコノ シエンシェ ユタンダッタドレナヤ。^(C ン一)
するなつて 学校の 先生(が) 言つたんだつたそうだ。⁽⁸⁾ (ん)
ホレガラ ナグ^ア ナタンダド。
それ以来 なく なつたんだそうだ。

B アエツァー タンダ^ア モラテ アラグナテ コンツ^ア ムガスノ
あれは ただ^ア もらつて 歩くなつて 昔の

(A ンー) モラエモスド⁽⁹⁾ ツガテ シトツノ ナエ (A ンダ" ンダ"ヤー)
ん 乞食 と 違って 一つの ね そう そうだ"ねえ

ギョーッミタ"エナ モンタ"デー。

行事 又 たいな もんた"よなあ。

A イミ アッテ アラグ"ナツ"ナホレナ。 (C ンダナ) ンデモ
意味(が) あって 歩くのだ"よな そうだ"ね それでも

オラエノ カツギザワノ アダリシャ アエツ アラガネツ
俺家の 勝木沢の あたりでは あれ 歩かないんだ。

(B ンー) オラ コッチャ キテ ハスメテ⁽¹¹⁾ アダナ (B ンダガ)⁽¹²⁾
ん 俺(は) こっちに 来て 初めて あんな そうか

コッコナテ ユナ ワガタンダ"チャ。 (C.B ンー) オラエンドゴ
コッコ なんて いうの(を) 知ったんだ"よ ん 俺の(実家の) 所(では)

アラガネモ。 (C ンー) ンー。 コッコナテ。
歩かないもの。 (C ンー) ん。 コッコ なんて。

C マツノ ウツ"デモナー。
町の うちでも なあ。

A ンー アラガネ。 (C ンー) ホダナ オラ キエダ ゴド
ん 歩かない。 (C ンー) そんな 俺(は) 聞いた こと(が)

ナエモ。 イエー エダ ドギ
ないもの。 実家に 居た ときは。

B オラエン ドゴ タ"ド アラッケナ。
俺家の ところ だと 歩いたっけな。

C アラタナエ。 (B ドンードド) ゾロゾロド。
歩いたねえ。 (B どんどんと) ぞろぞろと。

往

- (1) 旧暦の正月15日の晩に、豆腐の田楽焼きを食べる行事があった。そして、この晩は、「コッコー ダンゴイエガ モツイエー」といって、家庭を訪問する。子どもや年男たちは、それぞれ袋を持って餅や団子（まゆ玉にして終わった団子など）をもらい歩くならわしであった。かけ声からこの風習を「コッコ」と言った。コッコーという音からいうと、鳥おいやかせ鳥や火伏せの系統であろうか。生理的には、餅で腹いっぱいになった体への植物蛋白質の補給であり、運動不足を解消する行為として適切なものであった。
- (2) 研究員（矢作春樹）に向かって言っている。
- (3) お祝いの行事なので「めでたいもの」を手にして訪問する年男が多かった。千両箱とか 福俵、米俵とか
- (4) 「アギ！ ホーガラ（吉方から） シエンリヨーバゴ ドッサリ マエゴンダ」などと言しながら、千両箱を座敷に投げこんだりした。
- (5) 「ひとつも」が原義。少しも・ちっとも・さっぱりの意。
- (6) 田楽とかコッコとかの風習・行事
- (7) 原義は「所」であろうが、この地方では「事」との混乱が見える。
- (8) ホエドは内陸地方に分布。庄内地方はヤッコ。
- (9) 「貰い申す」が原義。河北町を中心に2,3町村に分布。
- (10) 地名。河北町の中の小字名。話し手Aの生まれた所。
- (11) 現在の居住地。娘家のあるところ。
- (12) ハジメテ → ハシメテ のように清音化する。ザフトン（座布団）カキソメ（書初め） ホドント（殆ど）などがある。

II. 群馬県利根郡利根村大字追貝

収録・文字化担当者 上野 勇

同 協力者 杉村 孝夫

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

群馬県利根郡利根村大字追貝

2. 収録地点の概観

①位置

東経139度45分、北緯36度53分、標高約670m。

②概観

西に片品川渓谷で知られる吹割の滝があり、南に赤城山が眺望出来、周囲にはチメートル以上の山がつらなる。山間高冷地帯である。

③交通

国鉄上越線沼田駅下車、国道11号線をバスで約40～50分、車で約30分。

④地勢

片品川・栗原川の合流地点で、川の浸蝕によって出来たと考えられる三段階の立陵をなす地帯であるが、その丁度二段階の位置である。

⑤行政区画の変動

昭和21年9月30日東村赤城根村二村の合併により現在の利根村が設置される。

⑥戸数・人口

(利根村) 昭和50年12月1日現在 世帯数1,771戸 人口6915人 {男3,411 女3,504}。

⑦主な産業

農林業が主体である。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

当方言は、方言区画上、この地を含む群馬県の大部分や埼玉県中部以西などとともに西関東方言にはいる。ただし西関東方言の特徴としてあげられる推量を表わす「ダンベー」(だろう)は、当方言では「ダ、ペー」となっており、これは千葉県、茨城県や福島県の浜通り南部や中通り南部の推量を表わす形式とも通ずる。ところが、これは②の音韻上の特色の項でとりあげるように、撥音に有声音が続くとき一齊に促音と無聲音になるという現象の一つであり、他の文法的特徴、例えば形容詞の活用などでは前記地域とは異なっていまさしく西関東方言的特徴を有している。

終助詞「ムシ」は昭和五十年度録音の会話にはあらわれていないが、少なくとも話し手達の若い頃まではよく用いられていた。「ムシ」およびその変化形である「ムサ」、「ム」の分布がみられるのは群馬県でも北部山間地域が主であり（南部山間地域及び埼玉県西部にもみられる）、西関東方言域の中でも分布の限られた終助詞である。

② 音韻上の特色

(1) 拍の種類

共通語の拍（例えば服部四郎博士の記述などにみられるもの）の他にツオ [tso]、ツア [tsa]、チエ [tʃe] の拍がある。また、三十歳代以下の場合にはデヤ [dʒe] の拍を持つ者もある。

例 ツオ ロソオク（六束）

ツア サツツア（さんざん）、オツツアレタ（叱られた）、マサ
イツアン（政一【郎】さん）

チエ チ、チエー（小さい）

デヤ トーダ、タテヤー（どうだったの？）

【補説】若い人の「デヤー」の形は、断定を表わす助動詞「ダ」と終助詞「ヤ」の融合したもの。他に、終助詞「カ」と「ヤ」の融合した「キャー」もある。老年層では意志を表わす助動詞「ベー」と終助詞

「ヤ」の融合した「ビヤー」がある。

(口) 拍の結合 (音節構造)

CV, CVE, CVN, CV_Q, CSV, CSVE, CSVN, CSVQ (ア行は /a, ɿ, ɿu, ɿe, ɿo/ で CV構造となる。ヤ行とワ行は /ja, ju, jo, wa/z/ CSV構造となる。Cは子音音素, Vは母音音素, Sは半母音音素, Eは長音音素, /./は撥音音素, Qは促音音素) の他に, N, CVEN, -VEQ, CSVNQ および CVNE といった構造の音節がある。

例 ハンデ (てれど) の第一音節, シマ (馬) の第一音節

CVEN シラーン カオ (知らん顔) の第二音節, イケバ 一
ーンニ (行けばいいのに) の第四音節, ヤリテーンデ
(セリたいので) ; 第三音節, ヒクッテ ユーン (引
くと言ラの) の第四音節

CVEQ ケーッテ キテ (帰ってきて) の第一音節, マーッテ
クレル (回ってくれる) の第一音節, モレーッコ
(黄い子) の第二音節, イーッショケンメ (一生懸命)
の第一音節

CSVNQ イヤンッテ ユー (慰安と言う) の第二音節

CVNE ドシーナニ (どんなに) の第一音節

【備註】この他 CVHQなどの構造もありそうである。ただし、以上にあげた音節構造は当方言でも体系の周辺的存在である。「ンデ」は「それで」の弱まり形である。長音音素は連母音の融合長音化したもののが後半部、または強調のために挿入されたものであり、撥音音素は助詞「ノ」の弱まり形である。最後から二番目の例は引用を表す「ッテ」の前に撥音音素で終わる語が来る場合にだけあらわれる。連母音の融合、長音音素の挿入、弱まり形の基底には非融合形、長音音素の挿入されない形式、明確な形式があり、より基底のレベルではこれららの音節構造も解消される。そこで、一方ではこれららの構造を避けるために長音音素の脱落現象などもみられる。

$C V E Q \Rightarrow C V Q$ ダセネッテッテ（出せないと言ふので）

$C V E N \Rightarrow C V N$ オメンチ（おまえの家），アレダネンカ（あれでは
ないのか）

(八) 連母音の融音には文かんである。「アイ」，「エ」；「アウ」；
「オイ」，「オエ」，「イエ」は「エー」；「オー」（ただし動詞のみ）；
「エー」のように融合長音化する。また，「アワ」，「オワ」のように
半母音〔W〕をはさんで母音が続く場合にも「アー」，「オー」のよう
に融合する。後者について例をあげる。

例 アワ：ア一 カーラ（河原），ネバザー（根羽沢【地名】），ア
一メシ（糞飯）

オワ：オ一 モノッコーシ（物壊し），ゲンノーナンザー（玄翁
・ア一 などは），コンダー（今度は）

【補説】「エ」，「ウエ」などには「ハイテ」（生えて），オシロイ
・チュイバ（おしゃりと言えば）のように「アイ」，「ウイ」になるこ
ともある。

(二) 母音，子音の共通語との対応で目立つものは次の通り。

イ：エ エバッテタ（威張っていた），メッカッテ（見つかって），
エレタ オシロイ（入れたおしゃり）

オ：ウ アスコ（あそこ），ゴマナンズー（胡麻などを），スシナノ
(そんなもの)

ヒ：シ シト（人），ハシゴッベ シッテ フレ（梯子足をひってく
れ），シトフュジュー（一冬中）

(ホ) ラ行音

ラ行音は，撥音化，ラ行子音だけまたはラ行音全体の脱落，弱まりな
ど変化が著しい。

ラ：ン ャンナクッチャ ナンネー（やうなくてはならない），フン
ネート（降らないと），ツクシネン（作らないの）

レ: ン クルカ シンネー (来るかしれない), クンネー (くれない)

【補説】 ラ行音の撥音化は主に動詞、助動詞、補助動詞の語尾でおこり、後に否定を表わす「ない」、禁止を表わす「な」、終助詞の「なあ」などがある場合である。

レ: イ ソイダカラ (それだから), ツイテガレタ (連れていかれた)

レ: オ (子音の叶脱落) ヒッパラエチマッテ (引っぱられてしまつて),
ダカー (だから), セツダケード (説だけれども)

レ: オ (レの拍脱落), ソデ (それで)

(八) 促音

廣東方言が促音を好むことは有名である。当方言においても促音化、
促音挿入は盛んにおこなわれる。^(例1) 促音の挿入は形態素のつなぎ目におこなわれるほかに、形式の第一拍めと第二拍めの間に^(例2) もおこなわれる。促音化は、撥音に有声子音 *o*, *z*, *b* などが後接している場合におこる。
^(例3) 撥音が促音化し、有声子音は無声子音 *七*, *c*, *p* となる。

例 1. ャマッキ (山着), ワケッチ (分け地), イキッツイテ (行きついで (行き着いて), マルクッテ (丸くて), オレッキ (俺だけ)

2. ヨッポド (よほど), ャッパリ (やはり), ブッツケテ (ぶつけて), オッソロシカッタ (恐ろしかった), イックラモ (いくらでも)

3. サッヅア (えんざん), コッター (今度は), タッホ (圓),
ビッポークジ (貧乏籠), ソノ タッピニ (その度に)
なお、「ダンベー」も「ダッペー」(だろう)となる。

4. その他 オッキー (大きい), ソッキ (その次), ダセネット
テッテ (出せないと言うので)

(ト) ^(例4) 撥音・長音音素の挿入も盛んである。長音音素は、強調表現の場合形式の第一拍めと第二拍めの間に挿入される。^(例5)

例 1. アンスリ シナカッタ (あまり為なかった), ミンナ (皆),

オラナンゾ（俺なご）

2. テーッケー（大きい），ホーントニ（本当に），テーンデ（で
んご），フターリ（二人），チャーント（ちゃんと）

ただし，次のように第二拍めと第三拍めの間の場合もある。

シラーン カオ（知らん顔），ドンーナニ（どんなに）

【補説】一方，長音の短呼化（長音音素の脱落）もみられる。これには常に短呼化され，固定しているものと，発話の速度や感情によって長音になったり短呼化されたりしてゆれているものがある。はじめの二例は固定しているもの。第三例はゆれているものである。

ハンタラ（半俵），イッショケンメ（-生懸命），ヒラガワ（平川）

【地名】は

(子) その他，母音の無声化や脱落も盛んにおこる。アクセントの山の
はじめの部分でも無声化がおこる。また，i, eのようなくらい母音のみならず，
e, え，oなどびの広い母音さえも，文末で文勢が弱まつた場合や速度の速い発話の場合，無声子音の後で無声化することがある。

k, t, pは気音を帯びてするどく聞こえる。

が行子音は語末ではおみむね摩擦音の「χ」である。

「キーチャンナ」（喜【市】ちゃんは），「サイキンナ」（最近は）
のように撥音で終わる語に助詞「は」が続くときは連声によつて「ナ」となる。

アクセントは東京式であるが，三拍名詞の第五類に属する語には東京
語の頭高型の中高型が対応するものがある。

③文法上の特色

(イ) 「ユッタッケ」（言ったっけ）のような形式の過去を想起する言
い方のほか「キカシタッタヨ」（聞かせたものだったよ），「アキネー
ガ デキタッタヨ」（商店ができたものだったよ）という形式もある。

(ロ) 活用

力変動詞は「ツイテ キラレタ」（連れてこられた），「モッテ キサ

シテ」(持ってこさせて)のように共通語の未然形に相当するところに連用形と同じ形があらわれる。

サ変動詞では「クラク シルッチュート」(暗くするというと), 「シルケド」(するけれども), 「シレバ」(すれば)のように終止, 連体, 仮定形が連用形と同じく語幹が「シ」で始まり, 一段化の傾向がみられる。

形容詞「ない」は「ネカッペー」(無からう), 「ツノデ ネータッテ」(角でなくとも)のように未然形, 連用形が終止形と同じ「ネ(ー)」の形になり無活用化の傾向がみられる。

助動詞「だ」の仮定形は「イットーダラ」(一斗なら)のように「ダラ」である。また, 次の例は連体形の「ダ」であるとみられよう。「ケンガ テキル トキダデ」(憲【ミ】が生まれるとき「よので」)

動詞「落ちる」や「歩く」などが「て」に続く形は「オッテ」, 「アルッテ」のように促音便となる。

使役の助動詞「セル」の過去形は, 「クワシタ」(食わせた), 「ムカシガタリ シテ キカシタ」(昔讀りをして聞かせた)のように「シタ」である。

(八) 語の接続

助動詞「ダ」やその連用形「デ」は助詞「ノ」を介さず直接動詞, 助動詞に接続する。

例 クレダカラ (来るのだから), イグダカラ (行くのだから), アクルヒ フッタデ (明くる日に降ったので)

共通語の「の」にあたるところにそれが用いられないことによって, 形容詞連体形と主格助詞「が」, 様態の助動詞「ヨーダ」の連体形と逆接を表わす助詞「ニ」, 動詞の連体形と目的を表わす助詞「ニ」, 名詞と名詞などが直接接続する。

例 デッケーガ アッタイネー (大きいのがあったよね)
クレーヨーナニ イグダカラ (暗いようなに行くのだから)
コメー ハカルニ (米を量るのに)

ジューニサン トキ (十二・三歳のとき) , オメー セワン ナル (おまえの世話をやる) , ソレ メーニ (モヤ-の前に)

(二) 助詞の脱落

当方言において脱落する助詞は「ガ」, 「オ」, 「ニ」の三者である。助詞が脱落するかわりに体言の末尾語が長呼される。

例 ガ: キューやサン ナクナッタ (久弦さんがなくなつた)

クリーム デタ (クリームが出た)

オ: ナニ トッタ (何をヒツタ)

アタマ オサエチャッタ (頭を押さえてしまった)

シンボ ツクッテル (田圃をつくっている)

オ: E コメー ハカルニ (米を量るのに)

ハダギー マッタ (肌着をやつた)

ヨク一 カイテ (歛きがいて)

ニ: ジ ビルマ オーエンニ イグ (ビルマに応援に行く)

シューセン ナッタ (終戦になつた)

トコ マッタッペ、どこにやつたろう)

ヘータイ デネーカラ (兵隊に出ないから)

ニ: E オラガ ウチー クル (木の家に来る)

ミー クル (見に来る)

ナシー イッテ (返しに行つて)

(ホ) 共通語の「に」に相当する当方言の助詞は「エ」である。

例 シタエ ダイフ ミセガ デキテ (下にだいぶ店ができる)

ニグラノ マンナカエ ロップ ハサンドイテ (荷物の真中に口
袋をはさんでおいて)

(八) 待遇表現。差違しておらず、男女でも年齢のあるもの同士でもほとんど同じ形式を用いる。ただし、「ネンカイ」(無いのかね), 「アッタイネー」(有ったよね)にみられるような「イ」, 「ネ」は

「ネンカ」，「アッタナー」というそれらのない形式とくらべるとより待遇品位が高い。また，外來者に対する丁寧度の高い共通語の形式を用いることによって待遇品位を高めると同時に疎遠さをも表明している。その他，老年層によつて「シャル系」の助動詞が「ツツンケラッサイ」（おつけなさい），「ウソー・イワッ・シャルナ」（嘘をおかいなさるな）のように用いられている。

4 その他

①地点選定の理由

純粹な群馬県の方言をよく残している地点であることと調査者の身近な者があり、方言収録の便が得られ、また協力体制が整えやすいことによる。

②協力者の氏名

C, 3 話し手に同じ。

B. 表記について

文字化け簡略音声表記的カタカナ書きによっておこなった。特に注意すべき、カタカナの表わす具体音声の範囲、その他の符号について説明する。

(イ) パ・タ・カ行の子音は概略形式の頭位では鋭い気音を帯びているが、中・尾位ではそれ程めだたない。[p~p, t~t, k~k]

(ロ) ザ行の子音は概略形式の頭位では破擦音の [dз], [dʒ], 中尾位では摩擦音の [z], [ʒ]。

(ハ) ガ行子音は概略形態素の頭位で破裂音 [g]、その他の位置では摩擦音の [ɣ] である。

(ニ) ラ行子音は概略形式の頭位では破裂を伴い [dɹ̪], その他の位置では弾き音 [ɾ̪] である。ただし、この音は無告作な発音では弱まりやすく、古が齒に達しないことが多い。

(ホ) イ段音は「アイ、アエ、オイ、オエ」など連母音の融合長音化したもののが前半部を占める場合は半広母音の [ɛ̄], 母音「オ」、「ウ」の後では半狭母音の [ē]、その他の位置では [ɛ̄] よりもやや狭い [ɛ̪̄] である。

(ヘ) 「一」は長音の後半部 [!] を表わし、「→」は半長音の後半部 [·] を表わす。

(ト) カタカナの下の「。」は母音が無声化または消滅していることを表わす。この記号は時に「タタセキ声」をも表わす。

(チ) カタカナの上の「一」はアクセントの山を表わし、その部分が記号のない部分よりも高・発話されることを示す。ただし、文節ごとの分

がち書きであるため、文節と文節の間の横線の切れあはれ高さの変化を示すものではない。例えば「ミマノ ショ ザイ ャッ タンサ」(宿の裏にやったのさ)では「ミマノ」と「ショ ザイ」は同じ高さであることを表わしている。また、文字化資料に付された符号は派生アクセント節(二つ以上の基本アクセント節からなるアクセント節。基本アクセント節はほぼ文節や語に相当する。)につけたものである。これは、日常の会話が文単位で発話され、文節ごとにくぎって発話されるわけではないという事実からの当然の帰結である。

(リ) 文末あるいは文節末の「↑」、「↓」は上昇調 下降調を表わす。平板調は特にアクセント記号と区別しなかったが、例えば「へー。」などヒラ字のは平板調である。「↑」はいったん特に高くなつてから後下降することを表わす。

C. 話者・録音環境など

1. 録音年月日

昭和50年8月15日

2. 録音場所

群馬県利根郡利根村大字追見 861番地。小林弥太郎氏宅。

3. 話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴など

小林弥太郎 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追見

生年 明治40年12月6日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

兵歴 なし

職業 農業、紳士

言語的特徴 方言をよく保有している。

小林与志ゑ (女)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追見

生年 明治48年7月19日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

職歴 農業

結婚 昭和1年旧東村大字千鳥から旧東村大字追見に嫁す。

言語的特徴 方言をよく保有している。話しかけられて聞いたことについても直接話法を使つて臨場感あふれるように話す。

星野 寛司 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追見

生年 大正9年1月27日

最終学歴 青年学校本科卒

兵歴 昭和15年12月25日出征 昭和21年6月15日帰還。

職歴 農業（自営）

言語的特徴 方言を比較的よく保有している。説明文では詳しい注釈が
つくために注記が多い。

小林 喜市

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 昭和15年11月10日

最終学歴 群馬県立利根農林高等学校卒

職歴 農業

主な役職（公職） 利根村議在職中

言語的特徴 年齢にみあつた方言保有度。共通語と方言の使いわけに習
熟している。

4. 録音環境

①同席者

上記話し手の他、調査者上野勇、お茶の接待に小林喜市氏の妻、録音
担当者杉村孝夫が同席。

②話の進行状況

あらかじめ用意しておいた話題（昔の生活、遊び、旅行、天候など）
を小林喜市氏が進行役を務め、話題の提供をおこなった。（しかし、かならずしも用意された話題ばかりではなく、関連して出てくる話題につい
ては自由な進行にまかせた。）

③場の雰囲気

小林源太郎氏と小林よ志恵氏は夫婦、小林喜市氏はその息子。星野富
司氏は近所の人である。星野氏に小林氏宅までご足労を頼んだ。

時計、風鈴、テレビなどはすべて止めた。窓も閉じ、外からの雑音を
遮蔽しようとしたが、鳥の声、自動車の音などが時々聞こえる。

夏の午後の一時、茶を飲みながらなごやかに話が進行した。

④録音機・テープ

ソニー オープンデンスケ、19 cm/秒

1 雨乞と天気祭

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K イマヌデニワ アレダネー オトトシガ ャッパリ コーアッタノ
今までには あれだね、 一昨年が やはり このようだ状態
アッタンカイ。
だったのかね。

T アー オトトシワネー トモロコシガ ヨレタ⁽²⁾ネー。
一昨年はね、 玉蜀黍が 枝れそうになったね。

K ヨレタイネー。(間) ズーット ムカシモ ソーインガ アッタン
枝れそうになったね。 ずっと 昔も そういうこヒガ あったの
ケア。
かい。

A ムカシダッテ アッタヨ。アマゴイ スルッテ テンキマツリ ス
昔 だって あつたよ。 雨乞を すると[言たり]、 天気祭を
ルナンテ ユッタカラ。
するなどヒ 言ったから。

O アマゴイ シタリ テンキマツリ シタリ オーサーギ ャッタヨ
雨乞を したり 天気 祭を したり 大騒ぎを したよ。

一。

A テンキマツリ+ズイブン ャッタヨ。

天気 祭を 隨分 やったよ。

T ムカシノガ シンコクダッタヨーダネ。

昔の方が 深刻 だった ようだね。

A シンコクダッタイナー。ハーコノクレー (ムカシワ) スレバ
深刻 だったよな。もし このくらいに (昔は) なれば
ハーゴントニ アマゴイ スペーナンテ オーサーギダイナー。
もう 本当に 雨乞を しようなどヒ 大騒ぎ だよな。

O ムカシワ ムギコムギ ウント (ソーアエバネー) ツクッタカラ
昔は 大麦 小麦を たくさん (そういえばね。) 作ったから
サ。 (ソーアエバ コナイダ イッテタヨ トモジーサンガ)⁽⁴⁾
さ。 (そういえば このあいだ 言っていたよ 友じいさんが)
ムギコムギが ハエル⁵ チュンデ テンキマツリ シナケリヤ ド
大麦 小麦が 生える といふので 天気 祭を しなければ
一ショモネッテ テンキノ ビリビリ シテルノニ ミノカサデ⁽⁶⁾
どうしようもないヒ 天気が ビリビリ しているのに 蓑笠で
アノ一 ヤルンサネー。
やるんさね。

T アノ一 イチバン ヤルンガ ヒラガノ オフドーサヌネ。 (A シ
一番 やるのが 平川(地名)の お不動様だね
ー。) (ソーサー。) オフドーサヌー ミズン ナケー イレルト
(そうさ。) お不動様を 水の 中へ 入れるヒ

アメガ フルッ チュー ワケデネー。

雨が 降るという わけでね。

A アメガ フルナシテ。

雨が 降るなどと。

K ヨク オバーガ アレダネンカ。オレンチニ アル オフドーサマ
よく おばあが あれではないのか。俺の家に ある お不動様に

ニ ミズ カケテタ。

水を 掛けていた。

O オラー ヨクヨクダラ ショーガネー⁽⁷⁾ガ アノ ハイリックチニ
私は よくよくなら 仕方がないが、 入口に
オフドーサマガ アルベー。アレー ソソノ ホーカラ ダンダン
お不動様が あるだら、 あれに 祐の 方から だんだん
カケテ シメニヤー⁽⁸⁾ アタマッカラ バシショント カケルン
【水を】掛け はいには 頭から バシンヒ 其けるの
サ。ソースト マー ハー サツツア アキテッカラダカラ フル
さ。そうする もう さんざん 飽きてからだから 降る
(間) 下キニ ナルダカモ ワカンネー⁽⁹⁾ケド フルヨ。
じきに なみへだかも わからないけれども 降るよ。

K ヒラガノ オフドーサマワ ナニ アノ ゴホンゾンオ ツケルン
平川の お不動様は なに ご本尊を 【水に】漬けるの
(^タキ-) (^タキツボ イレル ワケ。) アノ タキツボ イレ
(滝に) (滝壺に 入れる わけ。) 滝壺に 入れる
ル ワケノ。
わけ?

T シ。

うん。

O タキ一 ショイコム ワケネ。

滝へ 背負い込む わけね。

K ハー。

O ソースト アメガ ラッテ クルッチュ マー イーツタエガ ア

そうすると 雨が 降って くるという 言い伝えが

ルンサーネー。

あるのさね。

T ソレカラ コナイダネー オーハラニ カジガ アッタイネー。⁽⁹⁾

それから この 間ね 大原(地名)に 火事が あったよね。

(A シー↓) アノ カジガ アッタ カジノ アクルニ アメガ フ
(うん。) あの 火事が あった 火事の 明くる日 雨が 降

ルッタカラ アメ マッテタケド フラナカッタネー。

ると言ったから 雨を 待っていたけれど 降らなかつたね。

A フッタッペー。

降ったろし。

T フッタッケカ。アントキ アメ フッタッケ ⁽¹⁰⁾ チョット。

降ったっけか。あの時 雨 ちょっと 降ったっけ。

A フッタッペー。ソットキ ⁽¹¹⁾ アントキ (フッタッペ) カジガ ア

降ったろう。あの時 (降ったろう。) 火事が

タカラ フッタッキューテ。

あつたから 降ったというので。

K チーット フル……。

少し 陰る

T アントキ カジノ アトダッタカネー。

あの時 火事の 後 たつたかね。

D アト アト。

後 後。

A アト アト。

後 後

T アトカイ。

後 かね。

A バーサマト ユッタダモノチ。^(D) アー ャッパリ フラーッテ ュ
ばあさまヒ 言ったのだものな。(ああ やっぱり 降るなヒ
ッタン) ャッパリ アメガ フラー・チュッテ カジノ アトニ ア
言ったの。) やっぱり 雨が 降るなヒ言ヌ。災事の 後に 雨
メガ フンネット マタ カジガ アルゾイ チュッタラ フッタナ
が 降らなヒ また 火事が あるぞヒ言タシ 降ったな
ーナンテ。フッタン。^(D) ダカラ アト マエノ ヒニモ アレ
などヒ。 降ったハだよ。(だから あの 前の 日にも) あれが
ガ フッタ キリデ イッコ フラネンダ。

降った キリデ 【その後】 まったく 降るまいのだ。

K アノ マエノヒ ⁽¹²⁾ カジガ アルト イツモ ⁽¹³⁾ アメガ フ
あの 前の ヒ , カジガ アルト イツモ ⁽¹³⁾ アメガ フ
ルッチュノワ オラ ハジメテ ⁽¹⁴⁾ キータヨ。

降るといひのは 僕は 初めて 聞いたヌ。

T ムカシカラ ユッテルダ。 (A ムカシカラ ユッタダ) ^(D) カジガ ⁽¹⁾
昔 カシ 言っていいるのだ。 ⁽¹⁾ (昔から 言ったのだ。) ⁽¹⁾ (災事が)

カジガ アルト アメガ フル。

⁽¹²⁾ 灾事が あるヒ 雨が 降る。

O カジガ フッテサ一 アノ一 カジガ アッテ ミッカイナイニ
⁽¹²⁾ 灾事が 灾事が あって 三日 以内に

アメガ フンネット (T マタ アル。) (マタ アル。) マタ - タト
雨が 降らないヒ (また ある。) (また ある。) また 後を
一ヒクッテ ユーン。(A ソイコト- イッタ。) ソジタラ ア
引くヒ 言うの。 (そういうことを 言った。) こうした
クルヒ フッタデ (A フッタン。) コリヤー ヨカッタッテ ジーサ
明くる日 降ったから (降ったの。) これは 良かったと
マバーサマデ ハナジタンサ。
ばあさま ご 話したのさ。

K アクルヒ フッタカナー。

明くる日 降ったかな。

T アー ソカ チョット フッタダネ。

ああ どうか ちょ、と 降ったのだが、

A チョット フッタ (T シー シー。) ナカラ フッタんだヨ。
ちょ、と 降った (うん うん。) かなり 降ったんだよ。

T ナカラ フッタダ。(A コレダカラ) ニジスギダイネ。

かなり 降ったんだ。 (これだから) 二時過ぎだよね。

A ンー。

そうだ。

T チョット フッテ マタ ソン ツギ。

ちょ、と 降って また その 次。

A チョット フッテ 又レックツ クレルナンチュデ オランチガ
濡れ 糸を【蚕に】 やるなどし言うのじ 1俺の家が
オヨメゴト。⁽¹⁵⁾

大泣言。

K ソーソソソソソ。⁽¹⁶⁾

そう そう そう そう そう そう。

- O オーヨメゴトサー。^(A) キー⁽¹⁷⁾ガ アクルヒー (間) ダカ⁽¹⁸⁾
 大泣言^キ。喜^ガが 明くる日^ヒ、 だがら
 ムイカニ フッタンサー。ナノカニ キヤソゾガ^{アスコイ} (K
 六日に 降ったのさ^{シタ}。七日に 喜達^{キダ}が あモニハ、
 ン^{シタ}。アレタ^カカイスイヨクニ イグンテ^(K) アソ^{ソダ} ソダ^ソ
 あれば^{アリ}、 海水浴^{カイスヨク}に 行くので^{アリ} (ああ そうだ とうだ うだ
 ダ ソダ ソダ) ソイデ⁽¹⁹⁾ ムイカニ アノ オジ^ガ ハヤク イ
 うだ うだ) それで 六日に おじい^ガ 早く
 ゲバ イーンニ オソ^クッテ マー フリタッテカラ イッタカラ
 行けば^{アリ} 良いのに 遅くな^ルて まあ 降り始めてから 行ったから
 ビショヌレノ クワオ ウーント トッテ⁽²⁰⁾ キタデ^{マーズ} ア
 ピは 濡れの 着^クを たくさん 取^フって きたので^{アリ} ます^{シタ} ああ
 コンラ コマッタナー。ソイデ⁽²¹⁾ キヤソゾガ^{カイスイヨク}
 これは 困ったな^{シタ}。 それで 喜達^{キダ}が 海水浴^{カイスヨク}
 イッテル ツチニ オジ^ニ
 行っている シチニ おじい^に
 K モットモ ソレマデワ フッテ⁽²²⁾ ナカッタンダイ。
 もッヒも それまでは 降^ルて いなかつたんだね。
 T カッパビア⁽²³⁾ イッタ⁽²⁴⁾ンダイ。
 カッパビア^{アリ} 行^ルたのだね。
 O ソー。カッパビアジャネン。^(A) ニガタエ^(T) ア
 そう。 カッパビア^{アリ}はないの。 (新潟へ) 新潟へ (ああうか
 ニガタエ) シ^タ イッタ⁽²⁵⁾ン。ソノ マエノ ヒニ フッタ⁽²⁶⁾ン。ダカ
 新潟へ^(アリ) うん 行^ルたの。 その 前の 日に 降^ルたの。 だから
 ムイカニ フッタ⁽²⁷⁾ンダ⁽²⁸⁾。
 六日に 降^ルたのだ。

K シー。

なるほど

O ソテ (ジュ - ャッハリ フリヤ - フッタンタネ。) ソテ ナ
それで (では やはり 降ることは 降ったのだが。) それで
ノカノ ゴゼンチュー シュージゴロマテ フッタンサー。
七日の 午前中 + 晴頃まで 降ったのさ。

T ア - ソーカ。ソダ ソダ。

ああ そうか。 そうだ そうだ。

S ソーダッペ⁽²³⁾。

もうだらう。

T シー。ソ - ソ - ソ - 。

ん。 そう そう。

K シー。(聞)コムギガ ウント ツクッタ トキニヤ - アレダ⁽²⁴⁾。テン
なるほど。 小麦が たくさん 作った 時には あれだらう。 天氣
ギマツッテナ アメガ ウント フリスギテ ギャクニ テンキマ
祭といらのま 雨が 多く 降り過ぎて 遂に 天氣 祭
ツリダッタッペ。

だらうだらう。

O ソリマー テンキマツリ。テンキマツリト - テンキマツリト ア
それは 天氣 祭。 天氣 祭 と
ヌ アマゴイト リヨ - ホ - アルカラナ - 。
雨乞ヒ 両方 あるから なみ。

A リヨ - ホ - アルカラ ソリヤ - ~~~~。

両方 あるから それは

K テンキマツリワ - アレダッペ ジンジャデ⁽²⁶⁾。
天氣 祭は あれだらう、 神社で。

- O ジンジヤ イッテ ジンジヤ / キー アレシテ (Kシ-) ドンド
神社へ 行々て 神社の 木を あれし (うん.) ピンピン
ン モシテサ一。
燃やしてさ。
- K タイコナン ⁽²⁰⁾ ハタイタジヤ ネン。ヤッタジヤ ネン。
太鼓なんかを たたいたのではない。 やったのではない。
- O オラガチデ クチヨーノ ^ト トシガ ソノ テンキマツリダッタッペ。
私の家で 区長の 年が 天気祭だ、たろ。
- K ハー ダカラ ナンネンマエン ナルンダ。
もう だから 何年前に なるのだ。
- T シートネー。
ええとねえ。
- A ニジューハチネン。
ニナハ年だえ。
- K ショーワ ニジューハチネンカ。
昭和ニナハ年か。
- O ニジューハチネンニ ^クチュー シタン。
ニナハ年に 区長 受 したの。
- K ソレカラワ ゼンゼン ネン。
それからには 全然【天気祭は】無いのか。
- A ソレッカラ イッコー ャンネー。
それから 全然 やらない。
- K ソンナコトワ シナカッタイナー。
そんなことは しなかったよな。
- O ソレカラ テンキマツリッテ シネン。
それから 天気祭というのは しない。

T テンキマツリ シナカッタネー。

天氣 祭は しなかったね。

O アントキ サケダケ サキ一 マットイテ イガネーッチュンテ
あのビキ 酒だけ 先に やっておいで【区長が】 行かないといふので
マードコンダ ?キヨーガ イッタ トキヤー ハー モミズ
まあ 今度は 区長が 行った 時は もう
ブロクニ ヨッパラッテ ミンナガ。⁽²⁸⁾ ナタデ クキヨー キットバ
へべぬけに 酔っ払って 喰か。 金で 区長を ⁽²⁹⁾ セカリたおせ
セ オソク キヤガッタカラナンテ オツタルル サーキタッタ。
遅く 来やがったから などと しかられる 驚きだった。
(↑ヘニ。) アノ カミノ サトーゲンガ ⁽³⁰⁾ (↑シ一。) ダーラ オレガ
上の 佐藤 源が だから 私が
オコッテ シモノ イチニ コトワリー イッタコトガ アル。
怒って 下の 一に こひわりを 言ったこひが ある。
イックラ ヨッパラッタッテ クキヨー ナタデ キットバスッテ
いくら 酔っ払っても 区長を 金で 切りたおすといふ
ユイ イーグサガ アルカッテ。イチガ アヤマリ キタダッテ
言い草が あるかと。 一が 謝りに 来たってよ。
ヨ。

K ダケド ドッヂカッチュエバ イマヌデ アレカネー テンキマツ
だけ飛びも どちらかといえど 今まで あれがね、 天氣 祭で
リ オフドーサマ ツケタナンテノワ アンマリ キカネーマナー。
お不動様を【壇に】漬けたなびといふのは あまり 聞かないやだ。

A ハ ユノゴロワ (↑ドーダロー。) サイキンナ ⁽³²⁾ ヤンナク ナッ
もう この娘は (どうだろ。) 最近は やらなく

タイナー。

なったよな。

O サイキシワ マンネー ジャネー カ。

最近は やらないのでははないか。

T キーチャンナ ⁽³³⁾ ソー オボエワ ネーカナー。オレワ ナンカイカ
喜ちゃんは それほど 覚えは 無いかな。俺は 何回か
キー タヨー。ヒラガーテ オフドーサマー タキツボ イレタカ
聞いたよ。平川で お不動様を 滝壺へ 入れたから
ラ フルダローッテ。

【雨が】 降るだろうと。

K ハ一ハ一。

そらがぬ。

O オレカ 4ドリニ イル ジブンワ ヨク マッタンサナー。ダ
私が 千鳥(地名)に いる 時分は よく やったのかな。
ケド コッチー キテッカラ ハナレテルカラ ヤルカ マンネー
だけれども こちら【直見】に 来てから 離れているから 【千鳥では】やるが やらないが
カ ムラガ チガッテルカラ ワカシネー ケド。
村が 違っているから わからないけれど。

A ムカシモノワ ホラ シンコーベー タヨリニ シテタカラ スグ
昔者は 信仰ばかり 頼りに してたから すぐ
モ一ハ一 テンキマツリ スベア アマゴイ スビヤーナンテ
もう 天気祭を しよう 雨乞を しよう などヒ
マッタンダイナー。? 千ヨ一サヌエ モーシコンデ アマゴイ ス
やったのだよな。 区長様へ 申し込んで 雨乞を する,
ル テンキマツリ スルッテ ソノ タッピニ マッタンダヨ。
天気祭を するヒ その 度に やったのだよ。

O イッ ジー ソノ カンケーノ ネー シトガサ コレー ジブシノ
まったく 関係の 無い 人がさ これを、 自分の
クチー (苦笑) マリテーンデー (トアードーカー) ソレー ア
ロ【飲酒】を やりたいので (ああ そうか) それを
レサー (トイー キッカケモ アルカラフ) シーイー キッカケ
あれど (いい きっかけも あるから な。) うん いい きっかけで
デ ソレー シレバ コレガ ャレルレカラ。⁹⁵⁾ サトーゲンナンザ ソ
これを すれば これが やれるから。 佐藤 滋 なびは
レデ モー ズブロクニ ヨッパラッテ。
それで もう へべれけに 酔っ払って。

K モットモ ムカシワ ソユ トキテモ ナキヤー ナカナカ イ
もッヒモ 昔は そういう 時でも なければ なかなか
マミテニ バンシャクダトカ ソユノモ スクナカッタ ^{重1}ダッペ
今のように 晩 酔だらけ そういうヒモ 少なかつた。
カラネー。
からぬ。

T ~~ナカッタ~~
^{重1}無かった,
^{重2}少なかった。

O ソイデ ナター フリアルッター アブナカッタンデ ソイデ ソ
重2 それで 錆を 振りあるいはたりして 色ながったので それで
ノ トシガ ホラー イマワ シューカイジョデ ショーボー ナ
その 年が ほら今は 集会所で 消防の
ニ シルケド ?チュー^テ マッタッペ。ダカラ ソントキ オレ
何を するけれど【その当時は】 区長で やったろう。 だから その時 私が
ガ アノ一 サケノ ヤドワ ⁽³⁶⁾スルケド テンキマツリ トキ ミ
酒の 宿は するけれども 天気の 時の

タヨー → ナター フリアルッター ソレ ユー コトワ ゴメン
ように 鉈を 振りあるいはる そのような こには 御免
ダカラッ チューテ ブンダンチョニ オコトワリ シタダッタイ。
だから ひいでので 分団長に お断りを したのだったよ。

ソシタラ コンド キオツケマス ⁽³⁸⁾ ナンテ ユーンダッチュワ。
そしたら 今度は 気を付けます などと 言うのだ" そうだよ。

K ダー → ヒトツーウ ソユー アレダネ アツイ ジキノ ヤッハ
だから ひとつは そういう あれだね 着い 時期の やはり
リ ナンカネ セーカツ シテグ ナカデノ コラ ナンチュンダ。
何かね 生活 しまいく 中での これは 何というのだ。
タノシミミテナンモ ?クマレテ (ンー ナッタンダネー。) ナ
樂しみのようこそ なまめて (うん、 なったのだね。)
ッタンダネー。ヤッパリネー。
なったのだね。 やはりね。

O ハヤク イエバ ナンニモ ゴラクガ ネカラ。(ソーダネ
早く 言えば 何も 娱楽が 無いから。(そうだね。)
一。) ゴラクッチュンダカ イヤシッテ ⁽³⁹⁾ ユンダカネー。ソンナヨー
娱乐 というのだが 慇守ヒ いらのだがね。 そのような。
ナ。

T デモ ムカシワネー。ムカシワータッテ マー センパイガ イル
でも、 昔はね。 昔はヒ言つても まあ 先輩が
ンダカラサー (A.O. 笑) オレガ ムカシツテ ユターネー ケドサ
いるのだからさ 僕が 昔ヒ いう こには 無いけれどもさ。
一。オレヨリ ムカシガ ツエンダカラ。ソレデモ コーユ ⁽⁴⁰⁾ キセ
俺より 昔ガ 強いのだから。 それでも こういう

ツキセツニ⁽⁴²⁾ネー アノ一 ハルゴガ スンデ コムギカリ⁽⁴³⁾スム
季節 季節に ね 春蚕 が すんご 小麦刈り が すむヒ
トヒトキマリ ツイテ チョット イキ ツク マガ⁽⁴⁴⁾アッタイ
ひときまり ついて ちょっと 息を つく 間が あつたよね。
ネー。(ソーソー ソー ソー。) イマジヤ ノベツマクナシ
(そ う そ う そ う そ う。) 今では ノベツ まくなしに
ユキノ フルマデネー(皆笑)。

雪の 降るまで ね。

O イマツサー イロイロ ツクルカラサー。(ソーダ⁽⁴⁵⁾ネー。) ムカシ
今は さ、 いろいろ 作るから さ。(そだぬ。) 昔は
ニ シューコ カウ シトモ⁽⁴⁶⁾タント ナカッタン。クワガ イタ
秋蚕 を 飼う 人も たくさんは いなかつた。桑が 滴む
ムッシュンデ。ハルゴ⁽⁴⁷⁾カッタダケダッペ。(ソー。) ソイデ エ
といふので。春蚕 を 飼っただけだらう。(うん。) それで
ダマメ⁽⁴⁸⁾チユナ イッサイ ツクンネージ⁽⁴⁹⁾トモロコシモ アレ
枝豆 ひらのは 一切 作らないし, 玉蜀黍も
ダッペ ジブンデ⁽⁵⁰⁾タダケシカ⁽⁵¹⁾ツクンネン。(ンマノ⁽⁵²⁾エサ
あれだらう, 自分で 食うだけしか 作らない。(馬の 飼ヒ)
ト) エダマメジヤー ネンダモノ⁽⁵³⁾ネー。(エダマメジヤー ネーヤ
枝豆では ないのだものね。(枝豆では ないよね。)
ネー。)(エダマメワ⁽⁵⁴⁾ネーダ。) ソダカラ ヨーガ⁽⁵⁵⁾ナカッタンサ。
(枝豆は ないのだ。) そだから 用が 無かったのさ。

A ダカラ ムギコムギガ⁽⁵⁶⁾カタズイテ マメー キッカケガ⁽⁵⁷⁾オイレ
だから 大麦 小麦 が かたづいて 大豆 の 砂寄せが 終われば
バ ソイデ ヒトッキリ⁽⁵⁸⁾ヒマダッタモノ。
それで 一時期 暫だったもの。

T ヒトツカリヒマダッタイネー。

一時期 暫だったよな。

A シー。ソイデ⁽⁴⁸⁾ クサトリモノーテ⁽⁴⁹⁾ マメン ナカエ クサトリー。

うん。それで 草取仕事 で 豆の中へ 草取り。

O イマー ハー ソレガ⁽⁵⁰⁾ ツージャ⁽⁵¹⁾ ネンダイ⁽⁵²⁾。イロイロ ハルゴ
今は もう それが そうでは ないのね。いろいろ、春蚕を
カッテ シューコー カッテ⁽⁵³⁾ バンシュー⁽⁵⁴⁾ カッテ ソノ⁽⁵⁵⁾ アイサ
飼って 秋蚕を 飼って 晩秋を 飼って その 間に

ニ エダマメダー⁽⁵⁶⁾ トマトダノネー。⁽⁷⁾ トモロコシカラネー。)

枝豆や トマトやね。(玉蜀黍からね。)

トモロコシダカラ⁽⁴⁸⁾ テーンテ⁽⁵⁷⁾。

玉蜀黍だから ひとつも。

A ダカラ ソノ⁽⁵⁸⁾ カン イッショケンメーニ⁽⁵⁹⁾ クサカリベー セッセ
だから その 間 一生懸命に 草刈りばかり せっせ
セッセト ャッテタンサ。

せっせと やっていたのさ。

O ノベツマクナシ。

ノベツまくなし。

T ソーダイナー。

そうだよな。

注

1. 「コーアッタ / アッタンカイ」 「雨が長く降らない状態だったのがね」の意。「コーダッタ / ダッタンカイ」とも聞こえる。無造作な発音。
2. 「ヨレタ」乾燥した。枯れる寸前になつた。
3. 「アッタンケヤ」 [attankeya] 終助詞「カ」 + 「ヤ」の融合形。
4. 「トモジーサン」友吉（人名） + じいさん。
5. 「ムギコムギガ ハエル」刈り取った大麦・小麦が乾燥できぬいヒ芽が出くしまう。
6. 「テンキノ ピリビリ シテルノニ ミノカサデ」天気が良くて日がカンカン照っているのに、雨が降るようになると願って蓑笠姿で雨乞をする。なお、この發話は途中でぬじれており、「ド・ショモネット」までは天気祭に関して、その後は雨乞に関して述べられている。
7. 「オラー …… ショーガネーが アノ …… アルベー」 OはKと別の内容の發話をKと重複しておこない始めたが、それを「ショーガネーが」までで言いきし、Kの發話に応じた内容に切り替えた。
8. 「バシャーント」擬態語で表情音（母音[a]を無声化させている）。
9. 「ソレカラ」早口で曖昧。
10. 「アメ フッタッケ」早口で曖昧。
11. 「スットキ」曖昧で意味不明。
12. 「マエ / ヒ」早口で不明瞭。
13. 「フ」 [fu] 言ひなおしのために通常あらわれない子音の後の休止がみられる。
14. 「キー タヨ」 [ki:təjō] 無造作な発音。
15. 「オーヨメゴト」大世迷言。ただし、大いに困ったの意。「ヨメゴト」は泣き言、千葉県香取郡と『分類方言辞典』にのっている。
16. 「ソーソーソソソ」徐々に低く、弱く発音されている。
17. 「キーが」 「キー」は人名、喜市の略。
18. 「ダカ」 [daka'] ダカラの弱まり形。
19. 「フリタッテカラ」 [r̩] の音は弱く、「ワイタッテカラ」のよう

にも聞こえる。

20. 「コンラ」、「コラー」の言い誤り。
21. 「カッパピア」遊び場のあるプールの名前。
22. 「ダカ一」ダカラの弱まり形。
23. 「ソーダッペー」急押し。
24. 「アレダッペ」〔aredap〕
25. 「テンキマツッテナ」無造作な発音。「テンキマツリッテノワ」はより丁寧な形式である。
26. 「テンキマツリワー」雨乞の方ではなく、天気祭の方はヒ強調した発話のために「リュにふたつめのアクセントの山ができている。
27. 「タイコナン」無造作な発音。「タイコナンカ」はより丁寧な形式。
28. 「ズブロクニ ヨッパラッテ ミンナガ」、「皆がへべれけに酔っ狂つての倒置法。
29. 「オッツアレル」〔o tssayeru〕とも聞こえる。〔r〕の発音のため舌の持ち上がりは少なく、舌背が軟口蓋に近づいて摩擦を起こしている。
30. 「サトーゲンガ」「サトーゲン」は人名、佐藤源次の略。
31. 「イチニ」「イチ」は人名、高橋一郎の略。高橋氏は佐藤源次氏の兄。
32. 「サイキンナ」「最近は」の連声形。
33. 「キーちゃんナ」「キーちゃんは」の連声形。
34. 「オボエワ ネーカナー」「記憶しないかな」の意。
35. 「コレガ ヤレルカラ」杯を持つしぐさをしながら。「酒が飲めるから」の意。
36. 「サケノ ヤド」人が集まって酒を飲むときに提供する会場。
37. 「ソレ ユー コト」「ソレワ」と言いかけて「ソーユー」と言いなおそうとして「ソー」の部分を先に言いかけた「ソレ」で代用した。
38. 「ソシタラ コンド キオツケマズ」。。。の部分はささやき声。
39. 「イヤンッテ」「へヒ言う」の意の「ッテ」は撥音の後にもあり得る。撥音の後に足音が続く音節構造が存する。例外的。

40. 「オレガ ムカシッテ コタ一 ネークドサー」この部分は A. D の笑いと重なっている。
41. 「ムカシガ ツエンダカラ」「昔のことによく知っているから」の意。「酒が強い」と同じ構造の表現。
42. 「ハルゴ」五月上旬掃立の蚕。
43. 「シュー コ」七月下旬掃立の蚕。
44. 「ンマノ」 [mmano] 機音が形式の頭位に立っている。
45. 「サ」 [sa] 文末の弱まり形。
46. 「キッ カケ」中耕。砂をすくって豆の木に寄せする作業。
47. 「バンシュー」「晚秋蚕」のこと。八月下旬掃立の蚕。
48. 「トーモロコシダカラ」「玉蜀黍も作るのだから」の意。

養蚕に関しては『群馬県の養蚕習俗』群馬県教育委員会事務局、昭和47年3月を参照。

2 壮健芝居

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

A ダカラ ソノ ジブン ヒマダカラ シバイヤ スビヤー シバイ
だから その 時分 暇だから 芝居屋 しよう , 芝居屋
ヤ カッテ フビヤー ナンテ (ソーダネー) ワケーシワ ワケ
買って こよう なびと (うだぬえ。) 若衆は
ーシテ ソーケンシバイヤ ブツベージャ ネーカナンテ ソイデ
若衆で 壮健芝居屋 しようではむいかなびヒ そして
ヤッタンダヨ。
やったのだよ。

K ソーケシバヤッテナ

「ソーケシバヤ」というのは【何】?

A ソーケン。

壮健。

K ソーケンチュナ。

「ソーケン」ヒハラの【何】?

A ソー ケンチュナ ニ ジューゴカラ ウー⁽⁴⁾ サソシジュー マテ
社 健といふのは 二十五から ええヒ 三四十九までの
ノ ワケーテガ。キュー ネンノ ソー。
若い 運中が。中年 の 社。

K アー シカ シカ。

ああ そうか そうか。

A ソー シノ ソー。ケンタ。タテルダ。⁽²⁾ (ンー。) ソー ケン。ハ一
社士の 社。 「ケン」だ。 建てるだ。 (なるほど。) 社健。

ドーシテ イセーガ ヨカッタンダ。オラガ ジーサマナンゾガ
どうして 感勢が よがつたのだ。 俺の じい者などが
イセ⁽³⁾ イセーノ イー トキワ ドーシテ ソー ケンシバヤ スビヤ
威勢の いい 時は ビラシテ 社健芝居屋 しよう
ーナンテ。ソイデ ミンナ カク ムラムラテ⁽⁴⁾ ハナー サケー
など。 それで 執 各 村々で 花に 酒を
イッ トーダナンテ オラー ホエモ イットー アゲ⁽⁵⁾ アゲロ ナン
一斗 がなどと 俺の方へも 一斗 あげるなど
テ ドーシテ エラ⁽⁵⁾ イ サギダッタ。
どうして えらい 驚きだった。

K アー ソレー アゲテ ソレ オワッテ⁽⁶⁾ ウチアゲテ。
あ それ あげく、 それを 終って 打ち上げで?

A ソーサー。

そうさ。

O ソイデ ミンナ カク ムラ⁽⁷⁾ アノー ウチテ ミンナ セキハ
それで 執 各 村々、 あの 家々 執 赤飯包
ン タイテ サー キタ シトニ ミンナー オキヤクニ セッタイ
炊いてさ、 来た 人に 執 お客に 接待

シテ ヒラガーカラ キタトキ カミ コゴロ (T
して 平川【地名】から 来たとき 上の 鴻五郎
コッキー キテカラダイ。) コゴローノ アスコニ (A コジロー
(こちら【道東】に来てからだぬ。) 鴻五郎の あそこに (鴻次郎の
ノトコロデ⁽⁷⁾) シコジローノ アスコニ アッタ トキテ
所で) うん、 鴻次郎の あそこには あった ヒキズ*

*

~~

A アレガ サイゴダッタカシンネーナ。オラガホ-ジャ ソケン
あれが 最後だったかしれないな。 俺の方では 壮健
シバイヤチュノ。テヌグイマデ ソメヌイテ テヌグイマデ ソー
芝居居というの【をやったのは】。 手拭まで 染め抜いて、 手拭まで 壮健
ケン オッカイソケンチュ イデタチオ シテ (0ハナ)-シタ
道具 壮健という 出立立ちをして (花を した
シトニ ユー クバッ⁽⁸⁾) ハナ-シタ シトニ ハナゲ-シ (0
人に こう 酉己) 花を した 人に 花返し。
ハナゲ-シ)。
(花返し。)

K イツゴロダヨ ソレワ。
何時頃だよ それは。

T ハー。
なるほど

A シー。
何だって?

K イツゴロ。
何時頃?

- O サー オレガ (A イツゴロダッペナ.) マダ オレガ トーカ ジュ
 さあ、 私が (何時頃だろうな。) まだ 私が 十歳^{じゆ}か
 一二サン トキジヤネーカナー。
 ナニ・三の ときではないかな。
- A オラナンドガ コドモノ ジブンダカラ ズイブン
 俺などが 子供の 時分だから ずいぶん
- O ジュニサングレー ダカシシネー。
 ナニ・三歳位^{じゆ}だから しれない。
- T ダモノ マダ オボエワ ネーヤネー。⁽⁶⁾
 それだもの まだ 覚えは 無いやね。
- A オボエワ ネー。
 覚えは 無い。
- O ウマレネモノ オメー ジュサン チッキエンダモノ。⁽¹¹⁾
 生まれないもの、 おまえ、 十三歳^{じゆ} 小さいのなもの。
- T オボエワ ネーヤネー。
 覚えは 無いやね。
- K ソケンシバイヤナンチューナー コレニモ ノッテネーヤナー。
 壮健 茅居屋などというのは これにも 戴っていいやな。
- S ソンシニモ。
 村誌にも。
- O スンナノ ネカッペー。ソレッカラ オレガ ジューシゴン チッ
 そのようなものは 無いだろう。 それから 私が 十四五歳^{じゆ}に
 テッカラ (Aハ⁽¹²⁾ドーシテ) チドリデサ一。アノ一 タメッコワモ
 な。これから (どうして【どうして】) チ鳥ぞき。 タメッハ、闇物^{アザメ}の
 / ウラテ アノ イヌノ ミサガ オヤジノ ゼーアニ一ガ シ
 裏で 今のは 美左の 親父の 善あいのが

ンセ"カギシバイ⁽¹⁶⁾ダイ。(間) ャッタッタイ。

身代限莫属だよ。やったこヒがある。

K ソラー ナニ イツゴロ ヤルン。

それは 何時頃 やるの?

A イマゴロー ヤルノサ。ハ- マメカリ アレガ オエテ⁽¹⁷⁾ シュ-
今頃 やるのう。もう 豆刈, あれが、終って 稲穂が
コガ オエテ (ア- マメノ サ⁽¹⁸⁾キリガ⁽¹⁹⁾ オワッテ.) マメワ
終って (ああ, 豆の きくきりが 稲穂っ.) 豆は
サ⁽²⁰⁾キリワ オワッテ (トトイキマ ツクトネ-) (ア-.)
きくきりは 稲穂 (一急 つくとね。) (なるほど.)
サ⁽²¹⁾ ?サムシリワ オイルシサ- (シ-) チョード ヒマナシタ
草取りは 終るしき (うん。) ちょうど 暫なんだよ
ヨ ドコタッテー。

どこでも。

K ズト⁽²²⁾ ハチガツノ チュ- ジュンゴロ。

そうすると 八月の 中旬頃がね。

A チュ- ジュンゴロ。

中旬頃。

O シ- ハチガツノ チュ- ジュンカラ ハガツ- マ- サブク
さん, 八月の 中旬から 九月 まあ 寒く
ナンネー チョード マ- イ- ジキダナンチュ。
ならない ちょうど まあ いい 時期だなどといふ。

A マーダ マメカリワ ネーシ イッコ- イ ホレコソ⁽²³⁾ ヨ-ワ
まだ 豆刈は 無いし まるきり それこそ 用は
ネーンダ。
無いのだ。

O ヌマタアタリカラ テングレンチュー / (トヘー。) (タノシテ)
沼田 [地名]あたりから 天狗連中の (へえ。) (頬んじかね。)

タノシテ キテ。

頬んじ 来く。

K ソテ⁽¹¹⁾ ドコテ ャッタン バショワ。
それで どこで ゃったのかね、場所は。

A バショワ ドコッキュウ ネー。ソノ バショニ ヨッテ。
場所は どこヒュウコヒは 無い。 場所に よって。

K ジンジャトカ ソーイ トコジャネン。
神社とか そういう 所ではないのか。

A ジンジャテ⁽²²⁾ ャ

神社ぞ

O カーラデ カーラヨー / コイガ ブテーオ キズイテサ一。⁽²³⁾
河原で 河原用の こいが 舞台を 繕いくさ。

A ソーラ ヨーイジヤ ネンダイ⁽²⁴⁾ ミシナ ホソキ一 カエツイテ⁽²⁵⁾
それは 容易ごは 無いんだよ 着 細木を 担いで
コーエニ ミシナ一 シテ ヨシズ一 ハッテサ一 ブテーツクルン
こういう風に みんなで 韋縛を 張ってさ 舞台を 作るのだ
ダモ！
もの。

K ヘー。

へえ。

O タニジュ一ノ テガ ミー クルタカラ (^Aタニジュ一) テーチ一
谷中の 連中が 見に 来るのだから (谷中) 大きい
スイテ アスコマテ ニジュ一マテ ツフルダカラ。コ一メガ
それで あそこまで ニ重まで 作るのだから。こう

リジュー コーニ。(k アーリー) ソイダカラ ドーシテ ~~ダ~~^ダ サ
回り中 こうじ。(ああ そうか。) モ肌ビから どうして どうして
ジキ (k サジキセキ ツクルダ イワユル) ダカラ サジキガ 才
機敷 (機敷席を 作るのだが、いわゆる。) だから 機敷が
タナンテ ユーダカラ。ミーシミテ サジキガ オチルンサー。

落ちたなどと 言うのだから。大勢のって 機敷が 落ちるのさ。

サジキガ オッタナンテ サギ アッタッペ。ダカラ ソレヨリ
機敷が 落ちたなどと 馬鹿マフきが あったる。だから それより
メーが ハタヤノ カンバテニ ムカシ アッタシネ。オ
前が 帰谷(地名)の 上帰谷に 昔 あったね。

ラガ マット オボエル ジブン。

私が やって 触れる 時分に。

T ヘー。

へえ。

K ジーナンカ ジューサンチューカ タイショ一 キューネンゴロテ
じいなどが 十三歳といふが 大正 九年頃で
オフリカ。ソイジャー。
終りが。それでは。

A ソジブンダナー。

その 時分だなあ。

K ソダナー。

そうだなあ。

A シー。

うん。

K ソラ ナニ トシフ。

それは 何、年齢は?

- A ソーケングミッチュナ ハー ワケー イマテ イエバ セーネン
 壮健組ヒラのは 差い， 今ご 言えは 青年
カイノ ワケダイナー。
 会の わけだな。
- K ワケーシ セーネンカイノ ワケカ。
 若衆， 青年会の わけか。
- O オッカイワ ⁽²⁸⁾ ソーダカモ
 追見は そうだかも
- A セーネンカイヨリヤー ソノカーシ トシガ オッキ一ケド。
 青年会よりは そのかわり 年が 大きいけれど。
- K デッケー テーマテ ハバガ ヒロカッタン。
 大きい テーマで 幅が 広かったの【だね】。
- A ソーダカラ ハバガ ヒレーカラ。
 それだから， 幅が 広いから。
- O ヒラガアタリワ _{xxx} モヨリノ シトサーネー。
 平川あたりは 最寄の 人氣ね。
- A アー [→] エライ コトダ。
 そらもう たいへんな ものだ。
- K ソラー アレダ _{xxx} ワケーシ オトコモ オンナモダッタダッペ
 もれは あれだ 若衆， 男も すも たっただろう
 ソラ。
 それは。
- A オトコッキリサ。
 男だけさ。
- K オトコッキリダッタダ。
 男だけだったのが。

O オトコンガ ャッタンサ。

男衆が やったのさ。

K ジャ オンナシワ イ、ショケンメ ジャー セキハン タイタリ
ごは 女衆は 一生懸命 では 赤飯を 炊いたり
アレ シタダ。

あれさ したのだね。

O シー→セキハンタキ。

うん 赤飯 炊き。

K ソーイ セッキョーダ。

そういう めんどうなへだね。

A ハー ミンナ ハナー シテ ミンナ ソーケン アレダ (°ミ
皆 花を して 皆 壮健, あれた
ンナ ダカラ テヌグイ アレ シナクッチャ一 ケーサナフッチャ
(皆 だから 手拭を あれ しなくては, 返さなくては
ナンネーカラネー。) サケー ミンナ ダシテ カッテ キテ カ
ならないからね。) 酒を 皆 出して 買って きて
ツテ ダカラ ナシー イッテ コナクチャ ナンネーツンデ ミン
買って だから 返しに 行って こなくては ならない いいうので 皆
一ナ・アレサ一 ハナー スルダッタイネー。
あれさ, 花を するのだったよね。

K シー。

なるほど。

A ソノカーシ マタ オーヨーデ ヤレバ オーヨーデ ヤレア ⁽²⁹⁾ オ
そのかわり また 大楊(はや)名で やれば, 大楊 で やれば
ツカイノ テガ ソーケングミテ マタ サケ イットーダラ イ
追良の 連中が 壮健組で また 酒を 一斗なら

ツトアゲルンサ ホイデ ソノソースリャー サケナンゾ
一斗 あげるのさ それで その そうすれば 酒など

イットアゲリャモーダカラ オッカイノ ソーケンセ
一斗 あげれば もう だから 追具の 壮健席

キスイタセキトットイテ ソージテ ドーシテ ドンチャン
敷いた 席を 取っておいて そうして どうして【どうして】 びんちゃん

サーキダイシバインナケー サケー モチコンテ。ムラジュー。
騒ぎだよ。 芝居の 中へ 酒を 持ちこんで。 村中【の人】
0 ンーナ ムラジュー ネコサーナー (Aシードネコダー。)ミンーナ
皆 村中 ゆらむしろきな (そらそら ゆらむしろだ。) 皆
ネコーダシテスイテ。
ゆらむしろきを 出して 敷いて。

マソレガナツノユイーツノタノシミダッタダッペネー。
まあ それが 夏の 唯一の 楽しみだっただらうね。

ムカシノシトノネー。(間) イマミテニゴラクガ ナカッタカ
昔の 人のね。 今のように 娱樂が 無かった
ラネー。
からぬ。

ゴラク ナカッタ。
娛樂は 無かった。

0 イマー ハー ザシキー テレビガ アルシネー。アレダカーノ
今は もう 座敷に テレビが あるしね。 あれだから
一コターアンマリ スタイタケドサ。エガニモ アンマ
そういう こには あまり 廃れたけれどさ。 映画にも あきり
リ イガネー イヌネー。
行かない、今はぬ。

T マダ カツドーシャシンナンテ ユー ジダイ シャネンカイ。
まだ 活動写真などは いう 時代ではないのかね。

K 笑

O ソーソー カツドーシャシン。
もうそう、活動写真。

T ナッタ トコカイ ゲントーカイカラ。
なったところから、幻燈会から。

O カツドーシャシンモ ナカッタッペ。
重1 活動写真も 無かったらう。

A マダ ナカッタッペ。ゲントーカイガ(32)
重1 まだ 無かったら。 重2 幻燈会が

T ゲントーカイカイ。
重2 幻燈会がね。

A ゲントーカイダッタッペ。
幻燈会だったらう。

O ゲントーカイ。
幻燈会。

T ソーダネ オレ コドモノ ジブンニアノーカイゾージニ
そうだね、俺は 子供の 時分に あのう 海蔵寺に

O カイゾージニ アッタッペー。
海蔵寺に あったらう。

T シュ ゲントーカイッシュンガ アッテ (°オラー ヒラガーカラ
うん、幻燈会というのが あって (私は 平川から
キタッタモノ) ミー イッタ コト アッタケド。
来たことがあるもの。) 見に行つた こヒガ" あったけれど。

K ソラ ナツマツリナンカニワ カンケーナク ャッタワケダ。ソラ。
それは 夏祭 などには 関係なく やったわけだね。それは。

A ソーサー。
もうさ。

O ソーイニ カンケーネー。
そういう事に 関係無い。

K ゼンゼン ベツニ。
全然 別に【やったのか】?

O ゼンゼン カンケーネーサネー。
全然 関係ない さぬ。

A ハー スキナ テガ オメー イマゴロン ナルト ヒマン ナル
ウラ 好きな 違中が、おまえ、今頃に なまく、暇に ちるヒ
ト シバイヤ カイー イグベヤナンテ。オラガ ジーサマナンゾ
芝居屋 買いに 行こうよ なビヒ。俺の じい様など、
オマイ シバイヤ アレダイ シンサンダノ アレダノ サトサ
おまえ、芝居屋、あれだよ 新さんや あれや 哲さんや
⁽³⁶⁾ ンダノ アスコデ マッテ カンゾーグ ムコーデ ⁽³⁷⁾ ミーテ マッ
あそこで やって、勘三の 向うで やって
テ エレー ソン コイタ (皆笑)。
みびく 損を した。

O ミンナー シバヤ マッテ モーケタ シトワ イッコ ネーヤ
皆 芝居屋を して 倘けた 人は 全然 ないよぬ。
ネー。(Kシ一。)ミンナ ソンサネー。ノムダモノ ソシニ キマ
(なまほど。)皆 損さぬ。飲むのだもの 損に きま、
ツテルヨネー。
でいるよぬ。

A ハー モラエバ ハナゲーシッシュュノ ミンナ シナクッチャナ
花を もらえば 花返しというのを 皆 しなくてはならない。
ンネー。

O イマー ヒヤ ? サイイ ジョーノ テノ ジブンワ ジシバヤダネー。
今 百歳以上の中の 連中の 時分は 地芝居屋だね。
ヒラガワ サカシテ (A ソレガ ジシバヤ ムム) チドリノ オヤ
平川は 盛んで (それが 地芝居屋) 千鳥の 親父
ジナンザー ジシバヤガ スキデ マー マイートシ ヨーク ヒ
などは 地芝居屋が 好きで まあ 毎年 よく
マガ アッタト オモーネー。ヨク ャ
暇が あたと 思うね。よく や

T アーイ コター ヒマー ツクルンジャネンカイ。
ああいう こじは 暇を 作るのでは ないのかね。

A ツクルンサネー。
作るのさね。

T ダカラ ヒラガノ シトワ カブキー オレノ オボエテッカラヌ
だから 平川の 人は 駄舞伎を 僕の 覚えてからまで
テ マッタインエー。 (A マッタヨ。) オフドーサマニ (° マッター。)
やったよね。 (やったよ。) お不動様に 皇 (やった。)
タムケ。

手向け。

A オフドーサマニ ヨク マッタイ。
皇 お不動様に よく やったよ。

O イマ オセール シトガ ハー シンジマッテ ネー カラ ャンネ
今は 教える 人が もう 存んでしまって いないから

一ケドネー。オフドーサマニ ヨク ャッタソネー。

やらないけれどね。お不動様によくやったのさね。

T ャッタネー。

やったね。

A ヒラガーワ カブキ ヨク ャッタ。

平川は 歌舞伎をよくやった。

O ダカラ ムカシカラ スキダッタダイネー。

だから 昔から 好きだったのだよね。

T スキダッタダ。

好きだったのだ。

A オッカイワ シバイワ アンマリ シナカッタナー。

追見は 芝居は あまり しながたな。

O オラ・ンゾ⁽⁴⁴⁾ガ フジンカイデ⁽⁴⁵⁾ ヌマタノ テングレン アゲテ イ
松などが 婦人会で 沼田の 天狗連を あげて
ツカイ ャッタッケ。フジンカイデ。

一回 やったっけ。婦人会で。

T ヘー。

へえ。

O ソン シタ (°・笑)。(皆笑)

損をした。

K ドーエ ソン シタ ハナシベーダネ。モーカッタ ハナシワ ネ
どうも 損をした 誰ばかりだね。儲かった 誰は
ーダネ。

ないのさね。

O モーカンネーサ。フジンカイデ ャッタんだ。トショリー ョン
・ 儲からなきさ。婦人会で やったのだ。年寄を 招待して

テ ヨロコバシタダケダモノ。ケーローカイニ マッタン。

喜ばせたにけだもの。敬老会にやったの。

ト シー。ケーローカイニネー。

なるほど。敬老会には。

K モットモ ケーローカイダラ ソレア (43) アレダ ヨロコシテ ヨ
もっとも 敬老会なら それは あれだ,
ロコブ シトガ イレバ イーダカラネー。マー ソレガ アレタ
書ぶ 人が いれば いいのだからね。まあ, それが あれだ
イナ。ナカナカ ズイブン ジダイノ ホーガ カーッテ キタ
よな。なかなか ずいぶん 時代の 方が 変なって きた
ンサネー。イロイロ ハッタツシタカラネー。

のさぬ。いろいろ 卷達したからね。

ト ソーダネー。

そうだね。

A オランゾガ ワケーシニ ナッテ ソケンシバヤチュナ アズマ
俺などが 若衆に なって 壮健芝居屋ヒラの口 東
カンデ イッカイ マッタカナー。
館で 一回 やったかな。

ト アレワ アズマカン ナン ナンネンゴ口 デキテルンダイ。
おれは 東 館は 何年頃に できているのね。

A イクネン デキテルイ。

幾年に できているね。

ト デキタノワ ワカンネーケド ナセセンジチュニ (間) ダイトー
できたのは わからないけれど 戦時中に 大東亞で
アデ ツブシタ ワケカイ。
潰した わけかね。

A ソーダイナー。

T アレ ネバガー イッタッタネー。

あれは 根羽沢(地名)に 行ったのだけ。

A ソー ソー ソー ソー。モッテッタンダイナー。

そう そう そう そう。持っていったのだよな。

T アントキ オレノ ウチニ カイー キタッテ ユーケド ウレバ
あのヒミ 僕の 家に 買いに 来たヒ 言うけれど 売れば
ヨカッタネー。(T・A笑) アーン ガランノ デッカイ ウチジマ
よかったです。 あのよくな 加藍カ 大きい がくじは
ドーショーモ ネーカラ。
どうしようも ないから。

O アズマカンチュデ オラー チドリカラ フノーネー エ
東 館ひいうで 木暮は 千鳥から あのう ねえ, 映画を
ミー キタダ。モートン。
見に 来たのだ。

T アー ソー ソー ソー。
ああ そう そう そう。

O イマノ アレカ アスコノ マサルサンノ メニ ナルダヨネー。
今の あれが、 あそこの 優さんの 前に なるのだよな。

T アッタンダ。アノー キチゴロー/スグ アトダ。
あったのだ。あのう、吉五郎の すぐ 後だ。

O ノーキョー/ソーコノ。
農 協の 仓库の

T ソー/ノーキョー/ソーコン トコニ アッタダ。
うん 農協の 仓库の 所に あったのだ。

O アッコ ⁽⁴⁷⁾ チーット ヘーッタヨーン トコネー。

あそこ 少し 入った ような 所ね。

T アラー ズイブン ミー イッタッタヨ。

あれは ずいぶん 見に 行ったものだよ。

O アー ズイブン イッタイネー。チドリカラ ヨク キタモシダト
あみ ずいぶん 行ったよぬ。千鳥から よく 来たものだヒ

オモーナー。イマ カンゲールト (°笑)。ヒ ⁽⁴⁸⁾ カリーナンゾ
思うな。今 考えると。千草刈に なビ
アキイッテ キテ ソイテ クタビレテルッチュニ ⁽⁴⁹⁾ キタモ
秋に 行って きて それで 疲れているというのに 来たものだ
ンダ ヨル。

夜。

T ソレ タノシミダッタカラネー。

それが 楽しみだったからぬ。

A ソーダ。

そうだ。

O ソレッキリ ネーダカラ。

それしか 無いのだから。

T ゴラクッテガ ネーカラネー。

娛樂 いうのが 無いかうぬ。

注

1. 「ウ——」考えていて思わず出た声。
2. 「タテル」壯健の健の字を健と混同している。
3. 「ソーケンシバヤ」「ソーケンシバイヤ」の弱まり形。
4. 「ハナ」祝儀の意。
5. 「エラーアイ」 [era-i]
6. 「ソレ オワッテ」「芝居が終って」の意。
7. 「コージロー ノ トコロデ」鴻次郎の家を借りて壮健芝居をやった。
8. 「クバッ」次のAの発話によって途切れたために促音が音節末尾にあらわれるという例外現象が生じている。
9. 「シ一 Kの問い合わせ丁の発話と重なったためもあって Aは問い合わせの意味が聞きとれず、問い合わせした。
10. 「オボエワ ネーヤネー」「記憶になりやね」の意。
11. 「オメー」人称代名詞ではなく、間投詞的用法。
12. 「ナッ テッ カラ」Aの発話を重なったため、自己の発話を印象づけ、続けるために「カラ」の部分を高く、強く発音した。
13. 「タメッコフモノ」これは「タメッコマモノ」であり、「タメゾー」という人が小間物屋をやっていたのでその家を「タメッ・コマモノ」と言う、ということであるが、録音では「タメッコフモノ」と聞える。
14. 「ミサ」(井上) 美左夫の略。
15. 「ゼー アニー」(井上) 善次郎の略+アニー。年上の人、目上の人を「アニー」と言う。
16. 「シンセカギシバイ」身代を片付けるときにおこなう芝居。
17. 「オエテ」 [oe-te]
18. 「サクキリ」土を細長く掘りおこす作業。
19. 「スト」無造作な発話。「スルト」または「ソースルト」が明確な形式。
20. 「イッコー イ ホレコソ」途中で言い変えをおこなった。
21. 「ソデ」無造作な発話。「ソレデ」が明確な形式。

22. 「ジンジマテ ャ」、次のりの発話によって途切られた。
23. 「キズイテサー」 [kidzuite-sa:] 形式の中位で破擦音があらわれている。ただし、「ズ」は形式の中位では濁摩擦音の [zǖ] である。
24. 「ネンダイ」 [nendai] 「ダイ」の部分は二重母音的。
25. 「カエツイテ」 [kætsǖide] , 「カツイテ」の言い間違い。
26. 「サジキ」 [saziki] , 軽い口蓋化が観察される。以下「サジキ」に関して同。
27. 「ヤット オボエル ジブン」 「やつと知っている時分」の意。
28. 「ソーダカモ」次のAの発話によって途切られた。
29. 「ヤレア」 [jareā]
30. 「シーナ」 [n:na] , 無造作な発話。「ミシーナ」が明確な形。
31. 「ネコ」 薫で編んだむしろ。「ネコー カク」 (わらむしろを編む)。
32. 「ゲントーカイガ」次の丁の発話によって途切られた。
33. 「カイゾー ジニ」次のりの発話によって途切られた。
34. 「オ×一」間投詞的用法。
35. 「シンサン」 人名, 新一郎の略+さん。
36. 「サトサン」 人名, 暂の略+さん。
37. 「カンゾー」 人名, 勘三。
38. 「ムコーテ」 向うの場所で。
39. 「ジシバヤ」 近所の人が練習をしてやる芝居。
40. 「ヨク マ」次の丁の発話によって途切られた。
41. 「オボエッカラマデ」 知っている頃まで。
42. 「オラーヌゾ」 [ora-n̩zo]。
43. 「ソレア」 [soreā] ,
44. 「モートーク」 暧昧で意味不明。
45. 「マサルサン」 人名, 優+さん。
46. 「キチゴロー」 人名, 吉五郎。
47. 「アッコ」 小さい声で。
48. 「アキー」 千草刈け彼岸秋に行く。

3 千草刈り

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林上志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ダラ ソッ子ノ ホーマテ^ト ヒクサカリ イグニマー アレダッ
だから もちの 方まで 千草刈に 行くには あれたらう
ペー ズイブン アサゲ ハヤク オキテ イグダッペー。
ずいぶん 朝 早く 起きて 行くのだう。

A アサゲ クレーンニ オキテグンサ。ヨガ アケルノ マッテ テ
朝 暗いのに 起きていくのさ。夜が 明けるのを 待って
カケタモノ。

掛けたもの。

O ヤマ イグ トキニワ クレー ~~~~
山に 行く ときには 暗い

K オランカニ ナッテッカラ ゼンゼン ナンネンカ。
俺などに なってから 全然 行かないのか。

O ンー オレガ キテ イチネンシカ イガネーモノ。
うん、 私が 【道具】来て 一年しか 行かないもの。

- K ダラ⁽¹⁾ アスコワ ンマ⁽²⁾ シタ- トッテッタ ワケ。
馬なら あそこは 馬は 下を 通っていった わけかね。
- A ミンナ シタ- トッテグン。コモリ アガッテ ソレカラ。
皆 下を 通っていくの。小森(地名)を 上がって それから。
- T ジュニサマガ アル ジュニサマ ト_{xxx} トッテ シタエ オ
ナニ 様_くが ある ナニ 様_く【の所を】 通って 下へ
リテ コニ グネグネ マガッタ ミチオ コモリ アガッタダ
降りて こう ぐねぐね 曲った 道を 小森に 上がったのだから。
カラ。ヨーク ウマ オトシタンダ"ネー。
よく 馬を 落したのだがね。
- A ソーダ。
そうだ。
- O ソユ トキ クレー ヨーナニ イグダカラ マー (A ヤモチ一
モハラ ヒキ 暗いようなとき 行くのだから まあ (烤餅を
マイテ) イッタ コトガ ネー トコイ ツイテガレルテ マー
焼いて) 行った こヒガ 無い 所へ 連れていかれるので まあ
マナ オモイ シタサー。
いやな 悪いを したさ。
- A オランゾウ タイガイ カナヤマイモ イッタイナー。カナヤマノ
俺などは 大概 金山(地名)へも 行ったよな。金山の
オクノ トコ イッタ。
奥の 所へ 行った。
- O チドリニ イル ウチワ オラ ヤナギダマサー。アスコノ コモ
千鳥に いる うちわ 私は 柳平(地名)だ。あそこ 小森の
リノ メール トコノ (T シーリ。) アスコガ ワリチダカラ。
見える 所の (ああ、あそこだね。) あそこが 割地だから。

A イチバーン トマックチガ ミサブローサンノ ウチノ ⁽⁴⁾ テーダカ
一番 はいり口ガ 巳三郎さんの 家の 割地だから。

ラ。ソシ ツギー センジサンダンバー。モリヤマノ ⁽⁵⁾ テーワ
その 次が 仙次さんだろう。 ⁽⁶⁾ 麻山の【連中の】割地は

T モチバガ アッタタンカイ。

持場が あったのかね。

A ン[↑]。

なんだって？

T モチバガ アッタ ワケカイ。

持場が あった わけかね。

A モチバガ アルヨ。タイガイ キメトクモノ一 マイトシ。ハ一
持場が あるよ。大概 決めておくもの 每年。もう
ソイデイテ シトガ イガネー ウチニ イッテ ハ一 ヒ一 モ
それぞいは【他の】人が 行かない うちに 行って もう 火を 燃や
シテ ヨノ アケルノ マッテルン。

して 夜の 明けるのを 待っている。

T ハ一[↑]。

なまほど。

A オーイッテ ナッテ ミテ イナケリマー ソコエ イッテ ⁽⁷⁾ ダ
「おおい」ヒ 口んで ミミ【誰も】いなければ そこへ 行って
⁽⁸⁾ マニ ソコ カルンサネー(笑) ハー／＼ ヒニ イッテ イト ホ
(たまに そこを 戻るのさね。) 前の 日に 行って 火を
(⁹ ナカデモ。)
(なかでも。)

T ヨク タキビオ トメッタネー。
よく 焚火を 燃やしたね。

O ベツニ ワケチジヤ ネーがネ。

【追見は】ベツに 分け地では ないよ。

A ワケッチジヤ ネー。

分け地では ない。

O チドリナンザー ミンナ ワケッチサー。

千鳥などは 皆 分け地さ。

T アー ソーカ ワケッチジヤ ナクッテニ。

ああ そうか 分け地では なくで。

A オラー ホーワ ミンナ ワケッチジヤ ネーン。バショ イッテ
俺の 方は 皆 分け地では ないの。場所へ 行って
ハー (ト) ソコエ アレースル。ソイテ カモーコタ一
もう そこへ あれを する。それで かまうことは

⁽⁴⁾
ネーカラ

ないから

O チドリワ チドリワ モトツ ワケタジヤ ナカッタケドサ一 ハ

千鳥は、千鳥は もいは 分けたのぞは ながったけれどさ、もし

- ソーユージャーネー コマルデ ミンナ (A ヒラガーワ ミン
ぞシシニヒズハ奴 困るので 皆 (平川 は 皆)

ナ) チドリノ テワ ミンナ (T オソク ナルト カレネーモンネ
千鳥の 者は 皆 (遙く なまヒ 戻れぬもの奴.)

-) ヤナギ ヤナギダマッキュ コトニ キマッチャッタンサ。キ
柳平といふ こヒに 決まってしまったのさ。

マンネー ウチワ オランゾワ スイギョージノ テッペン。コッ
決まらない うちは 私などは 水行寺の 天辺。こちらを
チ一 ミテ アノ ハチマキガ アルベ一。⁽¹⁰⁾ (T アー。) アスコイ
見て あの 鮎巻きが あるださう。 (あるね。) おそこへ

ツチャ一 オラー カッタダイ。ニネン ~~xxx~~ ャ アスコ チットコ
行つては 私は 焼いたのだよ。二年 あそこへ ちょっと
デーラガ アルダイ。
小平が あるのだよ。

T ソコワ スイギョージノ オテラノ ^(v2)アッタ トコカイ。
そこは 水行寺の お寺の あった 門がね。

O ソ-タッタ。
そうだった。

A ソーダ イキバン ウエダ。
そうだ 一番 上だ。

O イドノ アトモ ^(v2)アルヨ。
井戸の 跡も あるよ。

K ジー。
そうがね。

O オラー アスコ ニネン ツイテグレタモノ。
私は あそこに 二年 違れていがれたもの。

T アスコモ ドーチュ一 アルネー。ヒラガ一 ^(v2)ナタカラダラ。
あそこも 通中が あるね。 日向(地名)からなら。

A ヒサカリ イッ シューカングレー シタダ。
干草刈を 一週間 ぐらい したのだ。

O マーズ イグンガ クタビレルンダ イグンガ。ケーッテ クル
まず 行くのが 疲れるのだ 行くのが。帰って くる
トキヤ一 クダリダカラ ツットトット ^(v2)クタビレタッテ キ
ヒキは 下りだから ヒッヒッヒヒ 疲れても 【帰って】
ラレルケド イグンガ ミンナ ノボリダッペー ^(v3)アノ ヤマ一
来られるけれど、行くのが 全部 登りだらう、 あの 山を

テッ ペンマテ ノボルダモノ。

天辺まで 登るのだもの。

K ヒツサワ クガツダッペー。

千草は 九月だろう。

A ヒガン (kヒガン) ヒガンノ アキノ アイタ ヒガ (kアキガ)
彼岸 (彼岸) 彼岸の 開の, 開いた 日ガ (開ガ)
カマアキッテ ユーン。

鎌開ヒ 吉うの。

K カマアキダッペー。

鎌開だろう。

O ソ。

そう。

A ソーサー。ソレ メニ イッテ カッ チヤ一 ナンネンダ。
でうき。それの 前に 行って 戻っては ならないのだ。

O ヤマガ アレルトカ ナントカ。

山が 荒れるとか なんとか【言って】。

A ソレト一 ソレ メニ カルナラ ウマテ カルダラ イーン。
それと、それの 前に 戻るなら 烏ご ⁽¹⁴⁾ 戻るなら 良いの。
(kシ一。)ダンガリダラ ドコ一 カッ ⁽¹⁴⁾ テ
(なるほど。)段 戻なら どこを 戻って

O ヒツケテ クルダラー ケド。

付けて くる なら 【良い】けれど。

K ダンガリ アー ソーカー イチダン。

段刈? ああ そうか 一段。

A イチダン ロツ ツオクツツ ロツ ツオクツツ ツケテ クルン。
一段 六束ずつ 六束ずつ 付けて くるの。

K ツケテ クルダラ イツ カッテモ イー ヨカッタ ワケダ一。
付けて くるなら いつ ××××× 良かった わけだね。

O ムカシヤ一 アサクサカリッチューテ クレー ウキニ オキテネ
昔は 朝草刈 というのぞ 暗い うちに 起きてね,
— ミンナ ウマノ アル シトワ アレダ (トイッタネー。) ^ア
皆 馬の ある 人は あれだ (行ったね。)
アサハンメニ ミンナ イチダンツ ハー モ オキマリテ カ
朝 飯前に 皆 一段ずつ もう お極りご
ッテ キタモンダモン⁽¹⁵⁾ネー。ソイテ コムギ ツクル ジブンナ
刈って きたものだものね。 それで 小麦を 作る 時分は
コムギカリダッテ ムギカリダッテネー ミンナ アサハンメニ
小麦刈ても (大麦刈りもね) 皆 朝 飯前に
イッタモンダ。
行ったものだ。

注

1. 「ダラ」 この部分は A の発話と重複。A の発話は聞きとれない。
2. 「ンーマ」 [m:ma]
3. 「クレー ヨーナニ」 [Kure: jo:nani] [k] は閉鎖の後の気音が著しい。
4. 「ミサブ ローサン」 人名、巳三郎さん。
5. 「センジサン」 人名、仙次さん。
6. 「モリヤマノ テーワ」 次の丁の発話によって途切られた。
7. 「イト 木」 オと重複しているので途中で言いました。
8. 「タキビオ トメッタネー」 「トメッタ」の意味不明。文脈から「燃やした」の意であると判断される。焚火をたいて陣をしいた。
9. 「カモー コター ネーカラ」 次の〇の発話によって途切られた。
10. 「キマッチャッタ」 [kimattatta] [k] は閉鎖の後の気音が著しい。
11. 「ハチマキガ アルバー」 念押し。
12. 「オテラノ アッタ トコ」 水行寺山といら山になっている。
13. 「アノ」 指示代名詞であって間投詞ではない。アクセントの山がちいのは「エイントネーション」に支配されているため。
14. 「ドコー カッテ」 次の〇の発話によって途切られた。
15. 「カッテ キタモンダ」 「キ」 は [k] の閉鎖の後の摩擦が激しい。[ʃi] のようにも聞こえる。

4 葬

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

0 アキチャンガ ハチガツ ジューニニチニ シンダダッタケドモ。ジュ
アキ(人名)あんが 八月の 十二日に 死んだのだったけれども。
一イチシチノ ヒダッタッペ。ト^{xxx} イマノ トヤマダッケガ アス
ナ一日の 日だったろう。今の 石底山(地名)だつたらうか
コエ ウンマー ヒーテ クサカリ イッタノサ[↗] ドコ イッ
おそこへ 馬を 引いて 草刈りに 行ったのを さて ビニへ 行ったのか
タノ ワカンネー。トヤマジュー ナエアルッタ。テ^{xxx} テンボーガ
わからぬ。 石底山中 呼び歩いた。 電報が
キタデ キドクノ テンボーガ キタデ ソイテ ソノ ツヤ
来たので、 危篤の 電報が 来たので それで その、
ツヤオ ショッテカ ホイデ モー アスコエ イマノ イシバタ
豊(人名)お おふじってだったか それで もう あそこへ、 今の 石畠さ。
ケサー。アスコノ カシラナシノ オカシナ ハタケ カッコーン
あそこでの 頭無(地名)の おかしな 火田、 かこうの

イ一 ハタケ。アスコエ ソバー マイタデ ソコ一 ハ一 コ
いい 灑。 あそこへ 蕎麦を 薄いたので そこを もう
二ニ ミンナ キッ カケテ アノ一 クサ一 スクヨニ シトイ
こう みな 砂糖をして 草を 敷くように しておいてさ
テサー ソイデ クサ一 カルンデ アスコ一 キテルカナート
それで 草を 焼るので あそこには 来ているかなと
オモッテ アスコマデ トンデッテ ミタラ キテネーテ ハ一
思って あそこまで 走っていって みたら 来ていないぞ もう
イキセキ キッテ トヤママノ⁽⁴⁾ ミチ カサー ハイアガッテサ一
息せき 切って 磨き山の 道を 草を分けて 這は上ってさ
イーッショケンメ ヨバッテ キトクノ テンポーガ キタデ
一生懸命 呼んで、 危篤の 電報が 来たので
ソイデ ヨドーシ デテッタンサ一。(トヘー。) ソイデ オタジバ
それで 夜通し 出ていったのさ。(なるほど。) それで おタジばあ
一サマノ⁽⁶⁾ トコマデ イギツツイテ ホタラ ハ一 ビョーニンワ
様の 所まで 行き着いく、 そうしたら もう 病人は
シッテタチユーモンネー。⁽⁷⁾ キタッチユーガ ワカッタラ イキガ
知っていたというものが。 来たヒいうのが めかったら 息が
キレタッチユモノ。(トヘー。) ダカラサ一 ドヒノ オバサンガ
切れたというもの。(なるほど。) だからさ、 土肥(人名・名字)の おばさんが
イッテテ ネーサン^ダレカ コレ イナカカラ クルダデ イ
行って、 姉さん 誰か これは 田舎から 来るのだよ、
ナカカラ クルノ マッテルジ^ア ネーカッテ ユッタケド オバ
田舎から 来るのを 待っているのでは ないかと 言ったけれど おばさんは
一ワ アレダモンダカラ ナニガ イナカカラ⁽⁸⁾ クルッキュ。ソ一
あれだものだから 何が 田舎から 来るヒいうものが。

ジャー ネー クルジャー ネー カッテ デ ャッタソ。ソーシ
もうでは ない、 来るのでは ないか ヒ 。 そうしたう
タラ オジーガ タマケチャッテ イケーレン オコシチャッテサ
おじいが 魂消しまって 胃癌 繼々 おこしてしまってさな。
ーナー。オジーウ イグネンサ。クニマツジーサン。(ア クニマ
おじいは だめなのさ。 国松 じいさんか。 (ああ 国松
ツオジーカイ) ヒデー メニ アッタデ。オヤジワ デテグ ソノ
おじい かね。) ひどい 目に あったよ。 おやじは 出ていく、 その
アトデ オジーウ イケーレンデ フタバンモ ミバンモ ネネ
後で おじいは 胃癌 繼々 ニ 晩も 三 晩も 痠ないのだ。
ーダ。(アヘー。) クルシガッテ、ソイデ ドーショーモネーデ チ
(へえ。) 苦しがま 。 もれで どうしようもないのぞ、
ドリノ ジーサマモ イッショニ イッタンサンナ。シュー ゴサン
千鳥の じい様も 一緒に 行ったのさな。 修吾(人名)さんと
ト イッショニ シンダデ アトカラ イッタンサン。ホーテ チ
一 群に、 死んだのぞ 後から 行ったのさ。 もれで
ドリノ オバーガ ルスイニ キテタケド ミズー クレチャ
千鳥の おばあが 留守屋に 来たけれど 水を ヤッコは
ナンネー ゴハン クレチャ - ナンネーッテ。アノ イマノ タ
ならない ご飯を やっては ならないと。 あの 今
カシチャシノ オヤジガ イシャノ トキデ アノ シトガ (ア
敬(人名)ちゃんの おやじが 医者の ときで あの 人が (あ
コバヤシセンセーガ。) ソイデ キテ モラッテ ソシテ フンネ
小林先生が。) それで 来て もらって、 そして やらないで
ーテ クレッタカラ ハイッテ。ホテ イシガ (9) イグッシュート
くれと言ったから 「はい」と言った。 そして 医者が 行くといふヒ

ヨシ一 ミズ モッテ ⁽¹⁰⁾ コイ。イシャガ ュッタダカラ ノヌネ
 よし 水を 持って こい。 医者が 言ったのだから 飲まない
 - ヨニッテ、ノマキヤ ⁽¹¹⁾ シンジマウツンデ オマワンニ モ
 ようにヒ。 飲まなければ 死んじしまう というので 茶碗に
 ッテ ⁽¹²⁾ キサシテ ゴクゴクゴク ホースト モー ピタット ブツ
 持って こましき ゴクゴクゴク そうすると もう ピタッヒ ぶつかって
 カッテ ソーレコソ クルシー。アセ ⁽¹³⁾ カイテ クン。ホイデ イ
 それこそ 苦しい。 汗を ガいて くる。 もれぐ
 シャー トンデッテ ⁽¹⁴⁾ イマミタイニ オラ ユーセンガ ネカラ
 医者へ 走っていって 今の様に ほら 有線【電話】がないから
 イシャエ コンダ トンデッテ クルン。ソイデ イシャガ ト
 医者へ 今度は 走っていって くるの。 それで 医者が
 ンデ クルン。ソイデ チドリノ オバーガ ミテ ノンダッペ
 走って くるの。 それで 千鳥の おばあが 見く、 飲んだら
 ダメダメダメ ⁽¹⁵⁾ ダメダメダメ ウソー イワッシャルメ コンター イ
 駄目駄目駄目 駄目駄目 嘘を お言いなさるな あなた、
 マ オマワンデ ノンダッペ。ソユダッタヨ。イッコー ユー
 今 茶碗ご 飲んだら。 そういうヒだったよ。 全然 言う
 コト キカネンタモノ ソイデ オバーガ ケット ⁽¹⁶⁾ テ ハ
 ヒを きかないのるもの、 それで おばあが 帰って きて もう
 コンダー アノー カカガ ⁽¹⁷⁾ ツイーヨ。ゼッタイ クンネー
 今度は 嬢が 強いよ。 絶対 やらないから、
 カラ ユー コト ヒトツモ キカネーカラ。ソイデ クンネーテ
 【おじいの】言うこヒを ひとつも きかないから。 それで やらないで
 ナオッタケドサ。オレガ ^{×××} ヨメゴノ ユー コト ⁽¹⁸⁾ セーンゼン
 治たけビキ。 私の、 娘の 言う ことは 全然

キカネーデ (°笑)。マーズ ソイデ ソントキ アレダッタナ
きかないで。 ます もれで そのとき あれだったな。

ー。クーシューケー ホーダナンテ クルカラネー。(トソーダネー。)
空襲警報だなどといつて 駆逐艦が来るからね。(そうだね。)

ソイデー オラー オーイオ カケテー メグリジュー ムシロナ
それで 私は 覆いを 掛けて 巡り中 遊などいつのを

シツ ツルシテ クラーク シテサ。ホーイダケド オレガ コ
吊して 暗く しまさ。 それだけれど 私が

ー クラク シルックチュート ビヨーニンダーッテ コニエバ
こう 暗く するヒラヒ 病んだと こうに 威張る。

レン。ソイデ ゼンサクサンガ メニイテ ゼンサクサンガ
それで 善作(人名)さんが 前【の場所】に いで 善作さんが

トンデ キタダヨ。オバマンガ アノー カンビヨーズカレデ ネ
走って きたのだよ。おばあさんが あのう 看病疲れで

ブッテルダト オモッテ キタン。ソージ ネー サー オメー
眠っているのだと 使って 来たの。 そうでは ないさ、 みまえ、

クレー コーユノ カケルト オジーガ コーマッテ トッチャ
黒い こうひらものを 掛けると おじいが こう やっく 取ってしまう

ウンダモ! ビヨーニンガ イルンダーッテ クーシューケー ホモ
だもの 病人が いるのだと言って、空襲警報も

(21) ナニモ アルモンカ。(トシ。)ソイデ ゼンサクサンガ アノ
なにも あるものか。(うん。)それで 善作さんが あのう

ー マツフジーオサー センジダシテ アノー ユテ ソバガ
松藤ミキ、 煎じ出して あの 湯で 蕎麦搔き

(22) キー シテ クレルト ソノ イケーレンワ ネダエニ ナルッキュ
して やるヒ そのう 胃痙攣は 根絶えに なるヒラヒで

シテ (K マツフジノ) シ。 (T ヘー。) ソイ リッテ ゼンサク。

(松藤?) うん。 (へえ。) もう 言って 善作さんか
サンガ オセータデ マツフジオ センジ⁽²⁵⁾ コノ一 ツル一 アレ

教えたので、松藤を 煎じ、 蔓を あれさ

サ一トッテ キテ クレテ ソイテ ソレオ センジダシテ ソ
取って きて く水で それで それを 煎じ出して

バガキ シテ クワシタ。ソレテ ナオッタンダ。ソレッキリ イ
蕎麦搾きを して 食わせた。 それで 治ったのだ。 それヨリ

ケーレン オコサナカッタヨ。(T アー ソーカイ。) ヤッパリ (T ハ
胃癌 摘を 起こさなかつたよ。 (ああ そうかね。) やはり

ツミミダナー。) キータダイナー。 (T ンー。) フタクチベ一 クッ
(初耳だな。) 効いたのだよな。 (そうかね。) ニロハガリ

タラ イラネーッナンテ ツキダシタッタケド。(T ンー。)
食ったら いらない などと 突き出したのだけれど。 (そうかね。)

K マツフジ センジテカ ソノ シルデー ソバカキ シテ。
~~xxx~~ 松藤を 煎じてか、 その 汁で 蕎麦搾きを して。

O ソー マツフジッチューノ マツミテーヨーナ (A ツルガ アルダ。)
もう、 松藤といふのは 松の様な (蔓が あるのだ。)
ツルガ アルダイネー。

蔓が あるのだよね。

T ツルノ ガチガチノ ホイテ^x ハダガ ソコカラノ⁽²⁷⁾ ハダ。
蔓が ガチガチの、 そして 樹皮が ガサガサの 樹皮。

O コンナクレー フテー
このくらい 太い

A ハビノ ハダ (T シ。) ハダミテーヨーナ アンナヨーナ
蛇の 肌 (そうぞう。) 肌の様な みんな様な

- O ソノ ツル⁽²⁸⁾
その 薤
- T ソイデネー マツ⁽²⁹⁾
それで 松
- A ~~タ~~-ヨーノ ママ イグト イックラモ アル。
大楊(地名)の山に 行くと いくらでも ある。
- T チョット ニオイ スルンサネー。
少し 白いが するのさね。
- O ソレ ゼンサクサンガ ヤマカラ トッテ キタ。
それ 善作さんが 山から 取って きた。
- T アユノ ムカシ オフロ イレタネー。
あいうのは 昔 お風呂に 入れたね。
- A フロエ イレルト 又^クトマルナシテナー。
風呂へ 入れると 温まるなど。
- O アレ 又^クトマルッキューネー。
あれは 温まるというね。
- A タダ イレルト マックロノ ミズガ デテナー。
まだし 入れると まっ黒の 水が 出くな。
- T ソーダ^ヌネー。
そうだね。
- O アレ ホントイタ ャツ センジダシテサ一 ソースト ショー⁽³⁰⁾
あれを、 切しておいた のを 煎じ出してき、 そうすると 醬油
ユノヨーナ イロノ
のような 色の
- T アレ デルンダイネー。
あれは 出るのだよね。

A オーラー ホーノ ャマニワ ネーケド オーヨーノ ャマニワ イ
俺の 方の 山には 無いけれど 大楊の 山には
ツクラモ アル。

いくらでも ある。

O ソイデ⁽³⁰⁾ ソレー センジテ アノー ソノ^一 ユ ネータタテ ア
それで それを 煎じて あめう そのう , 湯を 煮え立たせて
レサ^一 ソバガキ シテ クワシタダッタイ。
あれさ , 蕎麦搔きを レマ 食わしたのだったよ。

T ヘー ソースト イケーレンガ イー ワケダ。
へえ そうすると 胃痙攣に 良い わけだ。

O イケーレンガ ネダエニ ナルッテ ゼンサクサンガ ユッタダヨ。
胃痙攣が 根絶えに なると 善作さんが 言ったのだよ。
ソノ セーダガナ マードユーダカ。
その せいだか まあ ビラリウのだか [治ったよ]。

T イヤ イマデモ ソーユー ャツオ ツカッテルダネー。キノー
いや 今でも そういう ャツオ 使っているね。 昨日
ケーフンオ モライ一 きタ オレンチ一。
鶏糞を 黄いに きた , 値の家に。

O ヘー。
そうがね。

T ナンテダッタラ ジニ インダンダネー アレー。
どうしてだとしたら 痛に 良いのだ そうだね あれは。

O ヘー。
そうのがね

T アレオ フクロニ イレテサ一 コーマッテ ヤルト アノー
あれを 袋に 入めてさ こうやって やると あのう

0 ナゼルン。.

撫でるのか。

T ナンダソーダヨ ソコエ コーニ イレテ シタス
なんだそうだよ， そこへ こうに 入れて シタスンダト。
浸すのだって。

K ア ナルホド。

ああ なるほど。

T ケーフンテ コト バフンテ コター キータケド ケーフンテ
鶏糞というこひ， 馬糞というこひは 聞いたけれど 鶏糞という
コト (A 笑) バフンワ ズ アノ カンブエ ツケルンダソーダヨ。
こひ 馬糞は あの， 患部へ つけるのだ" そうだよ。

0 ヘー。

へえ。

T ダカラ イーッテ コト キータケド ケーフンワ シラナカッタ
だから 【馬糞】 良いというこひを 聞いたけれど 鶏糞は 知らなかつたな。
ナ。

K ネー ケーフ バフンワ インカネー。
ねえ， 馬糞は 良いのかね。

T バフンワ イーラシー。
馬糞は 良いらしい。

K イー マエッカラネー。
良い， 以前からね。

T バフンノ アノ一 マダ アッタカイ アッタカイ ヤツ (A 笑)
馬糞の あの まだ" 暖かい やつ
ユゲガ ユゲガ タッテル。
湯気が 立っている【れを】。

A ボ⁽³³⁾タント シタヨ-ナ マツ
ボタンヒ した様な やつ

O シ→ボタモチ。(K⁵⁶笑)
うん、 牡丹餅。

T シ→アレオ ヌノニ ツツンデ ガーセニ
え、 あれを 布に 包んで、 ガーセに

K イマ イネーカラ ダメダイ。
今 いないから だめだね。

A ンマワナー ソーワ イガネーマナー。
馬はな、 そらは いかないやな。

T ソーサー シマワ ミエネーモノネー。
そらき 馬は 見えないものね。

A イネーモー ホッカイドー エデモ イガナケリヤー。
いなもの、 北海道へでも 行かなければ。

O カーバジヤー コグソ一 トットイテ アレワ ナンノ クスリダ
川場(地名)では 蚕糞を 取って置いて、 あれは 何の 薬だ,
ケツアツノ⁽³⁵⁾
血圧の

A ケツアツノ クスリダ。
血圧の 薬だ。

O ケツアツノ クスリダッテネー。アレー ホシトイテネー
血圧の 薬だっぬ。 あれを チしておいてね

K ケツアツノ クスリ。ソノカーシ イチレーノ カイコノ コグソ
血圧の 薬。 そのかわり 一令の 蚕の 蚕糞
ダネー。イ千バーン チッ千一。
だぬ。 一番 少さい。

O アレー ホントイテネー。

あれを そして おいてね。

K マスミメーノ。

休み前の。

T ンー。

うかね。

O アー ソレコソ コマッケーマネー。メー。

ああ、それこそ 煙かいね 見えない。

A キレーダヨ ソノカーシ。

きれいだよ そのかわり。

T ソーダネー イチレーダラ。

うだね 一令なし。

A ソースト ハダガ ヨクナルナンテ ユフネー。

うすると 肌が よくなるなどと 言わないか。

O ハダモ ヨク ナルサーネー。

肌も よく なさぬ。

K ハダー ヨクナルサ。アレワ イワユル ヨー(ヨーリヨク)ソダ
肌は よくなるさ。あれは 所謂 (葉緑素だからね)

カラネ。) ヨーリヨクソダカラ。

葉緑素だから。

A トキョーノ アレワ オバサン 下カーツレ フンデルダナン
東京の あの人は、おばさんの ヒコロは それを 飲んでいるのだなどヒ

テ。

【言っていろ】。

注

1. 「ナエアルッタ」明確な形は「ナリアルッタ」。 「ナル」は呼ぶの意。
2. 「キドク」明確な形は「キトク」。すぐ後で「キトク」という形式も出てくる。
3. 「イシバタケ」石の多い畠。
4. 「トヤマヤノ」「トヤマノ」と言うところを調子を整えるために「ヤ」の音節を添えた。
5. 「カサ一 ハイアガッテ」「カサカサヒ草をかきわけて這い上って」の意。
6. 「オタジバーサヌ」「タジ」は人名。
7. 「シッテタ」[sitteta] [七] は音節主音的。
8. 「ナニガ イナカカラ クルッヂュ」ささやき声。反撥的表現。
9. 「ホテ」「ソーシテ」から次のように縮約された。ソーシテ>ホーシテ>ホシテ>ホテ
10. 「ヨシー」人名、又志恵の略称。
11. 「ヨシ一 ミズモツテコイ」ささやき声。直接話法で。
12. 「ノマナキヤ シンジマウ」ささやき声。直接話法で。
13. 「ゴクゴクゴク」ささやき声。擬声語。
14. 「クン」「クルン」(くるの)の縮約形。
15. 「ダメダメダメ ダメダメ」ささやき声。低く早口に。
16. 「ハアー」[xa:] 摩擦音弱い。
17. 「カカガー」嫁こそはの意。
18. 「オレガ ヨメゴノ ユー コト」「私の言うこと」と言いかけて立場を考慮に入れ、「嫁の言うこと」と言いなおすした。
19. 「ビヨニンダ」ささやき声。直接話法。
20. 「ビヨニンガ イルンダ」ささやき声。直接話法。
21. 「クーシューケーホモ ナニモ アルモンカ」ささやき声。直接話法。
22. 「センジダシテ」[señdzi da si te] 無造作な発音。

23. 「アノー」指示代名詞。思い出しながら話しているために屋位の拍が長呼されている。
24. 「ソノ」間投詞的用法。
25. 「センジ」 [se̥z̥i] 無造作な発音。
26. 「イラネーッ」 強く発音。直接話法で。
27. 「ソコカラノ」 不明瞭。「ガサガサノ」という樹皮の形容らしい。
28. 「ソノ ツル」 次の丁の発話によって途切られた。
29. 「マツ」 次のAの発話によって途切られた。
30. 「イロノ」 次の丁の発話によって途切られた。
31. 「センジテ」 [se̥z̥ite] 無造作な発音。
32. 「ネータタテ」「ネータタシテ」の言い間違い。
33. 「ヤツ」 次の〇の発話によって途切られた。
34. 「ガーゼニ」 次のKの発話によって途切られた。
35. 「ケツアツノ」 次のAの発話によって途切られた。

5 昔の商店

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志乃 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシャー ホーットニ オッカネーンダッテネー アキ
ます 曽は 本当に 怖らしいのだってね
ネーヤガネー ナンゲンモ ナカッタツチューカラネー (Tナカッ
商店がね 何軒も ながったというからね。 (ながたね。)
タネー。) センコー カウニワ ヨロズヤダケシカ ナカッタツチュー
線巻を 買うには 万屋だけしか ながったといったものね。
タモノネー。

T ソーカシンネー。ネー。

そうかしれないね。

O ソーダチッタヨー。

そうだと言ったよ。

T コドモン トキニワ ソコニ ^ア_ア カネコサンチニ (^ソーダ。)
子供の 時には そこに 金子さんの家に (そうだ。)

ツ アノー (A モリガ モリサンガナー。) ツテ ャッタネー。
xxx あのう (森が 森さんかな。) やったね。

A ツーダ。

もうだ。

O ツレ オレナ⁽¹⁾ンゾガ

それは 私などが

A オレナ⁽²⁾ンゾガ オベータノガ

俺などが 覚えたのが

T オレナ⁽³⁾ンゾガ オベーテッカラタ。

俺などが 覚えてからだ。

O ツー オレナ⁽⁴⁾ンゾガ (A ソントキニ ナレバ ハー) ガッコーエ
ラン、 私などが (そのときに なれば もう) 学校へ

クル ジブン /

来る 時分の

T シタエ ダイブ ミセガ デキタ。

下に だいぶ 店が できた。

A ダイブ アキネーガ デキタタ。

だいぶ 商店が できたものだ。

K ドンナ モンガ アッタダヨ オジーナンカノ トキニワ。
どんな ものが あったのだよ、 おじいなどの [お供] 時代には。

A アブラヤガ イッケント ヨロズヤガ イッケングレー。アトワ
油屋が 一軒ヒ 万屋が 一軒ぐらいいさ。あヒは

/ ノミヤガ アッタグレー。

xxx 飲屋が あったくらい

O アキ⁽⁴⁾ キンペーサンガ アッタヨネー。

ああ 金平さんが あったよね。

T キンペー サン マッタネー。

金平さん あつたね。

A ソツツギガ キンペー サンタッペー。

その次が 金平さんだろ。

O ソレト一 アノ一 カイツツアン / オヤジガ コオサンガ⁽⁵⁾ アレ
それと あの 嘉一さんの 親父が、 光さんが あれを
一 マッタダイネー。

やつたのよ。

A ソレッカラ ズット ノチニ ナッテダ。

それから ずっと 後に なつてだ。

O ゴフクヤオ マッテ。

吳服屋を やつて。

T ン一 ゴフクヤ マッタネー。

うん 吳服屋を やつたね。

A ソレ メニ トーフヤオ サンペードンガ マッタダ。

その 前に 豆腐屋を 三平さんが やつたのだ。

O サンペー ドーフッキューデ。

三平豆腐といふので。

A トーフヤ ソレガ⁽⁶⁾

豆腐屋、それが

T カドヤカラネー アノー ナガイマテ ナガイノ イリグチマテ

賀登屋からね あのう 長井(名字)まで、長井の 入口まで

ゼンブ タンボダッタダ。

全部 田圃だったのだ。

A タンボタッタンタ。

田圃だったのだ。

O タンボダッタンサネー ソテ ナガイワ ナガケードーテ⁽⁷⁾ ズーッ
田圃だったのさぬ、それで 長井は 長街道で ずっと
ト エレー モンダッタンネー (ト エレー モンダッタネー。) リヨーホ
たいしたものだったね、(たいしたものだったね。) 両方が
一が デッケー (イケガ アッテ) タンボデネー (タインタモ
大きな (池が あって) 田圃でね、(たいしたもの
ンダッタネー。) ホントニ。
だったね。) 本当に。

A タイシタモンダ。

たいしたものだ。

O ムカシャー ャタラー アノ アレダッタモノ ヨベナカッタッチュ
昔は 滅多に あの、あれだったもの、呼べなかつたヒラ
モノネー。(ソーラシーネー。) チャント オトリツキガ ナケ
ものね。 (そららしいね。) ちやんこ お取り次ぎが
リヤー (シ。) オクノ ヘヤニ イテ トーレナカッタチュー
なければ、(さん。) 奥の 郎屋へ いく、通れなかつたというね。

一。

T ソーラシーネー。

そららしいね。

A ン→ サダヨシドンチュー シトワ アレダカラ。
そうさ、定義さんヒラ 人は あれだから

O サダヨシドンチュー シトワネー。

定義さんヒラ 人はね。

T ソノ シトガ ケンカイギイン ャッタンカイ。
その 人が 県会議員を やったのかね。

A ソノ シトガ ケンカイギイン ャッタンサ。

その 人が 県会議員を やったのさ。

O オマツツアンノ ^(B) アニーカイ。

おマツさんの 兄かね。

A アニーダ。

兄弟。

T ゾーダネー オマツツアンノ ニサンダッタネー。

そうだね おマツさんの 兄さんだったね。

A イゲンガ アッタイ カオニ ヒゲガ ハイテ。ケンドーノ センセーデ ホーシンリューノ センセーデ。

先生で、法神流の 先生で。

O オトリツギガ ナケリヤ ゼンゼン アエナカッタダッчуーモノ ネー。イマワ ハー オトリツギズラ ネー (°笑)。

今口 もう お取り次ぎどころではない。

T キヤスク イエルヨーダ。

気安く 言えるようだ。

A ~~~~~

O テーッケー ウエキ アッタッテ ウエキー オイタッテ ナンニ 大きい 植木が あっても 植木を おいても 何にも

モ ナンネーチューデ ナカチヤンガ ^(B) ズイコン ズイコン ミー ならない というので なが(人名)ちゃんが ズイコン ズイコン

ンナ イー マツガ アッタノニ ミンナ モトカラ ズックリケ 執 いい 松が あったのに 執 モヒから 挿いて倒して

— シチャッタ。⁽¹⁰⁾

しまった。

A モッテーネーヨーダッタイナー。

勿体ないようだったよな。

T アカマツノ イーンガ アッタネー アスコニネー。

赤松の いいのが あったね あそこには。

A アカマツ イーンガ アッタ。

赤松の いいのが あった。

T イケバタニネー。

泄端にね。

O ソイデー ナカチャシガ ズクリケージチャッタト。オマッツア
それご ながちゃんが 挽いて倒してしまったって。 おまっさんが
ンガ キテ オコッタッチューケド オコッタラ クッヅケラッサ
来て 怒ったヒイラケビ、 怒ったら、 おつけなさいヒ
イッテ ユッタチド ⁽¹¹⁾ドーショーモネー。
言ったヒイラケビ どうしようもない。

K ソレモ ジダイノ ナガレダ ショーガネーダッペソラ。
それも 時代の 流れだ しかたがないだろう、 それは。

O ソコンチノ ムスメガ ズコ ⁽¹²⁾アノ ズイッキルダカラ ドーショ
そのうちの 弟が あの ズイコン セカラのだから どうしようも
モネーネー。(Tシ) オマッツアン キテ オコッタッチャタ。
ないね。(うん。) おまっさんが 来て 怒ったヒ言った。

T ヘー。
[↑]

へえ【もうがね】。

注

1. 「オレナンゾガ」次のAの発話と重複したので途中で言いさした。
2. 「オレナンゾガ オベータノガ」「俺などの記憶にあるのが」の意。次のTの発話によって途切られた。
3. 「オレナンゾガ オベーテッカラダ」「俺などの記憶にある頃からだ」の意。
4. 「キンペーサン」雑貨屋の名前。田中金三郎といら人がやっていた。
5. 「コオサン」少しつまめて「コ」と「オ」を独立に発話した。[ko^{20saŋ]}]。人名、光一の略+さん。
6. 「ソレガ」次のTの発話によって途切られた。
7. 「ナガケードー」長い門内の道。
8. 「オマツツアン」接頭辞「お」+人名、マツ+「さん」。
9. 「ズイコン」擬声語。木を挽く音を表す。
10. 「ズックリケーシチャッタ」、「ズックリケース」は「ズイコン」比「ヒックリケース」のコンタミネーション形か。
11. 「クツケラッサイ」「ラ」の部分は[dza ~ dza]のように聞こえる。破擦音的弾き音。明確な形は「クツケラッシャイ」であると言う。「シャル」系敬語の命令形である。
12. 「ユッタチド」明確な形は「ユッタッキューケド」。「~という」の意の「チュー」は時に直音化して「チ」となる。

6 昔の菓子・飴売りのおばあさん

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ソノ オジーナンカノ チッキエー トキワ アレキアーソノ
おじいなびの 小さい ヒキは あれがよ,
アメナンカ ドーユー アメダトカ ソンナ モナー アッタダメ
飴なび ビういう, 飴だヒカ モんな ものほ あつたぞうけめビズ。
ペケドサ一。

A アッタサ一。

あつたさ。

K ソーユー アレフ^(o)
もういら あれほ

O マックロナ アメダマッキュンガネー イチエン カウト トツ
真黒な 飴玉ヒイラガガム 一円 買うヒ 十粒ぐらい
ブグレ アッタ。
あつた。

A イワダマト ネジッタ マット。

岩玉ヒ 振った ベッヒ。

T ソイデ オランカノ オランカ オランカッテ コター ネー ケド
それで 僕などの、 僕など 僕など ヒ う ニヒは ないけんじき,
サ一 アノ ジブン ブッ カミ ブッ カキアメッ テンガ アッタ。
あの 時分 ブッ欠き 飴というのか あった。

O ブッ カキアメ。

ブッ欠き 飴。

A ブッ カキアメ。

ブッ欠き 飴。

T ヒツヨーニ オージテ アント イッ センテ ユートネー アノー
必要に 応じマ 一錢ヒ 言ラヒハ
イタ一 イタニ フシテ アンダヨ (Oソーダ。) (Aソーソー。)
板 板に 伸して あるのだよ。 (もうだ。) (もうもう。)
ウドンノ アノー マツミテニネー バンノ ウエデ フシテネ
うどんの あのう やつみたいには 板の 上で 伸してね
— コノクレー アツク ナッテンダヨ。ソレオ アノ フミテ
このくらい 厚く なっているのだよ。それを あのう, 肥び
コツン コツン ケンノーデ タタイテ (Oコン コン⁽²⁾ タタイチャ
コツン コツン 玄 箔で 叩いて (コン コン 叩いて
— ネー。) ソイデ テキトニ ウッタシダイン。

それで 適当に 売ったのだよね。

O ソーソー。

もうもう。

K ヘー。

へえ。

0 ブッ カキアメバー サマッキュデ オヨシバー⁽³⁾ ガ

ぶっ欠き食餉ばあ様ヒイロのて おヨシばあが

T シー ヨシオバー^ガ マッタンダ。

うん ヨシおばあが やったのだ。

A ハタゴヤエナンゾ トマッテテサ一 (Tシ^ス) ソイデ ホコノ⁽⁴⁾ ハ

旅籠屋へなび ジャッテテ^カ (うん。) それで そこの

ジラエ ブツケテ コワシチャ一 ノバシチャ一 (Tノバシテ
柱へ がっけて 壊しては 伸しては (伸して
シ一 シー シー。) シー ヨル (Tテツバキ ツケテネー。) (°笑)
うん うん うん。) うん、夜 (手唾を つけてね。)

ン ヨル コセーチャ一 ソテ^ア シタダ^タ テツバキ ツケチャ
うん 夜 作っては それで あれ したのだ、手唾を つけては。

一。

K ノシテ ソイデ ノシテ。

伸して、それで 伸して【かぬ】。

A ソイデ ノシチャ一 コーニ ~~~

それで 伸しては こうに

0 コマヨセノ シンノジョー^{ガノ} オヤジガ ソレテ^{シタダノ} キ
馬寄(地名)の 遊え丞の 親父が それで したの、

リギリアメッキュンデ⁽⁵⁾ コーニ キリギリギリギリ ~~~
ギリギリ 館ヒラハで こうに ギリギリギリギリ

A ソレワ マタ ミズアメサ一。ソレワ ミズアメ。ブッ カキアメト

それは また 水餌さ。それは 水餌。 ぶっ欠き食餉と

ミズアメワ チガウン。

水餌は 違うの。

O ソイデ アスコキテ ャッタン。ソナンガ ミンチ ハジマリ
それで あそこに 来く やったの。 みんなのが みんな、 はじまりだよね。
ダイネ。

A ウドンゴナテ アレ マゼテ ソレデ ブッカキアメ。トミチヤン
うびん粉で あれを 混せて それで ぶっ欠き食。 富ちゃんが
が ユーノワ ブッカキアメ。
言うのは ぶっ欠き食。

T ブッカキアメ。

【もう】 ぶっ欠き食【だ】。

A ギリギリッチューナー ハシーカランテ⁽⁶⁾
ギリギリ【食】ヒロラのは 着を からんで

T シー ハシーカランテ (ソレ ミズアメテネー) ミズアメ
うん 着を からんで (それが 水食では。) 水食、
イマノ アサダアメタ カンニ ハイッテル アサダアメ。
今 プチ食だ 鏡に 入っている プチ食だ。

A アサダアメト オナジダ。

プチ食と 同じだ。

O イッセンヤッテ イクラッテ コーニ アレー スルシナ
一錢 やって 稲穀 こうに あれを するからな。

K ソノコロ イッセンダ⁽⁷⁾ ャッパリ。
その 嘘 一錢だ やはり ?

O イッセンサー ョ⁽⁸⁾ アノ ヨシバーサマガ アノ ブッカキアメテ
一錢さ , あの , ヨシバーサマガ あの , ぶっ欠き食⁽⁹⁾ だね。
ネー (A ブッカキアメ ソーダ。) ヒー ヘー ヒー ヘー ナビヒヌ。
(ぶっ欠き食 そうだ。) ヒー ヘー ヒー ヘー ナビヒヌ。

ネー アレーノ カサッカキカイ。

あれはあの、かさかきかね。

ト キョーシヨカッタネー。

調子よがったね。

ア カサッカキダ カサガ カイタンダ。

かさかきだ、かさかきになつたのだ。

オ カサッカキテ ヘー コンジヤ ヘー⁽⁴⁾。イマニモ キレ
かさかきで ヘー こんにちは ヘー ヒ今にも
キガ キレソーネー。

息が切れそうね。

ト ソイデ キレナカッタネー。(皆笑)

それで切れなかつたね。

ア ソイデ ニクマレバーサマテナー。

それぞ憎まればあ様ぐな。

オ ハシゴッペ・シッテ・クレナンテ ネー ビー[↑] ギー[↑] ナンテネー
梯子、足をひってくれなどとね、ビー[↑] ギー[↑] などヒね,
ヒッヒッヒ⁰ナンテ コレワ フサビダナンテ マー(笑)。
ヒッヒッヒ⁰などヒ⁰これは 極だなどヒ まあ。

ト デ アノ シトノ ユッタンガ オレ イマン ナッテ ソー オ
で、あの人の言ったのが俺 分に なつて そう
モッタケドサ一 アレ イーズカケートーナンダヨ。オレノ オフ
迷ったけれどさ あれ 飯塚系統なんだよ。俺の

クロノ デドコノ ナンダ イーズカ ナンダッタカネー。
御袋の 出所の なんだ、飯塚 何だったかね。

ア スリブチノカー。

摺淵のか。

T シ♪。

うん。

O ヘー↑。

へえ。

T ホーイデ オレワ アノー シンダラ オメー セワン ナルンダカ
それで、私は 死んだら おまえの 世話を なるのだから
ラチュート ヒトツズツ ヨケー クレター オレニ (°ヘー)。
ヒ言うと ハヒツズツ よけいに くれたよ 俺に (へえ。)

ヒトツカケズツネー。ソースト ホントニ オレガ ハカモリン
一欠ずつね。 そうするヒ 本当に 俺が 墓守に
ナッチャッタ。オレ シトリタヨ。(°ヘー)。オテノ セドニ
なってしまった。 俺 一人だよ。 (へえ。) お寺の 裏に
ポント アノー (°アルンカイ。) (A ワタッペー。) アルケドネー。
ポント (有るのかね。) (そうだろ。) 有るけれどね。

ボントネー ショーガツ ショーガツ オガムノ オレッキリタヨ。
盆ヒ始 正月 振るのは 俺だけだよ。

O アンナ アクタレバーサマー アレダナー ドンナ シニザマ シ
あんな 悪なれはあ様は あれだな どんな 死に様く
ルナンテ ミンナ ワルクナ イッタケド コロリ シンデネー
するなどヒ 隅 悪口を 言ったけれど コロリ 死んでね
テーテー イー シニカタ シタダ。
たいへん 良い 死にかたを したのだ。

A イー シニカタ シタダ。

良い 死に方を したのだ。

K マッパリ ツー マッテ ウリアルッタタッペー。
やはり そう やって 走り歩いたのだろ。

O ウリアルッタ (T ウリアルッタ。) ショイアルッター。

走り歩いた (走り歩いた。) 背負い歩いた。

T ショットサー ダーラ アノー ゼンソクニ ~~イマ~~ イマニモ イ
背負ってさ だから 喘息に 今にも
キガ キレソーナンダヨ。オテラノ ダイモン アガッテ クルト
急が 切れそうなんだよ。 お寺の 大門を 上って くると
モー イマニモ イキガ キレソーテ ソイデ ワルクチワ イ
もう 今にも 息が 切れそうで それで 悪口は
ツタンダカラ。

言ったのだから。

A ワルクチベー。

悪口ばかり。

O アー→ ソレコソ ワルクチノ イーホーテー。

どうだ、 それこそ 悪口の 言い放題。

A アノ シトガ ~~ホム~~ ホメルナンキュ コト ナカッタ。
あの 人が 誉めるなどという ここ 無かった。

O アガリハナ キテ イナケリヤ アー→ コー ヒッパタイト ホイ
上がり端へ 来て いなければ もう こう へっぱたいス それで
デ ハー アメ カウ ^(ア) カエッキュンテ (A カエッキューテ) ハ
もう、 食を 買えといふので (買えハラので)
一 千ドリナンゾ クルックチュート ハー ノケセー ヒックルケー
もう、 千鳥などへ 来るといふ もう あおむけに ハッカリかえって
ッテ アガリハナエ キテ チドリノ シトナンゾガ キ ^(ア) ネテル
上がり端へ 来て、 千鳥の 人などが 猥褻しているのだ。
ダ。 カイコドキナンゾ キタッテ イソガシーカラ ソンナ カサ
蚕時など 来ても 忙しいから、 そんな

カキノヨーメ コエダカラネー キケーネーカラ ^シ_{xxx} キケーテ
かさかきのよな 声だからね 聞こえないから， 聞こえても
モ シラバックレテルンサー。ソースルトアタレ ユッテ？タ
しらばくみてれのき。 そうするヒ 懸念れを 言っては
⁽¹²⁾ リ ナッテルダイ。ソノ ヘンナ コエデ。シラバックレテルンサ
大きな声を出しているのだよ。その 疎な 声で。 しらばくめているのき。

K ソラ コップテ ツクッテ。

それは こちうで 作って かね?

T ジブンデ ツクッテ (A ジブンデ ツクッテサー) (K ジブンデ
自分で 作って， (自分で 作ってさ) (自分で
ツクッテ.) ジブンデ ツクッテ ショイアルッタン。ダーラ ソノ
作ってか。) 自分で 作って 背負い歩いたの。 だから その
ショイカゴッテンガ ザマッカゴー イマー ソユ スガタ
背負い籠というのが ざま籠を 今は そういう 姿は
ナク ナッタケドサー アノ カゴノ フチガネー ^{テア}_{xxxx} テアカ
無く なったけれど あの 篠の 篠がね 手垢
ツチュンカ テアブラデ (A シアブラデナー) (D ヒカッテタ.)
といふのか 手油で (うん 手油でな) (光ってた。)
クロク ヒカッテタ。 (K ヘー。) ソレ セナカエ アノー アタル
黒く 光っていた。 (へえ。) それを 背中へ 当る
トコダケ 又ノ オツツケテサー。ソイデ ショイアルッタンタ
所だけ 布を つけてさ。 それで 背負い歩いたのだよ。

ヨ。

K ナルホドネー。

なるほどね。

O ソノ ザマッカゴ イレル一 ナンダネ イロシナ モノ ブッコ
その ざま籠へ 入れる 何だね いろいろな ものを ぶっ込んで
ンデ ソノ ウエー コー ハコ一 アゲテネー ソノ ハコノ
其の 上に こう 箱を 上げてね その 箱の
ナカニ ブッカキアメガ アルンサ。
中に ぶっき餅飴が 有るのさ。

T アレンダヨ。

有るのだよ。

K イクシユルイモ ドーセ イレテルタッペ。イクツカ
幾種類も どうせ 入れていらう。幾つか

O ソイデ ゴマナンズ一 シメニヤ一 イレテネー。
それで 胡麻などを 終いには 入れてね。

A ゴマー イレテ ゴマモ ヨク イレタ。
胡麻を 入れて、胡麻も よく 入れた。

O イレテ ャタソナネー。⁽¹³⁾ シトイロッキリサ一。
入れて ゃったのさね。 一色だけさ。

A シトイロッキリサ ナニモ アリヤ一 シネー。
一色だけさ 何も 【他には】ありは しない。

O ソレッキリ モチアルクン。ソイダカラ ヨッポド ヨシットデ
それだけを 持ち歩くの。 それだから よほど 生きていたのだよな,
⁽¹⁴⁾ ナツノト キヨンサンガ クルトキ キマッタッチタラ テー
清(人名)さんが 来る とき, 決まったと言ったう
⁽¹⁵⁾ ラジュー キテ ワルクチ イッテ ⁽¹⁶⁾ アルッタッキュテ オキンサ
平中 来て 悪口を 言って 歩いたし いうのご お金さんがね

ンガネー クヤシガッテ (トシ-シ-シ-ニショ-ノ) ニショ
悔しがって うん うん うん 西屋(地名)の。
一ノ オキンサンガ クヤシガッテ マー オヨシバー サマガ シ
西屋の お金さんが 悔しがって まあ、 おヨシばあ様が
一イッテ アルッタッキュード アノー オラガ ウチワ ケ
そう 言って 歩いたといふけれど、 あのう、 私の 家は
ツカラ ハイリコムヨーダッテ ミンナニ ユッテ アルッタンサ
穴から 入り込むよう ドビ 城に 言って 歩いたのさね。
ネー。キヨシガ ウチワ アノー ケツカラ ハイリコムヨーナ
清の 家は あのう 穴から 入り込むような
ウチダッテ ユッテ アルッタンサー。
家だって 言って 歩いたのさ。

A コンチワーッテ ユエバ セドエ デル 〜 コンチワーッチユ
こんなちはヒ 言えば"裏へ 出る こんなちはヒ 言えば"
エバ セドエ デルヨーナ ウチダッテ ユッタ。
裏へ 出るような 家だって 言った。

O ソー イッテ ユッタッキューテ マー。
そう 言って 言ったといふので まあ。

A ヨシバー サマガ 〜
ヨシばあ様が

O ヨシバー サマガ ソニ キテ ユッタンサ オラガ チーアタリ
ヨシばあ様が そうに 来て 言ったのさ、 私の 家あたりにも
モ キテネー (Kシ.) オレガ ホー イチネン サキ キタン
来てね (うん。) 私の 方【には】一年 先に 来たのかな
カナー ホーイデ ヨシバー サマ ソー イッタダッキューテ オ
それで ヨシばあ様が そう 言ったのだといふので

キンサン クヤシガッテ (°笑)。

お金さんが 傷しがって。

K ドーセ ズイブン ソーユヨーナ ウチダッテ アッタダッペー
ビッセ ずいぶん， そういうような 家だって 有っただらうな，
ムカシダカラネー。

昔だからね。

T ムカシヤー イロイロ キヨクタンドッタカラネー。
昔は いろいろ 極端だったからね。

K ネー。キル モンカラ クー モンカラチュエバ イロイロ ザツ
ねえ。着る ものから 食う ものから といえば” いろいろ 雑
ダッタッペーカラ。
ミッキラから。

O ン→ ザツダッタサー。
そうだよ， 雑だったさ。

注

1. 「アレワ」次の口の発話によって途切られた。
2. 「コンコン」二度目の方がやゝ高い。
3. 「オヨシバーガ」次の丁の発話と重なったため途中で言いさした。
4. 「ホコノ」[xokono] [x] は軟口蓋摩擦音。
5. 「ギリギリギリギリ」歌うような調子で。
6. 「カラムデ」次の丁の発話によって途切られた。
7. 「イッセンダ」円より下の一錢二錢という単位だったのか。
8. 「ヒー ヘー ヒー ヘー」擬声音。「ヒー」の部分は息を吸って喉を鳴らしている。「ヘー」の部分は息を吐いて喉を鳴らしている。
9. 「ヘー コンシャ ヘー」押さえたかすれ声。ものまねをするように。
10. 「ヘー」無声喉頭摩擦音。
11. 「カウエッシュンデ」「カウ」と言いかけて「カエ」と言いなおしたために「ウ」の音が弱く残った。
12. 「ユッテタリ」話者の説明では「ユッテチャ一」(言つていい)と言っている、といふことである。
13. 「シトイロ」一種類。
14. 「ヨシットデ ナツノト」話者の説明では「イキテタダイナー」ヒ言つている、といふことである。
15. 「テラジュー」森山(地名)の中の平ヒイラ組中。
16. 「イッテアルッタ」言い廻ったの意。
17. 「コンチワーッチュエバ セドエ デルヨーナ ウチダッテ ユッタ」この部分笑いながら。

7 病気見舞の品物

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アーメシナンザ カラーメシデ アツワ コメー イレナクモ ク
粟飯などは 空飯で 粟は 米を 入れなくても
エルグレー ダッチュ オシエタモノ⁽¹⁾ ジョーダンジ⁽²⁾ ネー ヨ。イヌ
食えるくさいだ⁽³⁾ いうことを 教えたもの、 兄妹ではないよ。
ナンザ ハナシ⁽²⁾
今などは 話

A アーメシワ コメー イレナクモ クエル。
粟飯は 米を 入れなくても 食える。

O ハナシン ナンネーザー。

話に ならないや。

A ムギメシン ナケー アズ^{xxxx} アズキ一 イレルトカ アズキ一 イ
麦飯の 中へ 小豆を 入れるとか、 小豆を
レテ クエバ テーが イーヤ。
入れて 食えば 見栄えが いいや。

T オホシサマッタダカラネー。

お屋様と言ったのだからね。

O シュ オホシサマサー。

うん、 お屋様さ。

T ビョーニンノ マクラモト イッテ タケツニ コメー (°オコ
病人の 枕元に 行って 竹筒に 米を
メダ オコメダッテレバ ビョーニンガ ナオルッツン。) ビョーニ
(お米だ お米だヒ言つていれば 病人が 治るヒいうの。) 病人が
ンガ ナオルッツー マー ソンナ キョクタシナ ハナシダケド
治るヒいう まあ そんな 极端な 話しだされども
モ ゾーダッタソーダカラ ソノクレー キチヨーダッタラシヨ。
そうだったもうだから そのくらひ 貴重だったらしい。

O ン一 キチヨーダッタダネー。⁽³⁾

うん 貵重だったのだがね。

A ダッテ コノ モリヤマダッテダッペ タンボノ アッタノフ キ
だっそ この 嵐山(地名)でも だろう 田園の あつたのは
ウガ マー イチバン アルッキリテ オテラガ アルシー キヨ
【郵便】局【の家】が まあ 一番 あるだけで お寺が あるレ
シガ トコガ サンメー ウシオザイニ アッタッキリダッタッペ
清(姓)の どころか 三枚 後田に あつたきりだつたらう。
一。ダレモ ホカノ シトナンザー タンボノ タノジモ アリヤ
誰も 他の 人などは 田園の 田の字も ありは
一 シネー。
しない。

O ダカラ イマワ ボンモ ショーガツモ ネー ミンナー アレダ
だから今は 盆も 正月も ない、 着あれだ

ケド ムカシヤー ナ モノビツチエバ ウレシカッタンサネー。

けれび 昔は 物日といえば 嬉しかったのさね。

オサンヤサマダトカ ジュニサマダトカ ソブ タッヒニ タイ

お三夜様だとか ナニ様だとか その 度に

シタ モンジャ ネンサー アズキゲートカ マー スイトンダイ

たいした ものでは ないのさ 小豆粥とか まあ， 水団だよね。

ネー。マー ソーメン カッテ クル。シニカカッタ シトガ ツ

まあ 素麺を 買って くる。死にかかった 人が

一メン クグレー サネー。

素麺を 食うぐらいいね。

T ソーダネー。(T.A.K 笑)

そうだね。

K ノドエ トーンネー カラカラ。

喉へ 通らないからか？

O ソーサー。

そうさ。

T タマゴガ ホー ビョーニンダケダッタモノネー。ビョーニント

卵が もう 病入だけだったものね。病人ヒ

アカンボダッタカネー。

病人坊だったかね。

A シトン ビヨーキミメー二 クズガ クズノ コレ コノックレー
人の 病気見舞に 葛が， 葛の これ このくらいの

ノ マツニナー マルクッテ コノクレー ナ イマノ カンズメグ
やつにな， ぬくで このくらいな， 今の 誰詰めぐらいた

レーナ マツ。

やつ。

T ター クズコッテンガ アッタネー。

ああ 葛粉といらのが あったね。

O クズコッキュンガ アッタッペー。

葛粉といらのが あったろう。

T チョード アノ ボールガミノ チャズツタヨー。

ちょうど あの ボール紙の 茶筒だよ。

O ソー コレニ ヒキ キー モッタグレーナネー。

そう これに 気を 持ったぐらいた【太さの】ね。

A コレヨリ フテーヤ。

これより 太いよ。

O ↗。

うん。

A イマノ カンズメダ (ソシナ マツ ミミ) ニホンカ - サン
今の 鏡詰だ、 (そんな ヤフ) 二本か 三本
ボンダイナー ビョーキミメー。

だよな、 病気見舞【に持っていくのは】。

O サンボン コーニ ビョーキミメー モッテ クルン。

三本 こうに、 病気見舞に 持って くるの。

T ダッテ ニジュー アレガネー ニジュー ニジュー ゴセンカナー。
でも あれがハ 二十五金錢かな。

(笑) ヨク カイ一 ッタヨー オレ アラー。

よく 買いに 行ったよ 俺は、 あれは。

A ビョーキタナンテ

病気だなどヒ

O ソレト サトーオネー コー フクロダケワ デーッケー フクロ
それを 砂糖をね こう 袋だけは 大きい 袋ですね,

デネー↓ (↑ン↓。) アーユ マツ ミンナ サトーネー クレタダ
(うん。) あぬいら セツ 隅 , 砂糖をね くれたのだ

ツタイネー ビヨーキミメーニ ミンナ。
つたよぬ , 病気見舞に , 隅 .

A ビヨーキミメーサ。

病気見舞え。

O オボエテルヨ。

覚えていろよ。

K ソレ ユイツノ ビヨーキミメーノ シナモノダ↓。
それが 唯一の 病気見舞の 品物だ?

O ユイツノ ユイツノ ビヨーキミメーヰ↓。
唯一の 病気見舞【の品物】。

A ソレ ユイツダカラ。
それが 唯一だから。

O ソイデ⁶⁾ ヨメ^{xxx} ヨメゴニ クルト ソノ トシマ一 王一 セッキニ
それで 嫁に 来ると その 年は もう 李節の終りと
シヨ 4ユ一 テネー。
暑中でね。

K ン一↑。

何だって?

O ヨメゴニ クルトサ一 ソノ トシワ ミンナ アノ一 シキセ一
嫁に 来るヒキ , その 年は 隅 あのう 仕着せ ,
(↑ン↓。) ハルサキワ ホラ ヤマッキト 王モニキネ一 キセテ
(うん。) 春先は ほら 山着と 股引版 着せて
ソイデ一 ナツワ マ一 ヒトエモノ イチメ一 フユワ マ一
それで 夏は まあ 单衣 一枚 冬は まあ

アレダ アワセー キセタモンサーネー。

あれだ、 梶を 着せたものさや。

T ソーダッタネー。

そうだったね。

O ン ハジメテノ トシダケワ タビ イツォウ ゲタ イツォ
ラム、 初めての 年だけは 足袋 一足、 下駄 一足。
ク。 タビ イツォクグレー カッテ モラッタダケデ オメー
足袋 一足ぐらい 買って もうっただけで おまえ、
ヒトフユジュー ハケルモンジャーネー。

—冬中 着けるものではない。

注

1. 「オシエタモノ」この部分小声で。
2. 「ハナシ」次の A の発話によつて途切られた。
3. 「ンー キチヨーダッタネー」発話全体小声で。
4. 「オサンヤサマ」お月様をまつる行事。
5. 「ジュニサマ」山の神様。
6. 「セッキニ ショチュ一」話者の説明では「セチイショ一」と言つてゐる、ヒリうことである。その意味は暮に正月の着物を買ってくれること、である。ただし、この後の O の発話を追つてみると、季節の終りと暑中に着るものや身につけるものを買ってくれることの意でも矛盾はない。

8 出稼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

T ソノ ジブン テカセギッテング アッタダイネー。(Aソーソ
での 時分 出稼というのが あつたのだよね。
ー。) イヌデ ユー テカセギガ一。
今で 言う 出稼が。

O ソーサーナー。

そうさな。

K シ。.

うん。

T アン ジブン イチバン フケーキダッタネー。(Aフケーキダッ
あの 時分 一番 不景気だったね。
タイナーノムラニ シゴトガ ネンダカラ。
村に 仕事が ないのだから。

A オラガ ホージャ アシオドーザンニ イッタダ。
俺の方では 足尾 金員山に 行ったのだ。

T シー。

そうかね。

A シ。アシオドーザン イッタリ ネバザーハネバザージャ
もうだ。足尾金剛山に行ったり 根羽沢(地名)に、根羽沢では
ネーナメザワ。アシオドーザンニワナシナンネンモ
ない、奈々沢(地名)【に行ったのだ】。足尾金剛山には何年も
イッタイ。イカリヤミチサントイッタイ。
行ったよ。「イカリヤ」の未知さんヒ行ったよ。

T ヘー。

そうかね。

A シ。アスコニアルアノゲンノーナンガーアシオドーザン
ムン あそこに ある あの 云翁なびは 足尾金剛山から
カラ ジーサマ ショッテキタタ。
じい樹が 背負って きたのだ。

O デッケー~~~~

大きい

T コノヤマコシタンカイ。

この山を越したのかね。

A コノヤマコシテッタンサー。

この山を越していったのか。

T シー。

そうかね。

A シニッパグレニアウヨーニシテ(Tシー。[↑])ロクリンパンノコ
死ぬような思いをして(ふうん。)六林王を
シテッタンサー。
越していったのか。

K イマノ リンドーノ アスコノ オクノ (A シー↓) ロクリンパン
今の 林道の あそこの 奥の (もうだ) 六林班を
コシテカイ。
越してかね。

A ロクリンパンノ コシテ コーシンサンニ テテ ソイテ ミンザ
六林班を 越して 庚申山に 出て それで 金艮山に
ンニ デテ。
出て【行ったのだ】。

K オモニ アシオトカ ソンナ コーザンガ オーカッタ ワケダ。
主に 足尾ヒカ そんな 鉱山が 多かった わけだ。

A コーザンガ オーインサ。

鉱山が 多いのさ。

O オラガ テーン ナッテ コンダー コンダ キリュー／＼ ウメダ
私の 代に なっく 今度は、 今度は 桜生の 梅田へ
エ カセギニ ⁽⁴⁾ オジーナンゾ イッタ。
猿ぎに おじいなどは 行った。

A オラナンザー ムラダッテ セーカツヒニ ⁽⁵⁾
俺などは 村でも 生活費に

O マイトシ イッテ カン／＼ ショーワ ⁽⁶⁾ ニネン イッテ ソイ
毎年 行って 昭和 二年に 行って それで
テ カラダガ マイッチャッタ。
身体が まいってしまった。

T ャー ショーワ ニネン。
ああ 昭和 二年かね。

O シン オジー イチネン ミズン ナカデ シゴト シトフュジユ
三 おじい 一年 , 水の ゆご 仕事を 一冬中したもの

—ダモノ タマラネー サネー。

たまらぬいさね。

I⁽⁴⁾ ウメダワ ナニニ イッタン。

梅田は 何【の仕事】に行たの?

A ゴガンコージダッタネー ヒサカタマチー。

護岸工事だったね , 久方町に。

K アー カーラノカー。

ああ 河原のか。

I^{xxx} キリューノ (A^ノ) キタノネー。

桐生の (うん) 北のね。

A ヌシーソー キタノ。

うん, そう そう 北の。

I ノー。

そうだったの。

O シャシンガー ショワン イクタレ⁽⁴⁾

写真が

A ノコッテルカ シンネーネー。

残っていいか しれないな。

O ノコッテルカ シンネーネー。

残っていいか しれないな。

I ジー キリューガワノ ゴガンコージ。

では 桐生側の 護岸工事【だね】。

A ソーダッタイネー。アレガ アレテ 下キノ ゴガンコージダッタ。

そうだったよね。あれが 荒れて, 時の 護岸工事だった。

O ソレガ ナキヤー ウシー ヒーテ ドタッピキダモノネー⁽⁹⁾。

それが なければ 牛を ヨリヒテ ピタッ引きだものね。

T ソーダ^ベネー。

そうだね。

O シー[→]。

そうさ。

A ウンソーヒキガ ドタッヒキ。

運送引きが ヒタッ引き。

O ウンソーヒキガ ドタッヒキ。

運送引きが ヒタッ引き。

T ソノゴー コッチノ サボーコージガ ハジマッタ ラケカネー。

その後に こちらの 砂防工事が 始まった わけかね?

コノ シガキ["]ノ シガキ シガキダッケ シライワカ。

この 白岩(地名)か?

A シライワ ハー ソー ナッテ クルト ズット アタラシク ナ
白石 あし そら なつま くると ずっと 新しく
ッテ クルナ。

なつく くるな。

T アタラシク ナッテ クルダ^ベー ショーウン ナッタカラ。

新しく なつく くるのだね, 昭和に なったから。

往

1. 「イカリヤ」旅館の屋号。
2. 「ミチサン」人名, 未知造の略+さん。
3. 「ロクリンパン」場所名。営林署がある。
4. 「カセギニ」働きにという意味も含まれている。
5. 「セーカツヒニ」次の〇の発話によつて途切られた。
6. 「カンノ」意味不明。
7. 「I」調査者, 上野勇。
8. 「ショワン イクタレ」意味不明。
9. 「ドタッピキ」材木の頭に鉈のようなものを使うつけて繩で牛に引かせる運送法。『荷の運搬と牛の扱い』の項参照。
10. 「シガキ」話者の説明では平瀧といふ地名ではないかとのこと。「シガキ」ヒララ地名はない。

9 荷の運搬と牛の扱い

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

B 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

0 アサマドノ ナニ カシラナシカ一 アズコノ オテラノ ジショ
浅間戸(地名)の 何ぞ、 頭無(場所名)が、 あそこの お寺の 土戸門は
イマ アレカ一 ダレガ ツクッテル。イシヤナンゾガ ツクッ
今 あれが 誰が 作っている。 石屋などが
テルンカ。アノ一 カジュ一オケノ アノ ワキー キョクノ カ
作っているのか。あの 架車桶の あの 橋に 【郵便】局の
ラマツダッケカ テーッケ一ガ アッタイネー アレー キッテ
唐松だっけか 大きいのか あったよぬ、 あれを 切って
ソイテ オジ オヤジガ ダスッチュッタケド オレガニ コー
それで 親父が 出すと言ったけれど 私に こう
カタ一 アガンネーダイ。コドモガ ネ一カラ ャダ (^ オテラ
肩に 上がらないのだよ。 ふ供か ないから ハヤだ、 (お寺の
ノ カラマツダッタッペー。) ャダッテ オーダッテ イガナクチャ
唐松だったろう。) いやでも おうでも 行かなくては

ナンネー。ソイデ キッチャ一 オヤジガ ココ アケテ クレチヤ
ならない。それで 切っては 親父が ここに 上げて くれては
一 テメーテ アトカラ イッチャ一 モッテッチャ一 ウンソー
自分で 後から 行っては 持っていっては 運送に
エ ツケタダイ。(Kシ一。) ソンナ オモイ シタ (°笑)。
付けたのだよ。(そらかね。) そんな 思いを した。

K ウンソー ア ウンソーが デテッカラ ダイブ アレカ一。
運送、あ、運送が 出てから だいぶ あれか?

A ハー ウンソーが デテッカラ ダイブ ヨク ナッタ。ソレ メ
もう 運送が 出てから だいぶ 良く なった。その 前は
一ワ ミンナー ジゴロテ⁽²⁾ ヒクトカ ドタッピキサ一。
皆 「ジゴロ」で 引くヒカ ピタッ引きさ。

I⁽³⁾ ドタッピキッテナ一。

ドタッピキ ヒラの口は【どういうやり方で引くの】?

A ウシノ セナカ⁽⁴⁾ ケツイ アノ一 ドッコイ⁽⁴⁾ チュ一ノ イッツケ
牛の 背中、穴に あのう 「ドッコイ」 ヒラの口 煙いつけ
トイテ ソイデ ナワ イレテ アノ カス⁽⁵⁾ カスケミテナノ
ておいて それで 繩を 入れて あの 金糸のようないものを
コ一イニ ブッテネ ソイデ ヒクン。
こういう風に 打ち込んでね、それで 引くの。

I ナ一。

なるほど。

A ソイデ ジョートダッタ。⁽⁵⁾ ジョーズン ナッテ ハナゾリックュ一
それで 上等だった。 上手に なって 端橋ヒラの口
ノシテ ソイデ ヒクヨニ シタダッタ。ホッカイドーナンゾ
して それで 引くように したのだった。 北海道など

テフ⁽⁶⁾ コナイダマデ ソレ ャッタ ワケダイネー。ユナイダ リョ
では この間まで それを やった わけだよね。この間
コニ イッタ トキ ホッカイドー ミンナ ソレ マルダッタ
旅行に 行った 時 北海道は 岐 それを やるのだと言っ
ッケ。カザッテ アッタッケ。カイコン トキノ アレダナン
たっけ。飾って あつたっけ。開墾の 時の あれどなどと。
テ。ハナゾリッテ チーセー ツリサネー。ソコエ アノ ハナダ
端橋^{ヒラハシ} といふのは 小さい 橋^{ハシ}。そこへ あの、 端だけ
ケ アゲトイテ ソイデ アトワ ズルズル ズルズル (Kウンマ
上げておいて それで あとは ズルズル ズルズル (馬が
ガ ヒーテグ) ウンマデモ ウシデモ ヒーテ ウンマダイネー
引ひていいく【のか】?) 馬でも 牛でも 引いて、 馬だよね
ホッカイドー ワネー。オラ ホーワ ウシデ ヒータン。ソーデネ
北海道はね。 僕の 方は 牛で 引いたの。 そうでない
トキヤー タダノ ドタッピキサー。キマワシ^m チューンノ イ
時は たまの ピたっ引き え。 キマワシ ヒラウものを
ツモ ツケトイテ ソイデ ナンボンモ。アソシチャ一 又
いくつも 付けてみいて それで 何本も【引いた】。 そうして
ケチャ一 ウシガ トビダシテサー (I.A 笑)。
抜けには 牛が 縦伏出してえ。

K ザイモク オイテ キチマウヨーダ スケデテ。
材木を 置いて きてしまうようだ^ト 抜け出で。

A オイテ クルヨーダ スケチャ一 オイテ クル (I.K 笑) ソース
置いて くるようだ^ト 抜けには 置いて くる そろすほどだ
ルダ一 マタ一 ウシ一 トッヅカマエキ一 アレダ一 マタ一
また 牛を とっ掴まえては あれだ また

ヒッパッテ キチャ一。

引つぱって きては。

T アノ ウシワ マダ カイリョー シテ ナカッタロ。アノ ジブ
あの 牛は まだ 改良 して ながったろう。あの 時分の
シノ ウシワ ツオカッタイネー (Aツエー。^(A) ツノノイ 一ツノ
牛は 強かったよね (強い。) 角の、良い 角を
一 モッチャッテネー。
持っていてね。

O ン~ ツノ モッテネー。

うん、 角を 持ってね。

T アノ ウーチャンチ⁽¹⁰⁾ タメサクサンガ⁽¹¹⁾ コノ ウエテ⁽¹²⁾ ウシニ
あの、 卵ちゃんの家の 為作さんか この 上で 牛に
アノ一 カベットン⁽¹³⁾ トコロ オジツケラレチャッテネー。
あのう 壁のある場所の 所で 押しつけられてしまってね。

A ソーダ ソーダ。

そうだ そうだ。

T コノ (A チヨーセンウシダッタケドナ。) エー シル チヨーセンウ
この (朝鮮牛だったけれどな。) え【何と言った】? うん、 朝鮮牛
シイ⁽¹⁴⁾ テッカイ ウシダッタネー。
良い、 大きい 牛だったね。

A テッカイ ウシダッタ。チカラガ アッタイ。
大きい 牛だったよ。 カガ あったよ。

O イー ヨク ウシニ ツキトバサレタダヨネー。
よく 牛に 突き飛ばされたのだよね。

T ツキトバサレタネー。

突き飛ばされたね。

O マーッタク。

まったく。

T デモ ウシッテモ ニシケンノ セーク アノー スコーシ アノ
でも 牛といつても 人間の 所為か あのう 少し あのう
エサー クレルト カゲン スンダカ ツノト ツノノ アイ
飼を やるヒ 加減を するのだが 角ヒ 角の
ダエ ハサンジャ ンダネー。

間へ 挟んでしまうのだね。

A シーヴ。

もうもう。

I ジーヴ。

うん。

T ツノワ カケナイスヨ⁽¹⁰⁾。

角は 掛けないですよ。

A ツノワ カケナイ。

角は 掛けない。

I ココロエテル。

心で導いている。

T エソレダケ カン カンガエテンダ ムコモネー。アレ ツノ
ええ、それだけ 考えているのだ むこうもぬ。あれ 角で
デ ヤラレタラ イッ パツダネー。
やられたら 一発だね。

A ジーヴ イッ パツダ。

うん、 一発だ。

O アノ デッケー アタマデ オシツケルノ イテーマネー (T イテ
あの 大きい 頭ご 押しつけるのは 痛いやね (痛い。)

一.) ツノデ ネーッタッテ。サッキリ シニ ノブガ コーニ ア
角で なくとも。さくきりを しに のぶか こうに
トカラ イグッチュート リコードカラネー ナニモ ネー トコ
後から 行くヒュウヒ 利口だからね 何も ない ところでは
ジヤ シネーケド コ コンナ デッケー クワノキガ アル ト
しないけれど こんな 大きな 桑の木が ある
コエ ハ クワノキガ アル トコエ イグナット オモーッチ
ヒコヘ、 もう 桑の木が ある ところへ 行くなヒ 思うヒュウヒ
一ト モー コー ャッテ ツノー モッテ クルダ。アーノ カ
もシ こう やって 角を 持って くるのだ。あの
ラサワノ ハタケイ イグ トキ メーノ ハー 下モガ コー
唐沢(地名)の 畑に 行く ヒキ 前の 日に 友が こう
ヒツ ヒッパッテ アルッタラ オッカナカッタダト ダカラ ア
引っぱって 歩いたら 憲ろしかったのだって、 だから
シター シネーッテ 下モガ ナクンデ ソイジャー カーチャン
明日は しないヒ 友が 泣くので それでは 母ちゃんが、
ガ ダカラ シューガネー コーニ ニグラノ マンナカエ コー
だから しかたがない こうに 荷 鞠の 真中に こうに
二 ロップ ハサンドイテネー キノ トコエ イギソーン ナル
ローブを 押んでおいてね 木の ところへ 行きそうに なるヒ
ト アトカラ オシテグ シトガ ノブガ グーット コーニ ハ。
後から 押していく 人が、 のぶが グーッヒ こうに
クン。ソ一 シナケリヤー アタマー グーット モッテ クルン
引くの。 そう しなければ 【牛が】頭を グーッヒ 持って くるのだ。
ダ。マーズ ロクデネー ウシサネー。ソーユ 杏 ホーガ ツイ
ます るくでもない 牛さぬ。 そういう 方が

ー^ンダイ^一 口^クテ^二ネー (°笑) ホーガ⁽⁰⁵⁾。

強いのだよね、 ちくでもない ちが。

T チカラ アルンダヨ。

力が あるのだよ

A チカラワ アルンダ。

力は あるのだ。

K ヘー → コドモガ バカニ スルンサーネー⁽⁰⁶⁾。

なに 子供が 馬鹿に するのさね。

T バカニ スラーネー。

馬鹿に するよね。

A バカニ スルン。

馬鹿に するの。

T シトオ ミルヨ。

人を 見るよ。

K シン。

うん。

注

1. 「カジュー オケ」屋号。
2. 「ジゴロデ ヒク」木を輪に切って猫車で運ぶ。この前の運搬法は「ジグルマ」で、これは肩に縄をかけて引く方法であった。
3. 「」調査者上野勇。
4. 「ドッコイ」横棒。
5. 「ジョートダッタ」 [dʒo:tó datta]。[tó] の発音は、破裂の後の気音がめだつ。
6. 「デワ」 「デ」 の発音の子音部では破裂がほんびなく、舌先ヒ歯茎との間の狭めがあるだけである。
7. 「キマワシ」木に打ち込む管。ハーケンのようなもの。
8. 「ウーチャン」人名、卯作の略 +ちゃん
9. 「カベット」壁のある所。「何々の所」を「ヘット」という。
10. 「カケナイスヨ」 外来者である I に対して話している。丁寧意識から「デス」の縮約形「ス」を使っている。
11. 「エ」応答語「エ」は共通語的、これもやはり I に対する丁寧意識による。
12. 「ノブ」人名のぶ。
13. 「トモ」人名、友子の略。
14. 「グーット」擬声語。力をこめて発話。
15. 「ホーガ」この部分笑いながら。
16. 「コドモガ バカニ スルンサーネー」 子供を牛が馬鹿にするという内容の発話になるべきところ。

10 狼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシーメージ アノチドリノオジーナンゾガホ
ます昔、明治、あの千鳥(地名)のおじいなびが
ラ メージ ガンネンダケード アノオジーナンゾガワケーシ
ほら 明治 元年【の生まれ】だけれど あの おじいなびが若い
ノ ジブンワ オーカミガ ウント イタダッチューモノネー。
時分は 狼が たくさん いたのだというもののね。

A オーカミガ イタ。
狼が いた。

K シー。
ふうん。

T シー。
ふうん。

A ソリャー ウント イタッチッタイナー。
それは たくさん ハ たと言ったよな。

- 0 ウーント イタダッキッタヨー。(↑へー。) ソイデ イマ / タミ
 トトクン ハたのだといつたよ。 (へえ。) それで 今、
 ゾーカ ウチノ ヒーオジー。
 民歳の 家の 會おじい
- K オーカミヨカ イノシシガ デタジャ ネン。
 狼よりか 猪が 出たのでは ないのか?
- 0 ヒーオジーが (A オーカミモ イタシ イノシシモ イタサ) アタリ
 會おじいが (狼も いたし 猪も いたさ。) あたり
 ガネ ホラ (A アスコニ イマ 下ヤマニ アルノガ ミンナ イ
 がね ほら (あそこに、今 破山に あるのが 哉 猪)
 ノシシ ~~~.) オイガミ / シンジュバヤシッチュ (K シシマイ
 老神【地名】の 心中林ヒラ ((
 チュンガ アルネー。) アレガ ソーダッ チュケドサ - (A アレガ
 ヒラのが あるね。) あれが そだヒラけれど (あれが
 ミンナ シシマイ。) アスコデ シンジュ シタダッ チュケド ソレ
 哉) あそびで 心中 したのだヒラけれど 那を
 オ ヒラガーデー ヒラガーデー ガ ミンナ カツイデ クルダッタッ
 平川の連中 平川の連中が 哉 担いで くるのだった
 チュ - ケドネー (↑シ -) オーカミガ デテ モー ヒドカッタッチュ
 というけれビね (そがね。) 狼が 出て もう ハビがったヒラ。
 ヨ。 オッカナクッテ ミーンナ サキ - タツンモ ヤダシ ア
 こわくて 哉 先に 立つのも いやだし
 トエ タツ タツンモ ヤテ ミンナ ゴチヨ ゴチヨ ゴチヨ ゴ
 後に 立つ、立つのも いやで 哉 ごちよ ごちよ ごちよ
 チヨ ゴチヨ ゴチヨト フターリオ カツイデ クルダッタッチ
 ごちよ ごちよ ごちよヒ 二人を 担いで くるのだったヒラけれど

ケド (↑シ♪。) オッソロシカッタッチュッタ オッカナクッテ。
(ラン。) 恐ろしがったといった、 こなくて。

A オーカミワ アンマリ イテ ドーショモネーチューテ "ソイデ"
狼は あまり いて ビラしようもないといふので、 それで
メージ ナンネンダッケナニ (^ テー⁽²⁾ンデ) ドクー クレタダッ
明治 何年だけに (こんで) 毒を やつただろう。
ペ。ソイデ ミンナ シニタエチャッタ。
それで 皆 死に絶えてしまった。

O オイガミカラ カツイデ キタラ ココノ ハー キョクノ ハカ
差神から 担いで きたら ここに 【野便】 局の 墓場の
バノ アスコン トコニ ウォン⁽²⁾ ウォン ウォント イテ ココ
あそこへ ところに ウォン ウォン⁽²⁾ ウォンヒ いて ここを
ノボッタラ マタ イテ ホイデ イシガミザカ イッタラ イ
登ったら また いて それで 石神坂(坂の名前)に行ったら
テ アレダッタモンネー ズーット コザカ イッタラ イテ イ
いて あねだったものね ずっと、 小坂(地名)に行ったら いて
マノ チドリノ メー⁽²⁾ノ アノ オシメサマン トコ アソコ
今の 千鳥の 前の あの お神明様の ところ、 あそこ
マデ イタツ⁽²⁾ ツイテ キタッチューモノ。(↑オーカミガ⁽²⁾。)
まで いた、 付いて きたというものの。 (狼ががぬ?)
デ トート ロクシ⁽²⁾ ホントニ ロクシックモ ホッテ イケタ
それで とうとう 本当に 六尺も 掘って 埋めた
ッチケド トト⁽²⁾ ホリダシタッチューネー。(↑シ♪。) モー イ
ヒ⁽²⁾ い⁽²⁾ た⁽²⁾ け⁽²⁾ れ⁽²⁾ ど とうとう 掘り出したというぬ。 (うん。) もう
ツタ⁽²⁾ ツカレタラ ドーユーニ シテモ トツテ ツーッチュー⁽²⁾
一度 付かれたたら どのように しても 取って 食うというぬ。

ネー。(↑へー オクリオーカミッテ キータネー。) マーズ オッ
(へえ、 送り狼というのを 聞いた(にヒガある)ね。) まず
カナカッタツ チューヨー ジューゴロクダッタッタナー。
こわかったヒラヨ。 +五・六だといったな。

A ソコノ マサルクンノ イドン ナケー オーカミガ オッテ ソ
そこの 優君の 井戸の 中へ 狼が 落ちて
ンデ モサブローサンチ シトガ ハシゴ カケテ アゲテ クレ
それで 茂三郎さんという 人が 梯子を 掛けて 上げて やつたら
タラ ソノ オレーニ シカオ オイテッタナンテ ソンナ コト
その おれに 鹿を 置いていったなどヒラ そんな ことを
イッタッケ。

言ったっけ。

K ソンナ ハナシガ ソンナ ハナシガ アルダ。
そんな 話が、 そんな 話が あるのだ?

A アルヨー アスコニ イヌデモ ツリイドガ
あるよ あそこに 今でも 鈎り井戸が

O マサルサンノ ウラニ。
優さんの 裏に。

T シリイド アル。
うん、 鈎り井戸が ある。

A アレー オーカミ サラゲオチテ (↑へー。) ソイテ アガレネーテ
あれに 狼が 落ちて (へえ。) それご 上がれないで,
ニシヤー アガレネーゲダーチューテ ハシゴ カケテ クレ
おまえは 上がれないようだ というので 梯子を 掛けて やつたよ。
ター。ソシテ ソノ オレーニ シカオ オイテッタナンテ.*
そして その おれに 鹿を 置いていったなどヒ。

T シー。シカモ イタソーダネー ココワ。

そうかね。鹿も いたそだね ここは。

A シカモ イタヨ。

鹿も いたよ。

I オボエテッカラ イマシタカ。

覚えてから いましたか？

A イマダッテ イルベー イックラデモ イルデ。

今でも いるだろう いくらでも いるよ。

I シカガ。

鹿が？

A シー。

うん うん。

T コノゴロ フエタンダネー アレネー。^(A) (コノゴロ) キンリョー
この頃 増えたんだね あれね。(この頃) 禁猟,
キンリョー ナッテ。
禁猟に なって。

I シー。

そうかね。

A キンリョー ナッテ フエテ コンド オキノ ^(B) ホーエ ジョソ
禁猟に なって 増えて、今度 沖の方へ 除草剤を
ザイマイタッペ。^(I) (シ。) ソイテ ササカラシチャッタ
撒いたろう。(うん。) それで 篠を 枯らしてしまった
モンダカラ ミンナ ^(C) トマエ デテ キチャッタ。
ものだから 皆 浴の入口に 出て きてしまった。

往

1. 「メージ ナンネンダッケナニ」 「ナ」は日、年を表わす語につく接尾辞。
2. 「ウォン」擬声語。
3. 「オキ」 奥の意。
4. 「トヌ」 出入口の意。

II 配給と兵役

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O イマ - テーラデ マルケド アノ ジブンフ クミガシラダケデ
今は 平等に やるけれども あの 時分は 組頭 だけで
マルカラ ケッキョク ソノ アレダッペ センキョ シタラ
やるから 結局 あれだろう、 選挙を したら
ソノ ジトッキリニ コー ナッチャウンサーネー。
その 人きりに なって しまうのさね。

A クミガシラデ キメルカラ。

組頭で 決めるから。

O クミガシラデ キメチャ一 シチマッタ。
組頭で 決めては してしまった。

K ダカラ マーリノ シトワ ダマッテリヤ ヨカッタカラ スミヨ
だから まわりの 人は 黙っていれば よかったから 住み良
カッタ ダッペネー。
かった、 だろう ねえ。

T ナニカ イエバ アタマ オサエチャッタ。

何か 言えば 頭を 押さえてしまった。

O シー ゼッタイフクジューダッタヨネ。コメガ キタッテ ク
うん、絶対 服从 だった よねえ。米が 来たって
ミガシラガ ハイキュースルダモノ ネー。

組頭が 配船 するのだと もの よねえ。

T リーダネー。

そうだねえ。

A センソートージワナー。

戦争 当時は なあ。

O ヒデー コトダッタ。

ひどい こヒだった よ。

K (笑しながら) ヒーテー⁽¹⁾ コトダッタ。

ひどい こヒだった。

O ソイデ (ヒデー コトダッタナーノ) テーラニ アノ一 コメ
アレダッペー もれで あれだらう (ひどい こヒだったなあ。) 平らに
一 ハカルニ クボッタ? カキオトセバ ヨーク ミテテ ヒト
を 射るのに 低く 摂き落せば よく 見ていて、ヒ
ツカミダッテ ホシーダカラネー。ハイキュー。ハーナー
掴みだって 欲しい のだから ねえ。配船【米】。

ニ クニマッツァンガ クボーグ ハカッタ ナンテ (皆笑)。
国松さんが 低く 計った なんて。

マデモ イマデモ イカリノ トモチャンガ クニマッツアンガ
今でも いかりや(屋号)の ヒメ(人名)ちゃんが 国松さんが
ハイキューメー⁽²⁾オ⁽³⁾ アノ コーニ⁽⁴⁾ クボーグ⁽⁵⁾ ハカッタナンテ。
配船 米を こうに 低く 計ったなんて。

アノー クボーグ ハカッテ ニショ一 ハカリダスノニ ドコ
低く 計って ニ升 計り出すのに どう
⁽⁴⁾
ヤッタッペ。
やったさう。

K モットモ ネー トキ!
もつとも、無い 時だから ねえ、 一粒だって 本
ントニ シンケンダッタ。
当に 真剣だった。

T ソノ クレニ シネート アノー タンナカッタンダヨ。
その 位に しないヒ 足りなかつたのだよ。

A タリネンダヨ。
足りないのだよ。

O ニニショ一 ハカリダスノニ ドコ ヤッタッペッテ ユーカラ
ニ升 計り出さるのに どう やつたさうヒ 言うから
オラ・ンダ⁽⁵⁾ モロー ケンリワ ネンダカラ タンボ ツクッテ
私などは 黄ラ 権利は 無いのだから 田園を つくるて
ルカラ ジブンデ⁽⁶⁾ トリマーシネー⁽⁶⁾。トコロが アノー ミヤショ
いるから 自分で 取りほしない。ところが 「宮の背戻」
一ノホラ ショーラガ⁽⁷⁾ アスケー キテタノニ ソイツオ キョ
の 正シガ あそこへ 来ていたのへ それを、局
ケデ⁽⁸⁾ クチヨーデ⁽⁹⁾ トメサシニヤー⁽¹⁰⁾ マンネーデ⁽¹¹⁾ クレッチュ
で 区長で 止さんには やらないで くれといふ
オコトワリダカラ ウシオザイウチガ⁽¹²⁾ アノー アレ シタダ
お断りだから 後田の家が あれをした
カラ マンネーデクレ。ココ キタベーダカラ マンナクッチャナ
から やらないでくれ。ここへ 来たばかりだから やらなくては な

ンネー。オーラガ シーサマモ ハラニ アッタカラ シカターネー⁽¹⁾
らない。私の じい様も 腹に あつたから 仕方がない
テメーノ タナコダカラ トモジーサマニ⁽¹⁾ ニショ一 ヤンナク
自分の 店みだから 友じいさまに ニ升 やらなく
ツチャ ナンネーカラ フボ フボッタッテ⁽¹⁾ ミンナ ハカルンサ
ては ならないから 低い 低いと言ったって みんな 計るのさ。
(笑)。ソイデ ハカリダシタノオ ミヤノ ショザイ ャッタン
それで 計り出したのを 「賓の 背戸」に やつたの
サ。ソシタラ イカリノ⁽¹⁾ オバーガ クニマツツアンノ アノ ハ
キ そしたら ハカリ【ヤ】の おばあが 国松さんの あの 計
カリダシタノ ドコ ャッタッペ (0笑)。ヤンナツチャフィネー。
り出したのを どこへ やつたろう。 いやになってしまふよねえ。

K マー エライ トキダ⁽¹⁾ トキダッペカラネー。マ キョード キョ
ま たいへん んだ 時だろうからねえ。 ま、 ちようび 今日
一ガ ソノ⁽¹⁾ キネンビダ⁽¹⁾ ネー。ハイセンキネンビダ。
が その (記念日がねえ。) 故戦記念日だ。

I イー ハナシニ ナッテキタジマナイ。
いい 話に 「な、てきち ではないか】。

O ソーテ⁽¹⁾ コツツア⁽¹⁾ シューセン ナッテカラ コツツアイ⁽¹⁾ イリヨ
それで こんびには 終戦【に】 なってから こんびには 衣料
一ガ ハイキューダナー。ソーテ⁽¹⁾ コッター。
が 配 手配 だ なあ。 それで こんびには 。

T アントキノ カネデ⁽¹⁾ アイテ⁽¹⁾ ユマシカラ ナニカラデ⁽¹⁾ ハチジュ
あの時の 金で あれひ 肥しから 何から ご ハチ
ーナンエン オレンチワ モラウマエ ミンナ タテカエタラシー
何円 俺の家は 貰う前に すべて 立て替えたらしい

ヨ(皆笑)。ホラ ウシダ⁽¹⁾ フキワリジッコーグミアイテサ一モ
よ。 ほら 吹割実行組合でさ 森
リヤマト ウシロダオ⁽¹⁾ マツ ヤッタッペ。ソテアノ一ソント
山此名ヒ 後田を やつが やったう。それで その時
キヤ タテカイトイテ アレガ アノ カグ⁽²⁾ ソノ カネ モラワ
は 立て替えておいて 僕が その金を 貰わ
ナカッタ。ソレ ミシューガ ハチジューナンエンタカ ヒヤクニ
ながった。それ 末4Xが ハ+何 円だか 百二十
ジューイン アッタヨ。
円 あつたよ。

A タイキンダニ。

大金だな。

T タイキンダニ。アノ ジブンダラネー。

大金だよ。あの 時分ならぬ。

K ソーダネー。

そうだねえ。

O ンデ ケッキョク オービックショーノ テーガ ホラ トルモン
それで 終局 大召姓の 連中が 取るもの
ダカラ チーが⁽³⁾ ナクダッタヨナー。ダケド ケンガ⁽⁴⁾ デキル 下
だから チーが 辺くのだったよね。だけれど 魔が できる
キダテ オラモ ハダギガ ホシーダッペーチュンデ アカッコノ
時だから 私も 肌着が 欲しい だろう というので 赤子の
ハダギー マッタ。ソージタラ オラガ トコテ ナニ トッタ
肌着を やった。 そうしたら 私の 所で 何を 取った
ダン元ユーカラ 王モヒキダッケ ナニカ トッタ。アニサンナ
のだヒ いらから、 股引だけ 何かを 取った。 兄さん

ンザ テメーテモ ヨク カイテ (°笑)。ダッテ ミンーナ /
などは 自分でも 欲を がいて。 だって 皆の

ショーダクノ モトニ トルダカラ シカタガネンサネ。

承 諾 の もヒに 取るのだから 仕方がないのさね。

A ウント オービヤクショーダッテ ダイブ トッタダモ。
うんヒ 大百姓 でも 取ったのだもの。

O マーズ ヒドカッタサ。
まず ひどかったさ。

K ナニワトモアレ イチバン ワリー トキダッタダンネー。⁽²¹⁾ ソント
何はともあれ 一番 愚い 時だったからね。 その
キャラネー。
時はね。

A ワリー トキダッタサ。
悪い 時だったさ。

O ソイデ イッコー シャーネーデ オラガッチワ ヘータイ デネ
それで 全然 知らないで 私の家は 兵隊に 出
一カラ ヘータイ デネーカラッテ モリヤマデーが キタノー
ないから 兵隊に 出ないからといって 麻山の連中が 来たのを
ミーンナ ヒトセン ウント ショッタン。ソシタラ コット 夕
かきがつき 多く 背負ったの。 そうしたら 今度 反
シベツニ オイテクル トキニ ナッタラ オラガ ウチワ グー
別に 置いてくる 時に なったら 私の家は ぐっと
ット スクナカッタ。バカッタラシー。ズーアイブン オラー ホー
少なかつた。馬鹿馬鹿しい。 すいぶん 私は 奉公
コー シタダゾ。⁽²²⁾
したよ。

A トミちゃんチダノ ヒデー メニ アッタサナー。メンセキガ も
富ちゃんの家などは ひどい 目に あつたきな。面積が
ツテタカラナ(24)。

持っていたからな。

T メンセキガ アッタカラネ(25)。

面積が あつたからね。

A トミちゃん キョクが ヒデー ~~~~~~。

富ちゃん【それ】局が ひどい 【目にあつた】。

T ツクル シトガ ネンダカラ(26)。

作る 人が ないのだから。

A ソーン ツクル シトガ ネンダ。

そうそう 作る 人が ないのだ。

O コンダ タンベツ スュー トキニヤー コンダ ソー ナッタン
今度は 反対に する ときには 今度は もう なつたの
サネー。

さね。

A ソイデ マダッチュデ ヤクバデ ャッテクレッチュデ ヤクバデ
それで ハヤだといふので 役場で やってくれば いふので 役場で
ヤッテ ヨコッタラ ナーニ コンダ オランダ
やって よこしたら 何ひうこいか 今度は 俺なぞは

O コンダ オラー ウント スクナク ナッタ。ンテ コッタ
今度は 私【の家】は 非常に 少なく なつた。それで 今度は
キョクデ ダセネッテッデ オレガ イバッテ キョクチヨガ
局で 出せないといふので 私が いはって 局長が
リヨーテオ ツイテ タノメバ オレガ ダスッチューデ イバッ
両手を ついて 頼めば 私が 出すといふので いはつた。

タ。ソシタ ⁽²⁹⁾ キョ ^{xxx} キエイ ⁽³⁰⁾ ヨシチャンド ^{トシ} ^{トシ} トシアキジャネ
 そうしたら 清ちゃんだ 利明(人名)ではない
 一 ミツガ ⁽³¹⁾ キテ マー キョ ^ク チョーガ フトン カブッテ コ
 光が 来て まあ 局長が ふくん かぶって
 一サン シテルダカラ カンベンシテ ⁽³²⁾ ダシテ クンネーケー ソ
 降参 していろのだから 勉強して 出して くれないかい。
 一シャー アンマリ ジュークーベー コクカラ キョ ^ク チョーガ
 そうしたら あまり 文句ばかり 言うから 局長が
 リヨーテー ツイテ オネガイシマスッテ イエバ マメー ハ
 手を ついて お願いしますと 言えば 米を
 シタラ ミツガ ハンタラ オラガ ハンタラ ^{ダセバ} オツク
 光が 半俵 私が 半俵 出せば おいつく
 ワケデ ソレデ オレガ キョ ^ク チョーガ コーサン シレバ ^ダ
 わけで、それで 私が 局長が 降参 すれば
 シテ クレルレッテ ユックタン。
 出して やると 言ったの。

A ヤマカ一 ハタケ一 モッテッテ イッコ一 ツクンネーダカラ。
 山も 畑も 持っていて 全然 作らないのだから。

O ウーント キタンサ。
 たくさん 来たのさ。

T ヨイシャーナカッタネー。
 容易では ながったねえ。

A ソノメー キョクワ ⁽³³⁾ ヒヂー ^{ウマク} ヤッタソナ一。
 その前に 局は うまく やったのさな。

O イッコー ダサズニ イタンダモノ。
 またく 出さないで いたのさもの。

A イッコー ホケン ダシモシネーデ ソレデ アレ シタダカラ。
まったく 保険を 出しも しないで それで あれ したのだから。
メンセキガ アッテ。ミンナガ ソノカーシ ヒデー メニ アッ
面積が あって。皆が その変わり ひびい 目に あった。
タ。コンダ ヤクバデ マーッテ クレル ヨーン ナッタラ イ
今度は 役場で 回って くれる 様に なつたら
ツコー セワーネー。テメーノ ブンダケ ダセバ アトワ シラ
まったく 世話がない。自分の 分だけ 出せば あとは 知らん
ーン カオシテ ャミー ウットバシテ。
顔して 間に 並りとはして。

T ソーダッタネー。

そうだった 収え。

A マーズ ヒドカッタサー。ウント ダセーッテ。
まず ひどかった。たくさん 出せと。

T オレ ニジューイチネンマデ ソーアコト シラナカッタ。ジュー
俺は ニャー年まで そういうことを 知らなかつた。 +
ゴネシカラ ニジューイチネンマデ シラナカッタカラ。
五年から ニヤー年まで 知らなかつたから。

I ドコ イッテマシタ。

ビニヘ 行っていました。

T エー チューチューサー ハイッテ ジューゴネシマデ チュー
エーヒ 中支へ 入って，十五年まで 中
シハイッテ チューシカラ タイワン ナンシ フツイン シャ
支へ 入って 中支から 台湾，南支 仏印 シム
ム (イシーン) ⁽³⁶⁾ アノ ビルマノ アノー ヨシエサンノ オトート
ビルマの あら， よ志ゑ(人名)さんの 弟の

ノ キューやサンカー。^(k) アー キューやサン ナクナッタ ジ
久 弥さんか。 久 弥さんか なくなつた
ブンニ オレガ フツ ^{フツ}_{××} アノー タイメンコッキョー コジテ ピ
時分に 僕が タイ面 国境を 越して ピ
ルマ オーエンニ イグ ワケダッタンダヨ。
ルマに 応援に 行く わけだつたのだよ。

〇 イガネーデ スンダンダ。

行かないで 済んだのだね。

ト ソイデ イグ トキューテ アノ オラナンド アノ サキノ レ
それで 行く 途中で 僕など 先の
シチューガネー ホリョー シューヨースル ニジューゴマングレ
連中がね 捕虜を 収容する , ニナ五万ぐら
一 シューヨーセル ⁽³⁷⁾ シューヨージョ ツクッタワケダ。ソコエ
収容する 収容所を 作ったわけだ。そこへ
イッテ シューセン ナッタ。ソノ ユーグンノ ツクッタ シュ
行って 戦に なつた。その 友軍の 作った
一ヨージョエ オレタチ ハイッチャッタ(皆笑)。マインチ ア
収容所へ 僕達 入ってしまった。毎日
ノー ヒコーキデネー テークーシテキチャー ビラー マクンデ。
飛行機でね 低空してきては ビラを 撒くので。
(^k シー。) ヨコハマカラ トキョーマデ モージトガネー ミ
横浜から 東京まで もう 人がね
シナ ゴロゴロ タオレテテ ミル カゲモ ネーナンテ。
皆 ゴロゴロ 倒れていて 児るかけも 無いなビヒ。
〇 オカナンカ アノー アレダッペ。エーセータイダカラ ケンキユ
岡などは あれだろ。衛生隊だから 研究

— ザイリョ — ニ ハツカネズミ トリー トキヨー ケーッテ⁽⁶¹⁾

材 料 に ニ十日 鼠を 取りに 東京 へ 帰って

キテ シューセン ナッタ。

さて 終戦 に なった。

T オラガ ゲンエキダッタカラネー。シナデ ショーカイセキト⁽⁶²⁾

俺が 現役 だった からね。支那で 蔿介石と 今

マノ ショーカイセキ⁽⁴⁰⁾ (笑いながら) (0. ショーカイセキ⁽⁴¹⁾ (笑いながら)
ショーカイセキ

がら) チョッケーグント ブツイタンダカラ。ソーシテ アノ

直 気 軍 ヒ ぶつかったのだから。そして

— アトカラ クル ホジュー ヘーニ ソノアスコニネー ホ
後から 来る 補充兵 に あそこに あそこにはね

タルイシノネー アノ ケキンゾク ヤクンダトカネー ツク
螢石のね、 軽金 属を 作る

ルンダトカネー ヒコーキノ ヒコーキオ ツクル ホタルイシッ
のだヒカム ホタルイシッ

テングガ カリヨク アルンダソーダネー。ソレオ モジテ ケキ
火力 が あるのだ そうだねえ。それを 燐やして 軽金属を

ンゾク ツクル ヒコーキノ ゲンリヨー ツクル ソノ イシオ
作る、 飛行機の 原料を 作る、 その 石を、

ヤマガ ホシクッテ ソレオ ニホンガ センリヨースル トキ
山が 欲しくて それを 日本が 占領する 時に

— オレタチワ マイッタ ラケダ。ソントキ マモッテタン
俺達は 行った わけだ。その時 使っていたのが

ガ ショーカイセキ！ チョッケーグンナンダイネー。ツオイダッ
蔿介石の 直氣軍 なんだよね。 強いひだつたのだ。

タンダ。ソレオ コンダ マカシテ ゾxxx センリョーシテ ソイデ
それを 負かして 占領して それで
ツイ一 ヤツ マカシタラ ヒトツキ タタネー ウチニ ホー
強い やつを 負かしたら 一月 たたない うちに
ジューへー ト^ラレチマッタ。(A 笑) ショーカイセキニ。ソレテ
補充兵 が 取られて しまった。 蔵介石 に 。 それで
ソレ スマシテ コンダ アノ ムコーアイ フツイン イッタダ。(周)
それを すませて 今度は 向うへ、 仏印へ 行ったのだ。

0 ナンダ キヨシサン クヤシガルノワ オラー ナイチニベー イ
何というか 清さん くやしがるのは 私は 内地にはばかり
タモンドカラ イマ イクンチテコター イエネーモンダカラ (A
居たものだから あヒ 幾日というこヒは 言えないものだから
イッコー モラエネーダ。) イッコー モラエネートカ ナントカナ
(全然 賞えないのだ。) 全然 賞えないヒカ 何ヒカ なビヒ
ンテ マー ブツクタ ブツクタ。
まあ ぶつくさ ぶつくさ。

k ソースト 下ミチャンワ ズトト ジュxxx ⁽⁴⁾ ジューゴネンカラ↑。
そうするヒ 審ちゃんは するヒ ナ五 年からが奴。

T ウン ジューゴネンカラ (⁴ シューセンマデー) ニジューイチネン
うん、 + 五年から (終戦まで) ニ + 一年
マデ。 (⁴ イタワケカイ) シューセン ナッテ イチネン ホリヨ
まで。 (いたわけかね) 終戦になつて 一年 捕虜
ン ナッタ。
に なつた。

k アー ソーカ ソースト マル ロクネン ジャナウッテ シチネ
あみ そーか そうすると ある 六年、 ではなくて 七年

ン。

T マル ロクネンキヤ ナラネンダケドモ (ト) ロクネン ナル ワケ
まる 六 年 しか ならないのだけれども (六年に なる わけ
ダ。) シー。アジカケ (間) ダラ ナナネングレーン ネルンカナー。
だ。) うん。あじかけ なら 七年位に なるのかな。

K チョード イー トキノ ロクネンダカラニー。
ちょうどいい 時の 六年だからねえ。

T イー トキノ コーシュゴーカクナシカ ナッタ トキダカラサー。
いい 時の、甲種合格などに なった 時だからさ。
(° タマラネーダナー。) ソーシタラ ソノ アト コンダ ヒッパ
(たまらない ね。) そうしたら その 後 今度は 引っはり
エチマッテ。ロクガツニ チヨヘーケンサデサー コーシュゴ
られてしまって。六月に 微兵検査でさ、甲種合格の
一カクノ ハンモ オサレタラ ソノ ジュニガツニ ヒッパリ
判も 押されたら その【年の】+二月に 引っはり
ダサレタン。

出されたの。

K アー チョード ソイジャー ハタチノ ケンサデ。
ああ、ちょうど それでは 二十歳の 検査で。

T ソー。ダカラ ハタチデ ケンサシテ (ト) ソノ トシノ ジュニ
そう。だから 二十歳で 検査して (その 年の +二月の)
ガツ。) マー カヅエ ニジュイチデ。 (間) テ ソノ トシニ
まあ がぞえ 二十一【歳】で。それで その 年に
ヒッパリダサレタン。

引っはり出されたの。

- K キョード ハタチス ⁽⁴⁴⁾ カラ ニジューゴカ ロク シチ ハチ。
さよラビ ニ+歳 から ニ+五か 六，七，八。
- T ソイデ キョード アノ ムコーン ロコーキョーカラ ハジマッ
それで ちょうビ むこうの 蘆溝橋から 始まって
テ ソコ タケナワ ナッタ ジブンデ イッセンデ キョーイク
たけなかになつた 時分で 一線で 教育
サレタダ。オラ。テッポーダマノ ジツダンノ クル ナカデ。
されたのだ。私は。鉄砲玉の，実弾のくるなかで。
- K ンー。ジャー イマワ ショージノ コロワ ソッチー イッテタ
なるほど。それでは 今は，尚司(人名)の 墓は そちらに 行っていた
ワケだ。
わけだ。
- T イッテタ ワケ。
行っていた わけ。
- K トショーネー ⁽⁴⁵⁾
そうでしょうぬえ。
- T ソノ ジブンワ シャンハイアタリ イタ ワケだ。
その 時分は 上海あたりに いたわけだ。
- A ンー。
- K イマー ショージナンカ ユ ⁽⁴⁶⁾ ユガタ ヤキュー ⁽⁴⁷⁾ ナンカ ヤキュー
今は 尚司などは タカ 野球
ーナンカ ャッテルケド (K笑)。
など やつているけれど。
- T アノ ジブンワ アケテモ クレテモ ピンタダケダッタ。
あの 時分は あけても くれても ピンタだけだった。

O ピンタダモノナー。

ああ、ピントだものだ。

K バット カツイデ ノンキ マッテルケドモ。

バットを 担いで 命氣に してしまひぬども。

T アーノ ジブンワネー。 (°シーン!) シロイ モノガ クレーッ。

【まったく】あの 時分はね。 そうそう。 白い 物が 黒いと

ツタッテ ハイハイツツタノガサー。
(46)

言ったって ハイハイヒ 言っていたのがさ。

O ソーコトダナ一。

そういうことだな。

K テッポート バットジャ エレー チゲーダイネー (笑いながら)。

鉄砲ヒ バットでは えらい 違いだよね。

T ソーテ ナニカ イエバ スグ ケンペータイガ キテ ケンペー
それで 何か 言えば すぐ
が キテ エバッテタ。

が 来て 戒張っていた。

O ソーダガネー。

そうなのだよ。

K ダカラ タイショウマレノ ジトッテナ イチバン ソーユー⁽⁴⁷⁾
だから 大正生まれの 人比ひうのは 一番 そういう
ゲンエキデ タイヘンナ トコロー ャッテシタ ワケナシサー⁽⁴⁸⁾ネ
現役で 大変な ところを やってきた わけなのさね。

一。

T ソーダイネー。⁽⁴⁹⁾ ダカラ イー トキ ナカッタ ワケダ。
そうだよね。だから 良い 時が ながった わけだ。

K ソデ アタマーメージノ シトニ アタマ_{xxx}カラ ⁽⁴⁹⁾ オサエラレテ
それで 豊を 明治の 人に 頭から 押えられて
~~~~~。

T ウン オサエラエル。ナオ アジブンワ アレダッタカラネ。  
うん 押えられる。まだあの時分は あれだったからね。  
ホーケンジダイダッタカラ。  
封建時代だったから。

K ソーダネー。スト チューカンニ オッパサマレチマッテ (ソー)  
そうだね。 中間に はさまれてしま、で  
ケーッテ キタラ コンダ~~~。  
リ帰って きたら 今度は

T カーッテルカラネー コンダー。イツモ ワリ一トコ デチャッ  
変わっているからね 今度は。いつも 悪い ところへ 出てしまったね。  
タンサ。

K キョードネー。  
ちょうどね。

O オレンチノ オバーが オカチャンガ イルトキヤー ソレホド  
私の家の おばあが 嘴ちゃんが いる 時は それほど  
ジナカッタケド アブラマノ イワオチャンガ デテ アレダッタ  
では なかったけれども 浅屋の 敵ちゃん(人名)が 出て あれだったろう  
ツペ ジキ アノ ホラ シューセン ナッタッペ。イワオチャンガ  
直に 終戦に なったろう。 敵ちゃんが  
デタラ オラガ オバーが ナクナッタイ。<sup>(50)</sup> コンダー オラガ ト  
出たら 私の おばあが 泣くのだったよ。 今度こそは 私の

コイ クルツッテ (° 笑)。 (A コンダ オラナンゾガ~~~) ヨン  
ヒコヘ くるといって。 (今度は 僕などが) 今度は  
ダ一 オラガ イマ シトツキ タテバ オラガ ウチー クルッ  
もう 一月 たてば 私の 家に 来る  
テユッタラ オバーが カミサマ イッショケンメー タノムダッ  
と言ったら おばあが 神様に 一生懸命 頼ものだって。  
テ。オラガ ウチー コネーデ クダサイ。オラガ ウチ~~~(笑)。  
私の 家に 来ないで 下さい。 私の 家  
ソジタラ シューセン ナッタダト。(間) イワオチャンニー フレ  
そしたら 終戦に なったのだって。 厳ちゃんに 来ねば  
バ オラガ ウチー クラーッテユッテタン。  
私の 家に 来るよと 言っていたの。

K アレガ イマ イチネン ノビレバ ズイーブン ヒドカッタデショ  
あれが もう 一年 延べれば 随分 ひびがったぞう  
一ネー。<sup>(51)</sup> モットネー。  
ぬえ。 もっヒぬえ。

T ヒドカッタネー。モー アトカタモ ナクナッタダッペ。  
ひびがったね。 もう 跡形も なくなつたろ。

A アーッ。イマ イチネン ノビタラ ヒドカッタ～。  
その通り。 もう 一年 延べたら ひびがったさ。

T デモ オラナンドワ マケイクサッテノ シタ コト ナカッタカ  
でも 僕などは 負け戦というのを した こひが なかつたから  
ラサ一。 (↑シーン。) ダカラ ニホンワ マケルト オモワナカッ  
き。 だから 日本は 贠けるヒ 思わなかつた  
タナ一。  
な。

K ソラ ソーダンベナー。ゼンゼン コッチガ ワカンネンダカラネ  
それは そうだろうな。全然 こちら【の様子】が わからないのだからね。

一。

T ンデ フツイン ナニダイガクッタッケナー。アスコエ ハイ  
それで 仏印の 何という 大学といったけな。 あモニハ 入った  
ッタトキニ ャツラノ バクゲキノ ウマインニ タマゲテ マ  
ときには やつらの 爆撃の うまいのに 警いて まあ  
ー コリャー モニホンモ アブネーカナート オモッテ ソ  
これは もう 日本も 危ないかなと 思って  
ントキ オモッタッタケドネー。<sup>(52)</sup> (↑シー。)ソントキ ミナライシ  
そのとき 思ったけれどね。 そのとき 見習士官  
カンガ キタシダヨ。 (↑アー。)ソントキ ミナライシカントー  
が 来たのだよ。 そのヒキ 見習士官と  
エー ショー ショエ ショーショエ ツイタトキニ ホシノサン  
小哨へ 着いた 時に 星野さん  
ダメダナ。マソソジブンワ カイキューワ ベツデモ メ  
だめだな。 その 時分は 階級は 別でも  
シノ カズナシダカラ (A シ。) ミナライシカンテ ザガネ ツケ  
飯の 数なのだから。 見習士官で 座金を 着けて  
テサ一ト一カカエチャ一クルケレドモ ヤセンワ ハジメテ  
さ、 刀を 抱えては 来るけれども 野戦は 始めて  
ナシダカラ (トンノ)コサンヘーノ メシノ カズノ オーイ ヤ  
なのだから 古参兵の 飯の 数の 多い  
ツニマー シカタガネーヤ ホシノサン ホシノサンテ カン  
ヤツには 仕方がないや、 星野さん 星野さんヒ

タッポワ マダ ブンショーネヨ デ ゴチョーダヨ。カシカシニ  
片一方は まだ 分哨長で 伍長だよ。下士官に  
ミナライシカシガ サン ツケタケドサ。(^シ-)ニホンド  
見習士官が 「さん」をつけたけれども。日本は  
一モ アブネー アブネーカシンネーヨ。ンデ マー ヘータイデ  
どうも 危ない 危ないかしれないよ。それでまあ 兵隊で  
ナイチ ヨースジテ キーテ キタタカラ。(A.O.シ-)ソレマ  
内地の 様子を 聞いて 来たから。それまで  
デ ソンナ アレ ナカッタケド ソントキ ハジメテ バクゲキ  
そんな こと 無かったけれども そのとき はじめて 爆撃  
サレタンダヨ。(^シ-)ソンデ ニホンノ ヒコーキワ サー  
されたのだよ。それで 日本の 飛行機は キーッヒ  
ット ヒッ コンジマウンダ。(kシ-) テキ シューガ テキ シュー<sup>×××</sup>  
引っ込んでしまうのだ。敵襲が  
ガ アルト。ソントキニ オレ アノ ヨソエ アスビー デテタ  
あると。そのときには 僕は 他所へ 遊びに 行っていた  
ンダ。(^シ-)ソーシタラ カエッテ キタラ アノ カエロー  
のだ。 そうしたら 帰って いたら 帰らうと  
ト オモッタラ アノ アノ ナンダ チューザンダイガクッタカ  
思ったう 何だ チューザン 大学といったかな  
ナ アノ ダイガクニ オラナンド イタンダケドモ タテモン  
あの 大学に 僕達は いたのだけれども 建物を  
ゼンブ ツア タテモン ツブサズニ ドーロダケ ウマノイ  
全部 建物は 潰さずに 道路だけ、島の  
ル トコダケ コー バタバタ バタバタ ゴジックロバクダン  
いる 所だけ バタバタ バタバタ 五十キロ 爆弾を

オトシテ (↑シニン。) ホトンド ウマガ ゼンメツン ナッタンダ  
落として ほひんび 馬が 全滅に なったのだよ。  
ヨ。オラナンカノ ブンタイガ サンジュー サンビヤクゴジット  
俺達の 分隊が 三十 三百五十頭  
一グレー イタンダモノ。 (↑シニン。) ソノ ヤツガ サンフリ (間)  
ぐらい いたのだもの。 そいつが 三割  
グライ マー ノコッタノガ ヒヤクハヒチハ千 イタダッタネ。  
ぐらい、まあ 残ったのが 百 七八【頭】いたのだったね。

## 往

1. 「ヒー デー」 [hi' de:]
2. 「コ」 [ko]
3. 「クボーク ハカッタ」 配給米を計るとき、桶の表面よりもくぼませて計った。
4. 「ニショー ハカリダスノニ ドコ ャッタッペ」 少しずつけずつ計って分量がせるのにどこをどうやったのだろう。
5. 「オラーアンダ」 [ora' nda] オラナンドワ>オラーアンダ。
6. 「トリヤーシネー」 [torjasi:binen:] 「シ」の摩擦の程度は弱い。
7. 「ミヤショーノ」 「ミヤショー」は宿の背戸と呼ばれる家のことを。次にも「ミヤノ ショガイ」として出てくる。やはり特定の家を指している。
8. 「ショーラガ」 「ショー」は人名。正。
9. 「キヨクデ クチヨーデ」 「郵便局を開いている家」を「局」という。郵便局をやっている家の人が区長で。
10. 「トメサンニマー」 「トメサン」は人名「止吉」+さん。
11. 「トモジーサマニ」 「トモジーサヌ」は人名「友吉」+じいさま。
12. 「クボ」 クボッタッテ 配給米の計り方が正当でないと被配給者が言っても。
13. 「イカリノ」 [ikarino]。[ikaino]とも聞こえる。[r]の音は弱い。
14. 「I」 は調査者 上野勇。
15. 「コッツア」 [kottsa']。コッタ>コッツア。無造作な発音。
16. 「コッツァイ」 [kottsa'i]。コッタ>コッツァイ。無造作な発音。[kottai]とも聞こえる。
17. 「フキワリジッコークミアイ」 「フキワリ」の[r]の終音は弱い。
18. 「ウシロダオ」 「ウシロダ」の[r]の発音は弱い。地名。
19. 「チーガ」 「チー」は人名。小形千恵子。
20. 「ケンガ」 「ケン」は人名。憲三。
21. 「トキダッタダンネー」 ダカラ>ダーラ。ネーの前でダン。

22. 「サ」 [sa] 文末の弱まり形。
23. 「シタダゾ」 [sitadazo] 摩擦音 [zo] は文末の弱まり形。
24. 「トミチヤンチダノ」 「トミチヤン」 は人名 富司 + ちゃん。
25. 「メンセキガ モッタカラナー」 「面積があつた」と言おうとして「面積を持っていた」と途中で言いなおしたねじれ文。
26. 「メンセキガ アッタカラネー」 助詞「ガ」の音に摩擦音の [ya]。 「メンセキダッタカラ」 とも聞こえる。
27. 「ツクル」 [tsükuru] エフの母音のための舌の動きはゆすか。 [tsükkuru:] とも聞こえる。
28. 「スュー」 [suː] スル > スュー。無造作な発音。
29. 「ソジタ」 ソジタラ > ソジタア > ソジタ。 「ラ」 の子音が脱落して「ア」 母音連続が「ア」 長音となり、さらに短呼化されたもの。無造作な発音。
30. 「キュイヨシチャンド」 [kjuijōsitsanda] キヨシチヤンの言ひそこない。
31. 「ミツガ」 「ミツ」 は人名 光美。
32. 「クンネーケー」 [kunne:ke:]
33. 「ジュークーベー コクカラ」 「文句を言う」 の意で「ジュークーユー」と言う。
34. 「ヨーイジャーナカッタネー」 「大変だ、たぬえ」 の意。
35. 「ソノ」 [so+nō] 。 「スノ」 に近い音。
36. 「ソーン」 [m̩:m]
37. 「シューヨーセル」 「シューヨースル」 の言ひ間違い。または「ス」 の音の調音点が前よりかつ低いため「セ」 のように聞こえた。
38. 「オカナンカ」 「オカ」 は人名。岡司。
39. 「ケーッテ」 [ke:tte]
40. 「イマノ ショーカイセキ」 先に話題になった「ショーカイセキ」 という鳥の名と同じ音であるの意。
41. 「ショ\*\*」 昭和ヒ言ひかけてやめた。
42. 「ンー」 [n̩:] 年数を考えている。思わず発した声。

43. 「(間)」あしかけで何年になるかを考えているため間ができた。
44. 「ハタチズ カラ ニジュー ゴカ ロク シチ ハチ」「二十歳過ぎ」と言いかけてやめ、「二十歳から」と言いえた。そのために「カラ」との間に息の休止もあらわれた。六、七、八は独言でも言うように年数を数えた。だんだん人音量は小さくなっていく。
45. 「トショーネー」 [tʃo:nē]. 無造作な発音。
46. 「サ一」 [sa: ].
47. 「ヤッテシタ」 [jatte sita] ヤッテキタの弱まり形。
48. 「ソーダイネー」 [so:daine: ].
49. 「アタマーカラ」 「頭を」と言うつもりが「頭から」と言いつぶした。「アタマー」は「頭を」の意。対象格を語末母音の引きのばしによって表わすことは当方言の特徴のひとつである。
50. 「ナクナッタイ」「ナクダッタイ」の無造作な発音。アクセントの型からも「泣くだった」の意であることがわかる。もし、「なくなつた」であればアクセントは「ナクナッタ」となる。
51. 「デショーネー」「デショー」はTに対する丁寧体。KはTよりも年下。
52. 「オモッタッタ」 過去回想。

III. 長野県上伊那郡中川村大字葛島  
かみいななかがわ  
かづらしま

収録・文字化担当者 馬瀬 良雄

# A 収録地点とその方言について

- 1 地点名 長野県上伊那郡中川村大字葛島
- 2 収録地点の概観 長野県上伊那郡中川村は伊那谷のほぼ中央、上伊那郡の最南部に位置する。明治22年(1889)に葛島村、大草村、四徳村の3カ村が合併し南向村と称したが、昭和33年(1958)片桐村を合併(中川村となった。天竜村をはさんで左岸に南向、右岸に片桐が位置する。大草がその中心である。人口5552人(昭51.3.1)、世帯数1308(昭51.3.1)、面積77.24km<sup>2</sup>。

調査地点葛島は中川村の最南端に位置し、西は天竜川に面し、南は小渋川によって下伊那郡と境を接している。上伊那地方にありながら、文化圏の上からは飯田・下伊那文化圏に属している。主産業はかつては養蚕、現在は果樹・蔬菜の栽培。人口995人(昭51.3.1)、世帯数223(昭51.3.1)。

## 3 収録した方言の特色

① 方言区分上の位置・隣接諸方言との関係 長野県の方言は、東条操氏の区画に従うならば東部方言の東海東山方言、都竹通年雄氏に従うならば東部方言のナヤシ方言(長野・山梨・静岡方言)に分類される。長野県の方言はさらに奥信濃・北信・中信・南信の各方言に区分される。南信方言は木曽、下伊那及び上伊那の南部の方言がこれに属し、中川村方言はこの中に分類される。南信方言では西部方言的特徴が長野県の他の方言と比較して多い。

② 音韻上の特色 葛島方言のモーラ体系は調査していないので、同じ中川村の片桐方言のものを示す。話者は松下大佐氏(明23年生まれ)。

|     |     |     |     |     |      |      |      |     |     |    |     |      |      |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|-----|-----|----|-----|------|------|
| 'u  | 'o  | 'a  | 'e  | 'i  | 'ju  | 'jo  | 'ja  | 'wo | 'wa | 'e | 'we | 'wjo | 'wja |
| hu  | ho  | ha  | he  | hi  | hju  | hjo  | hja  | —   | —   | —  | —   | —    | —    |
| ŋu  | ŋo  | ŋa  | ŋe  | ŋi  | ŋju  | ŋjo  | ŋja  | —   | —   | —  | —   | —    | —    |
| g'u | g'o | g'a | g'e | g'i | g'ju | g'jo | g'ja | —   | —   | —  | —   | —    | —    |
| k'u | k'o | k'a | k'e | k'i | k'ju | k'jo | k'ja | —   | —   | —  | —   | —    | —    |
| z'u | z'o | z'a | z'e | z'i | z'ju | z'jo | z'ja | —   | —   | —  | —   | —    | —    |

|    |    |    |    |    |     |     |     |   |   |   |   |   |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|---|---|---|---|---|
| cu | co | ca | —  | ci | cju | cjo | cja | — | — | — | — | — |
| su | so | sa | se | si | sju | sjo | sja | — | — | — | — | — |
| ru | ro | ra | re | ri | rju | rjo | rja | — | — | — | — | — |
| —  | do | da | de | —  | —   | —   | —   | — | — | — | — | — |
| —  | to | ta | te | —  | —   | —   | —   | — | — | — | — | — |
| nu | no | na | ne | ni | nju | njo | nja | — | — | — | — | — |
| mu | mo | ma | me | mi | —   | mjo | mja | — | — | — | — | — |
| bu | bo | ba | be | bi | bju | bjo | bja | — | — | — | — | — |
| pu | po | pa | pe | pi | pju | pjo | pja | — | — | — | — | — |
| u  | o  | a  | e  | i  |     |     |     |   |   |   |   |   |

N

Q

共通語にないモーラについてかんたんに説明しておく。

/'we/ は次のような場合にあらわれる。

/'weeta/ [we:tə] (沸いた) cf. /'eeta/ [e:tə] (焼いた, 明いた)

/ka'wee/ [kawee:] (買いに) cf. /ka'ee/ [kae:] (代えに)

/'wo/ は次のような場合にあらわれる。

/hana'wo/ [hanawo] (鼻を) cf. /hana'o/ [hanao] (鼻緒)

/'wjo/, /'wja/ は次のような場合にあらわれる。

/hu'wjoo/ [Φuwjo:] (笛を) cf. /hu'joo/ [Φujoo:] (冬を)

/hu'wjaa/ [Φuwja:] (笛は) cf. /hu'jaa/ [Φuja:] (冬は)

/'co/, /'ca/ は次のような場合にあらわれる。

/'ogooqcoo/ [ogottso:] (お御馳走)

/'joodaaqcama/ [jo:dat:sama] (雷様)

なお、この方言では、「たとえば「嗅いだ」は [kaīda] または [kajīda] と発音され、木曽の山村 [kaida] とは発音が異なる。また、軽い敬意と親愛の気持ちをあらわす -ナンは、[nāN] と発音されることはあるが、普通は [nā:~] あるいは [nā:~] のように発音される。そんなところからこの方言では口母音音素に対して鼻母音音素を認めるべきではないかと考えているが、疑問の点もあるので、上のモーラ表にはこの点を加えなかった。

音声上の特色として、まず連母音の特色をあげる。共通語の /a'i/, /a'e/ に対し /ee/ の対応する語が多い。たとえば, /eeso/ (愛想), /'eedayara/ (間柄), /teejeee/ (大概), /teeko/ (太鼓), /meeba/ (前歯), /'iidee/ (飯田へ) など枚挙にいとまがない。いわゆるサ行イ音便のハナイタ (話した), サイタ (差した) なども, この方言では /haneeta/, /seeta/ となる。

共通語の /i'e/ に対しては幾つかの語で /ee/ が対応する。たとえば, /'ee/ (家), /keeru/ (消える), /meeru/ (見える) のように。しかし、「ひえ (穢)」「知恵」などは /hi'e/, /ci'e/ であり, /hee/, /ce e/ で対応することはない。

その他, 共通語の /o'i/, /o'e/, /u'i/ などは共通語と同じであり, たとえば以上に対し, /ee/ や /ii/ が対応することはない。例をあげれば, /cu'jo'i/ (強い), /hido'i/ (ひどい), /kiko'eru/ (聞こえる), /'obo'eru/ (覚える), /sabu'i/ (寒い) など。

この録音で連母音の融合がそれほど認められないのは, この融合が近年しだいに行なわれなくなっている点のほか, 話し手の学歴や彼等の属している階層が関係しているであろう。また, 録音ということで話し手が緊張していたこと, さらによそ者である調査者が同席していたことなどもこのことに関係があると思われる。

次に, 母音の無声化。調査したのは次の諸語である。

北, 鹿, 下, 菊, 叱る, (頭の) ふけ, 拭く, 拭け, 突く, 突け,  
口, 潰け物, つた(葛), 靴, 月, 土, 鮎; 汽車, 吹く, 着く, 來  
た; 振った, 吸った; 降った, 食った; 奥, 松, 栗子, 書く。

3回発音してもらった。1回でも無声化の認められたのは次の諸語である。

鹿, 下, 叱る, (頭の) ふけ。

つまり, 母音の無声化現象は極めて少ないことが分かる。そしてその認められた語は, すべて CiCV ~ CuCV (Cは無声子音音素) の /V/ が /e/, /a/ のように広い母音の場合であることが注目される。

この方言には「もともと促音のないところに促音を入れる現象」が認

められる。ハナッカミ（鼻紙），カラッカゼ（空風），ガケップチ（崖縁），ウワッカー（上皮），ウツクシイ（美しい），ヤヤッコシー（ややこしい）など。

金田一春彦氏の分類によつて，内地方言の音韻を表日本方言，裏日本方言，薩隅式方言の三つに分けるならば，中川村方言は表日本方言に属することになる。また，榎垣実氏に従つて表日本方言を東日本方言と西日本方言とに分けるならば，東日本方言的特徴と西日本方言的特徴とをあわせ持つ方言ということができよう。

アクセントについてちょっと觸れておく。この方言は東京式アクセントに属し，型及びその種類は東京語と同じであり，型に所属にする語も，東京語と若干の出入はあるものの，それに近い。

### ③ 文法上の特色

イ) 中川村は文法上東西方言対立の境界地帯に位置する。この方言で東部方言的特徴を示すものを挙げれば，次のとおりである。  
ソーダ<sup>(注1)</sup>（そうだ），アカウナル（赤くなる），カッタ（買った）  
(注1) ソーダはソーナともあらわれる。むしろーナの方が基底方言的かという。

次に西部方言的特徴を示すものを挙げれば次のとおり。

イカシ（行かない），イカナシタ<sup>(注1)</sup>（行かなかった），イカニヤ<sup>(注1)</sup>（行かなければ），デヨ（出ろ）。

指標の取り方にもよるが，ここに挙げたところでは西部方言的特徴の方がやや多いと言えそうである。

(注1) 以上のほかにも，継続態としてフットル（降っている）を使い，フッテルを使わない点，老年層では（傘などを）サシタをセータと言っている点などは，西部方言的特徴として加えることができよう。また，継続態と結果態とを文法上区別しない点などは東部方言的特徴と見ることができる。

ロ) 敬語的表現がゆたかである。相手に寄ることを勧めるのに，敬意の程度により，次のような種々の言い方がある。

ヨレ — ヨリナ — ヨランカ — オヨリナ — ヨットクンナ —

オヨリナンエ — オヨリテ — オヨリトクンナ — オヨリナンシ  
ヨ — オヨリトクンナンショ

上の中から特徴的なものにつき少し説明する。

i) -ナンショ 軽い敬意と親愛感をもって使われる。オヤスミナンショ（お休みなさい）, オトリナンショ（お取りください）, ゴメンナンショ（ご免なさい）など。

ii) オーテ 上のオヨリテは、オヨリルという敬語動詞に助詞 -テが下接したもので、〈オヨリテ オクンナ〉や〈オヨリテ オクンナ ナンショ〉の後半部が省略されたともみることができる。この方言では言い切りがオールであらわされる敬語動詞が頻繁に用いられる。たとえば、アル（ある）, ミル（見る）, ケール（帰る）の動詞を例にとると、それそれ、オアリル, オミル, オケーリルとして用いられる。

以上のほか、敬語的表現として特徴的なものを、1, 2 挙げる。

iii) アリマス この方言ではゴザイマス（古老ではゴザイマスル, ゴザリマスルも使われる）のほかに、アリマスを使う。たとえば、〈コノトコロ オサテク アリマスナムシ〉（このところお寒うございますね）のように。アリマスは丁寧さをあらわす補助動詞として、広く男性、女性の区別なく用いられる。

iv) -ナムシ, -ナム, -ナン これらは念を押し、余情を含み、敬意をあらわすのに用いられる。敬意は -ナムシが最も高く、 -ナンは最も低い。なお、 -ナムシ, -ナムは老年層の一部で使われるにすぎない。 -ナムは [nam] と発音される。また、 -ナンは [naː] または [na̚ː] と発音される。しかし、ここでは簡略表記を行い、これらを -ナン で表わした。

#### 4 その他

地点選定の理由としては、第1に馬瀬が中川村の方言について以前調査したことがあり、その方言についてかなりよく知っていることをあげる。第2には中川村が文法上東西両方言の境界地帯にあり、東西方言対立が実際の会話の中でどうあらわれてくるか、興味深かった点をあげる。その他、民話のすぐれた語り手がこの村にいる点も、ここを選ばせる理

由の一つになっている。

録音テープの聞き取りで不明な箇所、方言の意味、用法で不審な点は、  
話し手のひとり、清水悟郎氏にお尋ねした。氏にはこのために長時間何  
回にもわたりご協力いただいた。また、氏には話し手の選定をはじめと  
して録音調査のもろもろのことについてご協力いただいた。この録音調  
査には沖裕子氏（東京女子大学文理学部学生）が同行し、その手伝いを  
した。氏はさらに録音テープからの資料の文字化、共通語訳で馬瀬を助  
けた。また、淨書は馬瀬則子が行なった。

## B 表記について

簡略音声表記の意味で片かなを用いた。それぞれの片かなの表わす具体音声を次にかんたんに示す。

ウ： [ɯ] 円唇でなく、平唇。

オ： [ɔ] 基本母音の [o] よりも広い。

ア： [ɑ] 基本母音の [a] よりも後寄り。

エ： [e] 基本母音の [e] よりも広い。

イ： [i] 基本母音の [i] よりも多少調音点は低く、かつやや後寄り。上に述べた母音の具体音声の説明は、母音が子音とともに拍を作った場合にもあてはまる。

ユ： [ju]

ヨ： [jo]

ヤ： [ja]

ヲ： [wo] ~ [ʷo]

ワ： [wa]

フ： [ɸɯ]

ホ： [hɔ] 母音間では往々 [h] は [h̚] となる。ハ, ヘの場合も同じ。

ハ： [ha]

ヘ： [he]

ヒ： [çɪ]。[çɪ] の摩擦は共通語のように強くはない。ヒュ, ヒヨ, ヒヤの場合も同じ。

ヒュ： [çɯ]

ヒヨ： [çɔ]

ヒヤ： [çɑ]

グ： [ɣɯ]

ゴ： [ɣɔ]

ガ： [ɣɑ]

ケ： [ɣe]

ギ： [ɣi]

ギュ : [ yju ]

ギョ : [ yjo ]

ギャ : [ yja ]

グ : [ gw ]

ゴ : [ go ]

ガ : [ ga ]

ゲ : [ ge ]

ギ : [ gi ]

ギュ : [ gju ]

ギョ : [ gjo ]

ギャ : [ gja ]

ク : [ ku ]

コ : [ ko ]

カ : [ ka ]

ケ : [ ke ]

キ : [ ki ]

キュ : [ kju ]

キョ : [ kjo ]

キャ : [ kja ]

ズ : [ dzu , - zu ]。一般に母音間では摩擦音 [z] , 他の位置で破擦音 [dz] があらわれる。他のザ行の拍でも同じ。共通語におけるような母音の中舌化は認められない。ただし, [dzu] の摩擦音 [z] が弱い個人がいる。[d<sup>z</sup>ukin] (頭布) のように。

ゾ : [ dzo , - zo ]

ザ : [ dza , - za ]

ゼ : [ dze , - ze ]

ジ : [ dʒi , - ʒi ] ただし, [dʒi] の摩擦音 [ʒ] が弱い個人がいる。  
[dʒiki] (時期) のように。ジュ, ジョ, ジャの場合も同じ。

ジュ : [ dʒu , - ʒu ]

ジョ : [ dʒo , - ʒo ]

ヂヤ : [dʒa, -ja]

ツ : [tsɯ] 共通語におけるような中舌化は認められない。ただし、[tsɯ] の摩擦音 [s] の弱い個人がいる。[t<sup>s</sup>ɯ t<sup>s</sup>ɯ] (筒) のように。

ツオ : [tso]

ツア : [tsa]

チ : [tʃi] ただし、[tʃi] の摩擦音 [ʃ] の弱い個人がいる。[t<sup>s</sup>i t<sup>s</sup>i] (乳) のように。なお、チエ、チヨ、チャの場合も同じ。

チエ : [tʃɯ]

チヨ : [tʃo]

チャ : [tʃa]

ス : [sɯ] 共通語におけるような母音の中舌化は認められない。

ソ : [so]

サ : [sa]

セ : [se]

シ : [ʃi]

シエ : [ʃɯ]

シヨ : [ʃo]

シャ : [ʃa]

ル : [d̪rɯ, -ɯ] 一般的に母音間では弾き音 [d̪] があらわれ、他の位置では弱い破裂音で始まる。個人によってはかるえ音を用いる。あるいはこの音の方がこの方言では古いのかかもしれない。以上は他のラ行のかなの場合も同じ。

ロ : [d̪ro, -ro]

ラ : [d̪ra, -ra]

レ : [d̪re, -re]

リ : [d̪ri, -ri]

リエ : [d̪rjɯ, -rjɯ]

リヤ : [d̪rja, -tja]

ド : [do]

ダ : [da]

デ： [de]  
ト： [to]  
タ： [ta]  
テ： [te]  
ヌ： [nu]  
ノ： [no]  
ナ： [na]  
ネ： [ne]  
ニ： [ni]  
ニュ： [nyu]  
ニヨ： [nyo]  
ニヤ： [nya]  
ム： [mu]  
モ： [mo]  
マ： [ma]  
メ： [me]  
ミ： [mi]  
ミョ： [mjo]  
ミヤ： [mja]

ブ： [bu] 母音間ではしばしば [b̥ ~ β] があらわれる。この点は他のバ行のかなについても同じ。

ボ： [bo]  
バ： [ba]  
ベ： [be]  
ビ： [bi]  
ビュ： [bju]  
ビヨ： [bjø]  
ビヤ： [bjɑ]

ー： 引き音をあらわす。

ン： 語末にあっては [N]。ほかに， [honto] (本と)， [hommo]

(本も), [hoijya] (本が), [hoiwa] (本は) などの [り] [m] [j] [w] などをあらわす。なお、文末助詞として用いられる [na?̄] [na?̄] の [?̄] [w] も、前に述べたように「ン」であらわす。

ッ : [isso:] (一層), [ippen] (-遍), [itto:] (-等), [isso:] (一升), [ittso:] (一町) などの [s] [p] [t] [ʃ] などをあらわす。

その他必要に応じて本文の注で述べる。

## C . 話者・録音環境など

- 1 タイトル 「縞手本の話」
- 2 録音年月日 昭和50年11月15日
- 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場 (片桐と  
(ゑ氏の自宅))
- 4 話し手 清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ。  
片桐としゑ氏 女性 明治39年生まれ。

清水悟郎氏は長野県の旧制中学校教諭を経て信州大学教授となり、退官後、郷里に近い飯田女子短期大学の教授となり、現在に至る。就学、就職のため、よそでの生活は約45年。したがって、多少録音には共通語の影響が見られないわけではない。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

片桐としゑ氏は同じ中川村であるが、大字片桐の生まれ。とついで22歳の時から現在地に住む。葛島の方言と片桐の方言は厳密に見ると異なる点がないわけではないが、大きく見てほぼ同一と考える。職業は農業。方言の保有度はこの年代の女性の普通程度。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。二人の間柄が義理の姉と弟の関係であるので、また、録音場所が片桐氏の自宅であることもあります、話題も昔の思い出話であるためもあって、話の進行状況はスムーズであった。

- 
- 1 タイトル 「幼いころの遊び」
  - 2, 3, 4, 5は「縞手本の話」に同じ。

- 
- 1 タイトル 「昔の嫁入り」
  - 2 録音年月日 昭和50年11月15日
  - 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場（小池千勢氏の自宅）
  - 4 話し手 小池千勢氏 女性 明治32年生まれ  
清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ

小池千勢氏は元地主階級の家の生まれ。中川村に近い赤穂（現駒ヶ根市）にとつき、その後、夫の転任により松本市に一時住む。夫の死後、再び中川村に戻り、家を継ぎ、現在に至る。よそでの生活は約15年。無職。話し好きであり、かなりのスピードでてきぱきと話された。

清水悟郎氏については「縄手本の話」の4を参照。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。話しはもっぱら小池千勢氏が話し、清水悟郎氏は聞き役、あるいは話しの引き出し役を勤めた。昔からの知り合い同志であり、録音場所が小池氏の自宅であるため、小池氏はリラックスして、てきぱきと話された。

# 1 縞手本の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生まれ

B 片桐としゑ 女 明治39年生まれ

A オネーサマー<sup>(1)</sup> コネーダ<sup>(2)</sup> ゴモシン<sup>(3)</sup> シトイタ<sup>(4)</sup> シマチヨー<sup>(5)</sup> モッ  
あ義姉様<sup>(6)</sup>、この間<sup>(7)</sup> お頼み<sup>(8)</sup> しておいた<sup>(9)</sup> 縞手本を<sup>(10)</sup> 持って  
テキテオクレタ。  
来て<sup>(11)</sup> くださった?

B ハイ。アノー アリマシタモノテナン。ニサンサツ<sup>(12)</sup> ココエ  
はい。あのう(搜したら)ありましたものですからね。2,3冊<sup>(13)</sup> ここへ  
ダシテ<sup>(14)</sup> オキマシタノ。  
(A アリマシタ。  
出して<sup>(15)</sup> おきましたの。  
ありましたか。)

A ホーカナ。

そうかな。

B ハイ。オゴランテ<sup>(16)</sup>。  
はい。御覽<sup>(17)</sup>になつて。

A ワシワ<sup>(18)</sup> アレオ<sup>(19)</sup> ミルトナー<sup>(20)</sup> ナクナッタ<sup>(21)</sup> オカーマノ<sup>(22)</sup> コト一  
私は<sup>(23)</sup> あれを<sup>(24)</sup> 見るとなあ、<sup>(25)</sup> せくなつた<sup>(26)</sup> お母さんの<sup>(27)</sup> ことを  
オモイダシテサ<sup>(28)</sup> ウーント<sup>(29)</sup> ウレシーンナ<sup>(30)</sup>。  
思い出<sup>(31)</sup>てさ、<sup>(32)</sup> とっても<sup>(33)</sup> 嬉しいんだ。

B ハイ。ココニ<sup>(34)</sup> オジサンが<sup>(35)</sup> キモノニ<sup>(36)</sup> シタリ<sup>(37)</sup> ハカラニ<sup>(38)</sup> シタ  
はい。ここに<sup>(39)</sup> おじさんが<sup>(40)</sup> 着物に<sup>(41)</sup> したり<sup>(42)</sup> 裕<sup>(43)</sup> に<sup>(44)</sup> した

ノカ<sup>(15)</sup> アリマスラ。  
のがあるでしょう。

A アール アル。コレーカ<sup>ハ</sup>カマタ。コレカ チューカッコー  
あーる ある。これが 褙だ。これが 中学校へ  
イッタ トキニ ャッテナ。  
行った 時に (はいた)やつでな。

B ハイ。  
はい。

A フーン。コレワ ミンナ オカーマカ<sup>オ</sup>ッタ ワケジャー ナ  
ふうん。これは みんな お母さんが 織った わけでは  
クッテ……。  
なくって……。

B ゼーンブ オリマシタノ。 (A ソーカナ。) ソエテ コノ キ  
全部 織りましたの。 ( そうかな。) それで この  
レオ<sup>(17)</sup> ヨソエ アゲテ。  
布を よそへ 上げて。

A フーン。  
ふうん。

B コ<sup>xx</sup> コッチ<sup>ノ</sup> ホンワ ヨソノイ イタダイテ キタトカ ソー ユー  
こっちの 編手本は よそのを 頂いて 来たとか そういう  
フーニナン ウチデ オッタノカ ( A ハハ<sup>ナル</sup>……。) コレテ  
ふうにね, 家で 織ったのが ( はは<sup>なる</sup>……。) これで,  
( A フン ) ヨソカラ イタダイタノカ<sup>。</sup> コレッチユヨーニ  
ふん よそから 頂いたのか これっていうように  
( A ナルホド。 ) アノ キメテ コー ユーノ マタ ヨソエ  
なるほど ) あの 決めて こういいうのを また よそへ

ワケテ アケテ ヨソカラモ コレ イタダイテ キトリマスワケ。  
分けて あげて よそからも これを 頂いて 来ておひますわけ。

A コレア ソノ一 ソーモクゾメッテューカ クサキゾメッテューカ  
これは そのう 草木染めっていうか くさき染めっていうか  
シランケード ソー ユー コトデ ソメタンダナー。  
知らんけれど そう いう ことで 染めたんだなあ。

B ハイ ヤリマシタ。 クルミゾメトカナン (A ア クルミテ)  
はい。(他にも)やりました……。くるみ染めとかね。(あ、くるみで)

ソレカラ ハイ スミ ケシズミヲナン (A ハハニ) アノ一  
それから はい 炭、消し炭をねえ (ははあ。) あのう  
イレテ ソレデ スミテ ソメテ。  
入れて それで 炭で 染めて。

A コレデ コー チカチカ ヒカットルワー キヌイトズラ。  
これで こう チカチカ 光っているのは 絹糸だろう。

B キヌイト。  
絹糸。

A コレア ミンナ ジブンノ ウチデ トッタ イトダナー。  
これは みんな 自分の 家で とった 糸だなあ。

B エー。 オバーちゃんか。 アノ イッショケンメー サクリツチユ  
ええ。 おばあちゃんか あの 一所懸命 座繰りといふ  
一ノデ トリマシテナン。  
ので とりましてねえ。

A アノー シクタトカ アノ一 (B ソーソー) ジョーマユワ ウ  
あのう シクタとか あのう (そうそう) 上繭は 売  
リニ ダシチマッテ (B ウリニ ダシテ タマトカナ) チューマイモ カイガ  
リに 出しちまって、(売りに出して、玉繭とかな) 中繭も 買いが

キテ、タマダトカモトシクタッテユーカナー (B  
来て、玉繭だとかもとシクタって言うかなあ、  
ハイ) アレデ<sup>(20)</sup> トッタンジャ ナイ！  
はい あれで とったんじゃ ないの。

B トリマシタノ。オバーサンジブンデナン (Aフーン) ザク  
とりました。おばあさんが自分でねえ (ふうん) 座縁  
リッチューノデ<sup>(21)</sup> テデマワシテ コー アノー テデマワシテ  
りというので あれ 手で 回して こう あのう 手で 回して  
ナン (Aアレデナン) トッテ。  
ね。 (あれでねえ) って。

A ソレジヤ・アノトキニ アノー ナン<sup>イ</sup>イトノ コー クチヨーダ  
それじゃああの時にあのう何の糸のこう口を出  
スノニ (Bミコ<sup>テ</sup>) エミコ<sup>テ</sup>ヤッタシナーアノー……。  
すのに、 (みごで) ええ、みごで やったしなあ あのう……。

B アウツキ。  
あ、うつ木(卯木)。

A ウツキ。 (Bウツキノハッパ<sup>テ</sup>) ウツキノハカ<sup>。</sup> チョット  
うつ木。 (うつ木の葉っぱで) うつ木の葉がちょっと  
ヒッカカルンナ。  
引っ掛かるんだ。

D ソーソー。  
そうそう。

A ソレデ トッテキテ クレッчуートナー (Bハイ)<sup>。</sup> トクイ  
それで とってきてくれっていなあ (はい) 得意に  
ニ ナッテナー トッテキテ。アレ ヤルト コー……。  
なってなあ とってきて。これ やると こう……。

B ケッコー トレマシタナン。

結構 とれましたねえ。

A トレテ (Bハイ) ヤリマシタナー。

とれて。(はい) やりましたなあ。

B ソーンー。

そうそう。

A ソーシテ コノ キヌイトヲ ムカシノ <sup>(22)</sup> シトダッタカラ <sup>(23)</sup> オケ  
そして このう 絹糸を 昔の 人だったから お蚕  
一コ ~~xxx~~ オケーコサマカ。ハイットルトカ。 ソシテ ウント ソ/  
お蚕さまが はいっているとか。 そして うんと その  
キヌイトバカリダト <sup>(24)</sup> オケーコゾッキチュッタジャー ナイ。 オ  
絹糸ばかりだと オケーコゾッキって言ったじやない。 オ  
ケーコゾッキノ キモノ。 (B笑)  
ケーコゾッキノ 着物。

B ソーンー。

そうそう。

A ゼンブ オカイコサマノ (Bハイ) イトダッチュ。  
全部 お蚕さまの (はい) 糸だっていう(意味で)。

B キヌニ キヌオリモノヲナン。  
絹織物をねえ。

A オケーコゾッキチュッタナー。 エー ソックリ オカイコサマ  
オケーコゾッキって言ったなあ。 ええと、そっくり お蚕さまの  
ノイトガ ハイットルッチューノカナ。  
糸が はいっていっていいうのかな。

B ソーンー。

そうそう。

A オケーコゾツキノ キモノダ"テ ジョートータゾツチュッタンナ。  
正絹の 着物だから 上等だぞって言ったんだ。

トコロガ コレオ イータエ キテッテ ハズカシクテナー (B)  
ところが これを 飯田へ 着て行って 軽ずかしくてなあ

ハイ) イータノ シューナンカ ミンナ コンガスリジャ ネーカ  
はい) 飯田の人達なんか みんな 紺絣じゃ ないか  
ナ。

B ソーソー。 ゴツ <sup>(25)</sup>コレ キルト ゴツイツ テューカナン ム  
そうそう。 ごつ これを 着ると ご ごついっていうかね,  
カシ!。  
昔の。

A ソー。 ゴツイツ ユーケドナー。 ソレデナー ワタシ コレ  
そう。 ごついって 言うけれどなあ。 それでなあ 私が これを  
キテッタラ ワラワレテナー ミンナニ。(笑) コンナノ <sup>キ</sup>コンナ  
着て行ったら 笑われてなあ みんなに。 こんなのは <sup>キ</sup>こんな  
ハハオヤノ テオリノ シマノ モノ キトルノワ <sup>オ</sup>ワシツ  
母親の 手織りの 縞の もの 着ているのは わし  
キリナ。(Bハイ) アトワ ミンナ コンガスリズラ。  
だけなんだ。(はい) あとは みんな 紺絣だろう。

B ソーソー。  
そうそう。

A ワラワレテナー。 ハツカシカッタダ。 ソノ ウチニナー ソツ  
笑われてなあ。 軽ずかしかったんだ。 その うちになあ  
コラジューノ オカーマカ<sup>(26)</sup> テオリテ<sup>(27)</sup> テオリツ テューコトバク  
そこら中の 母親が 手織りで、 手織りっていう 言葉は

ムカシ アッタカ ドーカ シランケードモ ソレデ コリヤー ト  
昔 あったか どうか 知らないけれども、それで これは  
トイ モンタ" アリガタイ モンダゾッテ シトガ ワラッテモ  
尊いものだ、ありがたい ものだとあって、人が 笑っても  
ワタシワ (Bハ一) キトッテ チューカ<sup>ガ</sup>クヲ ソツキョー シ  
私は はあ 着ていて、中学を 卒業 し  
タ トキニ ハオリダケ オカーマガ<sup>コンガスリヲ</sup> コサエテ  
た ときに 羽織だけ お母さんが 糸絣のを こしらえて  
くれた。  
クレタ。

B コンガスリ カッテ モラッテ。  
糸絣を 買って もらって。

A ウン。 ソレデ トキョーエ イッタ トキモナ コレヲ キテ  
うん。 それで 東京へ 行った ときもな、これを 着て  
ツタンダ"カラ。  
行ったんだから。

B ジミダッタワナン。  
地味だったわねえ。

A ウン ソーナ。 コレヲ キテッテ。  
うん、そうだ。 これと 着て行って。

B (笑) ジミナ ムスコテ。  
地味な 息子で。

A ウン ソレデ オカーマガ<sup>コサエテ</sup> クレタモンダ"デ トイ  
うん、それで お母さんが こしらえて くれたものだから 尊い  
ゾッチュ一 キモチガ<sup>(28)</sup> アッタモンデ (Bハ一) キテッタ"ナー。  
ぞといふ 気持ちが あったものだから (Bハ一) 着て行ったんだなあ

- B ソーンー。  
そうそう。
- A コレ ドーダナ オネーサマ コレ。  
これ どうだな。お義姉さま これ。
- B ワカイ ジブンニワ カナシ一 ハズカシートカ (A ソーンー)  
若い 時分には 悲しい、恥ずかしいとか そうそう  
オモイマスケド チョット オーキク ナッテクリヤ .....  
思いますけれど、ちょっと 大きく なってくれれば .....
- A イマ ミリヤ ドーダナ コノ イー ガラノ ヨサ。  
今 見れば どうだな、この 良い 柄の 良さ。
- B オヤノ<sup>(29)</sup> コシラエテ モラッタ モノワナン。  
親に こしらえて もらった 物はねえ。
- A イー ガラ ジャ ネーカナー。  
良い 柄じゃ ないかな。
- B イー シマオ イッショ ケンメー カンガエテ。  
良い 縞を 一戸懸命 考えて。
- A ミンナ キ / キータ タイシタ モンダ。  
みんな 気の 利いた 大した ものだ。
- B ホントニナン。  
本当に ねえ。
- A コレオ ソメタリ キスイト イレタリ シテ。タイシタ モンダ  
これを 染めたり 絹糸を 入れたり して。大した ものだ  
ナー。  
なあ。
- B オトコバッカ ヨニンヲ ソイデモ ハカマニ ハオリニ (A ソ  
男ばかり 4人を、それでも 裕に 羽織に そ)

二ナ) キモノト (Bン一) ミンナ オッテ キセタンダ"デ  
だ。 着物と そう みんな 織つて 着せたんだから  
ムカシノ シトワ エラカッタナン。  
昔の 人は 偉かったねえ。

A ウン ソーナ。 ゼーンブ テオリテ (Bハイ) ヨニンノ コ  
うん、 そうだ。 全部 手織りで はい 4人の 子  
ドモニ キ ナンシテ クレテ タビダッテ ミーンナ……。  
僕に <sup>xx</sup> 何して くれて 足袋だって みんな ……。

B ジブンデ スッテ。  
自分で 縫つて。

A ウン。 タビモ ジブンデ (Bハイハイ) コサエテ クレタ。  
うん。 足袋も 自分で はいはい こしらえて くれた。  
ハカマワ シタテヤサン ダシタケレドモ ハカマノ タタミカタ  
袴は 仕立屋さんに 出したけれども 袴の 置み方を  
モ オシエテ クレテ (Bハイ) ワシ チューガク イッ  
教えて くれて、 はい わしが 中学に 行って、  
テ オトコノコノ クセニ チューガク イチネンデ ジューサン  
男の子の くせに 中学 1年で、 13か  
カ シテ (Bハイ) ハカマ タタンダ"ラ ミンナ ビックリ  
4で はい 袴を 置んだら、 みんなが びっくり  
シテナー。  
してなあ。

B ショーシシャ"デ。  
<sup>(30)</sup>  
尚志社で。

A ウン キレーニ タタンダ"ニー。  
うん、 きれいに 置んだよ。

- B ハー。  
はあ。
- A ハカマノ ヒボノ ムスピカタナンテ ムズカシーモ！  
袴の 紐の 結び方なんて 難しいもの。
- B ハイ。ソーソー。（A フン） アノー ナンダ イシタタミニ ムスン  
はい そうそう。（ふん） あのう なんだ、 いじ置みに 結ん  
デナン。  
でねえ。
- A ソーナ。（B ハイ） アー ユー コト チャント オボエーテ  
そうだい（はい） ああ いう こと ちゃんと 覚えて。
- B ソエテ オボエテ オイデル。アノタビヲヒボタビヲナン（A ウン  
それで 覚えて いらっしゃる。あの、足袋を、紐足袋をね、うん,  
ヒモタビ） ヌイテ コシ一 コーブラサケテ（A ソーソーン  
紐足袋） 脱いで 腰へ こう ぶらさげて（うそうそう  
一ソーウン）アルイトッタジャネー。（A エー）アツク ナルト ナイテ コ  
う、うん 歩いていたじゃない。ええ 暑くなると 脱いで  
シエ ブラサケテ。  
腰へ ぶらさげて。
- A ソレガ ウットルノク ダイタイ コハゼ<sup>テ</sup><sub>XXXXXX</sub> コハゼ。  
それが 売っているのは 大体 こはせで、こはせ。
- B コハゼ<sup>テ</sup>。  
こはせで。
- A デ ヒモタビナンカ ナイモンテ アレモ（B ナイモンテ）  
で 紐足袋なんか 無いものだから、あれも（ないものだから）  
ハズカシカッタケードナー（B ソーソー） ソノウチニ マー  
恥ずかしかったけれどなあ（うそう） そのうちには まあ

オカーマワ <sup>(33)</sup> コドモよ オモシタ <sup>(34)</sup> タレタモンタ"テ"ッテ  
お母さんは 子供と 思ったか こしらえて くれたものだ"からと  
ツテ オシマイニワ モー ホコリッテ ユーカネー <sup>(35)</sup> (B エー  
いって、 終わりには もう 誇りと いうかねえ (B エー  
ソーダナン ハイ) カンシャッテ ユーカ ソンナ キモチダナ  
そうですねえ はい) 感謝と いうか そんな 気持ちだな,  
イマカラ カンカエテ ミルト。 (B ソーソー) ソーンナ キ  
今から 考えて みると。 ( そうそう ) そんな  
モチデ ~~ヤツ~~ ヤットリマシタナー。 ワシャ イマ ミテモ コ  
気持ちで やってましたなあ。 わけは 今 見ても  
ソーンナ ガラ イー ガラダト オモーナー。  
こんな 柄 ~~は~~ 良い 柄だと 思うなあ。

B アリマスニ イマモ。 コンヤ モッテ クリヤ ヨカッタナー  
ありますよ、今も。 今夜 持って くれば よかったなあ,  
アノ クラニ。  
あの 蔵に(あるのを)。

A ソーカナ アリヤー .....  
そうかな あれは .....

B ネマキデモ コシラエテ センセーンテモ キテ イタダキ ェ  
<sup>(36)</sup> 寝巻でも こしらえて 先生にでも 着て いただければ よ  
カッタト オモッテ。

かったと 思って。

A ソーカナ。 コリヤ ダイジニ シマットキナヨ。 コリヤー ト  
そうかな。 これは 大事に しまっておきなさいよ。 これは  
トイ モンダニー。  
尊い ものだよ。

B アノ シマノ ~~~~~  
あの 縞の .....

A ドノ ウチニモ アルラカ コー ュー モナ  
どの 家にも あるのだろうか、こう いう ものは。

B サー ミナミノ アタリニワ マダ アノ フトンヲナン (Aフ-  
さあ、 南の あたりには まだ あの ふとんをねえ、  
ンフン) ヤッハリ ジオリノ フトンヲ コシラエテ オイデマ  
ふんふん) やっぱり 織りの ふとんを こしらえて いらっしゃ  
スニ。

やいますよ。

A ハー。 シマツノ イー ウチジヤ ....。  
はあ。 始末の いい 家では ....。

B ソー ソー。  
そう そう。

A トットイタワナー。  
取って置いたよなあ。

B ハイ。  
はい。

A コリヤー トトイ モンター。  
これは 尊い ものだ。

## 注

- (1) BはAの実兄の妻にあたるのでこう呼ぶ。オネーサマよりも少し敬意を込くし、親愛の気持ちをこめた呼び方はオネーマ。
- (2) 語源的には言うまでもなく「ご無心」。
- (3) シマチヨーは「縫中帳」で「縫手本」のこと。縫織物の切れ端を貼りつけた見本帳。
- (4) オールであらわれる敬語動詞の過去形。「4収録地点とその方言について」の「3. 収録した方言の特色」の中の「③文法上の特色」を参照されたい。
- (5) [hai]
- (6) [naː̐i]。「A. 収録地点とその方言について」の「B表記について」の関係部分を参照。
- (7) もっとも年長の者ではデー・テ [deːte] が聞かれる。いわゆるサ行イ音便はこの方言では以前はかなり行なわれていた。
- (8) 共通語の文末助詞「の」の用法に近く、断定表現に用いられ、語調をやわらげる。ただし、共通語とは異なり、男性も使い、-ノヨや-ノネとなることはない。
- (9) 同じようにソーシテ、ソレデなどもホーシテ、ホイデなどとなる。-カナは話し手の清水氏によれば「目上、目下の区別なく使われる」という。
- (10) ゴラン(ご覧)に対して、注(4)で述べたオールの敬語動詞の形式とあてはめたもの。ただし、オゴランテのみで、オゴランルやオゴランタなどの形はない。
- (11) 義姉であるBに対してAはかなり尊敬表現を使っているが、Bがこの部分に-ナンを使って敬意を示すのに対し、Aはほとんどの場合-ナーを使い、-ナンは1・2の例外を除き使っていない。これは、男性と女性との違いか。あるいはこの地方の中心都會飯田市を中心に新たに起こりつつある軽い敬意をあらわす-ナーをとりいれたものか。
- (12) 注(1)参照。「祖父」「祖母」「父」は、それぞれ、オジーマ、オバ

一マ，オトーマ。

- (13) -ナは断定をあらわす助動詞の言い切り。-タ"も用いられるが、-ナの方が古いという。また、-タ"に比べ断定をやわらげ、詠嘆の気持ちを多少こめ、ていねいさを加えるという。-ナは形容動詞の言い切りにも次のようにあらわれる。コノ ヘンワ ヨルワ シズカナ (ニの邊は夜は静かだ)。
- (14) [hə:ě]のように聞こえる。この種の音声もハイで表記した。
- (15) -ラは推量を表わす。この方言では推量を表わすものとして、-ズラも用いられる。-ラと-ズラの相違は、-ラの方が確実性が高く、-ズラの方が低いという点にある。
- (16) [h̩m̩.̩]。応答のことばはこのほかにもかなりかな表記の具体音声と離れているものがある。
- (17) [kireo]。助詞の「を」はていねいに発音されるときは、どのような環境にあっても [wɔ]。しかし、助詞「を」は清水、片桐両氏とも会話では広い母音 [e] , [a] の次では [o] , [ɔ] の次では [hako:] (箱を)の場合のように長母音、狭い母音 [i] , [u] の次では [wo] で現れることが多い。
- (18) 一番品質の悪い繭。
- (19) タマは玉繭。2匹の蚕がいっしょに作った繭。
- (20) -ノを男性が使っている例。注(8)参照。なお、ナイは在来の方言ではネーとなるのが普通。ナイに限らず、この方言では、共通語の連母音の-アイ、-アエにあたるところには-エーがあらわれるのが一般的だったという。
- (21) もっと年長の者ではマウェーテ [mawe:te] となる。いわゆるサ行イ音便形は今回の録音ではあらわれなかつた。注(7) 参照。なお、この点についての指摘は以下省略する。
- (22) 共通語のhiにこの方言のsiの対応する例はこの方言では少ない。「人」のほか「一つ」「ひとり」などに認められるにとどまる。
- (23) -カラは共通語的。在来の方言では-デや-モンデを使う。会話の中に-カラがあらわれるることが時どきある。この点についての指摘は

以下省略する。

- (24) -ゾッキは「ばかり」を意味する接尾語。オケーコゾッキは正絹の意。
- (25) 「ごつごつした」の意。
- (26) 前にはハズカシクテとあるが、ここはハツカシカッタ。清水氏(B)は録音のこの部分を聞いて、後者は使わない言い方だと内省している。ハツカシカッタ<sub>ン</sub>ナあるいはハツカシカッタ<sub>ン</sub>ダとなるべきところである。
- (27) この文はここで中断され、意味的に次には続かない。
- (28) [kj motʃiæ̝]。
- (29) オヤニの言い間違い。
- (30) 清水氏(B)が通学した旧制飯田中学校の自主寮。飯田市上飯田にあった。
- (31) 言いよどみがあり、このような発音となる。
- (32) 今このはぜの代わりに紐で結んだ足袋。
- (33) [oka:ma:]あるいは[oka:maya]のように聞こえるが、話し手の清水氏がオカーマワだと聞き取られたため、本文ではそのように扱った。
- (34) よく聞きとれない。話し手である清水氏は本文のようではないかと言われる。
- (35) -ネーは共通語的。清水氏の発話には時折-ネーが混じる。ただし、この点についての指摘は以下では省略する。
- (36) 録音時に同席した馬瀬を指す。
- (37) 家号。「3. 音の嫁入り」の話し手小池氏の家の家号。

## 2 幼いころの遊び

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生れ

B 片桐ともゑ 女 明治39年生れ

A アリヤ ムカシワ ドーダッツラナー。 アノー オトコノコト  
あれは 昔は どうだったんだろうなあ。 あの 男の子と  
オンナノコト イッショニ<sup>(1)</sup> アソンタ コトモ アッタシ ベツベ  
女の子と 一緒に 遊んだ ことも あったし、 別々に  
ツニ アソンタ コトモ アッタカ ナカニ アノー オトコノコ  
遊んだ ことも あったが、 中に あの 男の子で  
デナー (B 笑 ハイ)<sup>ハイ</sup> ヨク オンナノコンナカエ ハイッテクト  
なあ、 良く 女の子の中に はいって行くと  
オ<sup>ヌ</sup> ナンダッタヤー ナントカ イッチヨンチヨ<sup>ヌ</sup> イッチヨンチヨ  
何だったなあ、 何とか イッチヨンチヨン  
ントカ ナントカ イッテ ワラッタジヤンカ。<sup>(3)</sup> オトコノ ナカ  
とか 何とか 言って 笑ったではないか。 男の 中  
/.....  
の.....。

B オートコノ ナーカニ マメイリヨ。<sup>(4)</sup> (A イッチヨン。 ウン。 )  
男の 中に 豆入りよ。 ( イッチヨン。 うん )

ナーフ「オトコノ ナーカノ マメイリ」。 ナントカ ユー。  
なあ 「男の 中の 豆入り。」 何とか 言う。

A ナントクデ イッチョンチヨントカ (B笑) イッテ カラカラ  
何とかで イッチョンチヨンとか 言って からか  
ッタナー。  
ったなあ。

B ソーソー。  
そろそろ。

A ソースト ユンドワ オトコデ オンナ／ナカエ ハイッタ や  
そうすると 今度は 男で 女の 中へ はいった や  
ツカ。ハズカシカッテ カエッテ キテ イッショニ ナッテ コ  
つが 腹心すか(か)って リ帰って 来て、一緒に なって  
ンドワ オトコワ タカシカ タカシッチュッタナー タケウマノ  
今度は 男は タカシか、タカシといったなあ、竹馬のこと  
コト タカ タカシ。 (B タケウマノ コトオナン。ハイ。)  
と タカシ。 竹馬の ことをねえ。 はい。  
タカアシタナー アリヤー。 タカシニ ノッテー ソイカラ ア  
タカアシ(高足)だなあ あれは。 タカシに 乗って それから  
リヤ カタアシトビ アリヤ シンコロッチュッタカナ オトコノ  
あれは 片足跳び、 あれは シンコロと言ったかな、 男の子は。  
コワ。 シンコロデ ドコマテ イケルカ シンコロノ キョーン  
シンコロで どこまで 行けるか シンコロの 競争を  
ニ (Bハイ) <sup>(5)</sup> シルトカナー。 オンナノコワ ドンナ コト  
はい するとかなあ。 女の子は どんな ことを  
シツラ。  
いたろう。

B オンナノコワナン エー オテタ<sup>(6)</sup>マトカ オハジキトカナン。 や  
女の子はねえ ええ お手玉とか あはじきとかねえ。

リマシタナ。

やりましたね。

A ウン オハジキ。ヤッタナ。

うん、おはじきやったな。

B ソノ オハジキモ イマワ アノ イロイロ ウットリマスケドナ  
その おはじきも 今はあのいろいろ 売っていますけれどね、

ン（Bウン）ムカシワ ナイデ ソノ サッキモ イッタヨ  
（うん）昔は、無いから、そのさっきも言った

一ニ <sup>(8)</sup>コシブノ カワニ キレーナ イシカ アッテ アブラ  
ように 小渕の 川に 石が あって、油石

イシッチューア ヒロッテ キテ <sup>(Aア-</sup>ソーソー) アレテ  
というのを 拾って 来て <sup>ああ</sup> そうそう あれで

オハジキ ヤリマシタンナ。 <sup>ソシテ</sup> <sup>(Aア-</sup>ソーソー) <sup>ア</sup>イシ一 ヒロッテ  
おはじきを やりました。 <sup>そして</sup> <sup>あ</sup>の <sup>石を</sup> 拾って

<sup>キタナ</sup> オマネキッチュッテナン <sup>(Aウン)</sup> コノ テノヒラエ  
来たなあ オマネキと言ってねえ、 <sup>（うん）</sup> この てのひらへ

ノセテ コー ヤッテ コー スルノー オマネキッチュイマシタ  
乗せて こう やって こう するのを オマネキと言いましたよ。

二。

A ウー ウーン アッタ アッタ。 <sup>(B笑)</sup> アノー ソレワ オ  
うう ううん、 あった あった。 <sup>（あの）</sup> それは

<sup>(10)</sup> ハジキデ オイテ タクサン ニキッテ <sup>(Bハイ)</sup> コヤッテ  
おはじきを 置いて たくさん 摺って <sup>（はい）</sup> こうやって

コー ヤルッテ <sup>(Bハイ)</sup> ソーソーソーソー。ミトッタ。  
こう やると、 <sup>（はい）</sup> そうそう そうそう 見ていた

B オマネキッチュイマシタ アレナゾ。 (A フンフン) タク  
オマネキと言いましたんですよ、あれね。

サン トッタ シトガ  
たくさん とった 人が。

A アレオ タクサン タクサン 上へ よしよし… (Bハイ) ソレカラ ナ  
あれを ××× たくさん とった…, (はい) それから  
ニカ コー ポロポロト コボシテ マタ ナニカ ヤラナンダ。  
何か こう ほろほろと こぼして また 何か やらなかつた。

B コボシテワ ドータッタカ オボエトリマセンケドナン。  
こぼしては どうだったか 対えていませんけれどねえ。

A アリヤ コー ャッテ コー ャッテ, オレ オトコモ ャッタ  
あれは こう やって, こう やって, おれ, 男も やつたな。  
才。

B ウン。 ソレワ オハジキ。  
それは おはじき

A オハジキデ ャッテ イチバン サイコワ ニカイ ヤラニヤ イ  
おはじきで やって 一番 最後は 二回 やらなくては  
<sup>(11)</sup>  
カナクテー。  
いけなくて。

B ソノ アタッタノワ トッテ。  
その あたったのは とって。

A ツギワ……。 トッテ。 イチバン サイコ ミンナ ヤル  
とつて。 一番 最後に みんなが やる  
トキニワ サイコワ コー ニカイ ュ ャッテー (Bハイ)  
時には 最後は こう 二回 こう やつて (はい)

ニカイ セーコー スレバ トッテ一 (B トッテ) アレワ オ  
ニ回 成功 すれば とって (とつて) あれは  
トコノコモ ャッタナ。  
男の子も やつたな。

B オトコノコモ ャリマシタ カシラナン ハイ。  
男の子も やりましたかしらねえ、(はい)。

A ヤッタンナ。 イッショソナッテ。 ソレカラ アノー トキドキ  
やつたんだ。 一緒になつて。 それから あの 時々,  
一 キット トーキョー! キンジョエ イッタ シトカ モッ  
きっと 東京の 近所へ 行つた 人が 持つて  
テ キタンダカ アルイワ オイセサマエ イッテ カエリ=カ  
來たのか, あるいは お伊勢さまへ 行つて 帰りに  
ツテ ミタンダカ (Bハイ) カイカラテ オハジキ ャッタラ。  
買って 来たのか, (はい) 貝がうで あはじきを やつただろ。

B アーカイラナ。 アノ ナンチュイマシタッタ。 キシャゴ<sup>。</sup> シ  
ああ 貝をね。 あの なんて言ひましたか。 キシャゴ 知  
ッテ オイデマスカナ。 (Aウン シットル アノ) コー コ/  
って いらっしゃるかな。 (うん, 知つてゐる。あの) こう この  
クライ チーサクテ (Aウン チーサクッテ) コー キリキリ  
くらい 小さくて (うん 小さくて) こう キリキリ  
キリット (Aウン) アノ (Aアレテ) キシャゴ<sup>。</sup> ッチュイ  
キリッと, (うん) あの (あれで) キシャゴって 言い  
マシタナ。 (Aアレデ ャリマシタナ。) アレヲ ャリマシタ  
ましたね。 (あれで やりましたな。) あれを やりました  
ナ。 アレワ チーサクッテ タクサン コー ノサッテナン。  
ね。 あれは 小さくて たくさん こう (のひらに) のつてねえ。

A ソーソー。アレヲ フ~~ッ~~<sup>ッ</sup> オミヤケニ カッテ キタンダナー  
そうそう。あれを お土産に 買って 来たんだなあ,  
キット コドモノ。  
きっと 子供の。

B フクロイ ハイッテナン。  
袋へ 入ってねえ。

A ウン。フクロイ ハイッテ オリマシタナー。  
ウン 袋へ 入って いましたなあ。

B ハイ。イマノヨーニ キレーナ ホカノ オモチャ一 ナイテ" アー ユ  
はい。今のように きれいな ほかの "おもちゃが" ないから、ああ い  
一 モノが オモチャデ オミヤケダッタナン。  
ものが おもちゃで おみやげでしたねえ。

A ソーソー。ソーダナ。アリマセ<sup>ン</sup>デシタナ。 (Bハイ) ジブ  
そうそう そうだな。ありませんでしたな。 (はい) 自分  
ンデ マー クフー シテ ャッタンダナー。  
で まあ 工夫 して やったんだなあ。

B ソーソー。  
そうそう。

A ソレカラ オトコノコワ ソレ ケン<sup>(14)</sup> ケンチユッタケドナ。  
それから 男の子は、 それ、 ケン、 ケンと言ったけれど"な。

B アー ソーソー。アレ ナンチユイマシタッタネ。 イマノ シ  
ああ そうそう。あれを 何と言いましたっけね。 今の  
ユーニ イワセルト。  
人達に 言わせると。

A イマノ シューワネ ナントカ ユーンダワ。 アレオ ャッチャ  
今の 人達はね、 何とか 言うんだわ。 あれと やっては

イカンチュッテ (Bハイ) ソレカラ モー シツツ オトコ  
いけないと言って、 (はい) それから もう 一つ 男の子

ノコガナー クキノ ナカイ クキ ゴスンクキナンカラナー (かなか  
くぎの、 長い 釘, ちぢ釘など)をな。

Bハイ) ジエ コー ウチコンテー。  
はい) 地へ こう 打ち込んで。

B アリヤ ナンテユイマシタッタナン。<sup>(16)</sup>

あれは 何と言いましたかねえ。

A アリヤ ナンチユーチッタッタカナー。<sup>(17)</sup>

あれは 何と言ったかなあ。

B コドモア ヨク ヤリマシタニ。

子供は よく やりましたよ。

A ソーシテ ソレヲ ジブンデ ウチコンテ アイテノー タオス  
そうして それと 自分で 打ち込んで、 相手のものを 倒す

ヤツ ヤツテー。 (Bハイ) ソレカ ジブンノ アシー ササ  
やつを やつて。 (はい) それが 自分の 足に 刺さ

ッタリ スルモンタカラ アブナイカラ (Bハイ) ヨセヨナン  
ったり するものだから 「あぶないから (はい) よせよ」など

チユッテ センセー＝ イワレタノーオー<sup>(18)</sup> オモイタシマスナー。  
と言って 先生に 言われたのを 思い出しますなあ。

(Bハイ) アレワ ナンチュー アソビタッタナー。  
はい) あれは 何という 遊びだったかなあ。

B ナントカ ユッタナン。 ソレカラ アノ ボーカフシトカ ユッ  
何とか 言いましたねえ。 それから あの 棒隠(とか) 言って

テナン (Aソー) アノ イシ<sup>xxx</sup> ツチベタエ コー ボーテ (ねえ  
そう) あの 地面へ、 こう 棒で

A カクンズラ ) アナオ コシラエテ ソンナカエ ポーオ コ  
書くんだろう ) 穴を 作って その中へ 棒を

イレテ ( A ウン カクシテ オイテ ) ソシテ チョット コー  
入れて ( うん 隠して おいて ) そして ちょっと こう

ナゼテ カクシテ ( A ウン ) ボーカクシッチューノオ ヤリマシ  
なぜて 隠して ( うん ) 棒隠しといふのを やりまし

タンナ。 ( A ウン ) ドコニ カクレトルカナンテ。  
たのよ。 ( うん ) 「どにに 隠れていらぬか」など

A ソー。 ソレカラナー ボーカクシ=ニタノデナー アノ一 ジ  
そう。 それからなあ 棒隠しに 似たのでねえ あの  
ベン ジベ ジベタオ フカーフ ホッテ コンナ ( B ハイ )  
地面を 深く掘って、こんな ( はい )

マル カイタリ シカク カイタリ シテ ( B ハイ ) ホーシテ  
まると 書いたり 四角を 書いたり して ( はい ) そして

コー カクシトイテ ( B ハイ ) ソー シテ ドコニ ナニカ  
こう 隠しておいて ( はい ) そして どにに 何が

カイテ アルカッテ ユーノーネー アテッコー シテ ( B  
書いて あるかと いうのをねえ、 当てっこをして、

ハイ ) ソノ トーリ コー イイ イクカ ドーカ ソレモ  
はい ) その 通り こう 行くか どうか、 それも

(20) マタ アレオ オトコノコワ ヤッタナー。 ソレ…  
また あれと 男の子は やったなあ。 それ…

B オンナノコワ ヤラナシタナン ソレワ。 ハイ。  
女の子は やらなかつたわ、 それは。 はい。

A エー オトコ ソー オンナノコワ ヤラナカ (21) ナンダ。 アソ  
ええ そう、 女の子は やら なかつた。 あ

レカラ アレワ ナンナ ソーリヲ (B ウーン) ケ<sub>xx</sub> アノ ケ  
それから あれは 何だ, そ"うりを, うん あの 跳む  
アゲテニ。

上げて。

B ゲータ ゲタ コンボトカ イーマシタワネ。  
「けた けた コンボ」とか 言いましたわね。

A アー ソーカ。 アレワ ナニカナ。 ウラカ デルカ オモテカ。  
ああ そうか。 あれは 何かな。 裏が 出るか 表が  
デルカッチュ アテッコ シタノカナ アリヤー。 (B ソーソー)  
出るかという 当て合ひを いたのかな, あれは。

アレ ャッタナー。

あれを やったなあ。

B アノー アレ オシ<sub>xx</sub> アシタ オテンキニ ナレトカ イッテ。  
あの, あれ, あした お天気に なれとか 言って。

A ウーン ソーソー。  
うん そうそう。

B オ<sub>xx</sub> オモテガ デタラ オテンキデ (A ウン) ウラガ デタラ  
表が 出たら お天気で, (うん) 裏が 出たら  
アメフリタ"ヨッテ ソー ュー コトモ ヤリマシタンドニ。  
雨降りた"よって そ"う"い"う" ことも やりましたんですよ。

A ウーン ソータ" ソータ" (B ハイ) アレ ソ"ーリバキテ ソー  
うん, そ"うだ", そ"うだ". (はい) あれは そ"うりば"きて, そ"うり  
リッチャ" ミンナ ソレ ムカシア ミンナ コドモ ミンナ  
といえば みんな, それ 音は みんな, 子供は みんな  
ソ"ーリタ" ッタンデ"ナ。 (B ハイ) ソ"ーリバキテ ャッテ ソレ  
そ"うりた"ったからな。

ヤリマシタナー。 アレ オトコノコモ オンナノコモ ヤリマシタ。  
やりましたなあ。 あれを 男の子も 女の子も やりました。

B オンナノコモ ヤリマシタ。  
女の子も やりました。

A ヤリマシタナー。  
やりましたなあ。

B ハイ。ソレデ ソノ オンナノコワ オテダマ (Aウン) オトコノ  
はい。それで その 女の子は お手玉 (ラン) 男の  
シューク ケン/コト ナンテ ユッタッタカナー。イマノ  
衆は ケンの 事を 何て 言ったっけがなあ。 今  
コトバデ ユート アレワ (Aエー アレワネー) ナントカ ユッタナー。  
言葉で 言うと あれは (ええ、あれはねえ) 何とか 言ったなあ。

A ココラジャ ケンテ ユーケドネー イータノ マワリデワネー  
こらへんでは ケンと 言うけれどねえ、 飯田の 回りではねえ  
(Bハイ) ナントカ イッタナー。 イマ コドモ ベチャッ  
何とか 言ったなあ。 今 子供は ベチャッ  
チュー トコモ アルナー (B笑) ペチャット コー ウツカラ ペ  
言う所も あるなあ ペチャッと こう 打つから  
チャッチャー コドモガ アルケードモ。  
ペチャッという 子供が いろいろけれども。

B アレー マタ ハヤッテ オリマシタニ コノコロ。  
あれが また 流行って おりましたよ、 この頃。

A ソーカナ。  
そうかな

B フュンナルト。  
冬になると。

- A アレワネー ガッコーデワ シトユロ シテ イケ…ネーナンテ  
 あれはねえ、学校では ある一時期 では いけ ないなどと  
 センセーカ。ユッテー。  
 先生が 言って。
- B アレ カケトイテ トリマステナン。  
 あれは、賭けておひでから とりますからねえ。
- A ソーソーソーソー。 アー トルモンデ トッタリ  $(B \frac{\text{ハイ}}{\text{はい}})$   
 そうそうそうそう。 あのように とるので、 とったり,  
 マケタリ カッタリ  $(B \frac{\text{ソーソー}}{\text{そうそう}} \frac{\text{ハイ}}{\text{はい}})$  スルモンデ ウン。  
 負けたり 勝ったたり  $(\frac{\text{そうこう}}{\text{はい}})$  するものだがら、うん。
- B カケコトノヨーナ。  
 賭けごとのような。
- A ソー ソレデ イカシツ チュッタントナーナー  $(B \frac{\text{ハイ}}{\text{はい}})$  ソンナ  
 そう それで いけないと言ったんだなあ  
 コト アリマシタナー。  
 $\underline{\hspace{1cm}}$   
 ことが ありましたなあ。
- B ソレデ ソノ オタマノ ウタオナ  $(A \frac{\text{ウン}}{\text{うん}})$  アノ一…  
 オレで その お手玉の 歌をな、  $(\frac{\text{うん}}{\text{うん}})$  あのう…。
- A オボエテ オイデル。  
 覚えて いらっしゃる。
- B シットリマスニ。 ャッテ ミマスカ。  
 知っていますよ。 やって みますか。
- A ャッテ ミナ チョット。  
 やって みな、 ちょっと。
- B アノー コー タクサン ャッテ カッタ  $\frac{\text{カッタ}}{\text{xxx}}$  シトガナン  $(A \frac{\text{うん}}{\text{あいう}})$   
 あのう、 こう、 たくさん やって 勝った 人が ねえ

ウン) アレ ヤリマスワケダ。 (A ウン) ソレテ 「オシト  
うん) あれと やりますわけです。 (A うん) それで 「オシツ(あつ)

ツ オロシテ オロシテ オサライ」 ッテナ (A ウン) ソレカ  
オロシテ オロシテ オサライ」 とね, (A うん) それから

ラ 「オミーンナ オサライ」 ソレカラ 「オーテバサミ オー  
「オミンナ オサライ」 それから 「オテバサミ(お手挟み)

一テバサミ オーテバサミ オロシテ オッサー ライ」 デ コンタ"  
オテバサミ オテバサミ オロシテ オサライ」 それで、今度は

コユビデ コー ハサムノワ オツリンコッチュイマスンナ。 (A  
小指で こう 挿むのは オツリンコと言うんです。

フン フーン) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ  
ふん ふうん) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ  
テ オサラ……」 ソレオ ズート ャッテナン (A ウン) マ  
テ オサラ…… それと ずっと やってねえ (A うん) まだ  
タ" アノー (A ツズ……) 「オーキナ ハーショ コクレ」  
あのう 続…… 「オオキナ(大きな)ハショ(橋を) コクレ(<ぐれ)」

トカナン (A フンフン) ヤリマシテ。  
とかねえ (A フンフン) やりました。

A ツズケルダケ ツズケルノ カナー。  
続けられるだけ 続けるのかなあ。

B ハイ。 ズート ツズケテナン (A フーン) ドコマテ イッ  
はい ずっと 続けてねえ, (A ふうん) どこまで い、  
タカワ アマリ オボエトリマセンケドナン (A フン) 「チー  
たかは あまり 覚えておりませんけれどねえ, (A ふん) 「チイサナ  
サナ ハーショ コクレ」 トカ コー ャットイテ (A フン)  
(小さな) ハショ コクレ」とか, こう やっておいて (A ふん)

アタマ アケテ オテタマ ムコーエ オクットイテ チャット  
頭を あげて お手玉を 向こうへ 送っておいて、 すばやく  
ウケマスンナ コー ャッテ。 (A フンフンフン) 「オーキナ  
受けますのです こう やって。 ふんふんふん」 オオキナ  
ハーショ コクレ チーサナ ハーショ コクレ トカ ユッテ  
ハショ ユグレ、 ティサナ ハショ コクレ とか 言って  
(A フンフン) ソー ユノー ズット ヤリマシタニ。 ハイ。  
ふんふん そう けうのを ずっと やりましたよ。 はい。

A ハー オトコノコタカラ オボエトラナカッタカ。 ソー キ キー  
はあ、 男の子たから 覚えていなかったか そう 聞いた  
タヨーナ キカ スルナ。  
ような 気が するな。

B コー ミンナ ヨッテ キテ イ エンカワナンカデナン ヤリマス！  
こう、 みんな 寄って 来て、 縁側などでねえ、 やりますの。

A フンフン ウーン ウン ハー エンカワ！ ヒナタボッコ (B ハ  
ふんふん ううん うん、 はあ、 縁側の 日向ぼっこ は  
イ) シナガラ<sup>(24)</sup>  
しながら。

B ソーソー。(A フンフン) ホテ アノ キョクトリッチューノモ ヤリ  
そうそう。(ふんふん) それで あの キョクトリといふのも  
マシタンナ。(A ホー ホー) ミツツテ ヤッタリ ヨツツテ  
やりましたのです。(ほう ほう) 三つで やったり 四つで  
ヤッタリ (A フーン) デキン シトワ フタツテ コー ヒ  
やったり (ふうん) できない 人は ニつで こう  
ヨイヒヨイト (A フンフンフン) ヤリマシタケドナン。  
ヒヨイヒヨイヒ

A イマノ ソノ一 ウタオネー アノ一 キートッテ ワシナー オ  
今 の そ の 歌 を ねえ、あのう 聞 い て い て わ し な あ  
モイタ"シタノワ アノ一 コー ュー ウタ オボエテ オル  
思 い 出 し た の は、あのう こ う い う 歌 を 覚 え て い る、  
イ デ ル カ ナ。  
いらっしゃるかな。

B ハイ。  
はい。

A 「ヤマ コシテ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ」  
「ヤマ(山)コシテ カワ(川)コシテ コウヤ(紺屋)オコンサ ホイ」

B アーリマス アリマス。<sup>(25)</sup> ハイ。  
あります、あります。 はい。

A アレワナー アレワ ナニウタッチューカ シラシケド コドモノ  
あれはねえ、あれは 何歌といいか(どうか) 知らないけれど 子供の  
ウタッタ ワラベウタタ"ケドナー。 (Bエー) アレナー カシ  
歌った 童歌だけれどなあ。 (ええ) めれなあ 柏  
<sup>(26)</sup> ワバラニ コーヤカ アツツラ。  
原に 紺屋が あつたう。

B ア ハーハーハー。 オユンサンチュ シト アリマシタノ。  
あ、 はあはあはあ おこんさんという 人が いましたの。

A ウン アッタンナ。 コーヤカ アッタン。  
うん、 あつたんだ。 紺屋が あつたんだ。

B フーン フン。 アリマシタナン。<sup>(27)</sup>  
ふうん ふん。

A ソユデナ一。  
そでなあ。

- B アレナー 「ヤーマ コシテ カワ コシテ カワラノ オコンサ  
 あれなあ、 「ヤマ コシテ カワ コシテ カワラ(川原) オコンサ  
 ホイ アンベ イカーンカナ」ッテ コー イッタソダナ。  
 ホイ アンベ(遊びに) イカンカナ(行かないかね)と こう 言ったんだな。
- A フーン。  
 フーン。
- B アーソビニ イキマショッチュ コトナンタ"ナ アンベ イカーン  
 遊びに 行きましようという ことなんだね、「アンベ イカンカナ」  
 カナッテ (Aアンベ フン)  
 と呼んで (アンベ フン) ソレカラ ツレテクノ。  
 それから 連れていくの。
- A ワシノワナ オモシロイニ。  
 わいのはな おもしろいよ。
- B ハイ。  
 (はい)
- A 「ヤーマ コシテ カーワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ  
 「ヤマ コシテ カワ コシテ ユウヤノ オコンサ ホイ  
 ッテュートナー。  
 というと名め。
- B ハイ。  
 (はい)
- A 「マダ」 ネテ オルニュッチュッテ 「ネボーダ"ナム"ュッチュッテ。  
 「マダ」 ネ(寝)て オル=いよいと いって 「ネボウダ"ナム(寝坊だね)"」といって。
- B アッ ソーソー。  
 あっ そうそう。
- A ソレカラ ソノ ツキ マタ 「ヤマ コシテ カワ コシテ コ  
 それから その 次は、 また 「ヤマ コシテ カワ コシテ

一ヤノ オウンサ ホイュッチュート 「イーマ カオ アラット  
ユウヤノ オウンサ ホイユッていうと、 「イマ カオ(顔)アラット  
ルニョッチュッテ 「オネボータ"ナム"ュッチュッテ 「ヤマ コシ  
ルレ=(洗っているよ)」といつて 「オネボウタ"ナム" といつて、 「ヤマ コシテ  
テ カワ コシテ コーヤノ オウンサ ホイュッチュート 「イ  
カワ コシテ ユウヤノ オウンサ ホイ」というと 「イマ  
マ オマンマ タベトルニユッチュ。 「オネボータ"ナム"ュッチュツ  
オマンマ(ご飯)タベトル=食べているよ」といふ。「オネボータ"ナム" といつて  
<sup>(28)</sup> チャッナエ。 ソシテ オトノノコデモネー。 (曰ハイ) アノー  
はねえ。 いい(男の子)もねえ、 へ はいノ あかう  
ガッコ イキ加ケニ ソシテ ョンテ" アルイタノ。  
学校へ 行きかけに ひい(呑み) 歩けた。

B ハハハ。 アノー ムカシ アソビテオ ツナイテ" イ  
は、は、はあ。 あのう 昔は、 庭(いにしへ)に 手を つないで  
ツチャナン ユー オーゼ"テ" 「ヤマ コシテ カワ コシテ カ  
行つてはねえ こ) 大勢で 「ヤマ コシテ カワ コシテ  
ワラノ オウンサ ホイ。 アンベ イルンカナユッチュ ヤツオ  
カリラノ オウンサ ホイ。 アンベ イルンカナユツテ やツを  
ヤリマシタンナ ハイ。  
やりましたの、 はい。

A アーアー ソッカラ キタンダナー。  
ああ、ああ、そこから きにんだなあ。

B ソレテ カワラノ オコンサッテタケード コーヤノ オコンサタツ  
それで 「カワラノ オコンサ」といつたけれど 「コーヤノ オコンサ」だった  
タカモ シレマゼン。  
かも しれません。

A ソレデ エツ ~~xxxx~~ チョード イー コトニネー (B エツ) カシワバラニ  
それで ちょうど 良い ことにねえ, (ええ) 柏原に  
コーヤガ アッタ ワケ。 (B 笑) コンヤ コンヤッテュー ャツ 三  
紺屋が あった わけ。 コンヤ, コンヤという やつを  
ユーヤッテュッタナー。  
ユーヤと言ったなあ。

B エー コーヤッテューノ アリマシタ。 キツツアッテュー オジ  
ええ, ユーヤというの, ありました。 「きつつか」という おじさま  
サマデナン。  
じねえ。

A ソー。 アノ一 ハマオバサマノ ムコノ ミチシタノ ウチカ  
そう。 あのう はまおばさまの 向この 道の下の 家が  
コーヤデナー (B エー マエデ ソーソーソー ソー ハイ) ソ  
紺屋 でなあ (ええ, 前で, そうそうそう はい)  
エダモンドカラ ソレ オボエテカラナー ソコエ (B ハイ)  
それだもんだから, それを 知ってからなあ, そこへ (はい)  
イッテ オーキナ コエデ ユートナー オバーサンニ <sup>(30)</sup> オコラレ  
行って 大きな 声で 言うとなあ おばあさんに 叱られて,  
テ (B 笑 オコラレ……) ソンナ コト オモイタス ウン。  
そんな ことと 思い出す, うん。

B ヘエー。 ムカシフ ソンナヨーナ アノ一 ウタオ ウタッテナ  
へええ。 昔は そんなような, あのう, 歌を 歌ってねえ。  
ン。

A ソー ホンットーノ フラベウタデナー。  
そう, 本当の 童歌でなあ。

B ソータナン。

そうですね。

A エ。 ミンヨートシテノ ワラベウタッチューノカ。<sup>(32)</sup> (Bハイ)  
ええ。 民謡とての 童歌といふのが

アッタトモーナー。

あつにと思うなあ。

B ソーソー。 ナンカ ナニカ アッタヨーナ キカ。 イルケド。  
そうそ。 何か、 何か あつにような 気が するけれど。

ナニカ ユメノ ベンマニ トート ソエテ トクユーノカ。 アリ  
何か 「ユメ(未)ノ ベンマニ トト(魚) ソエテ」。 とかいうのが あり  
マシツア。

ま(に)いは)。

A エー ソー ムー モナ アッタ ウン。  
ええ そ) い) もかか あつた, うん。

B アッタ。

あつた。

A トト ソエテッテ シロイ ベンマニ トト ソエテッテ シロ  
「トト ソエテ」って, 「シロイ ベンマニ トト ソエテ」って, 白い  
イ ベンケイント ムカシア タベレナカッタモンデ。  
ご飯なんか 音は 食べられなかつたものにかう。

B ソエテ タイジニ シテ クレタッчу ノトダ<sup>ンダ</sup>ナ一 ウン。  
それで 大事に して これにといふ ことなんだなあ, うん,

A ソー ユー コト ソー ユー ユト。 トト ソエテ ナンテ  
そう いう こと, そう いう こと。「トト ソエテ」なんて  
(Bエニ) トト ナンカ オショーカヅシカ ツガンジヤ ネー  
ええ お魚、 なんか お正月いか 付かないじや ない

カナー。

かなあ。

B ソーダナン。

そうですね。

A ウン。

うん。

B ムカシワ ホント アノー オコメノ ゴハンナンカ タベルレッテ  
昔は ほんとうに あの、 お米の ご飯なんか 食べるとい  
エ コト アリマセナンダ"テ" A ソーソ エー ムキメシダ"ト  
ことは あります(たから)、 、 どうぞ えー 麦飯だとか  
カ ヒエメシダ"トカ。  
りえ(稗)飯だとか。

A エニ ソーデスネ。 アノ シロイ ゴハン タベタノワ……。  
ええ、 そうですね。 あゝ 白い ご飯を 食べたのは……。

レ オショ 一ヶ<sup>0</sup>ット……

か正月と……

A オショーカ<sup>0</sup>ツ……。 カソ"エル ホドシカ ナカッタナ。  
お正月……。 数える ほどしか なかったな。

B エー。

ええ。

A <sup>(33)</sup> ダカラ シロイ マンマニ トト ソエテ ナンテ エーバ オー  
だから、 白い ご飯に お魚を 添えて なんて 言えば、 大  
<sup>(34)</sup> ゴチソーテ"……。 ウスヒキノ バンニ シンマイヲ ハクマイテ"  
ご馳走で……。 日ひきの 晩に 新米と 白米で  
タベタナ。  
食べたな。

B ハイ。

はい。

A ソレカラ アト オショーカッ サンカゲック<sup>(35)</sup>ライト アトワ ゼ  
それからあと お正月 3ヶ月ぐらいいと、あとは  
シブ ムキメシタナ。  
全部 麦食だな。

B ソーソー。

そうそ。

A エッ。アハノマイ メベマゼン。(Bエー) エッ ア ミンナ  
ええ。かゝは朱 食べません。(ええ) ええ。ぐ、みんな  
ムキオ ツクッテ オリ・キシタデ(エー) エッ ムキメシオ  
麦と 1月(ふりおいたつ)、(くそ) ええ、麦食  
タバテ ヤリキシ。

(36)  
食ヤセ やりたべ。

B ムキオ ツクッテ アクヲ ツクッテナン。エー。  
麦と 1月(ふりおいたつ) 栗と 作(つく)ねえ、ええ。

A アクモ タダタシ ノシヒチナンテ ヌサエテナー。  
栗も 俊(とこ)、栗餅(くりもち) こいつてなう。

B コノコー ホシヤ (Aエー) ナントカ ユーノカ アッタジヤ  
「コノユー(この子) ホシヤ(欲(いの)しこ)

なんとか 言うのが あったじや

ナイカナン。

ないですかね。

A ウン ソレモ アル。ウーン アノコー ホシヤ コノコー ホ  
うん、それも ある。ううん、「アノコヲ ホシヤ コノコヲ ホ  
シヤトカ。ミンナ ウタッタシタナ。  
シヤ」とか。みんな ひついたんだなあ。

B コレモ アノ ヨク カンカエテ オリヤー オモイダシマスケー  
これもあのよく考えていれば思い出しますけれ  
ドナン。 (Aソーソー) チョットニワカニワ (Aソー)  
じねえ。 (ううう) ちょっと急には (う)  
オモイダセマセンケド ナカナカムカシワ イロイロ アリマシ  
思い出せませんけど、なかなか昔はいろいろあります  
タニ ソンナヨーナ ウタガ。  
たよ、そんなような歌が。

A アーリマシタ アリマシター。 (Bエー) ソンナ ジブンノ  
ありました、ありました。 (ええ) そんな時分の  
イッショニ アソンタ シトガ ゴロクニン アツマッテー ミン  
一緒に遊んだ人か 5, 6人 集まつてみ  
ナデ<sup>(37)</sup> イッショニ ウタットル ウチニ タレガ スユーシズツ  
んなで一緒に歌っていきうらに 誰かが少しうつ  
オモイダシテ フルッテュ コトガ アレバナー。 ウン。  
思い出していくといふことがあればなあ。 うん。  
B ソー スルト オモイダシマスガナン。 ウン。  
そうすると思い出しますがね。 うん。

## 注

- (1) [iʃʃo̤i̤]。
- (2) [betsubetsui̤]。
- (3) 話し手の清水氏は [warattazane:ka] と言ったつもりだと言われる。  
- ジャンカは若い人たちの間で使われる。
- (4) 話し手はこの辺をなれば歌っている。
- (5) 在来の方言ならばセル。
- (6) 在来の方言はオタマ。
- (7) 在来の方言はオハシジキ。
- (8) 小渋川。上伊那郡と下伊那郡との境界を流れる川。録音した集落葛島の南縁を流れる。
- (9) 話し手の清水氏によれば、青黒いつるつる滑る感じのする石だと云う。
- (10) オハシキヲと言うべきところであろう。
- (11) 在来の方言ならばイカナンデ。
- (12) よく聞き取れない。この部分は清水氏の認定に従った。
- (13) [kaeri̤i̤]
- (14) めんこの方言。
- (15) - タッタは過去の回想をあらわす。一本は共通語的な言い方。
- (16) いわゆるネッキ(根木)の遊びである。
- (17) ナンチュッタカナーとるべきところであろう。
- (18) - ヨセヨナンテあるいはそれと類似の表現でないと、ヨセヨナンチユツテでは正確には文意が続かない。
- (19) 言いよどみがあってこうなる。
- (20) [mat]と聞こえる。
- (21) ヤラナカッタといいかけて、在来の方言の言ひ方のヤラナンダに言い変えたもの。
- (22) [ike ne:]と中にホーズを置いて発音している。なお、在来の方言ならばイカン、またはイケン。

- (23) 次のBの発話と重なり聞き取り不能。
- (24) -ナガラは共通語的。在来の方言ならばシシナのように-シナをとる。
- (25) コンテキストからいうと、〈オリマス オリマス〉とあるべきところ。
- (26) 中川村大字葛島の中の集落名。
- (27) Aの発話と重なり文字化不能。
- (28) -ナエはこの地方在来の方言ではない。-ナエは上伊那郡中部以北で行なわれる。
- (29) ハマオバサマのマの子音は口を不完全に閉じた鼻音に聞こえる。
- (30) 在来の方言はオバーサマ。
- (31) [hontto: no]。
- (32) [warabewutattʃu: noã]。
- (33) 共通語的な言い方。在来の方言ならばダ"モンデ"とかタ"デ"。
- (34) 日とひいてもみを落とす作業。せいぜい20俵が30俵程度の量で、5, 6軒のエイでやり、ほとんび1日で終わったという。
- (35) サンカニチ(3ヶ日)の言いそこない。
- (36) 〈ムキメシオ タベテ シコトオ ヤリマシタ〉ということか、それとも〈ムキメシオ タベテ オリマシタ〉とあるべきところを、こう言い違えたものか。
- (37) [iʃʃo̝i]。

### 3 昔の嫁入り

話(手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 小池千勢 女 明治32年生れ

B 清水悟郎 男 明治37年生れ

B ソレデモ ドータナ チセマ。<sup>(1)</sup> ムカシト イッコ一 カワランチ  
それでも どうだな、 千勢さん。 昔と いっこうに 変わらないと  
ユーヨーナ タトエバ マー コトバンノ モンダイデモ ニンジョ  
いうよくな、 たくれば まあ 言葉の 問題でも 人情の  
モノ モンダイデモ カンコンソーサイノ モンダイデモ ナニカ  
問題でも 冠婚葬祭の 問題でも 何かは  
ワ ヤツハシ ナニカ ノコットルワ ノコットルナー。  
やつぱり 何か 繰り、いふことは 番ついいなう。

A ノコットリハブノ。  
タクハタリエドジョウ。

B ダンダン ナフナッチャ一 イクガナー。  
だんだん なくなつては いくがなあ。

A オソーシキ / ケーシキ ケーシキ ジャナイ マリカタナンカモ  
お葬式の 形式、 形式じゃない、 やり方 なんかも  
( B ソーソー ソーソー ) ズイヅン チガッテ キマシタシナーン。  
そう、 そう、 そう、 そう ) 隨分 違つて 来ましたしね。

B エーエー。 ウン。  
ええ、ええ。 うん。

A ソレニ ダイ仔 ツ コンレー／＼ ヤリカタワ モー ゼンゼン ナ  
それに 第一 その 婚禮の やり方は もう 全然  
ガッテ シマイマシタシナン。  
違つて しまいましたしね。

B フンフン。 フンフン。  
ふんふん。 ふんふん。

A イマ モー リヨーホーテ リヨーリヤミタイナ トコエ イッテ  
今 もう 両方で 、 料理屋みたいな ところへ 行つて  
ヤルツチューノニナン。 (B エー サヨー サヨー サヨー)  
やうといつのにや。 (ええ, 左様, 左様, 左様)  
ムカシワ ツ / <sup>(2)</sup> ムコイリダ"トカ" (B エッ エー サヨー エッ) ナ  
昔は その 婚入りだとか (ええ, ええ 左様, ええ) な  
ンタ" ロードーダ"トカ" (B エッ) ソー ユー コトワ モー<sup>(3)</sup>  
んだ 卽等だとか , (ええ) そろ いう ことは もう  
(B エッ) ゼンッゼン<sup>(4)</sup> ヤリマセんシナーン。 (B エッ) ナ  
全然 やりませんしね。 (ええ)  
一ニカ / コットル コトカ" アルカナン。 (笑)  
行か 続いている ことが ありますかね。 (5)

B ソーデスナー。 アノー ミンナ ウチノ サシキテ" ミンナ ヤ  
どうですねえ。 あらう, みんな 家の 座敷で みんな  
ツタ ツケメ"。 (B ハイ) ムカシ。  
やった わけだ。 (ハイ) 昔。

A ソーテ" アリマスニ。  
そうで ありますよ。

B タ"レモ ドッカノ リヨーリヤエ モチタシテ アルナンテ" ドッ  
誰も どこかの 料理屋へ 持ち出して やるなんて

力 シンゼンケッコンナンカワ イーケードモ リョーリヤデモ  
どニカ 神前結婚なんかは いいけれども 料理屋でも  
<sup>(6)</sup>  
シンゼンケッコンナンテ ユーンダケレドモ (Bエー) ドーモ ア  
神前結婚なんて 言ひんだけれども (ええ) どうも あ  
レワ キニ イランナ (笑)  
れは 気に入らないな。 ( )

A マー ドッカニナー チョット マツッテ アルカ ナンタカ シリマセンケドナン  
まあ、どこかにな、ちょっと 紀って あるか なんだか 知りませんけどね,  
(笑) (Bキニ イランナ アレワ) シキノ ホーワ モー (笑) (Bサ  
気に入らないなあ、あれば 式の 方は もう 左  
ヨーサヨー カンタンデ。 ムカシトウ ホント<sup>(7)</sup> オコンレー  
様、左様、簡単で。 昔とは 本當、 お婚禮  
タケワ ホントニ テガッテ シマイマシタナー アー。  
だけは 本当に 違って (まいましたな、 ああ。  
B チカイマシタナー。 ソレデモ コチラワ マー オウチモ フル  
違いましたなあ。 それじも こらうは まあ おうちも 古い  
イシ ナンテ ホーバー／＼ オキリカ タイヘンデ (Aハイ)  
し、それで 方々の お義理が 大変で (はい)  
オアリルラ。  
ございましょう。

A イヤ アノ ダンダン スクナク ナッテ キマシタシナン。 ソ  
いや、 あの ダイレクト 少なく なって 来ましたしね。 そ  
レカラ (Bエー エー エー) ウチワ ヤッパリ ソー イフ  
れから (ええ, ええ, ええ) うちは やっぱり そう いう  
ニ フユーナ コトカ アリマシタテ ナンテ イーマスカ ソ  
ふうに 不幸な ことか ありましたので、 何と 言いますが、 そ

A 一 オチューニンチュー コトーシテ オリマセンノ ワリア  
のう お仲人といふ ことと して おりませんの、 割合  
イニ。  
二。

B ハー ハイ ハイ ウン。  
はあ、 はい、 はい、 うん。

A ソレデ アノー オチューニンコッテユ一 モノガ<sup>(9)</sup> ナイモンデ  
それで あのう オチュウニンユ という ものが ないもんだから、  
(B ハイ ハイ、 アノ ズット オギリモ スクナフ アリマス。  
、 はい、 ほい) あの ずっと お義理も すぐのう ござります。  
(B ウンウンウン) チチノ タイモ シトリマセンシナン。 (B ウ  
うん、 うん うん) 父の 代も しておりませんね。 (う  
ンウン) アタシノ トキモ ヤツバツ<sup>(10)</sup> ワリアイ ハヤフ シュ  
ん(ん) 私の 時も やつぱり 割合 早く 主  
ジンカ。 ナフナリマシタデ (B エーエー) マツモトニ オリマ  
人が なくなりましたので (ええ、 ええ) 松本に あります  
ス・トキ・マー・ミクミバカ・アリマシタケド・ソレワ・マタ・チ  
す・時、 まあ 3組ばかり ありましたけれど、 それは また ち  
ヨット エンボーデ アリマスルシナン (B エーエー) ソレタ  
よつと 遠方で ござりますね。 (ええ、 ええ) それだ  
モンデ ユコホド アノ オツキアイ シマセンシ (B エーエー  
ものだから ここほど あの お付き合いと しませんし、 (ええ、 ええ  
ー) ソレデ ワリアイニ スクナインデ アリマスニ (B フ  
それで 割合に 少ないので ござりますよ、 (かん  
ン) エー。 アノー イチューニンオ イフツモ シトリマス  
かん) ええ。 あのう お仲人を 幾つも してあります

トナーントナー (B サヨー サヨー) ソーストソノオチューニ  
とねえ、(左様、左様) そうするとそのオチュウニンコ  
ンコッテユーノカホーボーニデキマシテサン。  
と いうのが 方々に できましてね。

B エー ソーデアリマス。  
ええ、そうです。

A ソー ユーノカ ナカナカソノオツキアイニタイヘンデア  
そう いうのが なかなか その お付き合いに 大変で ござ  
リマスケドナン。 (B エー エー エー)  
ええ、ええ、ええ ワリアイニスク  
いますけどね。 割合に すぐ  
ナク アリマスケドナン。<sup>(13)</sup> ソレニマー ウチカラ テタ オバ  
のう ござりますけれどね。 それに まあ うちから 出た あは  
タチモ モー タンダーン ナクナッテ シマイマシタシナン。 フ  
蓮も もう だんだん 亡くなつて (まいまたしね) 本  
ントニ スクナク ナリマシタケド。 ソレデモ ヤッハリ イ  
当に すくなく なりましたけど。 それでも やっぱり  
ナカワ ナカナカ オギリカ タイヘンデ アリマスナン。(笑)  
田舎は なかなか お義理が 大変で ござりますね。

B サヨー サヨー エー。 オギリワダ<sup>x</sup> ナンチュッテモ タイヘ  
左様、左様、ええ。 お義理は 何と言つても 大変  
シテアリマス (A ホント) マチバトチガイマシテナー。  
で ござります。 (本当) 町場と 違いましてなあ。

A エー。  
ええ。

B エー。  
ええ。

A ムカシワ アノ マー リョーケデ ハナシカ マトマリマストナ  
昔は あの まあ 両家で 話が まとまりますとね、  
ン モチロン マー ミアイ ~~xxxx~~ ミアイモ ウタシドモナンカ シナ  
もらろん まあ 見合いも 私どもなんか しな  
<sup>(4)</sup> イクライデ (笑) シャシンモ ミナイク<sup>ア</sup>ライデ (笑) アリ  
いくらいで 写真も 見ないぐらいで ござ  
マシタケド ウチト ウチトデ マー ハナシヲ キメマスラ。\*  
いましたけど うちと うちとで まあ 話を 決めますでしょう。  
リョーケデ アー ソノ イロイロ イマワ コンレーニ ツイテ  
両家で ああ その いろいろ 今は 婚礼に ついて  
ソーダンナンカオ イタシマスナン。 ソレヲ モー ムカシワ  
相談 なんかを 教えますね。 それを もう 昔は  
ゼンゼン ソー ユー コト一 シマセンノ。 ナカエ ソノ  
全然 そう いう ことを しませんの。 中へ そのう一  
オチューニンサマッテ ユー ナコード<sup>ア</sup>カ タッテ コチラエ イツ  
お仲人様と いう なこうどうが たって、 こちらへ 行  
テ ユー ユヨー ソレデ<sup>ア</sup> コチラエ イツテ コー ユヨー マ  
て こう いうようです、 それで こちらへ ひって こう いうようです、  
タ コー ユヨータ<sup>ア</sup> ソーデスヨッ チュヨーナ コト一 キーテ ソ  
また こう いうようだ そうですよ というような ことを 聞いて、 そ  
ノー リョーケデ アッテ ソノ シタソーダン スルナンテ  
のう 両家で 会って ソノ 下相談を するなんて  
ユー コトワ ゼッタイ ソノ アノ ケッコンノ ヒマデ<sup>ア</sup>リ  
いう ことは 絶対 その あの 結婚の 曰まで あり  
マセンノ。 (笑)  
ませんの。

ダーカラ ソイデ イヨイヨ マー コンレーノ ヒニ ナリマス  
だから それで いよいよ まあ 婚礼の 日に なります

ト ムコイリッテ イーマシテナン コー ヨメノ ウチエ ムコ  
と 女婿入りヒ 言いましてね、 こう 女家の うちへ 女婿

サンカ。オチューニンサマノ アンナイテ ソシテ ソノ マイリ  
さんが お仲人様の 案内で、 そして その 参り

マス。ホイデ ソコデ マー アノ ソレニワ ソノ ロードー  
ます。それで そこで、 まあ、あの それには その 「ロウドウ」  
ツテ ユーノカ オトモノ イミテ ロートーツテ ユー イミカ  
と いうのが、 お供の 意味で 「ロウトウ(郎等)」という 意味

モ シレマセンケドモ アノ ロードーツテ コノ ヘンデワ イ  
カも 知れませんけども、 あの 「ロウドウ」 と この 辺では  
一マスケド ソノ マタ シンセキノ マー オジサントカ ソー  
言いますけれど、 その また 親戚の まあ おじさんとか そう  
ユー ムコサンニ ツッテ <sup>(15)</sup>チカイ シトカ ゴロクニン オトモ  
いう 女婿さんに ついて (血の繋がりの)近い人が 5,6人 お供に  
ニ ツイテ アノ ソノ マー シンフノ イエー キマシテナン。  
ついて、 あの、 その、 まあ、 新婦の 家に 来ましてね。

ホイデ シンフノ イエー キテ コンダ シンフノ シンフワ  
それで 新婦の 家に 来て 今度は 新婦は

シマセンケード シンフノ リヨーシン キョータイト アノー  
(ませんけれど、 新婦の 両親、 きょうだいと、 あのう  
オ オヤコノ サカズキヤ シンセキノ サカズキヲ スル ワケ  
親子の 盆や 親戚の 盆を する わけ  
テ ゴザイマスナン。  
で ございますね。

ソーシテ マー ソコデ マー コチソーカ。 デテ ソエテ<sup>(1)</sup> コン  
そうして まあ, そこで まあ, ご馳走が 出て, それで 今度  
ドワ アノー カエリマスナン シンローワ。 ジブンノ ウチノ  
は, あのう 帰りますの, 新郎は。 自分の うちの  
ホーエ<sup>(16)</sup> ホエテ ソノ トキニ オチューニンサマワ<sup>(17)</sup> コッチニ  
方へ。 それで その 時に お仲人様は こっちに  
ヨメノ ウチニ ノコッテ オリマシテ (Bウンウン) コンド  
嫁の うちに 残って、 おりまして, うんうん 今度は  
ワ ユーカタ オヨメサンオ ツレテ コンドワ シンロー/  
夕方 お嫁さんを 連れて, 今度は 新郎の  
ソレコソ ホントーノ オヨメイリテスナン<sup>(18)</sup> デ<sup>(19)</sup> ソノ トキ  
それこそ 本当の お嫁入りですね。 で, その 時  
ワ ヤッハリ ソノ<sup>(20)</sup> シンフノ アノー ロードーカ<sup>(21)</sup> ツイテ  
は やっぱり そのう 新婦の あのう 郎等が ついて  
イキマシテ ソレデ オヤワ イキマセンノ ドッヂモ ゼンゼン。  
行きまして, それで 親は 行きませんの, どちらも 全然。  
ソレデ ムコーエ イッテ コンドワ マー アノ フーフノ サ  
それで 向うへ 行って 今度は まあ あの 夫婦の  
カズキカラ ミンナ ソノ イマノヨー=アノー シンセキス<sup>(22)</sup>  
孟から みんな その 今のように あのう 親戚<sup>(23)</sup>  
サカズキ ムコーン<sup>(24)</sup> ゴリョーシントノ オサカズキヲ マー<sup>(25)</sup>  
の 孟, 向うの ご両親との お孟と まあ  
ヤッテ ソレデ<sup>(26)</sup> マー コンレー/ノ ゴリョーシントノ オサカズ  
やって, それで まあ 婚礼の, ご両親との お孟  
キヲ マー ヤッテ。 ソレデ マー コンレー/ノ オシキワ オ  
を まあ やって。 それで まあ 婚礼の お式は 終

ワル ウケデ アリマスナン。

わる わけで ありますね。

ソーシテ ソノ サッキノ オハナシノヨーニ ソノ フツカメ  
そうして その さっきの お話の ように、 そのう 二日め  
ワ タイタイ ムラマワリ マチマワリッテ イーマスカ シンセ  
は 大体 村回り、 町回りと 言いますか、 親戚  
キマワリッテ イーマスカ アノー オチューニンサマノ オクサ  
回りと 言いますか、 あのう お仲人様の 奥さん  
ンカ。 ツレテ アルイテ クタ"サッタリ シテ マー シンセキオ  
が 連れて 歩いて 下さったり して、 まあ 親戚'を  
マワッテ。 ソイデ ミッカメニ コンドワ アノ サトカエリッ  
回って。 それで 三日めに 今度は あの 里帰りと  
テ イーマシテナー オヨメサンか ハジメテ アノ ウマレタ  
言いましてなあ、 お嫁さんが 初めて あの 生まれた  
ウチエ カエルノニ カエルッテ ユーカ マ カエルノニ コン  
うちへ 帰るのに、 帰ると いうか、 まあ、 帰るのに、 今  
ドワ ソチラノ ムコサンノ ゴリヨーシンカ。 ツイテ キテ 今  
度は そちらの 婿さんの ご両親が ついて 来て、  
ノトキ ハジメテ ソノ リョーケノ マー オヤタチカ アウ  
その時 初めて その 両家の まあ 親達が 会う  
<sup>(21)</sup> ウケデスネー。 マー チ <sup>xx</sup> チカケリヤ イーケド。 ソレデ ソ  
わけですねえ。 まあ、 近ければ いいけれど。 それで そ  
ノトキニ ヤッパリ アノ サトカエリト シュートイリッテ  
の 時に やっぱり あの 里帰りと しゅうと入りと  
イーマスノ。 ソノ トキワ シュートカ ハジメテ コッチー  
言います。 その 時は しゅうとが 初めて ちっちへ

キマスノ。 ソレデ サトガエリト シュートイリ。 ソレデ  
来ますの。 それで 里帰りと しゅうと入り。 それで  
ソノ一 マタ アノ一 コチラデ マー チョット ポチソ一  
そのう また あのう こちらで まあ ちょっと ご馳走  
シタリ シテ ソシテ ソノ シンロー／＼ シュートタチワ カ  
したり して、 そして その 新郎の しゅうとたちは  
エリマス。 ホイデ シンローワ コチラノ ウチ <sup>\*\*\*</sup> ヨメノ ジ  
帰ります。 それで 新郎は こちらの 嫁の  
ツカニ ノコッテ ソーシテ マタ イツカメニ コンドワ コ  
実家に 残って、 そして また 五日めに 今度は こ  
チラノ ヨメノ ホーノ リヨーシンノ シュショ <sup>\*\*\*\*\*</sup> シュートイリ  
ちらの 嫁の 方の 兩親の しゅうと入りと  
ト イッショニ カネテ マー シンフーフワ ソッチノ ウチエ  
一緒に 兼ねて まあ 新夫婦は そっち うちへ  
カエッテ ソレデ マー イッサイノ キョージカ<sup>。</sup> オワルンデス  
帰って、 それで まあ 一切の 行事が 終わるんです  
ノ。(笑)。<sup>\*</sup>

イマカラ カンガエテ ミマスト ヨク マート オモッテ。(笑)  
今から 考えて みますと、 よく まあ(やった)と思つて。

B エ一。  
ええ。

A イマノ ワカイ カタタチ ミタラ (Bエ一) ホント ピック  
今の 若い 方たちが 見たら (ええ) 本当に びっく  
リ ナサルケード。 イエト イエト/＼ ハナシデナー。 ソーシ  
リ なさるけれど。 家と 家との 話してなあ。 そうし

テ……。  
て……。

B ソレガ ネーサマ ネー ムカシワ マユカイニ キタ シトカ  
それが 姉さま、 ねえ、 昔は 蘿買いに 来た 人が  
( A エー ) コー ユー ムスメワ ドータ。 ( A エー  
ええ ) こう いう 娘は どうだ。 ( A エー  
ええ,  
ソー ) ホレカラ ……  
そう ) それから ……。

A アノ・ウチエ ドーダローッチュー コトデナーン。 ( B ソーンー  
あのうちへ どうだろうといふ ことですね。 ( B ソーンー  
ソー。エッエー ) ホレデ チョード イー ムスメダカラトカ チ  
ええ。ええ,ええ ) それで 丁度 いい 娘だからとか,  
ヨード・イー ムスコダカラッチュヨーナ ハナシニ ナリマシテ  
丁度 いい 息子だからといふよな 話しに なりまして  
( B エー エー エー エー ) ソエデ ヤッハリ マキキアワテ  
ええ,ええ,ええ,ええ ) それで やっはり 両方で 相談し  
行 リョーホーテ マー ソー ユー ナカデ ハナシオ シテ  
合って 両方で まあ そう いう 中で 話しを して  
クレル シトカ アルト マー オタカイニ シラベル コトワ  
くれる 人が あると、 まあ お互に 調べる ことは  
シラベル ワケデ アリマス。 アッチノ ウチノ ムスコワ ト  
調べる わけで ござります。 あつらの うらの 息子は  
一ダロートカ コッチノ ウチノ ムスメワ ドータロ ソー ユ  
どうだろうかと、 こっちの うちの 娘は どうだろう、 そう 言  
ッテ クレタケレドッテ ユー ワケデ シラベテ マー イーカ  
って くれたけれど いう わけで、 調べて まあ いい

ラ ソイ ジャ ヤリマス モライマスッテ ュー コトンナリマシ  
ら それでは (嫁に)やります、 貰いますと いう ことになりまし  
テモ リョーケガ イッショソ ナッテ ソノ イマノヨーニ エ  
ても、 両家が 一緒に ナッテ、 その 今のように、 ええ  
一 コンレンノ <sup>(24)</sup> ヒワ イツ <sup>(25)</sup> キメマショ一 ドンナ クライナ  
婚礼の 日は いつ 決めましょう、 どんな くらいな  
コトニ シマショーナンチュー コトワ ゼッタイ シマセンデ"  
ことに しましょうなどといふ ことは 絶対 (ませんで、  
モトヨリ ソノ一 シンローシンフダ"カ (笑) ソノ一 コンヤ  
もとより そのう 新郎新婦だか, そのう 婚約  
クシャノ デイトナシカ モチロン アリヤ シマセン。 (A笑)  
者の デートなんか もうろん あります (ません) (B)  
\*

B ホントダッタラ カオモ シラズニナー。

本当だったら 顔も 知らずになあ。

A ソーデ アリマスンナ。 ヨク マート オモイマスニ。  
そうで ござりますよ。 よく まあと 思いますよ。

B ソレカラ キマルト サケガ ハイルッチュッテ (Bハイ) オ  
それから 決まるとき 酒が はいりといって (はい)  
チューニンサマ サケオ モッテ キマシテ (Bエー) ワタシ  
お仲人様が 酒を 持って 来まして (ええ) 私も  
モ ジューアイククミ ャッタ コト <sup>(26)</sup> ダイッタイ ソ  
十幾組を やった こと…… 大体 そ

/ ホーシキデス。  
の 方式です。

A アー サヨーデ アリマスラ。 (Bエー) ソシテ コンタ" ュ  
ああ 左様で ござりますどう。 (ええ) そして 今度は

イノーオ イタダイテナン。

結納を いただいてね。

B サヨー サヨー。  
左様、左様。

A アー。ソレダッテ ミンナ オチューニンサマカ。モッテ クル  
ああ。それだって みんな お仲人様が 持って 来る  
ダケデ アリマスデナン。 (Bエー) ソーシテ ソノ トキニ  
だけで ございますね。 (ええ) そして その 時に  
ハジメテ ヒワ イツニ シマショートカ ユッテ (Bエーエー)  
初めて 日は いつに ほしょうとか 言って、 (ええ,ええ)  
ホレテ ダイタイ ムコガタノ ホーワ コノ イコーダ"カ"  
それで 大体 婉方の 方は この 意向だか  
コチラ ドーデスカッチュー。 コチラー コチラ"デ" マタ" コー  
こちらは どうですかといふ。 こちらは こちらで まだ こう  
ダトカ ユッテ (Bエッエー) ソコデ マー ダイタイ ヒヲ  
だとか 言って そこで まあ 大体 日を  
キメマスケド ソレダッタッテ オチューニンサマカ。ナカニ ハ  
決めますけど、 それだったって お仲人様が 中へ は  
イッテ アーデスカ (Bエーッ) コーデスカッチュッテ (B  
いって ああですか (ええ) こうですかといつて  
エー) キメテ フタ"サル わケ。 (笑)  
ええ) 決めて 下さる わけ。

B サッキノ ハナシミタイニ オチューニンサマッチュー／ワ ウー  
さっきの 話(みたいに) お仲人様といふのは  
シット<sup>(27)</sup> ダイジニ スル わケ。  
うんと 大事に する わけ。

\*

- A ソーテ アリマスノ。 ソレテ マタ ホント ダイセキニンデ アリマス  
 そうで ございますの。 それで また 本当 大責任で ございます
- モノナー カンガエテ ミレバ。  
 ものなあ、 考えて 見れば。
- B ウット エー ウント ダイジニ スル ワケ。  
 うんと、 ええ うんと 大事に する わけ。
- A リョーホー／ コト イッサイ ヒキウケテ。  
 兩方の ことを 一切 引き受けて。
- B エー。 ソレテ<sup>(28)</sup> オチューニンサマ オシテ モラッタ トコエ  
 ええ。 それで お仲人様を して 貰った ところへ  
 イッテ コドモカ。 デキルト コドモワ ショーカツ オボンニワ  
 行って、 子供が できると、 子供は 正月、 お盆には、  
 ショーカツワ カナラズ オモチオ ショッテ イク ワケネ。  
 正月は 必ず お餅を 背負って 行く わけですね。
- エッ。  
 ええ。
- A オモチヲ ショッテ イキマシテナン。 エー。  
 お餅を 背負って 行きましてね。 ええ。 (B エ  
 ん)
- B イマデモネー ワタシ イータ<sup>(29)</sup> / シトオ<sup>(30)</sup>ト サクノ シトオ ハ  
 今でもねえ、 私、 飯田の人と 佐えの 人と 媒  
 イシャク シタノワネー (A エー) イータ<sup>(31)</sup> / チクマチノ フ  
 約 したのはねえ、 (ええ) 飯田の 知久町の 古  
 ルイ ショーカタモニテ (A エー) ウント カタイ<sup>(31)</sup> カタイ  
 い 商家なものだから、 (ええ) うんと 疎い

ウチテ"ネー。 ( Aへー ) チャーット キマス。  
うちでねえ。 ( へえ。 ) ちゃんと 来ます。

A ハー ( Bエー ) ソーテ" ゴザイマスカ。  
はあ、 ( ええ ) そうで ござりますか。

B トコロカ コンドア一 アノ一 イマノ アネヲ <sup>(33)</sup> ジッカデ フタ  
ところが 今度はあのう 今の 姉を 実家で 二人  
リ シタケードモ シンルイタ"モンダ"カラ ( 笑 )  
したけれども、 親類だものだから

A エーエーエー ( 笑 ) ココロヤスイテ" ャッハリナン ホント (   
ええ、ええ、ええ ) 心安いから やっぱりねえ、 本当。  
( 笑 )。

B ソコワ イッコー ソソーニ ソー シトルケードモ マー ソレ  
そこは いっこう 疎略に、 そう、 しているけれども、まあ それ  
ワ ソレデ イート シマシテモネー ソレダ"ケ タイジニ シマ  
は それで いいと しましてしねえ、 それだけ 大事に しま  
シタナ。  
( たな )

A ホント ソーテ" アリマスニ。  
本当に そうで ござりますよ。

B マツモトワ ソノ カネツケオヤオ <sup>(33)</sup> タイジニ スルネー。  
松本は、 その、 鉄張親を 大事に するねえ。

A アヘー。  
ああ。へー。

B コンレーニ イキマスト シンローシンフノ トナリカ カネツケ  
女背礼に 行きますと 新郎新婦の 隣りか 鉄張親

オヤ。

A ヘー。

はい。

B ソノトナリカバイシャフニン。 (Aヘー) コーナッテ  
その隣りが媒酌人。 (はい) こうなって  
イマスネー <sup>(34)</sup> ヤマベノ キンジョウ (Aヘー) エー。ミクミ  
いますねえ、山辺の近所は。 (へえ) ええ。3組  
イー サンカイバカ ヨバレマシタケード ミンナ ソー ナッテ  
3回ばかり 招かれましたけれど、みんな そう なって  
マス。オチユーニンサマカ エツ シンローシンフノトナリテ  
います。お仲人様が、え、新郎新婦の隣りで  
ナフテネー ソノ リョードナリ カネツケオヤデスワ。  
なくてねえ、その両隣りが 鉄漿親ですよ。

A ヘー。コノ ヘンジヤ イマ カネツケオヤナンチュー コト イ  
へえ。この辺では 今 鉄漿親なんていうことを言  
一マセシナ。

いませんね。

B エツ アンマリ イーマセシナ。  
ええ、あんまり 言いませんな。

A ハイ。

はい。

B ウタシドモン トキニワ マタ<sup>(35)</sup> アノー オクマオバーナンカ 力  
私どもの 時には まだ あのう お熊ばあさんなんか  
ネツケオシテー。  
鉄漿をして。

- A エー。  
ええ。
- B デ ミンナ アノー オハグロ ソメテマシタカラ エッエー。  
で、みんなあのう お歯黒を 染めていましたから、ええ、ええ。
- A オハグロ一 ツケル カワリニナン エー ヤッパリ オハグロノ  
お歯黒を つける 代わりにね、ええ やっぱり お歯黒の  
ザイリヨーオ (Bエー) チョット オクッタリ シマシタケド  
材料を (ええ) ちょっと 貰贈ったり ほましたけど  
ナン。  
ね。
- B エー。  
ええ。
- A ホントニワ ツケナフテモ。  
本当に 付けなくとも。
- B サヨー サヨー。  
左様 左様。
- A ケド イマワ モー カネツケオヤナシテ キータ コト アリマ  
けれども 今は もう 鉄漿親なんて 聞いた ことが あり  
センナー。  
ませんなあ。
- B イーマセンニー。  
言いませんねえ。
- A イーマセンニ コノ ヘンデワ。 カンタンニ ナリマシタンダ。  
言いませんよ、この 辺では。 簡単に なりましたんです。
- B アノ ロードーッテ ユーノウ オジ オイ オジチューヨーナ  
あの ロウドウと 言うのは おじ、甥

シトカ。 オジッチューヨーナ シトカ。 イッタ ワケダナー。  
おじといふような 人が 行った わけだなあ。

- A エー オジテ アリマス。 タイティ (B エー) マー オンナ  
ええ、おじで ございます。 大低 (ええ) まあ 女

ワ ソー ユー トキ イキマセンモンデナー (B エー) エー  
は そう 言う 時 行きませんものですからなあ (ええ) ええ

オジ……。  
あじ……。

B ロードーデ ツイテ イッテ マ ゴエ <sup>xxxx</sup> ゴエーテ (笑) (A  
ロウドウで ついて 行って ま, 護衛で  
エー) ミトドケテ キタンダナ。  
ええ) 見届けて 来たんだな。

A ソー ユー コトデ アリマスンダナン。  
そう いう ことで ありますんですね。

B ソエデ ヒットー／ロードーカ ホーコク スルンズラ。  
それで 筆頭の ロウドウが 報告 するんだろう。

A ホーコク ソーテ アリマスンズラ キット (笑)。  
報告, そうで ございましょう, きっと。

B ツキソッテ イキマシテ コエデ ケーコーテ ブジ スミマシタ  
つき添って 行きまして, これで 結構で 無事 清みました  
ツテ ホーコク スル。  
と 報告する。

A ハイ スミマシタッテ。 コッチ一 キテ やッハリ リヨーション  
はい, 清みましたと。 こっちに 来て, やっぱり 兩親は

ク ツイテ イキマセンモンデナン (B イカン……) やッハリ  
ついて 行きませんものですからね。 (行かない) やっぱり

マ シンパイ シトル ワケデ アリマステナン。 (笑)  
ま 心配 している わけで ござりますのでね。

B エッ エーエー。  
ええ、ええええ。

A タカラ ムカシノ フントニ ゴコンレーッテ モナ タイヘンテ  
だから 昔の 本当に ご婚礼という ものは 大変で  
アリマシタ。 (笑)  
ございました。

B ソレデ ゼンブ ジブンノ <sup>(37)</sup>ヤ ヤ ヤ ヤリマシタ。  
それで 全部 自分の やりました。

A ソノ ゼンジツニ ニモツヲ マタ ハコヅタッテ イマミタイ  
その 前日に 荷物を また 運ぶと言っても 今みたい  
ニ トランクか アル ワケジャ アリマセンデナン。 ミンナ  
に トランクか ある わけでは ありませんからね。 みんな  
コ一 カツイデ <sup>(38)</sup>イキマシタシタ。  
こう 担いで 行きましたんです。

B サヨー サヨー。 ソーッ エー ミンナ カツイデ イキマシタ  
左様、左様。 そう、ええ、みんな 担いで 行きました。

ニ エー。 ココラ トーリマシタナ。 (A 笑 ホント)  
ええ。 こちらを 通りましたなあ。

タンスカ イクサオ キタ (A エー) ナカモチカ キタッテツ  
箪笥が 級棹 来た、 (ええ) 長持が 来たと言つ  
テワネー ココ トーリマシタ ネー  
てはねえ、 ここを 通りましたねえ。

A イクサオ キタナント イーマシテナン エー。 ミンナ カツイ  
級棹 来たなんて 言いましてね、 ええ。 みんな 担い

デ キマシタンダ。\* ムカシノ オヨメサンノ ニモツッテ イー  
で 来ましたんです。 昔の お嫁さんの 荷物と 言い  
マストナン マ タンス ナガモチワ モチロン ソシテ マ ヤ  
ますとね、 ま、 算笥， 長持は もちろん， そして ま，  
クトカ ソー ユー モノモ アリマスケレドモ タラ ~~タラ~~ タイイチ  
夜具とか そう いう 物も ありますけれども， 第一  
タライカ ジョーケ イリマスワケ。<sup>(Bウン)</sup> アノ チョットシモノ  
たらいが 上下 要ります わけ。<sup>(うん)</sup> あの、 ちょっと 下の  
モノ アラウノト フタツクライワ モッテ イキマスノ。 ソシ  
物を 洗うのと ニつぐらいは 持って 行きますの。 そし  
テ ハリイタッテ ユー ソレモ ヤッパリ ~~ニ~~ スクナクモ  
て 張り板と いうの， それも ヤッパリ ~~ニ~~ すくなくも  
ニマイ クライワ モッテ タンジャ アリマセンカナ。<sup>(Bウン)</sup>  
2枚ぐらいは 持ってたんじゃ ありませんか。<sup>(うん)</sup>  
ウン) エー ソシテ アノー タチモノバンテ イーマスカ オ  
ええ， そして あのう， 裁縫物板と 言いますか， あ  
サイホーニ ツカウ <sup>(Bアーハイハイ)</sup> マ オサイホーノ  
裁縫に 使う <sup>(ああ はい はい)</sup> ま， お裁縫の  
ドークワ モチロンダケド ソノ <sup>(Bウンウン)</sup> コー ユー  
道具は もちろんだけれど， その <sup>(うんうん)</sup> ニう いう  
オーキナ バンヲ モッテッタンデスネ。 ソー ユー オーキナ  
大きな 板を 持って 行ったんですね。 そう いう 大きな  
モノッテ ユット ソー ユー モノデ アリマシタデナン。  
物と 言うと， そう 言う 物で ございましたからね。

B ゲタバコナンカモ モッテ キタノ ミトッタケード……。  
下駄箱 なんかも 持って 来たのと 見ていたけれど……。

- A エー ゲタバコワ モチロン モッテ マイリマス エー。  
ええ、下駄箱はもちろん持つて参ります、ええ。
- B モッテ キタ モッテ キタンタ"ナン。  
持つて来た、持つて来たんだね。
- A ソレカラ イマノヨーナ ハハナンカノ トキワ アノ センメンキ  
それから 今のような、母なんかの 時は あの 洗面器  
ナシテ ユー モノワ イマ アーンナノワ ホント マダ アタ  
なんて いう 物は、今 あんなのは 本当に まだ 新  
ラシ (B ウン) モノデ チョーズダライッテ イーマシテナ  
しい (うん) 物で、チョウズダライ(手水 盆)と 言いましてね。  
ン。
- B ソーソーソーソーソー。  
そうそう そう そう そう。
- A ユー ユー フーニ シテ シタニ アシカ アッテ ヨク アノ  
こう いう ふうに して 下に 足が あって よく あの  
テレビ / エーカナンカデ チョット アリマスナン。  
テレビの 映画なんかで ちょっと ありますね。
- B アシノ ツイタ ソー フンフンフンフンフン。  
足の ついた そ、 ふんふんふんふんふん。
- A コンナフーン ナッテ。アシノ ツイタ チョーズダライナシテ  
こんなふうになつて。脚の ついた 手水 盆なんて  
ユー モノ一 モッテ キタヨーデ アリマスニ。  
いう 物を 持つて 来たようで ござりますよ。
- B フンフンフンフンフンフン。  
ふんふんふんふんふんふん。

A ソレテ ツリタ<sup>(39)</sup>イナンテ ユーノンナカエ ソー ユー タライ /  
それで 釣台なんて いうのの中へ そう いう 盆のよ  
ヨーナ モノオ イレテ キマシタノカナン。 (B ウンウンウン)  
うな 物を 入れて 来ましたのかね。  
ソーシテ ソノ一 タンス ナガモチノヨーナ モニニワ ユタン<sup>(40)</sup>  
そして そのう 篾笥 長持のような 物には 油单  
ッテ イーマシテナン (B ウン) ジョーモン/ ハイッタ コ  
と 言いましてね, (うん) 定紋の はいった こう  
一 ユー モノ一 カケテ (B カケテ ウン) ソーシテ カツ  
い 物を 掛けて (掛けて, うん) そして 担<sup>ハ</sup>  
イデ (B ウン) リヨーホーデ ナガイ ボーデ (B ソーソー<sup>ハ</sup>  
で うん) 両方で 長い 棒で, そ<sup>ハ</sup>う そ<sup>ハ</sup>  
ソー) ソーシテ カツ<sup>ハ</sup> シタチカ ヤッハ<sup>リ</sup> オモイシ マ  
そ<sup>ハ</sup>う) そして 担ぐ 人達が やっぱり 重いし, ま  
一 ソレモ オイワイタ<sup>ハ</sup>モンタカラ オーベ<sup>ハ</sup>テ ツイテ キテ カ  
あ, それも お祝いだものだから 大勢で ついて 来て,  
ワッテ カツイデ<sup>ハ</sup> クル ワケデ<sup>ハ</sup> アリマスナン。  
やわって 担いで 来る わけで ございますね。

B ウン。 ウン。  
うん。 うん。

A ホーシテ ソノ ナカヤドッテ ユー トコカ<sup>ハ</sup> アリマシテナン  
そして その 中宿と いう ところが ありますね,  
(B ウン) ソエデ<sup>ハ</sup> ソコエ ヨメノ ホーカラ モッテ キマシ<sup>(41)</sup>  
うん。 それで そこへ 嫁の 方から 持って 来ま  
テ ホレカラ コンドア ムコガタカラ ソノ ナカヤドエ ア  
て, それから 今度は 婦方から その 中宿へ あ

A 一 キテ ソエデ ソコテ ウケワタシヲ シマスノ ニモツ  
あのう 来て、 それで そこで 受け渡しを (ますの) 荷物  
ヲ。  
を。

B ウン ニモツノ サイリョー。<sup>(42)</sup>  
うん、 荷物の 宰領。

A ウン ソエデ ニザイリヨーッテ ユーノガ ツイテ (B ニザイ  
うん、 それで 荷宰領と いうのが ついて 荷宰  
リヨー ハイ) キマシテナン。 ホエデ ソコデ マタ コンダ  
領、 はい) 来ましてね。 それで そこで また 今度は  
ムコガタノ ホエ ワタシテ コンダ ムコガタワ ムコガタデ  
婿方の 方へ 渡して、 今度は 婿方は 婿方で  
ヤッハリ ソノ ニンフオ ツレテ イッテ コンダ ヒキウケテ  
やっぱり その 人夫と 連れて 行って、 今度は 引き受けで  
モッテ ヤッハリ ソノ ニザイリヨーカ アッタ ワケ。  
持つ やっぱり その 荷宰領が あった わけ。

B ウン。  
うん。

A ソエデ トチューデ ソー ユフーニ マー ミチモ トーアシ  
それで 途中で そう いうふうに、 まあ 道も 遠いし  
カッイデ クルノモ タイヘンデ アリマステナン。 (B ウンウ  
担いで 来るのも 大変で ござりますのでね。 うんうん  
ンウンウンウン) ソエデ ソノ ウケワタシ シタ ワケデ  
それで その 受け渡しを (た わけで  
アリマスンダ。 ホエデ ヤッハリ ソコデ エバ イッハイ マ  
ござりますんですね。 それで やっぱり そこで(何をするか)言えば、 一はい まあ

モチロン（B サヨーサヨー） ドッカ！ ウチヲ キメテ（B ウン） ンコデ  
もちろん、左様、左様 ビコかの うちを 決めて（うん） そこで  
イッパイ（B ウン） テタリ シテ ソーシテ コンダ マ  
一杯（うん） 出たり して、 そうして 今度は ま  
タ アノ ムコガタノ ホーデ カツイデ キタ ワケデ アリマ  
た あの 婿方の 方で 担いで 来た わけで ごさい  
ス。（B フンフン） ソレデ マー ソノ一ニモツヲ モッテ  
ます。（ふんふん） それで まあ そのう 荷物を 持って  
クルッタッテ マー タイヘンナ コトデ アリマスナー。  
来ると言っても まあ 大変な ことで ございますなあ。

B エー エー エー エー。  
ええ、ええ、ええ、ええ。

A マー オーゼー／＼ シトカ。アリマシタデナン。ムカシワ。（B  
まあ、大勢の 人手が ありましたのでね、昔は。  
ウン） ソレモ オイワイタモンデ マー オニキヤカニ ヤロー  
うん） それも お祝いだものだから、まあ お賤めかに やろう  
ッチュー コトデ ャッタントトオモイマスケドナン。（B ウン  
という ことで やったんだと 思いますけれどね。（うん  
ウンウンウン） イマノヨーニ トラックだ／＼（笑） ニグルマダノ  
うんうんうん） 今のように トラックだの（笑） 荷物だのか  
カ。アレバ オイケレド。（笑）\* ャッパリ ソノ一カコニノ  
あれば よろしいけれど。 やっぱり そのう、駕籠に 乗  
ッテ クルッテユーノワ マー ヨホドノ マー イエノ ムスメ  
って 来るというのには、 まあ よほど之の、 まあ 家の 娘  
デ アリマスナン。 マ ウチノ ハハナンカワ ソノ カコデ  
で ございますね。 まあ うちの 母なんかは、 その 駕籠で

キタシ ワタシノ コッカラ デタ オバタチモ カコデ イッタ  
来たし、私の ここから 出た おば達も 駕籠で 行つ  
ツテ イーマスケードモ。 アノー フツーワ ヤッハリ ウント  
たと 言いますけれども。 あのう 普通は やっぱり うんと  
オームカシワ ウマテ<sup>(44)</sup> キタコトモ アッタヨーテ<sup>(45)</sup> アリマスナン。  
大昔は 馬で 来たことも あったようで ございますね。

B ハーハー。 ウン。  
はあ、はあ。 うん。

A オークサカラ<sup>(44)</sup> オークサノ<sup>(45)</sup> ナントカ ユー イマワ ワスレタケ  
大草の 何とか いう 今は 忘れたけど  
ド ナントカカイトカラ<sup>(45)</sup> キタ オバーサンガナン ムカシノ オ  
何とかガイトから 来た おばあさんがね、 昔の  
バーサマデ<sup>(46)</sup> アリマスカ ソノ シトワ ウマニ ノッテ キテ  
おばあ様で ございますが、 その 人は 馬に 乗って 来て  
ソノ オバーサマノ ソノ ウマノ ウエニ カケタ フトンダト  
その おばあ様の その 馬の 上に 掛けた 布団だとか  
カ タズナダトカ マダ<sup>(47)</sup> ウチニ<sup>(48)</sup> アリマスケードナ。  
手綱だとか、 まだ うちに ありますけれどな。

B ホホー。  
ほほう。

A オームカシワ マー ソンナフーニ ウマテ キマシタカ。 アトワ  
大昔は、 まあ そんなふうに 馬で 来ましたか、 あとは  
マー ダイタイ ソノ オカコデ キマシタノ。 ソエテ モー  
まあ 大体 その お駕籠で 来ました。 それで もう  
チョット マー シタノー ウチダッタラ アノー ダイタイワ  
ちょっと、 まあ 下の うちだったら、 あのう 大体は

アルキマシタナン。 イマホド トーグ アリマセンシ。  
歩きましたね。 今はど 遠く ありませんし。

B アルイタソ。 ハイハイハイハイ。  
歩いたんだ。 はい はい はい はい。

A ャッパリ コーツーカ フベンダテ アンマリ トーフエ イキマ  
やつぱり 交通が 不便だから あんまり 遠くへ 行きま  
センデナン。  
せんからね。

B フン フン フン。  
ふん ふん ふん。

A ホイデ アノ一 キ イー キモノモ クット コー マフリアケ  
それで あのう 良い 着物も きりりと こう まくりあけ  
テ シタカラ ナカジュバンカナンカ ダスヨーニ シ トーグ  
て 下から 長襦袢かなんか 出すよう し， 遠く  
アルキマスンデナ。

歩きますのでな。

B フン フン フン フン。  
ふん ふん ふん ふん。

A ソー ャッテ アルイタリ (Bウン) ソレカラ… ソレカラ スコシ タ  
そ う やって 歩いたり (うん) それから…， それから すこし 経  
ツテカラワ ジンリキシャニ (Bウン) アリマシテ<sup>(46)</sup> (Bウン) ソ  
ってからは 人力車に (うん) なりまして， (うん) オ  
エテ” ソー ユー トキモ ソノ マー フツーノ ウチダッタラ  
れで そ う い う 時も， その ま あ 普通の うちだつたら  
ソノー オヨメサンカ シトリ ジンリキシャノ ノルダケテ” ア  
そのう お嫁さんか 一人 人力車に 来るだけで ござ

リマス。

います。

B サヨー サヨー。

左様、左様。

A アトノ ソノ ロードーノ レンチューウ ミンナ アルイテ  
あの その 郎等の 連中は、みんな 歩いて

イク ワケデ アリマス。 (B ウンウン) ソレデ" シバラク タ  
行く わけで ございます。 (うんうん) それで" (は"らく た  
ッテカラ コンドウ ジドー シャナンカ テキテ アノ タタ"イマ  
ってから、 今度は 自動車などが できて、あの 先程の  
トシマガ<sup>(47)</sup> コノ ヘンノ タイチコータッテ イーマスネ。  
登志恵さんが この ヘンの 第一号だったと いいますね。

B クルマデ" キタ!。

車で 来たの。

A ジドー シャデ" オヨメイリ シタノワ。

自動車で お嫁入り したのは。

B ホントカナ。

本当かな。

A エー ソノコロ ワタシワ ハイ ココニ オリマセナント"ケード  
ええ、 その頃 私は もう ここに おりませんでしたけれど  
ナシ。 (笑)  
ね。

B ホホー。 アレー。

ほほう。 あれ。

A ジドー シャデ" オヨメニ キタノワ モー コノ ヘンデ"ノ タイ  
自動車で お嫁に 来たのは もう この ヘンでの 第

- A イチコーダッテ イーマス。 (笑) コンド アチラデ オキキ  
1号だって 言います。 今度 あちらで お聞き  
ナサリマセ。 (笑)  
なさいませ。
- B ウンウン アレー。 ソリヤー タイシタモンダー。 (笑)  
うん、うん。あれ。 それは 大したものだ。
- A ソーウー ハナシ キーテ オリマスケード。  
そういう 話しを 聞いて いますけれど。
- B フーン。  
ふうん。
- A ソレデ ワタシノ トキワ モー アノー ジンリキシャデ イキ  
それで 私の 時は、もうあの 人力車で 行き  
マシタ エー。  
ました、ええ。
- B エー。  
ええ。
- A アー ソレカ マタ イマ ハナシテモ ホントニ オカシーンデ  
ああ、それが また、今 話しても 本当に おかしいの  
アリマスケード ワタシワ ジツワ ソノ オトートカ マダ ア  
ですけれど、私は 実は その 弟が まだ  
リマシタノデナン。 イッタシワ ヨメニ イッタ ウケデ アリ  
(その時は) いましたので。 いっただんは 女家に いッた わけで ござい  
マス シュジンノ トコロエ。 ソエデ ヤッパリ ソノ アカホ<sup>(48)</sup>  
ます、主人の 所へ。 それで やはり その 赤穂  
デ イマノ コマカネテ<sup>(49)</sup> アリマスケドナン ソエデ ヤッパリ  
で 今の 馬向ヶ根で ござりますけれどね、 それで やはり

アノー ソノ イマデ ユー アノ カミカタキリマデシカ <sup>(50)</sup> (B  
あの その 今で いうあの 上片桐までしか  
エー ウン) テンシャカ。キテ オリマセナンダ ムコーカラ。  
ええ、うん) 電車が 来て いませんでした、向こうから。  
ソーテ <sup>(51)</sup> マダ コッチワ デンシャガ ナイン。ソレデ ウチカ  
それで まだ こっちは 電車が ないんです。それで うちか  
ラ ソノ ジンリキシャデ イキマシテ ホレデ カミカタキリノ  
ら その 人力車で 行きまして、それで 上片桐の  
エキカラ コンドア デンシャオ イッシャ カイキリマシテナン。  
駅から、今度は 電車を 一車 買いきりましてね。  
ソーシテ ソレニ ノッテー (笑) (Bホー) ミンナデ ソノ  
そして それに 乗って、 ( ) ( ほう ) みんなで その  
ロードーカラ ナニカラ イキマシテ。 (笑) (Bヘー)  
郎等から 何から 行きまして。 ( ) ( へえ )  
ソーシテ アカホノ エキデ オリテカラ マタ アチラカラ  
そして 本穂の 駅で 下りてから、また あちらから  
ムカエノ カコガ キトリマシテナン。ソエデ カコニ ノッテ  
迎えの 駕籠が 来ていましてね。それで 駕籠に 乗って  
イキマシタ。 (笑) ホントニ ソノ ハナシヲ スルト コ  
行きましたの。 ( ) ほんとに その 話しと すると  
ドモタチワ ゴーカバンナンテ (Bゴーカバンダ 笑) ワライ  
子供達は 豪華版などと ( ) 豪華版だ 笑い  
マスケレド。 (笑) デンシャオ イッシャ カイキッテ。  
ますけれど。 ( ) 電車を 一車 買い切って。 ( )  
笑)

B ヘーへー。  
へえへえ。

A ノリマシタケドナン。ソレデ ソノ トキワ マー リンリキシ  
乗りましたけれどね。それで その 時は まあ 人力車も  
ヤモ オージマ<sup>(52)</sup> アタリニ シコダ"イワ アリマシタモンテ"。  
大島の あたりに 4,5台は ありましたものだから。

B フンフンフン。  
ふんふんふん。

A ドーヤラ ソノー アノー ロードーマテ" マー デンシャテ" /  
どうやら その あの 郎等 まで まあ 電車で, の  
トコマデワ ジンリキシャテ イキマシタケド (B フンフンフン  
ところまでは 人力車で 行きましたけれど ふん, ふん, ふん,  
フン) マー フツノー/ オウチデ" マー オヨメサンカ" ジン  
まあ 普通の お家では, まあ お嫁さんか" 人  
リキシャン ノルダ"ケデ" アトワ ソノー ロードーッテーバ" オ  
力車に 乗るだけで あとは その 卽等 と言えば 男  
トコデ (B ソーデスネ。エー ウンウン) アリマスシ エライ ト  
で うですね。ええ うん うん) ございますし, 大変 遠  
ーク アリマセンモンデナン ダ"イタイワ ミンナ アルイテ オ  
いのでも ございませんものですからね, 大体は みんな 歩いて, お  
トモ! シトワナン イキマシタンタニ。  
僕の人はね, 行きましたんですよ。

B ウンウンウン。  
うん, うん, うん, うん。

A ワタシワ マー チョット コマカネデ" トーグモ アリマスシ  
私は まあ ちょっと 馬鹿ケ根で, 遠くでも ございますし

ソーユー コトデ アノー カミカタキヨリマテ" アレテ" イッテ  
そう いう ことで あの 上片桐まで あれで 行って,  
アト ソノ デンシャオ カイキッテ (笑) イキマシタケドネ。  
あと その 電車を 買い切って (笑) 行きましたけれどね。

B ヘーエー ムカシワ ホントダ" エングミワ ス アノー ナンタ"  
へえええ、昔は 本当だ、 縁組は あの 何です  
ナーナー アノー ココラワ ダイタイワ シモイナノ ホートカ。オ  
なあ、あの、 こちら辺は 大体は 下伊那の 方とが  
ーク オーク アリマシタナー。  
もう ございましたね。

A ハイ シモイナカ。 オーク アリマス。  
はい、下伊那(との縁組)が どう ございます。

B コチラノ ミナミ<sup>(53)</sup> シン ゴシンルイモ ミナミノ ホーカ。オ  
こちらの、「南」の。 御親類も、 南の 方が  
オーイナー。  
多いなあ。

A ハイ ウチデモナーン オバタチワ ミンナ シモイナデ" アリマ  
はい、うちでもね あばたちは みんな 下伊那で ござい  
ス。  
ます。

B ソーテ" アリマスナー。  
そうで ございますなあ。

A カミイナノ ホニワ マー ホトンド アリマセン。  
上伊那の 方には まあ ほとんど ございません。

B フーン ウン。  
ふうん うん。

A アノー タタ マー ハハノ テウチカ カミジマ <sup>(54)</sup> チョット コ  
あの たたまあ 母の 出たうちが 上島， ちょっと こ  
コヨリ キタデ アリマスケドナン。  
こより 北で ございますけれどね。

B フン エー ハイハイ。  
ふん ええ はい(はい)。

A ソレテ ナナクボニ <sup>(55)</sup> イモートカ イ <sup>x</sup> ハハノ イモートカ。イツ  
それで 七夕保に 妹が 母の 妹が いって  
トリマ <sup>(B ウンウン)</sup> マ ソノ テードデ キタノ ホートワ  
あります、 <sup>(うんうん)</sup> ま、 その 程度で 北の 方とは  
ホトンド シンセキカ アリマセンノデナン。 <sup>(B ウンウンウン)</sup>  
ほとんど 親戚が ありませんのでね。 <sup>(うんうんうん)</sup>  
アリマセンケド マー ワタシワ エンカ アッテ ソレコソ <sup>(</sup>  
ありませんけれど まあ 私は 縁が あって それこそ  
B ウン) ソノー アカホノ ホーエ マイルヨー＝ ナリマシタ  
うん) その 赤穂の 方へ 参るように なりました  
ノデナン。 <sup>(B ウン ウン ウン)</sup>  
のでね。 <sup>(うん, うん, うん)</sup>

A ホントニ イマカラ オモエバ オカシーヨーデ アリマス <sup>カ</sup>  
本当に 今から 思えば おかしいようで ございますが、  
カミカタキリマデシカ デンシャワ <sup>(B エー)</sup> タツノカラ キ  
上片桐までしか、 電車は <sup>(ええ)</sup> 辰野から 来  
テ オリマセナント。 ムカシノ ムカシノ ハナシ。 <sup>(笑)</sup>  
て おりませんでした。 昔の 昔の 話し。

B ソレワー イマノー ソノ ゴーカバンワ イマ ハジメテ オキ  
それは、 今の その 豪華版は、 今 初めて お聞

キ シマシタケード (A笑) デンシャヲ カリキッタナンテ。  
き (ましたけれど,) 電車を 借り切ったなどと。

(笑)

A (笑) デンシャオ イッシャ カイキリデ (笑) ホント (笑)。  
電車を 一車 買い切りで, ほんと。

## 注

- (1) -マは軽い敬意をあらわす接尾語。敬意は-サマより低く、-サよりも高い。
- (2) 結婚式の前に、夫たるべき男性が媒酌人とともにはじめてその妻の生家を訪れること。
- (3) 結婚式の折、新郎新婦に同行する人達。3, 4人が普通で、多くそのおじが選ばれる。[ro:tɔ:] のようにも聞こえる。
- (4) [dzenddzen]
- (5) 終わりの部分は笑いで完全には聞き取れない。
- (6) [ʃindzenkeykō] のように聞こえる。
- (7) [hon-tto].
- (8) [hon-tto:].
- (9) 媒酌をしてまとめた夫婦を、子供とみなしてこういう。
- (10) ちょっと聞くと、[ja'bari] と聞こえるが、話(手の清水氏の認定)によりヤッパリとした。
- (11) ナクナリマシタンデンのはいるのが、この方言の普通の言い方。
- (12) 長野県松本市。話(手の小池氏)は夫の任地の松本にしばらく住んだ。
- (13) よく聞きとれない。
- (14) 共通語的言い方。在来の方言ならばセンとなる。話(手Bの清水氏)もそうであるが、Aの小池氏でもときおり、在来の方言-ンに代わって-ナイが用いられることがある。すぐ次のミナイグライデの-ナイも同じ。
- (15) 「付いて」か。ただし、話(手Bの清水氏)は「付いて」はツッテとはならないと言う。馬瀬の調査したところでも、「聞く」「引く」「敷く」などは、在来の方言ではキッテ、ヒッテ、シッテとなるが、「付いて」はそうならない。あるいはツイテとソッテ(添つて)の偶発的な混淆か。
- (16) [ho:je].
- (17) <コンドワ シンロー / ウ>の発話はここで中断され、意味の上では次に続かない。「新郎のうち」と言いかけて途中で止めたものだろう。

- (18) -ナンは -ネのようにも聞き取れる。
- (19) [ʃimpunno] のように聞こえるが、清水氏に従いシンプロとした。
- (20) [ʃiūsekizuki no]。シンセキズキアイノと言いかけて途中でやめたのがもじれない。
- (21) 共通語的言い方。
- (22) <マキキアワセテ イテ>で「両方で相談しあって」の意味だろうかと清水氏は言われる。
- (23) 共通語的な言い方。在来の方言ならばドーズラとなる。すぐ次のドーズロも同じ。ほかにもこれと同じ類例がある。
- (24) [konrē̠no] と聞こえる。
- (25) 「いつに」の意味でこう言ったものか。
- (26) 聞きとれない。清水氏によれば <ヤッタ コト アルケード> ではないかという。
- (27) [u:ntto]。
- (28) [otju:niūsama o] のように助詞を離して発音。
- (29) 長野県飯田市。
- (30) <イーダノ シトヲ バイシャフ シタ>と言いかけて、佐久の人のことと思い出して、シトヲトとトを加えたものであろう。
- (31) [kadai] と聞こえるが、話し手の清水氏に従いカタイとした。
- (32) 清水氏の実家の義姉の娘を指す。
- (33) 仲人のほかにいて、仲人よりも責任は重く、式の時には新郎新婦の紹介から一切をとりしきる。そして親子の関係は一生続き、ことに生まれる子とも縁が繋がることになっているという。ただし、松本地方ではハネオヤと呼ぶのが普通のようである。
- (34) 長野県松本市大字里山辺、同入山辺一帯を指す。松本市の東部に位置する。
- (35) 在来の方言ならばマンダ。
- (36) オバーは老婦人を親しんで呼ぶ時に用いられる。オバーマよりも敬意のない言い方。
- (37) ジフンノでは意味が続かない。

- (38) 中川村方言では [katswide] と発音する者と [katswidē] と発音する者とがいる。後者の方が古い発音らしい。二人の話し手は [katswide]。しかし、清水氏によれば「兄さん」は [aīsama] であって、[āpisama] ではないという。こんな場合に清水氏でも [ī] が聞かれる。
- (39) 物をのせてかついで行く台。板を台とし、両端をつり上げてふたりでかつく。嫁入道具・病人などをのせて運ぶに用いる（『日本国語大辞典』）。
- (40) ひとえの布・紙などに油をひいたもの。唐櫃・長持などの覆い、燈台などの敷物として用い、水気や油などの汚れなどを防ぐ。（『広辞苑』）
- (41) [sōede]。最初の子音 [s] の摩擦は弱い。
- (42) 荷物を運送する駄馬や人夫をひきつれ、その指揮・監督・警衛にあること。また、その役。（『日本国語大辞典』）
- (43) 遂語訳すると「そこで言えば」となる。話し手の清水氏は「そこで何をするかと言えば」の意味だろうと言われる。
- (44) 中川村の大字。現在の村の中心はここにある。
- (45) ……ガイトという家名を持つ家。
- (46) ノリマシテの間違いであろう。
- (47) -マについては注(1)参照。
- (48) 長野県駒ヶ根市大字赤穂。旧上伊那郡赤穂町。
- (49) 長野県駒ヶ根市。
- (50) 国鉄飯田線上片桐駅。下伊那郡松川町大字上片桐にある。
- (51) ほとんど聞きとれない。
- (52) 下伊那郡松川町大字大島。国鉄飯田線伊那大島駅がある。
- (53) 話し手小池氏の家の家名。
- (54) 上伊那郡中川村大字片桐の集落名。
- (55) 上伊那郡飯島町大字七又保。
- (56) 上伊那郡辰野町。国鉄辰野駅がある。

昭和53年3月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘3丁目9番14号

電 話 東 京 (900) 3111(代表)

## 国立国語研究所刊行書一覧

### 国立国語研究所報告

|      |                                                                                        |         |         |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------|---------|---------|
| 1    | 八<br>丈<br>島<br>の<br>言<br>語<br>調<br>査                                                   | 秀英出版刊   | 品切れ     |
| 2    | 言<br>語<br>生<br>活<br>の<br>実<br>態<br><br>——白河市および付近の農村における——                             | 〃       | 〃       |
| 3    | 現<br>代<br>語<br>の<br>助<br>詞<br>・<br>助<br>動<br>詞<br><br>——用法と実例——                        | 〃       | 700円    |
| 4    | 婦<br>人<br>雑<br>誌<br>の<br>用<br>語<br><br>——現代語の語彙調査——                                    | 〃       | 500円    |
| 5    | 地<br>域<br>社<br>会<br>の<br>言<br>語<br>生<br>活<br><br>——鶴岡における実態調査——                        | 〃       | 品切れ     |
| 6    | 少<br>年<br>と<br>新<br>聞<br><br>——小学生・中学生の新聞への接近と理解——                                     | 〃       | 180円    |
| 7    | 入<br>門<br>期<br>の<br>言<br>語<br>能<br>力<br><br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析——                      | 〃       | 品切れ     |
| 8    | 談<br>話<br>語<br>の<br>実<br>態                                                             | 〃       | 〃       |
| 9    | 読<br>み<br>の<br>実<br>驗<br>的<br>研<br>究<br><br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析——                      | 〃       | 〃       |
| 10   | 低<br>学<br>年<br>の<br>読<br>み<br>書<br>き<br>能<br>力                                         | 〃       | 〃       |
| 11   | 敬<br>語<br>と<br>敬<br>語<br>意<br>識                                                        | 〃       | 〃       |
| 12   | 総<br>合<br>雑<br>誌<br>の<br>用<br>語<br><br>——現代語の語彙調査——                                    | 〃       | 〃       |
| 13   | 総<br>合<br>雑<br>誌<br>の<br>用<br>語<br><br>——現代語の語彙調査——                                    | 〃       | 〃       |
| 14   | 小<br>学<br>校<br>中<br>学<br>年<br>の<br>読<br>み<br>書<br>き<br>能<br>力                          | 〃       | 400円    |
| 15   | 明<br>治<br>初<br>期<br>の<br>新<br>聞<br>の<br>用<br>語                                         | 〃       | 品切れ     |
| 16   | 日<br>本<br>方<br>言<br>の<br>記<br>述<br>的<br>研<br>究                                         | 明治書院刊   | 〃       |
| 17   | 高<br>学<br>年<br>の<br>読<br>み<br>書<br>き<br>能<br>力                                         | 秀英出版刊   | 〃       |
| 18   | 話<br>し<br>こ<br>と<br>ば<br>の<br>文<br>型<br>(1)<br><br>——対話資料における研究——                      | 〃       | 〃       |
| 19   | 総<br>合<br>雑<br>誌<br>の<br>用<br>字                                                        | 〃       | 〃       |
| 20   | 同<br>音<br>語<br>の<br>研<br>究                                                             | 〃       | 〃       |
| 21   | 現<br>代<br>雑<br>誌<br>九<br>十<br>種<br>の<br>用<br>語<br>用<br>字<br>(1)<br><br>——総記および語彙表——    | 〃       | 〃       |
| 22   | 現<br>代<br>雑<br>誌<br>九<br>十<br>種<br>の<br>用<br>語<br>用<br>字<br>(2)<br><br>——漢<br>字<br>表—— | 〃       | 〃       |
| 23   | 話<br>し<br>こ<br>と<br>ば<br>の<br>文<br>型<br>(2)<br><br>——独話資料による研究——                       | 〃       | 〃       |
| 24   | 横<br>組<br>の<br>字<br>形<br>に<br>関<br>す<br>る<br>研<br>究                                    | 〃       | 〃       |
| 25   | 現<br>代<br>雑<br>誌<br>九<br>十<br>種<br>の<br>用<br>語<br>用<br>字<br>(3)<br><br>——分<br>析——      | 〃       | 〃       |
| 26   | 小<br>学<br>生<br>の<br>言<br>語<br>能<br>力<br>の<br>發<br>達                                    | 明治図書刊   | 2,100円  |
| 27   | 共<br>通<br>語<br>化<br>の<br>過<br>程<br><br>——北海道における親子三代のことば——                             | 秀英出版刊   | 品切れ     |
| 28   | 類<br>義<br>語<br>の<br>研<br>究                                                             | 〃       | 〃       |
| 29   | 戰<br>後<br>の<br>國<br>民<br>各<br>層<br>の<br>文<br>字<br>生<br>活                               | 〃       | 400円    |
| 30-1 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(1)                                                      | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ     |
| 30-2 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(2)                                                      | 〃       | 〃       |
| 30-3 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(3)                                                      | 〃       | 〃       |
| 30-4 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(4)                                                      | 〃       | 〃       |
| 30-5 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(5)                                                      | 〃       | 〃       |
| 30-6 | 日<br>本<br>言<br>語<br>地<br>図<br>(6)                                                      | 〃       | 10,000円 |

|    |                                           |       |        |
|----|-------------------------------------------|-------|--------|
| 31 | 電子計算機による国語研究                              | 秀英出版刊 | 450円   |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——  | "     | 品切れ    |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識                     | "     | 350円   |
| 34 | 電子計算機による国語研究II)<br>——新聞の用語用字調査の処理組織——     | "     | 品切れ    |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称—— | "     | 450円   |
| 36 | 中学生の漢字習得に関する研究                            | "     | 5,000円 |
| 37 | 電子計算機による新聞の語彙調査                           | "     | 1,300円 |
| 38 | 電子計算機による新聞の語彙調査(II)                       | "     | 2,800円 |
| 39 | 電子計算機による国語研究(III)                         | "     | 700円   |
| 40 | 送りがな意識の調査                                 | "     | 1,500円 |
| 41 | 待遇表現の実態<br>——松江24時間調査から——                 | "     | 900円   |
| 42 | 電子計算機による新聞の語彙調査(III)                      | "     | 1,200円 |
| 43 | 動詞の意味・用法の記述的研究                            | "     | 5,000円 |
| 44 | 形容詞の意味・用法の記述的研究                           | "     | 3,000円 |
| 45 | 幼児の読み書き能力                                 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電子計算機による国語研究(IV)                          | 秀英出版刊 | 700円   |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性向語彙と価値観——   | "     | 700円   |
| 48 | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV)                       | "     | 3,000円 |
| 49 | 電子計算機による国語研究(V)                           | "     | 900円   |
| 50 | 幼児の文構造の発達<br>——3歳~6歳児の場合——                | "     | 品切れ    |
| 51 | 電子計算機による国語研究(VI)                          | "     | 1,000円 |
| 52 | 地域社会の言語生活<br>——鶴岡における20年前と今比較——           | "     | 1,800円 |
| 53 | 言語使用の変遷(1)<br>——福島県北部地域の面接調査——            | "     | 2,500円 |
| 54 | 電子計算機による国語研究(VII)                         | "     | 1,000円 |
| 55 | 幼児語の形態論的な分析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——            | "     | 1,300円 |
| 56 | 現代新聞の漢字                                   | "     | 3,000円 |
| 57 | 比喩表現の理論と分類                                | "     | 6,000円 |

#### 国立国語研究所資料集

|    |                            |         |        |
|----|----------------------------|---------|--------|
| 1  | 国語関係刊行書目(昭和17~24年)         | 秀英出版刊   | 45円    |
| 2  | 語彙調査<br>——現代新聞用語の一例——      | "       | 品切れ    |
| 3  | 送り仮名法資料集                   | "       | "      |
| 4  | 明治以降国語学関係刊行書目              | "       | "      |
| 5  | 沖縄語辞典                      | 大蔵省印刷局刊 | 3,800円 |
| 6  | 分類語彙表                      | 秀英出版刊   | 1,600円 |
| 7  | 動詞・形容詞問題語用例集               | "       | 1,700円 |
| 8  | 現代新聞の漢字調査(中間報告)            | "       | 500円   |
| 9  | 牛店安愚樂鍋用語索引                 | "       | 1,500円 |
| 10 | 方言言談話資料(1)<br>——山形・群馬・長野—— |         | 非売     |

#### 国立国語研究所論集

|   |         |       |     |
|---|---------|-------|-----|
| 1 | このとばの研究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
|---|---------|-------|-----|

|   |   |   |   |   |   |   |       |       |        |
|---|---|---|---|---|---|---|-------|-------|--------|
| 2 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 2 集 | 秀英出版刊 | 750円   |
| 3 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 3 集 | "     | 品切れ    |
| 4 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 4 集 | "     | 1,300円 |
| 5 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 5 集 | "     | 1,300円 |

**国立国語研究所年報（秀英出版刊）**

|    |          |      |    |          |      |
|----|----------|------|----|----------|------|
| 1  | 昭和 24 年度 | 品切れ  | 15 | 昭和 38 年度 | 250円 |
| 2  | 昭和 25 年度 | "    | 16 | 昭和 39 年度 | 品切れ  |
| 3  | 昭和 26 年度 | 160円 | 17 | 昭和 40 年度 | 250円 |
| 4  | 昭和 27 年度 | 160円 | 18 | 昭和 41 年度 | 300円 |
| 5  | 昭和 28 年度 | 品切れ  | 19 | 昭和 42 年度 | 300円 |
| 6  | 昭和 29 年度 | 200円 | 20 | 昭和 43 年度 | 品切れ  |
| 7  | 昭和 30 年度 | 品切れ  | 21 | 昭和 44 年度 | "    |
| 8  | 昭和 31 年度 | "    | 22 | 昭和 45 年度 | 400円 |
| 9  | 昭和 32 年度 | "    | 23 | 昭和 46 年度 | 450円 |
| 10 | 昭和 33 年度 | "    | 24 | 昭和 47 年度 | 450円 |
| 11 | 昭和 34 年度 | "    | 25 | 昭和 48 年度 | 品切れ  |
| 12 | 昭和 35 年度 | 350円 | 26 | 昭和 49 年度 | 600円 |
| 13 | 昭和 36 年度 | 160円 | 27 | 昭和 50 年度 | 700円 |
| 14 | 昭和 37 年度 | 220円 | 28 | 昭和 51 年度 | 非 売  |

**国語年鑑（秀英出版刊）**

|          |        |          |        |
|----------|--------|----------|--------|
| 昭和 29 年版 | 品切れ    | 昭和 41 年版 | 1,100円 |
| 昭和 30 年版 | "      | 昭和 42 年版 | 1,100円 |
| 昭和 31 年版 | "      | 昭和 43 年版 | 品切れ    |
| 昭和 32 年版 | "      | 昭和 44 年版 | 1,500円 |
| 昭和 33 年版 | "      | 昭和 45 年版 | 1,500円 |
| 昭和 34 年版 | "      | 昭和 46 年版 | 2,000円 |
| 昭和 35 年版 | "      | 昭和 47 年版 | 2,200円 |
| 昭和 36 年版 | 800円   | 昭和 48 年版 | 2,700円 |
| 昭和 37 年版 | 品切れ    | 昭和 49 年版 | 3,800円 |
| 昭和 38 年版 | "      | 昭和 50 年版 | 3,800円 |
| 昭和 39 年版 | 980円   | 昭和 51 年版 | 4,000円 |
| 昭和 40 年版 | 1,100円 | 昭和 52 年版 | 4,500円 |

高校生と新聞 国立国語研究所共編 秀英出版刊 280円  
日本新聞協会

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会共著 金沢書店刊 品切れ  
国立国語研究所

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS  
SOURCE X

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS  
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 1)

CONTENTS

**Foreword**

**Purpose and Outline**

**Text**

- Part 1 : YAMAGATA PREFECTURE (Hamlet Yati, Township  
Kahoku, District Nisimurayama)
- Part 2 : GUNMA PREFECTURE (Hamlet Okkai, Village Tone,  
District Tone)
- Part 3 : NAGANO PREFECTURE (Hamlet Kazurasima, Village  
Nakagawa, District Ina)

**THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
TOKYO JAPAN**

1978